

平成17年度放送大学大学院開設予定授業科目講義内容

平成16年11月発行

第 4 版

放送大学学園
教務部教務課

目 次

1. 総合文化プログラム

番号	頁	開設年次	メディア	単位	
◇文化情報科学群◇					
1	総合情報学（'02）	1	14	TV	2
2	総合人間学（'02）	3	14	R	2
3	言語文化研究Ⅰ（'02）（国語国文学の近代）	5	14	R	2
4	言語文化研究Ⅱ（'05）（都市と旅－フランス語で世界を読む）	7	17	R	2
5	言語文化研究Ⅲ（'05）（現代日本語の様相）	11	17	R	2
6	表象文化研究（'02）（文化と芸術表象）	14	14	TV	2
7	情報化社会研究（'05）（メディアの発展と社会）	18	17	TV	2
8	地域文化研究Ⅰ（'02）（地中海世界の歴史像）	21	14	R	2
9	地域文化研究Ⅱ（'02）（東アジア歴史像の構成）	23	14	R	2
10	地域文化研究Ⅲ（'02）（ヨーロッパの文化と社会－イギリスを中心に－）	25	14	TV	2
11	日本文化研究（'05）（神仏習合と神国思想）	27	17	R	2
12	比較文化研究（'05）（若者とジェンダー）	30	17	TV	2
13	文化人類学研究（'05）（先住民の世界）	32	17	TV	2
14	国際関係論（'02）	35	14	TV	2
15	国際社会研究Ⅰ（'05）（開発経済学）	37	17	TV	2
16	国際社会研究Ⅱ（'02）（中国近代政治史）	40	14	R	2
◇環境システム科学群◇					
17	数理システム科学（'05）	42	17	R	2
18	情報システム科学（'02）	45	14	R	2
19	複雑システム科学（'02）	47	14	TV	2
20	地球環境科学（'05）	50	17	TV	2
21	物質環境科学Ⅰ（'05）（分子から機能性物質・生体まで）	53	17	TV	2
22	物質環境科学Ⅱ（'03）（環境システムとエントロピー）	57	15	TV	2
23	生命環境科学Ⅰ（'05）（生物多様性の成り立ち）	59	17	TV	2
24	生命環境科学Ⅱ（'02）（環境と生物進化）	62	14	TV	2
25	認知行動科学（'02）（心と行動の統合科学をめざして）〔臨床心理プログラムと共通〕	64	14	TV	2
26	生活科学Ⅰ（'05）（食の科学）	67	17	R	2
27	生活科学Ⅱ（'02）（すまいづくりまちづくり）	70	14	TV	2
28	健康科学（'05）（人々の健康を支える基盤）	73	17	TV	2
29	精神医学（'02）	76	14	R	2

2. 政策経営プログラム

			開設年次	メディア	単位
30	経営システムⅠ（'02）（企業の公的経営）	78	14	R	2
31	経営システムⅡ（'05）（経営者機能）	80	17	R	2
32	経済政策Ⅰ（'05）（現代政策分析）	83	17	TV	2
33	経済政策Ⅱ（'05）	86	17	R	2
34	地方自治政策Ⅰ（'05）（自治体と政策）	88	17	TV	2
35	地方自治政策Ⅱ（'04）（自治体・住民・地域社会）	91	16	R	2
36	芸術文化政策Ⅰ（'02）（社会における人間と芸術）	93	14	TV	2
37	芸術文化政策Ⅱ（'02）（政策形成とマネージメント）	95	14	R	2
38	福祉政策Ⅰ（'02）（福祉社会の政策課題）	97	14	R	2
39	福祉政策Ⅱ（'02）（障害者施策の展開）	100	14	R	2
40	法システムⅠ（'02）（比較法システム論）	102	14	TV	2
41	法システムⅡ（'02）（市民運動と法）	104	14	R	2
42	法システムⅢ（'02）（情報法）	106	14	R	2
43	技術社会関係論（'04）	108	16	R	2
44	環境マネジメント（'02）（環境問題と企業・政府・消費者の役割）	110	14	TV	2
45	環境工学（'03）	112	15	TV	2
46	都市計画論（'02）（私達の都市をいかにデザインするか）	115	14	TV	2

3. 教育開発プログラム

47	教育文化論（'05）（人間の発達・変容と文化環境）	117	17	R	2
48	教育経営論（'04）	120	16	R	2
49	学校システム論（'02）（子ども・学校・社会）	122	14	TV	2
50	教育課程編成論（'02）（学校で何を学ぶか）	125	14	R	2
51	認知過程研究（'02）（知識の獲得とその利用）	127	14	R	2
52	教授・学習過程論（'02）（学習の総合科学をめざして）	129	14	TV	2
53	現代身体教育論（'02）	131	14	R	2
54	学校臨床社会学（'03）（教育問題をどう考えるか）	135	15	R	2
55	学校臨床心理学（'05）	138	17	R	2
	[臨床心理プログラムと共通]				
56	生涯学習論（'02）（生涯学習社会の展望）	141	14	R	2
57	情報教育論（'02）（教育工学のアプローチ）	144	14	TV	2
58	発達心理学（'02）	146	14	TV	2
	[臨床心理プログラムと共通]				
59	才能教育論（'02）（スポーツ科学からみて）	149	14	TV	2
60	道徳性形成論（'03）	151	15	R	2
61	逸脱行動論（'02）	153	14	TV	2

4. 臨床心理プログラム

		開設年次	メディア	単位
62	臨床心理学特論（'05） 156	17	R	4
63	臨床心理面接特論（'02）（心理療法の世界） 160	14	R	4
64	心理学研究法特論（'02） 164	14	R	2
	発達心理学（'02） [教育開発プログラムと共通] …(146)	14	TV	2
	認知行動科学（'02）（心の行動と総合科学をめざして） [総合文化プログラム環境システム科学群と共通] …(64)	14	TV	2
65	社会心理学特論（'05）（発達・臨床との接点を求めて） 166	17	TV	2
66	家族心理学特論（'02）（システムとしての家族を考える） 169	14	R	2
	精神医学（'02）… [総合文化プログラム環境システム群と共通] …(76)	14	R	2
67	コミュニティ・アプローチ特論（'03） 171	15	R	2
	学校臨床心理学（'05） [教育開発プログラムと共通] …(138)	17	R	2

＝総合情報学（'02）＝（TV）

〔主任講師： 中島 尚正（放送大学副学長）〕
 〔主任講師： 原島 博（東京大学大学院教授）〕
 〔主任講師： 佐倉 統（東京大学大学院助教授）〕

全体のねらい

急速に発展している情報技術は、現代の情報化社会を支える基盤として社会全体に大きな影響を与えており、広く産業、経済、政治、教育、芸術、文化等における知的活動を質的に変えつつある。社会の諸活動における知の営みと情報の関係を正しく理解することは、21世紀に生きる私達にとって、文系・理系の区別なく必要とされることであり、総合情報学は広義の情報リテラシーを幅広く身に付けることを目的としている。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	総合情報学の視座	講義の第1回目として、総合情報学の全体像を概観し、併せて講義の進め方についてオリエンテーションをおこなう。	中島 尚正 (放送大学副学長) 原島 博 (東京大学大学院教授) 佐倉 統 (東京大学大学院助教授)	中島 尚正 (放送大学副学長) 原島 博 (東京大学大学院教授) 佐倉 統 (東京大学大学院助教授)
2	情報技術の発展 (1)－メディアの進化－	情報技術のデジタル化を機軸とした予想される今後の発展が、情報環境を含むメディアの進化にどのような影響をおよぼしていくかについて、マクルーハンの「メディアはメッセージである」という広く知られた言葉を起点として、モバイル、ユビキタスという視点に重点をおきながら概説する。	北川 高嗣 (筑波大学教授)	原島 博 北川 高嗣 (筑波大学教授)
3	情報技術の発展 (2)－新しいリアリティの可能性－	情報メディアの進化の様相について考察し、それによってもたらされる可能性のうち、2つの重要な要素である、コミュニティと身体性の問題に関連し、1) 情報技術を用いた組織形成、組織の学習・成長の支援の可能性、2) 情報技術を用いたバーチャル(実質的に同等)なりアリティの形成の可能性について概説する。	同 上	同 上
4	産業と生産の情報化	情報化の流れは、生産と流通のしくみを一変させ、情報関連産業だけでなく、製造業をはじめとして産業の構造を変容させている。ここでは、その実例を紹介しながら、これからの産業と生産の方向を考える。	中島 尚正	中島 尚正
5	情報と経済	情報化とともに経済のグローバル化が進むが、コミュニティの衰退という問題も生じている。近年、新たな交換媒体として注目されている「地域通貨」を紹介しながら、情報化と経済の関連、コミュニティの今後のあり方について考える。	西部 忠 (北海道大学助教授)	植田 一博 (東京大学助教授) 西部 忠 (北海道大学助教授)
6	情報と法律	ネットワーク犯罪や著作権、プライバシーなど、情報技術によって新しく発生してきた問題に法学はどう答えようとしているのか、他領域とのコラボレーションの可能性も含めて議論する。	濱田 純一 (東京大学教授)	原島 博 濱田 純一 (東京大学教授)

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
7	メディア・アートとテクノロジー	コンピュータの出現で可能になったアートの新しい動きについて、映像を中心に紹介する。	原 島 博	原 島 博
8	情報と脳	認知ロボットの実験を通して、認知及び意識の問題への構成論的アプローチを、以下の点に注目しつつ紹介する。1) 工学構成論、脳科学、現象学の接点。2) 認知・意識の研究における身体性の意味。3) 神経回路およびロボットモデリング。4) 実験結果に関する力学系アプローチに基づく解析。5) 実験結果に基づく自己意識に関する現象学的解釈。	植 田 一博 (東京大学助教授)	植 田 一博
9	情報装置としての人間	人間は、環境との間でインタラクションをおこなう情報装置であると考えられる。このような情報学の立場からの人間理解の系譜を解説し、併せて、情報学と進化論を結びつけて人間の認知や行動を捉えようとする最近の動きを紹介する。	同 上	佐 倉 統 植 田 一博
10	情報化時代とメディア	多様なデジタルメディアの普及が、メディアの世界にどのような変容を引き起こしつつあるのか、今後、メディアの世界と我々はどのような関係を構築できるのかを、ソシオ・メディア論を軸に、ビデオ・ジャーナリズム、メディア・リテラシーなどのキーワードを織り込みながら展開する。	山 内 祐平 (東京大学助教授)	佐 倉 統 山 内 祐平 (東京大学助教授)
11	情報化社会の教育	バーチャルユニバーシティ（オンラインによる大学教育）やホームスクーリング（ネットワークや通信教材によって自宅で学習する形態）によって大きく変容しつつある合衆国の教育の現状を追い、これからの教育環境のあり方について議論する。	同 上	同 上
12	ネットワークコミュニティの組織論	Linux で脚光をあげたオープンソース運動や災害時の情報ボランティアなど、インターネットというメディアを通じて発生してきたボランタリーな組織のあり方とその可能性について議論する。	佐 倉 統	佐 倉 統
13	情報と生命科学	生命情報の基本であるゲノムを解読しようというゲノム計画が、世界的な規模で進行中である。これは情報技術の発展によるところが大きい。ヒト・ゲノム計画の意義を情報学の観点から解説するとともに、情報と生命論の枠組みについて考察する。	同 上	同 上
14	情報と生命論	生命の進化を情報という観点から見ることによって、人間の文化活動との接点生まれつつある。文化情報の複製単位である「ミーム」という概念を導入することで、文化現象を生命現象と同じモデルで記述できる。ミーム学の意義、現状、今後の展望などについて解説する。	同 上	同 上
15	総合情報学の展開と課題	講義の最終回として、3名の主任講師の座談会形式で、総合情報学の今後の課題について語る。	中 島 尚正 原 島 博 佐 倉 統	中 島 尚正 原 島 博 佐 倉 統

＝総合人間学（‘02）＝（R）

〔主任講師： 柏原 啓一（放送大学教授）〕

全体のねらい

西洋哲学は、主として人間の知的な働きに、人間らしさを求めてきた。だが、この主知主義に基づく科学の偏重に翳りが見え始めた現在、人間を感情や意志や身体をも含めた諸機能の総合とみなして「人間学」を唱えた哲学者の思想に、改めて注目する必要がある。総合的全人という人間の新たな自己理解に、道をつけたい。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	人間学と人類学	人間学の原語のアンソロポロジーは、人類学とも訳される。この語の使用の例を振りかえって、哲学的人間学に対する自然人類学や文化人類学の相関と相違について考察し、人間を総合的全人として理解する哲学的人間学の特徴を明らかにする。	柏原 啓一 (放送大学教授)	柏原 啓一 (放送大学教授)
2	哲学における人間観	哲学の歴史における人間の自己理解のあとを概観し、西洋の人間観が知的理性に重きを置いてきたものであることを見届ける。そのために、古代ギリシアにおける自然哲学から人間哲学への進展、近代哲学における知識論の形成のあとを探る。	同 上	同 上
3	科学と技術の時代	近代の主知主義的な人間観のもとで、科学と技術が大きな進展を見せたが、その背後に生じている問題に目を向ける。今日のわれわれにとって科学と技術の持つ意味を探るとともに、知性偏重を修正するための全人的視点の必要を説く。	同 上	同 上
4	カントの人間学 (1)	カントの主著が『純粋理性批判』『実践理性批判』『判断力批判』の三つから成ることの意味を、人間学的な観点から考える。すなわち、カントが知的理性の限界を想定して、善や美の価値を求める人間の精神活動をも大事にしたことに注目する。	同 上	同 上
5	カントの人間学 (2)	カントの最晩年の著者である『実用的見地における人間学』の内容を紹介しながら、カントの考えていた人間学の構想が、現実的な人間を、認識、感情、欲求の三つの能力の総合と捉えて、この総合的人間の实生活の記述にあることを確認する。	同 上	同 上
6	シェリングの人間学的図式	後期シェリングの哲学において、近代の知的理性を中心とする人間観が崩され、替って意志を中核に据える考えが提出される。ここではシェリングの『人間学的図式』を取りあげて、シェリングの考えていた人間学の内容とその問題点に触れる。	同 上	同 上
7	フョイエルバッハによる神学の人間学化	フョイエルバッハのキリスト教批判は、キリスト教の神学を人間学に読み替えることであった。その語るところを追いながら、フョイエルバッハが近代理性に替えて感情を中心とする人間学を構築したことを見届け、さらにそのことの問題点をも指摘したい。	同 上	同 上

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
8	ディルタイの生の哲学	ディルタイは、知、情、意の総合から成る人間を生（生きること）と呼び、これを全体的人間（全人）とも称した。このディルタイの生の哲学に、精神文化を形成して止まない総合的全人の人間学を認め、人間学の課題についてここで整理をする。	柏原 啓一	柏原 啓一
9	シェーラーの哲学的人間学	哲学的人間学の名称を用いてみずからの哲学の構築をはかったシェーラーの思想を取りあげる。有機体に階層を設け、人間を植物や動物の性格を含みつつこれを越えるものと規定するその方法に批判はあるが、世界開放性に人間の特質を認める点は評価したい。	同 上	同 上
10	キルケゴールの実存思想	キルケゴールによって提出された実存としての人間観について考える。キルケゴールの語る実存とは、普遍的な理性というあり方に尽くされない自由な人間であり、自己の主体性の形成を課題とする人間である。近代を越える新たな人間観の典型をここに見る。	同 上	同 上
11	ニーチェの超人思想	価値の転換を唱えて旧来の哲学の枠組の解体をはかったニーチェの思想を取りあげ、超人と名づけられたニーチェの人間観について解説する。超人とは、自己完結的なあり方を打破し、たえず未来へと自己形成にいどみかかる力動的な人間のことである。	同 上	同 上
12	ヤスパースの実存開明の考え	ヤスパースの名著『哲学』の中で、人間がどう理解されているかを探る。人間は、日常的な生き方や科学的な知識獲得や主義主張による世界観形成などさまざまな位相をしめすが、自己の無根拠を知る限界状況によって、真の人間らしさに目覚めるのだ、という。	同 上	同 上
13	ハイデガーの現存在分析	ハイデガーは、『存在と時間』において、存在の意味を探求する中で人間を現存在と呼び、この現存在の分析を通して存在解明を行う。この現存在としての人間を、ハイデガーがどのように捉えているのかを学びながら、総体としての人間の姿を検討する。	同 上	同 上
14	欠如態の人間	哲学的人間学を唱導するプレスナーやゲーレンの思想を紹介する。人間の脱中心性による世界開放性を説くプレスナーも他の動物に較べて人間を欠陥存在と呼ぶゲーレンも、人間を欠如態と見ている点に特徴があり、ここに文化形成の無限の可能性を求めたい。	同 上	同 上
15	人間学の総合性	総合人間学の講義の締め括りとして、改めて人間学の総合性について述べる。そして、国際化にともなう文化の多元化や価値の多様化の進む現代には、ことにこのような総合人間学の語る総合的視点からの未来開放的な人間理解が求められることに言及する。	同 上	同 上

＝言語文化研究 I (' 0 2) ＝ (R)

－国語国文学の近代－

〔主任講師： 野山 嘉正（放送大学教授）〕

全体のねらい

本講義は国語学と国文学の全体像を理解するための必要要件として、近代の出発点における国学からの転換に特に着目しつつ、学芸として国語学と国文学とが成立した過程を分析し講述する。その際に西洋文学のイムパクトがもたらした文学現象といかに交錯したかに重大な関心を払いつつ、近代の学問としての意義を考察する。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	国学から国文学へ	新時代の文学が未だに本格的には始動していない時期に、どうにかスタートした大学で国学からどのような伝統を引き継ぎ、そしていかなる新機軸が企図されたかを、当時唯一の大学であった東京大学の事例について検証し、本講義全体の基盤とする。	野山 嘉正 (放送大学教授)	野山 嘉正 (放送大学教授)
2	『新体詩抄』の歴史的意義	東京大学の三教官が試みた『新体詩抄』の序文の細読が本章の課題。この三人のうち東洋哲学の専門家は漢詩の達人でもあり、社会学と植物学専攻の二人は、元来が儒学の教養を備えていたことを強く意識しつつ、新時代の文学への対応について考察する。	同 上	同 上
3	近代文学の始動と国文学	坪内逍遙の『小説神髓』と二葉亭四迷の「小説総論」を考察し、次いで森鷗外初期の詩と小説について概観する。さらに逍遙・鷗外の論争に触れた後で、近代文学の動向と国文学者落合直文との関連を比較検討する。	同 上	同 上
4	正岡子規の「文学」と国文学	新時代の大学の国文学科に学びながら、卒業直前で中途退学した正岡子規の文学観を検討し、文学・日本文学・国文学等々の定義と特質について、具体例を示しながら考察する。	同 上	同 上
5	新体詩の確立と国文学	新体詩の確立者とされる島崎藤村の詩論を中心に詩業を検証する。その検証過程で国文学との関連を確認し、併せて小説家としての長い生涯と国文学の変容過程を展望する。	同 上	同 上
6	近世国学の成立	近世は、旧来の堂上貴族たちから新興の町人層に、和歌・物語などの古典が解放され流布した時代であり、それにとともに国学が成立する。体制的な漢学とはおのずから異質なこの学問を形成していった、僧契沖・荷田春満・賀茂真淵の動向に即しつつ国学形成の意義を考える。	鈴木日出男 (成蹊大学教授)	鈴木日出男 (成蹊大学教授)
7	本居宣長の古典研究	本居宣長は『古事記』『源氏物語』『新古今集』などの研究に偉大な業績を挙げ、近世国学の中に屹立する存在である。作品研究の実証的な合理性に徹することと、古代の非合理的なるものへの畏敬の念とが共存する、その学問の特質を考察する。	同 上	同 上

回	テ ー マ	内 容	執筆担当 講 師 名 (所属・職名)	放送担当 講 師 名 (所属・職名)
8	近代化のなかの国文学	国学者たちは、文献研究としての書誌・本文・語義・語法・考証等々の多岐にわたる研究分野を拓いたが、それらが明治期の大学制度の中にどのように組み込まれたか、西洋の文学研究の影響を受けて国文学としていかに出発したか、を考える。	鈴木日出男	鈴木日出男
9	文献研究と文学史研究	文献学における原典再建と、国学における諸本の異同の比較研究との特質を再確認し、文学史研究がもう一つの重要な研究分野になっていくことについても、事例を示しながら確認する。併せてこの二つの研究のありかたを考察する。	同 上	同 上
10	文献研究と文学史研究	文献学における原典再建と、国学における諸本の異同の比較研究との特質を再確認し、文学史研究がもう一つの重要な研究分野になっていくことについても、事例を示しながら確認する。併せてこの二つの研究のありかたを考察する。	同 上	同 上
11	国文学研究の課題	本文研究を基礎に据えて多方面に展開すべき文献学のこれまでのありかたに反省的考察を加えながら、近代以後の古典研究の方法論がどのように展開されてきたかについて述べる。その過程から古典研究の新たな可能性について展望を拓きたい。	同 上	同 上
12	日本語学と国語学	この二つの命名のしかたについて、明治期の事例を使いながらそれぞれの必然性を検討する。国語学が古くて日本語学の方が新しいというのは俗説に過ぎず、歴史社会との深い関連があったことを実証する。	同 上	同 上
13	国文典と洋文典	国学において分析・発見された文法が、明治になってから移入された西洋の文法と、どのように切り結び変容したか、あるいはどのように進展して両者が融合したか、等々の問題を、例示しつつ検討する。	同 上	同 上
14	国語国字問題	標準語の制定・普及について、仮名遣い・国字・文法などの諸点を検討する。明治三十年代に大きな社会的問題ともなったいわゆる国語国字問題の概略と、そこに生じた学問的な論争点とを解明する。	同 上	同 上
15	博言学・国語学・文学	初期の大学における博言学（言語学）と国語学との関係、国語学と文学との関係について、実例を示しながら検討し、併せて本講義の結びに資する問題点を提示する。	同 上	同 上

＝言語文化研究Ⅱ（‘05）＝（R）

～都市と旅－フランス語で世界を読む～

〔主任講師： 工藤 庸子（放送大学教授）〕

〔主任講師： 池上 俊一（東京大学大学院教授）〕

全体のねらい

グローバル化の時代、英語以外の外国語に親しむことに、どのような意味が、そして楽しみがあるのだろうか。フランス語の文献だからこそ浮上させることのできる世界像のようなものがあるのだろうか。

「都市と旅」と題したこの講義は、19世紀のパリを基点に始まるが、時代としては中世から現代まで、地理的空間としては、フランスの国境をこえて世界の各地を射程に入れる。ただし全体の構成は世界史概論のようなものではなく、鉄道、女性、食文化、国土、少年文学、港町、日本といったふうに、毎回、具体的なトピックをとりあげる。そして比較的平易なフランス語のテキストを引き、歴史学や文化論に立脚した考察を行うことになる。主題にアプローチする手法や切り口を提示して、大学院レベルの論文の書き方へのヒントを与えることも大きなねらいである。フランス語を解さぬ者であっても受講可。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	世界のなかのフランス語	導入は「明晰ならざるものはフランス語にあらず」という言葉の謎解きから。18世紀のフランス語は、いわゆる「普遍言語」の幻想を追っていた。これに対して「国語」とは、国民国家の個別性とアイデンティティを保証するものだ。それにしてもフランス語の文献に親しむことにより、どのような新しい世界が見えてくるのだろうか。旅行記の分析の一例として、ネルヴァルの『東方紀行』をとりあげる。「オリエント」をはじめとして、植民地化した広大な地域に普及し、浸透したフランス語は、いかなるステータスを与えられていたか。脱植民地化の時代の「広域フランス語圏」とは何か。	工藤 庸子 (放送大学 教授)	工藤 庸子 (放送大学 教授)
2	パリと鉄道	長距離の旅行を可能にした鉄道という交通手段は、19世紀前半から中葉にかけてヨーロッパに普及し、都市の風景を大きく変容させるとともに、文学や絵画の題材としてもしばしば取り上げられた。いくつかの作品を参照しながらパリと鉄道の関係をたどり、それが都市住民の集合的表象にもたらした変化について考察する。	石井 洋二郎 (東京大学 大学院教授)	石井 洋二郎 (東京大学 大学院教授)
3	旅人としての新しい女性たち	安全で快適な旅が可能になった19世紀末、世界の流動性は劇的にましてゆく。ベル・エポックのパリには、フランスの片田舎や新大陸出身の「さすらいの女」（コレットの小説のタイトル）たちが少なからずいた。ピカソと交流した作家ガードルード・スタイン、富豪の娘に生まれ「レスボスの女」として名を轟かせたナタリー・クリフォード・バーネイ、そして20世紀のフランス文学に大きな足跡をのこしたコレット。孤独でありながら強靱な、新しい時代のフェミニテを探してみたい。	工藤 庸子	工藤 庸子

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
4	パリの市場と食糧 調達	エミール・ゾラの小説『パリの胃袋』（1873年）は、1857～58年に建設され、魚介類、鳥肉、豚肉加工品、バター・チーズ、野菜、果物と、ありとあらゆる食べ物が洪水のように溢れ返るパリ中央市場を舞台としている。第二帝政に反感を抱き、仲間と暴動を画策する痩せっぽちの陰気な主人公は、色々な人に助けられながらも、最終的には陽気な狂騒を繰り広げるでっぷりとした腹=市場から、病的な異物としてはじき出されてしまう。 それにしても、なぜパリだけに、溢れ返るほど食糧が集まるようになったのか。それはどこから、いかにしてやってきたのか。中継点としての市場の形態・場所はどのようにして決まったのか。当局は、安定した供給、価格の高騰防止、税の徴集にどんな態度で臨んだのか。こうしたことを、アンシャン・レジーム期からフランス革命をへて、19世紀にいたるまでの変遷をたどりながら、考えてみたい。	池上 俊一 (東京大学 大学院教授)	池上 俊一 (東京大学 大学院教授)
5	都市の鐘の音	ミシュレの『フランス史』やユゴーの『ノートル・ダム・ド・パリ』には、殷々と鳴り響く鐘の音の美しい描写がある。これは、作家の想像力の産物ではない。鐘の音は、中世から近代にかけて、ほとんど唯一のメディアとして、住民にさまざまな情報を提供していたのである。鐘の音には、いわば「文法」があり、それが共有されていたからこそ情報は的確に伝わったのである。また都市において鐘の音は、ラッパの音や太鼓の音、叫び声などと補い合っていたこと、そして世俗権力と教会権力、あるいは諸身分間の「音の争奪戦」があったことも重要である。都市の音について、いくつか興味深い話をしてみたい。	同 上	同 上
6	国民と国土	ミシュレの『タブロー・ド・ラ・フランス』をひもときながら、「国土」がどのように描写され、周縁の地方と中心の首都が有機的に意味づけられてゆくかを考える。『ボヴァリー夫人』からは、ノルマンディーの片田舎に住むヒロインが、幻想の巨大都市パリを夢見る断章を抜粋し、さらに参考資料として、旅行ガイドブックなどに言及する。「国土」こそが、祖先の遺してくれたかけがえのない遺産なのだという自覚が共有されたとき、おのずと「国民」の意識が形成されてゆくのである。	工藤 庸子	工藤 庸子
7	愛国心は少年文学 から？	旅を主題とした少年文学から、ジュール・ヴェルヌの『八十日間世界一周』をとりあげる。分析の対象となるのは、インドでパールシー教徒の女性を救出するエピソードとアメリカの大陸横断鉄道にまつわる冒険である。ここではアングロサクソンというライヴァルに関する表象装置の分析を通じて、第三共和制初期の世界観を検証する。つぎに大ベスト・セラーとなった学校教材『二人の子供のフランス巡歴』を検討の対象として、子供たちを理想的な「国民」に養成するために、共和国が採用したイデオロギーとはいかなるものなのかを探る。	同 上	同 上
8	港町の表象	船と貨物と人間が往来する港町は、古来より異文化接触の十字路、見知らぬ「他者」との出会いの場である。そこには魅力あふれる異国情緒と、いささか猥雑で喧噪にみちた活動性と同居している。このような港町の表象を、詩人や作家その他の文筆家のテキストをとおして味得し、港町に固有の文化と社会について考える。	深沢 克己 (東京大学 大学院教授)	深沢 克己 (東京大学 大学院教授)

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
9	移動する人々とフリーメイソン世界共和国	密儀的加入礼をもつ国際秘密結社として、フリーメイソンは18世紀の創立から今日まで、さまざまな偏見をもってみられてきた。しかしそれは「啓蒙の世紀」の知的社交組織として、普遍的友愛の世界共和国をめざす運動であり、とくに外交官・商人・学生など、国際的に移動する人々のあいだで広く浸透した。フリーメイソン基本文書のフランス語版を読解しながら、この結社の理想と現実について考える。	深沢 克己	深沢 克己
10	砂漠というトポス	『星の王子さま』を糸口として、砂漠というトポスについて考える。歴史的な視点と表象としての解釈を交差させる手法が眼目である。ナポレオンのエジプト遠征軍が発見した「文明のアーカイブ」としてのナイル河沿いの砂漠、探検家たちの遭遇した沈黙のサハラ砂漠、アルジェリア周辺のエグゾティスム、というふうに、地理的な空間を特定しながら考察する。検討対象となる人物は、ナポレオン遠征軍の従軍画家ヴィヴァン・ドゥノン、探検家の先駆ルネ・カイエ、旅行記の作者モーパッサン、そして単身サハラ砂漠に踏みこんだ例外的な女性イザベル・エベラルなど。	工藤 庸子	工藤 庸子
11	旅する詩人たち	南米に生まれてフランスに渡ったロートレアモン、フランスに生まれてアフリカに脱出したランボー——19世紀半ばに生きた2人の詩人の対照的な軌跡をたどりつつ、それぞれの作品とからめて「旅」と創造行為の関係を考える。	石井 洋二郎	石井 洋二郎
12	島とユートピア	清浄な海は大陸の穢れを洗い流し、文明がもたらす精神の疲弊を癒してくれる——南太平洋の「楽園」をめぐる神話は今日も生きている。植民地史と探検史、そして人類学などの文献を参照しながら、ユートピアとしての島について考える。18世紀にタヒチを「発見」して「愛の島」という伝説を生みだしたブーガンヴィルと19世紀末にポリネシアを永住の地に選び、文明の起源に遡ろうとしたゴーギャンが、主たる考察の対象となる。	工藤 庸子	工藤 庸子
13	アジアと文明の遺跡	フランスがインドの彼方に位置する「インドシナ」に注目したのは、19世紀の半ばのことである。カンボジアの密林に眠るアンコール・ワットの遺跡は、植民地化の流れのなかで、いかなる文化的意味を担ったか。探検家のアンリ・ムオ、海軍士官として現地を訪れたピエーリ・ロティなどの紀行文を読む。さらに1931年のパリ植民地博覧会の会場で、アンコール・ワットの模型が表象したものを「文明の遺跡」という観点から考察する。本来「遺跡」とは国民が受けついでゆく「文化遺産」である。アンコール・ワットがカンボジアという国家に帰属することを、歴史の知見として学ぶことも課題となる。	同 上	同 上
14	幕末明治の日本とフランス	フランスにとって幕末維新期の日本は、地政学的にも強い関心の対象であった。欧米列強は中国に次いで日本に開国を迫ったが、その過程でフランスはイギリスとの間で熾烈な外交戦を余儀なくされた。そのため日仏修好通商条約締結後は、陸軍顧問団をはじめ、さまざまな使節団を送り込んだ。さらに鎖国のベールを脱いだ極東の島国は一部の人々の興味を呼び覚まし、少なからぬ旅行者が日本を訪れた。この回は全権団随員ド・モージュや美術収集で有名なギメなどが残した日本滞在記をもとに、この時期のフランス人の日本観を探る。	柏倉 康夫 (放送大学教授)	柏倉 康夫 (放送大学教授)

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
15	奴隷の旅・クレオール の声	最後にとりあげるのは、強制された旅である。大西洋をわたる奴隷船の「ミドル・パッセージ」、その極限的な歴史の記憶を糧に、クレオール文学の創造性は培われてきたように見える。奴隷制に関するフランス側の基本文献として、モンテスキューの『法の精神』とメリメの『タマンゴ』を読み、奴隷制廃止の立て役者ヴィクトル・シェルシェールを紹介する。さらにクレオール作家たちの活動に目を転じ、規範化された「国語」とは異質の言語、話し言葉として繁茂する混淆言語とは何かを考える。	工藤 庸子	工藤 庸子

＝ 言語文化研究 III ('05) ＝ (R)

－ 現代日本語の様相 －

- [主任講師： 姫野 昌子 (放送大学教授)]
 [主任講師： 上野田鶴子 (元東京女子大学教授)]
 [主任講師： 井上 史雄 (東京外国語大学教授)]

全体のねらい

現代日本語をさまざまな角度から考察する。言語は、その民族の文化と深く結びついている。現代日本を映す鏡としての日本語の様相を知ることによって我々自身の姿も客観的に捉えうるのではないだろうか。日本語学の立場から日本語の表現形式や談話構造を、社会言語学の立場からそのヴァリエーションと史的变化を取り上げる。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	音象徴語の機能 と用法	外界の事象と語音の間にある種の関連性を持つといわれる音象徴語（擬音語・擬態語）について形態的・意味的・統語的特徴を中心に考える。どのような形で日本語の表現を豊かなものに行っているか、文学作品や新聞記事などの実例も参考にしながら、分析する。	姫野 昌子 (放送大学 教授)	姫野 昌子 (放送大学 教授)
2	語構成のすがた ：複合語の構造 と意味用法	限られたことばで森羅万象を表現するには、語の合成が必要になる。日本語にはどのような合成語の類型があるのか、構成要素間の関係を形態的に整理し、その特徴をさぐる。例えば、「雨上がり」と「値上がり」は、形は似ていても、意味機能は全く異なる。種々の語例を通して複合語の実態を調べる。	同 上	同 上
3	語構成のすがた ：派生語の構造 と意味用法	接辞の中で、生産力のあるものは、多くのことばを作り出す。日本語の語彙を豊かにしている派生語を中心に、その様相をさぐる。例えば、「子供っぽい」と「子供らしい」は、どのように意味用法が異なるか。種々の語例を通して接辞と派生語の実態を調べる。	同 上	同 上
4	語における意味 の構造	日本語を豊かに彩ることばの意味について考える。どの言語の語彙も独自の形態で現実世界を分類し、構造化しているといわれる。反義語、類義語、多義語などの意味関係を通して、日本人の考えを探る。日本語の固有語である和語を中心に取り上げる。	同 上	同 上
5	類義表現の分析	似たことばの微妙な使い分けをどう分析したらよいか。語は星座のように並び、連想の網の目によって他の語と関連づけられているといわれる。いくつかの意味分野の語群の中から類義語を選び、分析する。日本語を学ぶ外国人学習者への視点も取り入れる。	同 上	同 上

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
6	授受動詞の用法 と話者の視点	授受動詞「あげる・くれる・もらう」は、本動詞としてものの授受を、補助動詞として事柄の授受を示す。対応する敬語「さしあげる・くださる・いただく」等の動作主にも目を向け、他言語の場合を参照し、日本語にみられる話者の視点について学ぶ。	上野田鶴子 (元東京女子大学教授)	上野田鶴子 (元東京女子大学教授)
7	指示詞の用法と 結束性	「こ・そ・あ・ど」の体系をもつ指示詞は、眼前の指示と文脈の指示に用いられる。談話にみられる指示詞の用法を中心に指示詞の担う機能について学び、他言語の場合を参照し、日本語における結束性のあり方をみる。	同 上	同 上
8	助詞の「は」と 「が」	日本語は、後置詞言語であり、後置詞の助詞「は」と「が」は、それぞれ係助詞と格助詞に分類される。「は」と「が」の用法を中心に、日本語における助詞の機能について学び、他言語の場合を参照し、日本語にみられる特徴をさぐる。	同 上	同 上
9	省略を用いた表 現	日本語は文脈に依存する度合いの高い言語であるといわれる。いわゆる「省略」を用いた表現を取り上げ、明示的言語の場合を参照し、暗示的言語ともいわれる日本語の様相について学ぶ。	同 上	同 上
10	受け身表現によ る述べ方	同じことがらを述べるのに能動的に述べる場合と受動的に述べる場合がある。日本語にみられる二種類の受け身表現を取り上げ、それぞれの用いられる条件を眺め、他言語の場合を参照し、日本語における述べ方の特徴をさぐる。	同 上	同 上
11	日本語の発音が 変わる	ガ行音・外来語音など戦後の日本語発音の変化を耳で確かめる。また、最近のアクセント・イントネーションの機能変化を、歴史的に位置付ける。	井上 史雄 (東京外国語大学教授)	井上 史雄 (東京外国語大学教授)
12	若者ことばの源 流と新語・新方 言	現代の若者ことばを、日本語の歴史の中に位置づける。また、新語の理論的分類を試みる。地方起源の若者ことば・新語の例として、ウザッタイ・ジャン・ミタク・～チッタ・ナニゲニなどの東京流入過程をみる。また、新語の発生・普及の理由を探る。	同 上	同 上

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
13	ラ抜きことばと サ入れことば	ラ抜きことばとサ入れことばの源流と最近の拡大過程をみる。数百年前からの動詞活用単純化の動きで、中部地方での動詞活用の整理傾向に源流がある。また、チガカッタのような新しい形容詞や、「ニュースな女」のような新たな用法も位置づける。	井上 史雄	井上 史雄
14	新型敬語の用法	現代語の敬語用法の丁寧語化を考える。また、「あいまい表現」(～のほう)との関連性をみて、談話パターン、言語行動全体の中に位置づける。対人関係のとらえ方自体が、タテ社会的なものからヨコ社会的なものへと変化しつつあると、捉える。	同 上	同 上
15	日本語の未来	難易度という観点から日本語を世界の諸言語の中に位置づける。日本語は、言語の基本構造は中程度の難易度だが、敬語と文字が難しい。外来語流入にともなって、音韻や文法にも、また言語行動・文字にも欧米化がみられる。日本語は欧米人にとって難易度が下がる方向に、変化が進んでいる。	同 上	同 上

＝表象文化研究（‘02）＝（TV）

－文化と芸術表象－

〔主任講師： 渡邊 守章（放送大学名誉教授・演出家）〕
 〔主任講師： 渡辺 保（放送大学教授）〕
 〔主任講師： 浅田 彰（京都大学助教授）〕

全体のねらい

芸術は、表象のシステムとしての文化の中にあつて、その固有の価値について意識的であり、またそうした価値の創出・伝達・受容と、更にはそれを伝承するとともに破壊もする営為として、文化の根幹をなす特権的な表象である。それは、文化をその多様な層において照らし出す<鏡>として機能するから、芸術表象の分析・研究は、文化の総合的な分析・研究において、最も重要な場の一つを構成する。表象文化研究は、表象としての芸術を、その創造・伝達・受容の多面的な局面において研究しようとするものだが、ここでは、政治制度や宗教的儀礼から日常生活に至る人間の営みに浸透している<文化>を顕在化させる<装置>としての芸術に焦点を定めて、その構造と作用、それらを可能にする作業の動態を分析する。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	執筆担当 講　師　名 (所属・職名)	放送担当 講　師　名 (所属・職名)
1	表象とは ～理論的フレーム	「表象」(representation[英語]、représentation[仏語]、Vorstellung[独語])という考え方について。「再＝現前化」と「再現＝代行＝表象」と「舞台上演」。何故、表象か？ 表象によって何が見えてくるか。「表象」についての思考の歴史的系譜。カント、ショーペンハウワー、ニーチェ。ミシェル・フーコーの視座（『言葉と物』における「表象の歴史」から、『監獄の誕生』以降の「表象装置」の分析へ）。表象の生成・伝達・受容の関係構造における芸術。「視線」の移動。「表象装置」の具体例（教会、劇場、美術館、万国博覧会、百貨店、オリンピック競技、ベンヤミンと複製芸術論、バルトの写真論）。「引用のゲーム」と「間・テキスト性」（歌舞伎における変形ゲーム）。「踊る身体」の表象。表象の廃絶（アルト）。	渡邊 守章 (放送大学名誉教授・演出家)	渡邊 守章 (放送大学名誉教授・演出家) 渡辺 保 (放送大学教授) 浅田 彰 (京都大学助教授)
2	表象装置Ⅰ ～都市と記念碑	「意味を付与されたイメージ」としての表象。建築の例（機能と意味）を都市とその記念碑的建造物によって分析する。「時計台」の系譜学。「安田砦」と「オデオン座フォーラム」の対比（記憶の活性化）。都市と時計台。時間の支配のトポス＝場。近代の時間＝駅の時計台。日本における「塔」の記憶。近代の時計台（アカデミズムと遊廓と）。ヨーロッパの都市における記念碑の表象（国民議会の例）。日本の国会議事堂の表象。エッフェル塔からの眺め。パリの都市計画の構造と意味。アルケ＝スナン王立製塩所に見る「中心」の意味（啓蒙思想による「パノプティコン」あるいは「一望監視方式」の発明）。「表象装置」という基本的な発想。	同 上	渡邊 守章
3	表象装置Ⅱ ～祝祭空間の演出	表象が創出され共有される特権的な時空＝場としての祝祭。カトリックの教会堂の例（ゴシックとバロックにおける世界像の表象としての教会建築）。バロック教会建築の「演劇性」。世俗的祝祭の典型としての劇場空間。「踊る王」の祝祭装置（宮廷バレエ、ルイ十四世御成婚パレード、ヴェルサイユ宮の『魔法の島の楽しみ』）。「葬儀」の劇場。	同 上	同 上
4	祝祭装置の近代Ⅰ	「共和国」の祝祭。劇場芸術の黄金時代であった19世紀ヨーロッパにおける「劇場」という表象装置。そこに設計された関係構造と、都市において劇場が醸成した虚構の作用の分析。19世紀の国際都市パリに照準を定め、台詞劇、オペラ、オペレッタ、バレエなど、19世紀を代表するジャンルについて、劇場による表象とその快樂の特性を分析する。	同 上	同 上

回	テーマ	内容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
5	祝祭装置の近代Ⅱ	ヨーロッパ19世紀の後半は、劇場という表象装置が、祝祭装置としてはすでに機能不全に陥り始めた時代である。そのような劇場芸術について、それを「キマイラ＝存在不可能な怪物」に譬えたのは、世紀末の詩人ステファヌ・マラルメであった。同時代の劇場芸術の破産とその根拠を暴きつつ、来るべき群衆的祝祭演劇の設計図を素描するマラルメ。「韻文朗読オラトリオ」「バレエ」「ワーグナーの神話的楽劇」「カトリックのミサ」をパラダイムの軸として設定しつつ、サーカスや寄席の芸の「直接的な演劇的力」を問い直すその演劇論を中心に、19世紀ヨーロッパが20世紀へと遺贈した「表象についての基底的思考」を跡づける。	渡邊 守章	渡邊 守章
6	美術館 あるいは記憶の装置	教会や劇場のように、19世紀近代以前から存在していた表象＝祝祭装置に対して「美術館」は歴然とフランス大革命の落とし子である。ただ、その出自によって、王侯貴族のコレクションを展示する「宮殿型美術館」（例えばローマのヴィラ・ボルゲーゼやドリア・パンフィリ）の「充満した私的空間」に対して、大革命以前から計画されたとはいえ、やはり『百科全書』とフランス大革命を受けて成立する芸術家のための「教育装置」でもあり、全国的な「記憶の装置」でもあるルーヴル美術館とを対比して見る。「文化的記憶装置」としての美術館の使命は近代・現代の芸術にも及ぶのであり、ニューヨーク近代美術館、パリ国立ポンピドゥーセンター、またルーヴルに対して19世紀美術館としての設定されたオルセー美術館、ロンドンにおけるナショナル・ギャラリーと二つの「テイト・ギャラリー」の「棲み分け」の例を分析する。	浅田 彰 (京都大学助教授)	渡邊 守章 浅田 彰
7	万国博覧会 あるいは展示の政治学	「万国博覧会」もフランス革命の所産の一つといえるが、それは当初から、単に全国規模の物産展であったのではなく、パフォーマンスを含んだ文化的イベントとしての特性を備えていた。しかも、19世紀後半に至って急速に大規模化するこの「展示空間」は、まさに19世紀ヨーロッパ近代が発明した「メガ・イベント」であり、ヨーロッパ近代における表象装置のベクトルをよく理解させる仕掛けである。「産業の展示」「帝国の展示」「見せ物（パフォーマンス）」という3つのベクトルに貫かれた万国博覧会の系譜と推移を、表象装置という観点から分析するが、1867年パリ万博の展示空間の構造と、エッフェル塔によって記憶されている1889年フランス大革命100周年記念パリ万博の文化的な発信力が焦点となる。ベンヤミンに倣って言うならば、万国博の群衆は「遊歩する群衆」であったが、20世紀になって、群衆の視線を再び客席に縛りつけつつ、なおかつ万国博に匹敵しうるメガ・イベントとして成立するのが、近代オリンピック競技にほかならない。それは「身体への視線の集中」という観点からも、20世紀の表象装置の地平を画している。	渡邊 守章	渡邊 守章
8	表象とメディア ～複製芸術論	表象を産出し伝達し共有させる「装置」に研究の焦点を当てれば、表象が「メディア」と如何に関わり、自らを変容・変質させつつメディアそのものをも変化させていくことに注目しなければならない。ベンヤミンの『複製芸術論』という20世紀の表象文化研究に基本的な命題（例えば「礼拝的価値」と「展示的価値」の対比や、「アウラ」とその喪失）を検討しつつ、1960年代におけるマクルーハンのメディア論、そして近年のレジス・ドブレ等による「メディアロジー（メディア学）」まで、表象やイメージとメディアが切り結ぶ局面についての言説を、歴史的に検証する。	浅田 彰	渡邊 守章 浅田 彰

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
9	表象とその臨界	<p>ミシェル・フーコーの名著『言葉と物』が大胆に立てた時代区分によれば、ヨーロッパ17世紀から18世紀にかけての「古典主義の時代」は、分節言語を特権的な表象のシステムとして確立させた時代であり、それに対して、18世紀末から19世紀にかけて生起する大きな断絶は、表象不可能な力の侵入のまに古典主義的な表象の思考そのものが揺らぎだす時代だとされる。それは言い換えれば、19世紀から20世紀を通じて、表象を思考する者は、常に表象の不可能性の出現と対峙しつつそれを行わざるを得ないことを意味する。特に、20世紀中葉の決定的な事件として、ナチによるユダヤ民族の大量虐殺があり、それは例えばワシントンの「ホロコースト博物館」の展示に対して、展示そのものの不可能性の上に立つ「ベルリン・ユダヤ美術館」のような形でも現れている。この人類史上の深いトラウマと同時代に、アントナン・アルトーのような「演劇の幻視者」が、全ての分節言語の廃絶の上に、「肉体の演劇」を立てようとしたことは、表象とその臨界を思考する上で、やはり避けては通れないだろう。やや視点を変えれば、西洋的な表象の発想にとっては臨界として立ち現れる、ある種の東洋的な表象の世界が、表象の思考の地平を画すのも当然かもしれない。マラルメの「余白」の強度の思考や実践であった『賽の一振り』が、東洋の水墨画に通じるような地平である。</p>	浅田 彰	渡邊 守章 浅田 彰
10	テキストⅠ ～神話装置	<p>文学的テキストを、19世紀近代が想定したように、「偉大な創造的主観性の産物」として、いわば閉ざされた系と考えるのではなく、言語による表象を作り・伝達＝流通させ、それを受容し、更にはそれを記憶として蓄積し、再び別の形で活用するという、「開かれたテキスト」として捉えなおす。18世紀から19世紀の江戸時代の日本で、「御霊＝敵討ち神話」として広く深く機能した「曾我物語」を例に、鎌倉時代におきた「敵討ち」の物語が、江戸の文化の内部で、どのように創造的な変容を遂げたかを分析する。その際、吉原という遊廓が、どのような文化装置として機能したかを理解することは、決定的に重要である。従って、ここでは、『籠釣瓶花街酔醒[かごつるべさとのえいざめ]』と『寿曾我对面[ことぶきそがのたいめん]』ならびに歌舞伎十八番『助六由縁江戸桜[すけろくゆかりのえどざくら]』によって、江戸時代の二大悪所場であった芝居町と遊廓が神話テキストをどのように変形して舞台を成立させたかを分析する。</p>	渡邊 守章	渡邊 守章 渡辺 保
11	テキストⅡ ～間[かん]ーテキスト性	<p>日本の伝統詩歌には、「本歌取り」という技法がある。それは単に古典のなかに典拠をもつことの顕示にはとどまらず、「本説＝典拠」と実際の言語パフォーマンスとの関係のゲームであった。単なる出典や影響関係の研究ではなく、テキストとテキストの間で演じられる「引用のゲーム」という局面に注目する必要がある。それは文学テキストと一般に芸術作品の受容論の地平を開くからだ。ここでも日本の江戸時代に例を取り、歴史上の事件であった「赤穂事件」を、『太平記』の「世界」に置き直すことで如何にして『仮名手本忠臣蔵』が成立したか、また、その『仮名手本忠臣蔵』を本説にして、如何に『東海道四谷怪談』が作られたかを分析する。もう一つに事例としては、八百屋お七の物語が井原西鶴の『好色五人女』から河竹黙阿彌の『三人吉三』へと変容したプロセスを論じる。</p>	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
12	身体Ⅰ ～舞踊と言説	表象としての芸術を考える際に、「身体」は特権的なトポス(話題=場)を提供する。ヨーロッパ19世紀の思考の内部では、捨象されることが多かった「身体」は、20世紀後半の思想の一つの重要な核をなしている。12回と13回で取り上げる「身体」は、舞台に現れる身体である。まずは日本の伝統演劇のなかから、能における「舞」と、「舞う身体」についての世阿弥の言説を分析し、『風姿花伝』から『二曲三体人形図』『花鏡』『三道』における世阿弥の思考を検討する。次いで、歌舞伎における所作事の発想とその構造・作用、主として歌の詞章と踊りの「振り」との関係に焦点を当てて分析する。	渡邊 守章	渡邊 守章 渡辺 保
13	身体Ⅱ ～虚構の身体	日本の舞台芸術には、「語り物」の構造が極めて強く、かつ多くの舞台表象を決している。ヨーロッパ的に言えば、「語り手」と「演技者」が分裂するわけだが、そうすることで、能も人形浄瑠璃も、また人形浄瑠璃を写した歌舞伎も、それぞれに固有かつ有効な舞台表象を作り上げてきた。その際、「演じる者」のステータスは、単にヨーロッパ近代の俳優論のように、演技者と役を完全に重なり合うものとしては発想できない。個人としての俳優と、彼が演じる役との間に、もう一つの、いわば「前=表現的」レベルを想定しなければならない。それを「虚構の身体」と呼ぶが、「語り物構造」と「虚構の身体」との関係、能と歌舞伎の演技によって見る。能の「仕舞い」や日本舞踊の「素踊り」は、この問題を立て、またそれを解く上で、重要なヒントを提供してくれる。	同上	同上
14	イメージのドラマ ツルギー	表象の最も分かりやすい局面は、イメージであり、意味を付与されたイメージである。その意味で、「映像論」は不可欠なのだが、映画映像、特に劇映画の映像を放送教材として用いることは、種々の制約から極めて困難である。そこで、「イメージ」の生成とその受容の政治・経済学とでも呼ぶべき主題をもつジャン・ジュネの戯曲『バルコン』の舞台(1956年作)を引用しつつ、現代社会とその文化における「イメージ」の演劇的・劇的作用について考える。ジュネの『バルコン』は、毎夜、客が自分の変身願望を満足させるべく訪れる「幻想館」と呼ばれる高級娼家を舞台に、権力への意思を性的表象へとシフトした「性と権力のごっこ芝居」だが、この娼家の女主人マダム・イルマと、その情夫でありかつこの店のパトロンでもある警視総監が、革命を挫折させて「英雄のイメージ」を手に入れるという、「イメージの権力奪取」を主題とする。その意味では、革命とその挫折の世紀と呼ばれた20世紀の総括とも受け取ることが可能な挑発的な劇作であるが、イメージのメタシアターとしてのその構造と作用に焦点を当てて分析する。なおこの舞台は演劇制作「空中庭園」が世田谷のパブリック・シアターの協賛を得て、渡邊守章訳・演出、篠井英介主演で、2001年に上演したものである。	同上	渡邊 守章
15	表象と言説 ～視線・技法・知	最終回は、表象文化研究の基本的な問題の系の配置を示しつつ、全体の総括を行い、この授業科目では取り上げなかったが、問題の系を構成し得る課題について、主任講師三人で討議する。特に、表象としての芸術を論じる際に、理論的言説化の作業のもつ意味について論じる。	同上	渡邊 守章 渡辺 保 浅田 彰

＝ 情報化社会研究（ '05 ） ＝ （TV）

－メディアの発展と社会－

〔 主 任 講 師 ： 柏 倉 康 夫 （放送大学教授） 〕

全体のねらい

情報革命と遺伝子工学の進展で幕をあけた新たな時代に、私たちの生活はどのような変化をとげるのか。未来を予測するのは困難だが、一つ確実にいえるのは、情報環境の変化が大きな要因になることである。ただ情報の世界にあっては、新たな伝達手段が登場しても、以前の技術がなくなるわけではなく、私たちは多様化する伝達手段を使い分けながら必要な情報を摂取する。それがひいては私たちの社会の枠組みを大きく変化させていく。20 世紀後半に始まったデジタル革命によって、工業文明から情報文明と呼ぶべき新たな段階に入った私たちの社会のあり様を、情報の視点から考察する。

回	テ ー マ	内 容	執 筆 担 当 講 師 名 (所属・職名)	放 送 担 当 講 師 名 (所属・職名)
1	コミュニケーションと伝達 —ドブレのメディアオロジーを中心に—	フランスの哲学者レジス・ドブレは 1991 年に発表した「一般メディアオロジー講義」の中で、彼が提唱するメディアオロジーとは、高度な社会的機能を伝達作用の技術的構造との関係において扱うものだとして述べている。事実、ドブレはその著作で、人間集団の象徴活動とその集団の組織形態との関係の間にある関係を、宗教、イデオロギー、文学、芸術などの具体的事例に即して検証している。だがこの新たな思考モデルは一方で論争と反発も引き起こした。初回の講義では、「メディアオロジー」の思想を中心にコミュニケーションと伝達の問題を考える。	柏 倉 康 夫 (放送大学教授)	柏 倉 康 夫 (放送大学教授)
2	時間意識の変容 — 20 世紀の芸術・文学に現れた時間—	情報伝達手段の進展と変化は、当然、私たちの世界観に影響をあたえ、意識のあり方を変化させてきた。19 世紀半ばから 20 世紀にかけて発展した輸送手段や、新たに登場したメディアは、とりわけ時間に関する私たちの認識を大きく変えた。そしてインターネットで個々人が結ばれる現在、いわば「人々の心が接続される」事態が起こりつつある。このとき私たちの時間意識はどのように変貌するのか。この問題を 20 世紀に登場した代表的な文学作品などを資料に用いて検討する。	同 上	同 上
3	話し言葉の復権 —書くこと・話すこと—	印刷技術の発明とその発達につれて、「話すこと」はその価値をますます減らしているように見える。こうした現象はあらゆるところで見られるが、とりわけ高度な社会生活の局面で顕著である。たとえば学術研究においては、次々に印刷刊行される本や論文が重視され、講義や講演、セミナー、研究室での討論の比重が下がっている。「本のように話す—口承性と知」の著者フランソワーズ・ワケ（CNR S 研究所長）は、こうした傾向に疑義を申し立てている。彼女の議論を中心に話すという基本的伝達手段の意味を考える。	同 上	同 上
4	印刷・書物・電子テキスト	印刷出版の歴史で革命を起こしたのは、いうまでもなく 1450 年ころにグーテンベルクが発明した活版印刷術である。それから凡そ 500 年間、この技術が人間のリテラシー（読み書き）向上に与えた影響は計り知れない。人々は鉛活字でインクを紙に印刷して書物をつくり、新聞、雑誌を発行し、膨大な情報を伝えるとともに、知識を蓄積してきた。だが印刷物の世界は、第二の革命といわれるコンピュータの導入によって、テキストの持つ意味が大きく変わりつつある。この回では印刷媒体の変遷をたどりつつ、「テキスト」の本質を論じる。	同 上	同 上

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
5	拡大する映像世界 —写真・映画・テレビ—	19世紀以来、写真・映画・テレビと次々に登場した映像メディアは、集団的あるいは個人的想像力を形づくるのに大きな力を発揮した。ただ注意しなければならないのは、写真、映画、テレビはそれぞれメディアとしての機能が異なることである。しかも、映像がコンピュータと結びつくことで、本質的変化が起こっている。現実とその映像という関係が逆転し、コンピュータのシミュレーション機能により、映像が現実を先行する事態が生じている。「イメージの文明」の現在を考える。	柏倉 康夫	柏倉 康夫
6	ラジオの過去と現在 —あるメディアの歴史—	カナダ生まれの文明批評家マーシャル・マクルーハンは、「メディア論」で、ラジオというメディアを部族の太鼓と呼んだ。これはかつてラジオが民族や文化の深層に訴えかけて、歴史を動かした経緯があったことを指している。しかしテレビという新たな情報システムが出現して以降、ラジオはむしろ話し手と受け手を一対一でつなぎ、個人的メッセージを伝えるという側面を強めている。そして、それがラジオの復権をもたらしている。20世紀前半をリードしたラジオというメディアがたどって役割を検討する。	同 上	同 上
7	絶え間なき通信の時代	通信の技術はこの100年で大きく変わった。無線通信、海底ケーブルの設置、電話の普及、そして携帯電話の登場。これらの通信技術は、人々が生活し行動して、人間関係を築くのに大きく貢献し、仕事や職場のあり方を変えた。ときどき登場した新たな通信技術が、利用者を取り巻く社会的環境と物理的環境をいかに変えてきたか。世界的規模で普及しつつある携帯電話などの移動体通信の特性を含めて、歴史的に展望する。	吉井 博明 (東京経済大学教授)	吉井 博明 (東京経済大学教授)
8	放送規制の展開	免許制度の下に置かれた放送事業の発達は、つねに制度的規制と密接なかかわりを持ってきた。この回では放送の制度的規制がどのような変遷をたどってきたかを、アメリカの事例を中心に振り返るとともに、とくに1980年代以降に進んだ多メディア・多チャンネル化やデジタル化の過程で起こった、放送メディアの制度的規制に対する新たな論議を題材にしつつ、放送メディアの制度的特質を論じる。	音 好宏 (上智大学助教授)	音 好宏 (上智大学助教授)
9	放送メディアの現状と課題	近年の電気通信技術の発達などを背景に、通信と放送の融合など、放送サービスは、いま大きな変革の時期を迎えている。今後、放送サービスは、社会的・制度的にはどのように位置づけられ、またこれまで果たしてきた社会的機能はどのように維持されるのか。放送はさまざまな課題に直面している。放送メディアの現状を踏まえつつ、これらの問題の意味するものを検討する。	同 上	同 上
10	コンピュータ・ネットワークの開発思想	1969年に稼働し始めた国防総省のARPAネットは、のちにインターネットのバックボーンとなったことで知られる。このコンピュータネットワークはどのような思想のもとに生まれたのか。ARPAネット構築を進めた情報処理技術部の初代部長リックライダーの思想形成の過程を縦軸にして、1960年代に情報化社会の未来像がどのように描かれていたかを取り上げる。	喜多 千草 (関西大学助教授)	喜多 千草 (関西大学助教授)

回	テ ー マ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
11	だれもが使えるコンピュータの誕生	現在のパーソナルコンピュータで使われている、書類・フォルダ・ゴミ箱などのある「デスクトップメタファ」は、1980年代にゼロックス社で生まれて広まったものである。当時、開発者たちが思い描いた未来のコンピュータ社会とはどのようなものであったか。この回では、誰もがコンピュータを使う時代がどのようにして始まったのかを検証することで、今日の情報化社会形成の発端を考える。	喜多 千草	喜多 千草
12	情報の画一化と社会 — 戦争報道の現実 —	伝達手段が飛躍的に拡大した結果、マスメディアがにぎる話題設定能力が強化され、政治・社会、ひいては経済活動までが、メディアが選択し提供する情報に左右される事態となっている。しかもマスメディアの寡占化が進み、新聞、雑誌、テレビの分野で資本を同じくする系列では、同一のニュースや論調が世界規模で流され、世論形成に力をふるっている。この回では、以上のような状況を、ヴェトナム戦争と湾岸戦争を例に検証する。	柏倉 康夫 (放送大学教授)	柏倉 康夫 (放送大学教授)
13	文化と情報格差	グローバル化する世界には、ソフトパワーとして世界に大きな影響力を持つ文化の浸透と地域社会に根づいた多元的な文化との相克が横たわっている。インターネットによる情報の大交流時代を迎え、メディアによる文化の発信は、多国間のさまざまな政治的課題を超えて、自国文化の経済化や安全保障上の主題ともなっている。情報化社会におけるソフトパワーと文化経済について考察する。	武邑 光裕 (東京大学大学院助教授)	武邑 光裕 (東京大学大学院助教授)
14	デジタル社会の著作権	デジタル社会は、これまでの重量的媒体によって支持されてきた情報を符号化し、旧来の媒体概念を離散、流動化させている。複製、改変が容易に行えるデジタル情報の特性から、著作権やコピーライトの概念そのものが根本的に問われている。公共性と私有制の間で揺れ動くデジタル社会における知的所有権や著作権のあり方を検討する。	同 上	同 上
15	情報化社会の行方 — 個人・地域・国家 —	ますます多様化する情報手段は、既存の国家や民族の概念に影響をあたえずにはおかない。それは地球規模で棲み分けと共生が可能な社会システムの構築を期待させる。情報技術の進歩は今後も私たちの生活や社会構造を変え続けるに違いない。だが一方で、それは個人のレベルや集団レベルで情報の格差を生み、それが時間とともに拡大する危険をはらんでいる。さらにはアイデンティティーの危機やリアリティーの喪失といった事態をもたらすことも危惧される。情報化社会の将来を検討する。	柏倉 康夫 吉井 博明 武邑 光裕 音 好宏	柏倉 康夫

＝地域文化研究 I (' 0 2) ＝ (R)

－ 地中海世界の歴史像 －

〔主任講師： 伊藤 貞夫（放送大学名誉教授）〕

〔主任講師： 樺山 紘一（国立西洋美術館長）〕

全体のねらい

紀元前 8 世紀から紀元 16 世紀にいたる地中海周辺世界に注目し、その歴史的諸相を、この世界の特質如何を問いつつ、多角的に考察する。序説と全体像提示にあてる第 1・15 回を除き、他の 13 回では何れも研究史上枢要の主題を選び、史料の様態と扱いの実際、各領域における先端的な問題状況の 2 点に留意しながら、議論を進める。

回	テ ー マ	内 容	執筆担当 講 師 名 (所属・職名)	放送担当 講 師 名 (所属・職名)
1	史 料 と 方 法	考察の対象と視角、講義全体の構成、履修上の留意事項について述べたのち、研究の基礎をなす史料の分類と批判、歴史を考察するそもそもの意義、このたびの研究に有効と見られる比較史的方法、の諸点に論及する。	伊藤 貞夫 (放送大学名誉教授)	伊藤 貞夫 (放送大学名誉教授)
2	古代の都市国家	この地域の古代史は、ギリシア・ローマの都市国家を軸に展開する。なかでも多数都市の競合的並存を貫くことにより、そのような歴史の典型を示すギリシアの場合を中心に、この世界がいかなる条件の下に成り立ち、いかなる歴史的位置を有するかを論ずる。	同 上	同 上
3	市民たちの世界	ギリシア・ローマ諸国家の核をなす市民共同体内部における社会的結合のありように関しては、近年さまざまな議論が生まれ、その帰趨は必ずしも定かでない。ギリシアの氏族制、ローマにおけるパトロネジに即して、最近の研究動向を追い、問題のありかを見定める。	同 上	同 上
4	家族史への誘い	古代ギリシア社会の基礎集団である家族の様態を、法廷弁論や碑文に基づき論究する。ローマとの比較はむろんのこと、近世ヨーロッパ諸地域の家族史研究や社会人類学の成果をも撮取り、核家族の遍在を想定する近年の有力説への批判を試みる。	同 上	同 上
5	奴 隸 制 社 会 論	古代地中海世界では、自由人と奴隸との区別は明らかであった。奴隸とは、いかなる境遇にある人々だったのだろうか。古代地中海世界を奴隸制社会としてとらえることはできるだろうか。碑文やパピルス文書を素材に、考えてみたい。	本村 凌二 (東京大学教授)	本村 凌二 (東京大学教授)
6	「パンとサーカス」の社会史	ローマ帝国の「パンとサーカス」は、しばしば墮落した大衆社会の代名詞のごとく語られているが、この恩恵施与の慣行には、古代社会の底流にある人間関係の本質が表れている。現代における社会資本の在り方を再考する機会にもなる。	同 上	同 上
7	古代末期社会論	かつて古代末期は古典古代文化が終末を迎える時代とみなされていたが、近年では独自の価値と文化を担う創造の舞台と考えられるようになった。この新しい世界がどのようにして生まれ育ったかについて、史料の再考を試みる。	同 上	同 上

回	テ ー マ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
8	中世イタリアの多言語資料	11-12世紀の南イタリアでは、当時の多文化併存状況を象徴するように、アラビア語・ギリシア語・ラテン語で記された文書が多く出されている。それらの文書の外的特徴や保存形態、それらが収集されている古文書館、解説・利用する際の問題点を論じる。	高山 博 (東京大学教授)	高山 博 (東京大学教授)
9	中世地中海三大文化圏論	7世紀から15世紀にいたるまで、環地中海地域は、アラブ・イスラム文化圏、ギリシア・東方正教(ビザンツ)文化圏、ラテン・カトリック(西ヨーロッパ)文化圏の三つに分割された状態にあった。この三つの文化圏を比較して、それぞれの特質を論じる。	同 上	同 上
10	中世地中海の交易と人的交流	中世の地中海は、大規模な覇権争奪戦の舞台であるだけでなく、異なる文化に属する人々が接触し交流する場でもあった。地中海を行きかかった人や物に注目して、地中海交易のありようとそこに形成された人的ネットワークや交流圏を論じる。	同 上	同 上
11	ルネサンスに甦る古代ギリシア	ギリシアの古典文献は、イスラム世界からラテン世界への翻訳や、ビザンチンにおける発掘をへて、15-16世紀のイタリアで本格的な再評価と再解釈を受け取った。その最終局面における展開を、ルネサンス文化の成熟に即して論ずる。	樺山 紘一 (国立西洋美術館長)	樺山 紘一 (国立西洋美術館長)
12	ブローデルとアナー派の地中海	ブローデルの『地中海』の基本構想を検証し、アナー派の歴史学方法論を吟味する。そこでは全体性と日常性というふたつの観点が重要であるが、両者の有効性が十分に発揮されているかどうか、また異なった視点がありうるのではないかを考察する。	同 上	同 上
13	オスマン帝国の成り立ち	13世紀末にイスラム・ビザンツ両世界の接点であるアナトリア西北部に出現し、16世紀には地中海世界の約4分の3の地域を占めるにいたったオスマン帝国の存在に注目し、その支配組織の特異なありようを、形成と発展の相の下に探る。	鈴木 董 (東京大学教授)	鈴木 董 (東京大学教授)
14	イスラム的共存のシステム	盛期のオスマン帝国が、さまざまな民族と宗教が複雑に入り組む広大な領域に対し、イスラム的伝統に基づく共存のシステムを用いながら、長期にわたりいかに統合の実を挙げたかを、史料の模索を通じ明らかにする。	同 上	同 上
15	地中海世界を考える視点	地中海世界は、歴史学はもとより、人類学・地理学・芸術学など、多様な角度から論じられてきた。数千年にわたる歴史をとおして、多様な文明が接触と競合を演じた世界を、いかに把握できるか。方法上の規準を原理的に捉えなおしてみたい。	樺山 紘一	樺山 紘一

＝地域文化研究Ⅱ（'02）＝（R）

－東アジア歴史像の構成－

〔主任講師： 浜口 允子（放送大学教授）〕

〔主任講師： 川勝 守（大正大学教授）〕

〔主任講師： 吉田 光男（東京大学大学院教授）〕

全体のねらい

東アジア世界とは何か。その文化や社会はどのように形成され、いかなる特徴をもっているか。本講は、東アジア世界を構成する中国・朝鮮を中心として、その歴史と現在をさまざまな角度から考察しつつ、併せてその研究方法や研究の現状を明らかにする。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	東アジア地域文化研究の方法、その特殊性と課題	東アジア地域には、前近代、近現代を問わず、膨大な官製文書、行政文書が存在する反面、地方文書、庶民文書、或いは各種社会や団体の史料などは不足或いは入手困難という傾向がある。したがって、東アジアの地域文化研究にあたっては、何よりもまず、史料の特殊性や、入手法、利用法、着目点などについて理解しておかなければならない。	川勝 守 (大正大学教授) 吉田 光男 (東京大学大学院教授) 浜口 允子 (放送大学教授)	川勝 守 (大正大学教授) 吉田 光男 (東京大学大学院教授) 浜口 允子 (放送大学教授)
2	東アジア世界とは何か	東アジア世界を特徴づけているものは何か。その理解のために、中国皇帝と周辺諸国家首長の朝貢・冊封関係と君臣関係の在り方、文化の伝播と形成等を取りあげ、中国の中華世界に対する朝鮮・日本の中華世界、東アジアの多極構造等について述べ、華夷秩序の歴史的展開と時期区分について考察する。	川勝 守	川勝 守
3	中華帝国の生成・展開・崩壊	一つの中国・一人者の支配はなぜ可能か。皇帝の出現と継承、王朝の形成と交替、官僚制と地方行政等の諸問題のもつ意味を理解し、帝国の諸制度、財政・土地制度・税制・徭役・官営工業等について検証し、そのシステムがなぜ崩壊するのかを考察する。	同 上	同 上
4	朝鮮近世の政治システム—官僚はどこから生まれてきたのか—	政治エリートである士族に焦点をあて、朝鮮近世の政治世界を解説する方法を考えていく。儒教、科挙、兩班、官僚制度、地方制度を中心に政治システムを分析し、政治と社会との相関関係、人々の政治意識などに迫る。	吉田 光男	吉田 光男 (東京大学大学院教授)
5	中国経済の社会動態—農業と手工業の結合	農耕と織布は中国における農業・工業生産の根幹であり、経済の基礎である。春秋戦国期の鉄製農具の使用より近代に至る農業・工業史の展開を追い、そこにいくつかの画期を設定して社会構造発展との関係を考える。	川勝 守	川勝 守
6	商業の発達と都市網の形成	唐宋期と明清期の二商業革命時期の内容を比較して、生産・流通・消費の所在関係、商人組織、経営・投資・管理、市場形成を確認し、明清期に国都—省城—府州城—県城—市鎮の重層的な都市階層がいかに形成されたかを見る。	同 上	同 上

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
7	朝鮮近世の流通経済—商業と商人—	朝鮮近世の流通経済には強い国家的統制があった。貢人、市塵、襍負商、大同法など、現在最も注目を浴びている研究課題に着目し、国家と商業との関係を手がかりとして流通構造の特色を探究し、朝鮮近世の経済世界がもつ特質を剔抉する。	吉田 光男	吉田 光男
8	伝統中国の社会構成	儒教主義に基く社会は、地主宗族をつくり、科举制により官僚を出し、商業・工業を営む者とともに社会の支配階層を占めた。一方、自作農・佃農・雇農は、都市下層民とともに地方社会の大半を占め、政治・社会変動の中心となった。	川 勝 守	川 勝 守
9	朝鮮近世の社会集団	氏族、契、郷案組織など、国家と住民の中間にあつて近世朝鮮社会の中核を形成していたさまざまな社会集団について、現代の社会調査を視野に入れながら考察し、歴史学と文化人類学・社会学の融合的な研究を模索する。	吉田 光男	吉田 光男
10	東アジアの思想文化—明儒における学統と政治実践—	儒教・仏教・道教は中国の宗教文化であり、三者相俟つて中国思想を形成し、時代とともに内容を変えつつ、社会発展に対応してきた。その影響は二千年來、朝鮮・日本・琉球などの周辺諸国に及び、各国にそれぞれ定着した。その変遷をみる。	川 勝 守	川 勝 守
11	東アジアの家族と女性	東アジアにおける男女の社会的関係は、一般に父権家族制度とその道徳律の影響を受けてきたとされる。そうした両性関係の形成過程を明らかにすると共に、近年の研究によって、伝統的女性像の見直しがなされていることにも言及する。またジェンダーの視角から、家族や宗族を中心とした社会の特質を考える。	同 上	同 上
12	十八世紀の清朝と東アジア世界—清、乾隆期雲南銅の京運問題—	一八世紀の清は、領土・民族・生産と流通・文化等の面で今日の中国の原型である。人口は世紀末に4億に近づき人口爆発を起こした。移住と開発は少数民族地域や周辺諸国へ向かい、漢民族内外に反乱と戦争を起こした。また同世紀は、物流の新たな流れや、人々の広範なネットワークを作り出した時であった。	同 上	同 上
13	東アジアの近代と中国のナショナリズム	ヨーロッパ世界によるアジア進出は、中華帝国の天下的世界が解体され、代わって国民国家が形成される契機となるものであった。その鍵ともいえるナショナリズムの、各地域、各時期における担い手や表出の場について考察する。	浜口 允子 (放送大学教授)	浜口 允子 (放送大学教授)
14	近代中国と都市社会	二〇世紀に入って中国社会はどのような変化をみせたのか。その研究は如何にすすめられてきたのか。新しい都市の形成に注目し、伝統社会をひきつぎつつ新たな時代を刻印するその特色について考える。	同 上	同 上
15	社会主義の選択と現代中国	二〇世紀後半の現代中国の歴史は、社会主義の受容に始まり、いまやそこから脱却するのか或いは深化させるのかを問う模索のなかで新世紀を迎えている。この半世紀の歴史をどう捉えるか、幾つかの着目点について述べる。	同 上	同 上

＝地域文化研究Ⅲ（‘02）＝（TV）

－ヨーロッパの文化と社会～イギリスを中心に～－

〔主任講師： 山内 久明（放送大学教授）〕

〔主任講師： 木畑 洋一（東京大学大学院教授）〕

〔主任講師： 草光 俊雄（東京大学大学院教授）〕

全体のねらい

ヨーロッパ連合はすでに現実となり機能しているが、他方において言語、文化、社会に目を向けると、国家を単位とする多様な個別が存在することも事実である。この講義では、ヨーロッパの文化と社会を、イギリスに焦点を合わせて、そこで、民族、人種、地域、階級などさまざまな要素が複雑に絡む仕組みと歴史的背景を考察する。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	はじめに －中心と周縁	イギリスは自らその一員であるヨーロッパ連合と不即不離の関係にある。ヨーロッパ大陸に中心を置いて見るとイギリスは周縁に位置するが、イギリスのなかで、イングランド対ケルト文化圏、南と北など、地理的・地域的多様性に基づく中心と周縁の関係が存在する。	山内 久明 (放送大学教授) 木畑 洋一 (東京大学大学院教授) 草光 俊雄 (東京大学大学院教授)	山内 久明 (放送大学教授) 木畑 洋一 (東京大学大学院教授) 草光 俊雄 (東京大学大学院教授)
2	自然と景観の保全	18世紀中葉のイギリスの田舎における「囲い込み」と、産業革命の結果としての産業都市の成立は、イギリスの田舎と都会を大きく変貌させた。環境破壊に対する反省は環境保全運動を促し、顕著な一例がナショナル・トラストである。同時に、都市計画が発達した。	山内 久明	山内 久明
3	民族と人種の融和	イギリスという国民国家がどのようにできあがってきたかを、ブリテン島、アイルランド島への人の移動、イングランドと「ケルト辺境」の関係に着目して検討し、さらにイギリス帝国の形成と崩壊の過程が、イギリスの人種・民族構成にいかなる影響を及ぼし、国民国家としての姿を変容させたかを問う。	木畑 洋一	木畑 洋一
4	ことばの標準化と多様性	アングロ・サクソン時代のゲルマン的要素と、ノルマン征服以後のフランス的要素との融合による英語の豊富化。教育制度やメディアを通して行われた英語の標準化。それにもかかわらず存続する地域と社会的差違による英語の多様性。言語政策の問題、等々。	斎藤 兆史 (東京大学大学院助教授)	斎藤 兆史 (東京大学大学院助教授)
5	政治と女性	議会制民主主義を育んだ国というイメージのイギリスであるが、女性が参政権を得たのは、イギリス帝国の中のニュージーランドなどよりはるかに遅く、第一次世界大戦末期のことであった。女性の社会的地位の変遷と女性参政権獲得運動の展開を歴史的に追い、イギリス政治の中での女性の位置を探る。	木畑 洋一 鈴木 実佳 (静岡大学助教授)	木畑 洋一 鈴木 実佳 (静岡大学助教授)
6	経済的繁栄と停滞	産業革命の先進国、金融の中心地、「世界の工場」として世界経済を先導したイギリスも、20世紀に入るとアメリカとドイツに追いつかれ、第二次大戦終結とともに植民地も失い、停滞。戦後の福祉国家の確立、サッチャー政策による福祉打ち切り、ビッグ・バンと続く。	草光 俊雄	草光 俊雄

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
7	社会構造と文化	いわゆる「階級」問題の複雑さは、中世の大土地所有者としての貴族に遡る土地所有形態に根ざした身分関係と、近世以後の流動的な経済活動による貧富の差に基づく階属性との混在に起因する。階級分化とは何か、教育は階級構造を流動的にするかどうか、等々の問題。	草光 俊雄	草光 俊雄
8	イギリスの医療	イギリスの近代科学に対するアイザック・ニュートンの貢献はいまさら言うまでもないが、それと並行してジョン・ロックに代表される経験論哲学の伝統の重要性が挙げられる。また、20世紀前半、ヴィトゲンシュタインを擁したケンブリッジの哲学的隆盛など。	鈴木 晃仁 (慶應義塾大 学助教授)	鈴木 晃仁 (慶應義塾大 学助教授)
9	個性を伸ばす学校教育	イギリスの初等教育制度が中央政府の政策によって統一されたのは1870年の教育法によってであり、それ以前は宗教別の教会と私学に任されていた。義務教育年齢が延長され、機会均等が普及するのは第二次大戦後である。公立と私学、カリキュラム、試験制度、等々。	小澤 周三 (東京外国語 大学教授)	小澤 周三 (東京外国語 大学教授)
10	古くて新しい大学	イギリスの大学は中世の大学としてのオクスフォードならびにケンブリッジ、スコットランドの諸大学、産業革命に呼応する19世紀の諸大学、第二次大戦後の社会の平等化に基づく新大学、1992年に昇格した最新の大学などがある。理念と制度の現在と歴史的背景。	山内 久明	山内 久明
11	国家と宗教	アングロ・サクソン時代に遡るキリスト教伝来、ローマ・カトリック教会直轄の中世キリスト教、ヘンリー8世による宗教改革と英国国教会の成立、国教会から離反した非国教主義の諸宗教。宗教は信仰の問題であると同時に、文化と社会の動態に深く関わっている。	同 上	同 上
12	文学とメディア	文化と社会の総体のなかでの文学——そのつくり手と受容者の社会的位置づけ。さらにそこから、いわゆる純文学に隣接するメディアや、ポピュラー・カルチャー、書き手としての女性、こどもの文化など、問題は尽きない。	山内 久明 佐藤 和哉 (日本女子大 学助教授)	山内 久明 佐藤 和哉 (日本女子大 学助教授) 鈴木 実佳
13	表象文化	ロンドンを中心とする夥しい数の劇場で、シェイクスピアをはじめとする古典と現代劇が共存する活力にみちた演劇活動。ホガース、パーマ、ターナー、カンスタブル、ラファエル前派などの絵画。高度な演奏活動と音楽的創造性との相関性、等々。	草光 俊雄	草光 俊雄 ゲスト 菅 靖子 (埼玉大学助 教授)
14	イギリスと世界	EUの一員でありながらEU統合の深化に対しては慎重なイギリス、かつての植民地であった英連邦諸国との絆も持続するイギリス、同時にアメリカ合衆国との「特別な関係」をも重視するイギリス——ユニークな多方位外交を進めるイギリスの、世界の中での位置を歴史的に探る。	木畑 洋一	木畑 洋一
15	イギリスと日本 ——おわりに	前回のテーマの延長としてイギリスと日本との関係文化、社会、外交などに即して考えるとともに、おわりにあたり全体をふたたび振り返り、まとめを行なう。	山内 久明 木畑 洋一 草光 俊雄	山内 久明 木畑 洋一 草光 俊雄

＝ 日本文化研究（'05）＝（R）

－ 神仏習合と神国思想 －

〔主任講師：高木 昭作（放送大学教授）〕

〔主任講師：末木 文美士（東京大学大学院教授）〕

全体のねらい

「日本文化研究」の「文化」を、文化人類学、比較文化学、文化断絶などという時の「文化」、すなわち社会に蓄積された思想、行動様式であり、各人は新たにそれに付け加えつつも、それに影響されて考えかつ行動する。日本人に影響を与え続けた「文化」として、この講義では神国・仏国思想について考える。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	秀吉・家康の神国・ 仏国思想	「文化」の意味を簡単に定義したのち、日本人に強く影響した「文化」の一例として、豊臣秀吉、徳川家康がそれぞれ海外に送った一種の外交文書の中から、日本型華夷思想としての神国・仏国思想を抽出する。	高木 昭作 (放送大学教授)	高木 昭作 (放送大学教授)
2	日本型華夷思想と しての神国・仏国思想	秀吉・家康の神国思想が中世に作られた神仏習合思想に深く影響されていることを指摘し、自民族中心主義としての日本型華夷思想の存在は既に倭王武の上表文に見られることを紹介し、さらに明治期の教育勅語がこれによっていることの指摘を通じて、が天皇制と密接な関連にあることを述べる。	高木 昭作	高木 昭作
3	生活のなかの神と 仏	よく日本人は無宗教であると言われるが、宗教的な信念や世界観として意識化されないかたちで、神仏信仰は生活のすみずみに浸透している。盆や正月の年中行事のほか、占い・祭礼・お守り札などの多様な民俗信仰を手がかりに、生活文化としての宗教を考える。	中村 生雄 (大阪大学大学院教授)	中村 生雄 (大阪大学大学院教授)
4	国家権力と神仏信仰	古代の鎮護国家の仏教、近世の寺請制、近代の神仏分離令や国家神道など、日本の宗教はつねに時の為政者の政治的な意図によって大きくその性格を規定されてきた。その歴史的経過を概観しながら、日本宗教の特徴を国家や社会との関係に即して明らかにする。	中村 生雄	中村 生雄
5	祖先祭祀と他界観	日本人の大半にとって仏教と神道は、先祖の霊を供養しその成仏を願うこと、氏神や鎮守の神に家族や地域共同体の安泰を祈ることで受け入れられてきた。死者を神や仏として祭祀の対象とする日本人の宗教感情について、その歴史的要因と問題点を検討する	中村 生雄	中村 生雄

回	テ ー マ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
6	古代の神々	古代の神々について、記紀神話を中心に紹介する。しかし、記紀神話は決して古くからの伝承をそのまま伝えるものではなく、7世紀末から8世紀はじめの政治情勢を反映したものであるから、その背景をおさえる必要がある。	末木 文美士 (東京大学大学院教授)	末木 文美士 (東京大学大学院教授)
7	仏教の日本化	仏教は単なる宗教に留まらず、先進的で総合的な文化として大陸から導入された。どのような新しい文化が導入され、それがどのように変容されて日本に定着したか、古代を中心に検討する。	末木 文美士	末木 文美士
8	神仏習合の形成	仏教の日本化のひとつの形態は、日本の神々を取り入れ、神仏習合という独特の宗教のあり方を生み出したことである。どのような経緯で神仏習合が形成されたか、その過程を検証する	末木 文美士	末木 文美士
9	鎌倉仏教の世界	鎌倉時代は、今日の大宗派の祖師たちが出現したこともあって、日本の仏教史の中でも特に注目されることが多い。最近の研究動向を紹介しながら、祖師たちだけでなく、より広い視野から鎌倉仏教を見直す	末木 文美士	末木 文美士
10	中世神道説の形成	古代よりの神仏習合の過程は、中世に至り神に関する教説を生み出した。それを中世神道説という。中世神道説には真言密教の影響を受けた両部神道、伊勢神宮祠官による伊勢神道、天台系の山王神道等の複数の流れがあり、それらは互いに関連しあいながら、中世の宗教世界の一角を占めていた。ここではその歴史的展開を跡づける。	伊藤 聡 (茨城大学助教授)	伊藤 聡 (茨城大学助教授)
11	中世神道説と中世の思想・文化	中世神道の教説は、仏教、中国思想(儒教・道家・道教)などが、教理化の根幹に深く関わっており、一種外来思想の日本化としての特徴を持つ。また、歌学、謡曲、軍記物語等の中世文芸で中世神道説の濃密な影響を受けているものも多い。この時間は、中世神道説と、さまざまな思想・文芸との関連を考える。	伊藤 聡	伊藤 聡
12	中世の神話叙述	中世には古代とは異なる、中世独特の神話が多数作られた。それは記紀神話を基本にしながらも、中世社会に相応しく改変されたもので、神仏習合的要素が色濃いのが特徴だった。このような中世神話を具体的に解説しながら、中世人の宇宙観・世界観を探る。	伊藤 聡	伊藤 聡

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
13	中世の王権思想	中世における天皇の権威は、実質的な権力の逡減に反比例するように上昇した側面がある。 それは特に神秘的性格を帯びたものであった。神国思想をはじめ、三種神器信仰、即位灌頂等の天皇をめぐる宗教的言説を採り上げ、中世における王権の意味を考える。	伊藤 聡	伊藤 聡
14	神仏関係の変容	中世の神仏関係は、近世になると儒教の導入などにより、大きく変容する。その中で、儒教や国学、復古神道などから排仏論が主張され、神仏習合に疑問が呈されるようになる。その経緯を概観する。	末木 文美士	末木 文美士
15	神国・仏国思想と幕藩制	神仏習合の中世に始まり、近世を通じて作られ続けた起請文について説明し、その意味が実質的には変化していることの指摘を通じて、秀吉による全国統一が具体的には「惣無事」体制への諸勢力（大名・町・郷村・宗教団体など）の統合であったこと、つまり「秀吉の平和」の強制に他ならなかったことを指摘した後、近世における平和（秩序）の意味について考える。	高木 昭作	高木 昭作

＝ 比較文化研究（ '05 ） ＝ （TV）

－若者とジェンダー－

〔主任講師： 宮本 みち子（千葉大学教授）〕

全体のねらい

若者の社会的地位や役割は、文化と社会経済構造の影響を受けて、歴史的にも国や民族によっても異なる。ポスト工業化社会では、青年期から成人期への移行が長期化し、若者が大人になるプロセスが大きく変貌しつつある。このような現象を、世界の複数の社会にまたがって比較文化の手法でみていくことによって、若者のあり方がどのような文化や社会経済条件の影響を受けているのかを検討する。また若者とその他の世代との関係についてもみていく。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	比較文化としての若者	若者をなぜ扱うかその意味を整理し、講義の全体像を示す。また、青年期・ポスト青年期・成人期という用語の検討をする。	宮本みち子 (千葉大学教授)	宮本みち子 (千葉大学教授)
2	人類史のなかの「若者」1	人類史のなかで、地球上の諸社会における若者の位置付けに関する資料は限られている。しかし19世紀以降の世界の民族誌にみられる若者の位置付けを概観する。特定社会において、人間の一生の経緯として年令又は加齢による基準を重視する社会と年令以外の基準を重視する社会があること、同一社会でも諸状況の変容によりこれらの基準が変動することなどを説明する。	原 ひろ子 (放送大学教授)	原 ひろ子 (放送大学教授)
3	人類史のなかの「若者」2	現在、地球上の諸社会は、何らかのかたちで国民国家に組み込まれている。19世紀以降、20世紀中葉までの産業革命・「近代化」にともなう生業の変化、学校教育の普及、栄養状態・疾病の変化、日常生活の変化、平均寿命の延びなどが社会における若者の生活や位置付け、「一人前」の基準などに対してどのように影響したかを男女比較及びジェンダーの視点を含めて考える。	同 上	同 上
4	イヌイットの「若者」：「伝統」時代	カナダ北極圏に住むイヌイットの若者・青少年の生活を通して、「伝統的」生活から「近代」への変化を、ジェンダーの視点を交えて考察する。	本多 俊和 (スチュアートヘンリ) (放送大学教授)	本多 俊和 (スチュアートヘンリ) (放送大学教授)
5	イヌイットの「若者」：現状		同 上	同 上
6	インドにおける「若者」の成立	インドの諸コミュニティの通過儀礼や婚姻などに言及しながら、ジェンダーやカーストなどによって多様な「青年期」のあり方について考える。合わせて植民地期以降の変化にもふれる。	押川 文子 (国立民族学博物館教授)	押川 文子 (国立民族学博物館教授)

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
7	現代インドの若者	学歴競争、就職事情、留学など国際移動、結婚などを例に、現代インドの青年たちの日常の変化を同時代の視点から考える。	押川 文子	押川 文子
8	現代社会における若者(1)	戦後日本の工業化時代に、青年期がどのようにして形成され、「成人期への移行」のプロセスが定式化されたかを、ジェンダー、社会階層、地域性をふまえてみていく。	宮本みち子	宮本みち子
9	現代社会における若者(2)	ポスト工業化時代に、若者の存在がどのように変化したのかを、ジェンダー、社会階層、地域性をふまえながら、欧米諸国と日本を比較しながらみていく。	同 上	同 上
10	現代日本の若者(1)	日本の若者を、高学歴化、少子・晩婚化、親への依存期の長期化などの側面から検討し、その意味を考察する。	岩上 真珠 (聖心女子 大学教授)	岩上 真珠 (聖心女子大 学教授)
11	現代日本の若者(2)	ニュー・エコノミーの進展に伴って、若者の労働分野で、二極化が起こっている。能力を発揮し、高給をとる若者がいる一方、フリーターと呼ばれる不安定な労働者が大量に出現している。その実態に焦点をあてながら、若者と仕事・労働市場の問題を検討し、夢見るフリーターに未来はあるかを考える。	山田 昌弘 (東京学芸 大学教授)	山田 昌弘 (東京学芸大 学教授)
12	現代イタリアの若者	イタリアの若者の実態を、親子関係、結婚意識・行動の変化に着目して紹介し、その社会的背景を検討するとともに、若者のライフコースの変化が何を意味するのか検討する。	岩上 真珠	岩上 真珠
13	若者研究の展開	社会変動が若者の成人期への移行に及ぼすインパクトと、若者の社会的地位の変化に関する研究動向を整理・検討し、これからの研究を展望する。	宮本みち子	宮本みち子
14	若者をめぐる社会・文化的課題(1)	雇用問題など、現代社会がかかえる若者の問題を総括し、それに対応する青年政策の潮流を、いくつかの国の事例と、EU、国連レベルの動向に焦点をあててみていく。	同 上	同 上
15	若者をめぐる社会・文化的課題(2)	14 回に続き、現代社会がかかえるその他の若者の問題を総括し、それに対応する青年政策の潮流を、いくつかの国の事例と、EU、国連レベルの動向に焦点をあててみていく。	同 上	同 上

＝ 文化人類学研究（'05）＝ (TV)

～先住民の世界～

〔主任講師： 本多 俊和（スチュアート ヘンリ）（放送大学教授）〕

〔主任講師： 大村 敬一（大阪大学大学院助教授）〕

〔主任講師： 葛野 浩昭（聖心女子大学助教授）〕

全体のねらい

今日、グローバリゼーションによる世界の画一化が進む一方、世界各地の民族やエスニック集団にみる文化的な多様性への関心が高まっている。こうした文化の多様性を正しく理解することによって、自民族至上主義（自民族中心主義）を克服し、真の意味での異文化理解にもとづいた共生的な国際関係の構築に貢献することが、文化人類学の重要な使命の一つである。この授業では、先住民に焦点を絞ってその歴史と現状を検討し、グローバリゼーションと文化的多様性の相克を共通のテーマとし、近代国民国家と先住民、国際法・憲法における先住民、言語政策と民族語保存運動、マス・メディアと先住民、先住民のアート、伝統的な知識と近代科学、「伝統」と「近代化」などを主題とした講義を通して、それぞれの分野の第一線で活躍している講師のフィールドワークを加味した授業で、文化多様性の理論と問題点を浮き彫りにする。

回	テーマ	内容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	先住民とは何か	先住民という概念をさまざまな視点から検討する。先住民と少数民族、エスニック集団の違い、16世紀にヨーロッパの歴史に登場した「野生人」としての先住民、「野蛮」視されてきた先住民像の修正などの問題を包括的にとり上げ、欧米を中心とした世界観を文化の多様性の視点からとらえなおす。	本多 俊和 (スチュアート ヘンリ) (放送大学教授)	本多 俊和 (スチュアート ヘンリ) (放送大学教授)
2	文化多様性への扉：人類学と先住民研究	グローバリゼーションが進行し、様々な紛争が頻発する今日の世界で、人類学は文化相対主義を支柱に文化多様性の尊重を掲げ、異なる価値観に対する寛容の精神を育んできた。しかし、こうした文化相対主義には、価値観が異なる文化的他者と自己の間に壁を築いてしまう本質主義に陥るおそれもある。この授業では、こうした人類学の理論的問題が先住民研究の場で先鋭化することを示し、理念的に文化多様性を議論するだけでなく、フィールドワークという具体的な現実の場に密着して文化多様性を考えることの重要性を示す。	大村 敬一 (大阪大学大学院助教授)	大村 敬一 (大阪大学大学院助教授)
3	人類学的実践の共同へ：フィールドワークと先住民	本質主義批判、オリエンタリズム批判の向けられる人類学であるが、そのフィールドワークは、あくまでも個別具体的な人々と私との対面的な関係とその変化に基礎を置くものである。そして今日、先住民の中には、それぞれ個別の想いや立場で自分たちのことを調べ、学び、教え、表現するフィールドワーク的営みを重ねている人々が少なくない。この授業では、人類学者のフィールドワークと先住民自身のフィールドワーク的営為とを重ね共同して見つめることを通して、人類学的実践の持つ可能性について考える。	葛野 浩昭 (聖心女子大学助教授)	葛野 浩昭 (聖心女子大学助教授)

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
4	民族文化としての採集狩猟活動：イヌイトの事例から	採集狩猟を基盤とする生業活動は、農耕の対極に位置づけられることが多いが、極北地帯のイヌイトの生業活動を事例に、こうした二項対立的な解釈を吟味することを通して、現代における「伝統」と「近代」について考える。	本多 俊和 (スチュア ート ヘン リ)	本多 俊和 (スチュア ート ヘン リ)
5	民族文化としてのトナカイ飼育：サーミの事例から	1970年代、或る女性は「体が続く限り遊牧を続けた」と語った。90年代、EU統合を前にして将来への不安を抱えながらも、或る男性は中学生の息子を連れてトナカイの追い込みに出かけた。2003年、息子の生まれた一人の青年は「今はいろんな選択肢があるけど、息子にもトナカイ飼育をして欲しい」と語る。この授業では3人の映像を通してサーミ人のトナカイ飼育を紹介すると同時に、それがサーミ民族文化の存続・発展の要であることについても考える。	葛野 浩昭	葛野 浩昭
6	野生の科学と近代科学：先住民の知識	世界の先住民は、狩猟・漁労・採集や農耕、牧畜などの生業活動を通して、環境を持続的に利用するための知識体系を築き上げてきた。この講義では、カナダ極北圏のイヌイトを事例に、伝統的な知識の可能性を問いながら、伝統的な生態学的知識が、グローバル化の原動力となってきた近代科学に対して提起する問題を考察する。	大村 敬一	大村 敬一
7	ロシア極東地域における先住民企業の生き残り戦略	ソ連崩壊と社会主義計画経済の破綻、資本主義化を目指したその後のロシア経済の混乱はシベリアや極東地域といった辺境地域にすむ先住民の経済にも大きな打撃を与えた。ここでは沿海地方のウデヘという少数民族の狩猟企業を例にとりながら、彼らの生き残り戦略を分析する。	佐々木史郎 (国立民族 学博物館教 授)	佐々木史郎 (国立民族 学博物館教 授)
8	先住民社会の変化と女性	ヨーロッパの入植者との接触によっておおきな社会変化を経験したオーストラリアの先住民社会では、社会の諸側面で変化への対応が見られる。見過ごされがちな女性たちも、この変化のなかにあり、柔軟な対応によって社会に力を与えることにもなっている。ジェンダーの視点から先住民社会の変化を考える。	窪田 幸子 (広島大学 助教授)	窪田 幸子 (広島大学 助教授)
9	アフリカの焼畑と混作：在来農法の語られ方	アフリカの熱帯雨林地帯では、狩猟採集、混作・焼畑農業など、自然との絶え間ない相互作用の中で、自然が生み出した多様性を生かす技法が発達している。国家や企業が森林を保護・活用すべき経済資源であると見なす中で、地域住民にとっての森との関係の全体像を考える。	小松かおり (静岡大学 助教授)	小松かおり (静岡大学 助教授)

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
10	メディアと先住民：表象する側とされる側	政府によるメディア政策。活字メディア、メディアとしての博物館、「民族」音楽などの媒体を通して、ドミナント社会のメディアに表象される先住民像とメディアを利用する先住民の自己表象を考察する。	本多 俊和 (スチュアート ヘンリ)	本多 俊和 (スチュアート ヘンリ)
11	民族文化から芸術活動へ：文化の創造的動態	先住民の間で高まりを見せている美術・文芸・音楽活動は、時に生活を支え、時にエスニック・アイデンティティを支えるための、民族文化資源の利用であり、民族文化の復興運動でもある。そして、これら芸術活動は、先住民からの first-voice として、また、グローバリゼーションと文化多様性の潮流とを媒介する声として、世界へ向けて発せられ、響き渡っている。この授業ではイヌイトとサーミの芸術活動を取り上げる。	葛野 浩昭 大村 敬一	葛野 浩昭 大村 敬一
12	先住民運動：過去、現在、未来	第二次世界大戦後におきた先住民運動の軌跡をたどる。戦後のアメリカ合衆国にはじまった公民権運動に出発点をもつ先住民運動が世界的に広がってきた様子を描く。	本多俊和 (スチュアート ヘンリ)	本多俊和 (スチュアート ヘンリ)
13	先住民族と憲法	先住民族の権利を国内において実現するためには憲法との適合性を考えなくてはならない。民族という集団に人権主体性が認められるか、特別な権利の保障は平等原則に反しないか、憲法の明文にないが民族にとって重要な権利をどのように保障するかなど問題は少なくない。本講では諸外国の事例も参照しつつ検討を行う。	常本 照樹 (北海道大学大学院教授)	常本 照樹 (北海道大学大学院教授)
14	アイヌ語の現在と未来	アイヌ語を今継承しようとしている人々の動きを、アイヌ語教室やアイヌ語弁論大会などで自主的に活動しているアイヌたちに焦点を当てて紹介し、国や道の政策との関係を見ながら、日本という国においてそういった運動の持つ意味を考える。	中川 裕 (千葉大学教授)	中川 裕 (千葉大学教授)
15	座談会 共同の学問、共生の世界へ	以上の授業で提起された課題や問題意識をとり上げながら、先住民の視点から文化的な多様性に関する議論と総括を行なう。	本多 俊和 (スチュアート ヘンリ) 大村 敬一 葛野 浩昭	本多 俊和 (スチュアート ヘンリ) 大村 敬一 葛野 浩昭

＝国際関係論（‘02）＝（TV）

〔主任講師： 小和田 恆（元早稲田大学大学院教授）〕

〔主任講師： 山影 進（東京大学大学院教授）〕

全体のねらい

複雑な今日の国際関係を捉えるために必要な基本的な考え方と現代国際関係の諸側面とを講義する。外国事情、国際情勢といった現状紹介ではなく、国際社会が抱えている主要な課題を示しつつ、履修者が自ら国際関係を分析できるような枠組みを提供したい。とくに日本外交とアジア太平洋地域の国際関係についての理解と分析を重視する。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	執筆担当 講　師　名 (所属・職名)	放送担当 講　師　名 (所属・職名)
1	国際関係論とは何か	初回から第5回までは、国際関係の基礎を講義する。国際関係論は、第一次世界大戦の悲惨な結果を踏まえて誕生したが、今日ではさまざまなアプローチがある。国際関係論の学問としての特徴を示すとともに、この講義の位置付けを明らかにする。	小和田 恆 (早稲田大学 大学院教授) 山影 進 (東京大学大 学院教授)	小和田 恆 (早稲田大学 大学院教授) 山影 進 (東京大学大 学院教授)
2	国際社会の捉え方	今日の国際社会は、西ヨーロッパで誕生し、世界全体を覆うに至った主権国家システムが基になっている。様々な国際社会の類型の中で、今日の国際社会の特徴を明らかにする。	同 上	同 上
3	国際関係と外交	国際関係にはさまざまな様態があるが、もっとも重要で基本となるものが国家間の外交である。外交の仕組みについて説明する。	同 上	同 上
4	対外政策決定過程	外交を行うに際して、国家は対外政策を決める。日本を例に、対外政策に関わる制度と、政策決定の仕組みを説明する。国益とは何かという問題にも触れる。	同 上	同 上
5	国際社会の組織化	人間活動の拡大とその相互依存が進み、それらの活動を規制するため国際レジームが作られた。さまざまな分野での調整が必要となり、組織化されるようになった今日の国際社会の複雑な様相を解説する。	同 上	同 上
6	平和と安全の確保	第6-10回は、今日の国際関係の主要な側面を取り上げる。第6回は、第二次世界大戦を経て、国際連合（とくに安全保障理事会）が国際の平和と安全を維持する責務を担うようになった。他方で、国連の役割には限界があり、それを補完する制度も無視できない。個々の国家が保有している自衛権と諸制度との関連も考察する。	同 上	同 上

回	テ ー マ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
7	国際経済の管理	国際的な経済活動を自由で円滑なものにする制度も発達した。経済のグローバル化が進む中で、国際経済機関の役割、通商関係をめぐる国際紛争（通商摩擦）の処理がどのようなものなのかを考察する。	小和田 恆 山影 進	小和田 恆 山影 進
8	開発と人間環境	先進国と途上国との間の経済格差が拡大する中で、同時にこれを是正する取り組みがなされてきたが、成果は十分ではない。他方で、開発はさまざまな環境問題を生みだした。環境と開発とのバランスをとろうとする国際社会の動きを考察する。	同 上	同 上
9	人間の安全保障	冷戦が終わり世界核戦争の脅威が減った反面、新しい脅威が注目されるようになり、「人間の安全保障」という新しい考え方が登場した。新しい課題に国際社会がどのように取り組んでいるかを考察する。	同 上	同 上
10	国際公共秩序	国際社会がグローバル化して、一つの人間社会を形成していく中で、国際社会全体のガバナンス・システムをどのように創出し、維持していくのが大きな課題になる。そのような国際公共秩序のあり方と問題点を、政治、経済、社会の各分野について考察する。	同 上	同 上
11	第二次大戦後の日本外交	第11-15回は、国際関係論の実証分析のケースとして、日本の外交を特にアジア太平洋地域の中で考察する。第11回は、その前提として、第二次大戦後の日本外交の歴史的レビューから始める。講和、国連加盟、戦後賠償などの問題を日本のアジア政策との関連で論じる。	同 上	同 上
12	経済大国としての参画	急速な経済成長を遂げ、経済大国として国際社会に参画するようになった日本外交を取り上げる。主要先進国として政策協調に取り組む日本と、経済協力を通じてアジアに深く関与するようになった日本を考察する。	同 上	同 上
13	冷戦後の新たな役割	日本は経済だけでなく平和や安全保障分野でも大国としての役割を果たそうとし始める。国連の平和維持活動への協力、安保理常任理事国入りの意味などを冷戦後の国際関係の文脈から考察する。	同 上	同 上
14	アジア太平洋協力の重層的枠組み	日本の周りでは地域的な協力制度が急速に発達している。アジア太平洋という切り口から、日本の外交と多面的重層的な地域的協力枠組みとを結びつける。	同 上	同 上
15	地域主義と日本外交	国際社会のグローバル化が進行する一方、ヨーロッパ、南北アメリカ大陸など世界各地で地域主義が謳われている。その背景を考察しながら、日本にとっての地域形成の可能性を論じ、合わせて、日本外交の課題としてのアジア太平洋地域の将来を展望する。	同 上	同 上

= 国際社会研究 I (' 0 5) = (TV)

- 開発経済学 -

〔 主 任 講 師 : 高 木 保 興 (東 京 大 学 大 学 院 教 授) 〕

全体のねらい

先進諸国と比較して生活水準が低い途上国では、農業開発や工業化によって高度成長を達成し、先進諸国へ追いつくことを最優先課題に位置づけている国が多い。ところが、債務危機や通貨危機、あるいは、グローバリゼーションや国際テロと内外に問題が山積し、なかなか順調な発展を遂げることができない。この講義では、途上国が直面する主要な問題を取り上げ、経済発展のための対策を議論する。

回	テ ー マ	内 容	執 筆 担 当 講 師 名 (所属・職名)	放 送 担 当 講 師 名 (所属・職名)
1	開発経済学の課題	開発経済学が分析対象とする途上国の「貧困」の考え方や測り方を紹介すると同時に、この講義では主要な力点をどこに置くか、講義全体はどのように構成されているか、など、この講義の目的を明らかにしたい。	高木 保興 (東京大学大学院教授)	高木 保興 (東京大学大学院教授)
2	耕地の利用形態	定率(あるいは、刈分)小作の非効率性とは何か、天候に左右される農業では、耕地の借地契約はどうなっているかなど、農業に不確実性と農民の働くインセンティブを導入して、耕地の利用形態を比較する。	同 上	同 上
3	農村共同体の相互扶助	農村共同体に多く見られる相互扶助を保険としてみると、どのような議論ができるだろうか。市場経済化が共同体の紐帯を弱体化するなら、相互扶助に代わる安全網は考えられるだろうか。	同 上	同 上
4	インターリンクエージ・ディール	農村では、お金の貸借契約と労働雇用契約や農産物販売契約などが同時に締結されることが少なくない。なぜ、このようなインターリンクエージ・ディールがなされるのだろうか。これによって貧しい農民は助けられているのだろうか。	同 上	同 上
5	マイクロファイナンス	農村に民間銀行が積極的に進出しないのはなぜか。100ドル前後の少額貸付の返済率が9割を超えるのはどうしてか。マイクロファイナンスは農村の貧困削減に威力を発揮しているのだろうか。	同 上	同 上

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
6	農産物価格と農 民の組織化	農産物価格は農民の生活水準に大きな影響を及ぼす。しかし、政府による介入政策は望ましい効果を期待できない。農民がより有利な価格で農産物を販売できるには、どのような試みが可能だろうか。	高木 保興	高木 保興
7	市場形成と工業 化	生活水準の向上は分業によって達成される。市場経済化と分業はどのように関係しているのだろうか。分業と工業化は密接に結びつくのだろうか。	同 上	同 上
8	工業化が意味す るもの	工業化とはどんな現象を指すのだろうか。工業化はどんな要因によって進展しているのだろうか。工業化を促進することは可能なのだろうか。	同 上	同 上
9	一極集中と環境 問題	途上国では、首都人口が異常に膨張している現象が多く見られるが、なぜなのだろうか。人口集中は大気汚染や河川汚濁の主原因となりやすい。途上国の国内環境問題には、いかに対処すればいいのか。	同 上	同 上
10	農業と工業の相 互連関	一般には、農業と工業の開発政策はそれぞれ個別に考えられる。しかし、両者は互いに密接に関連しあっているから、両者を同時に考慮に容れられるようなマクロ政策が望まれる。	同 上	同 上
11	世界経済の変容	第一次石油危機を契機として、世界経済は戦後の高度成長から低成長への局面へと転換し、生産的投資に使用されていた資金が株式や債券のようなストックに向かうようになって来た。国際的な資本移動の開始である。それは、途上国にどのような環境を提供しているのだろうか。	同 上	同 上
12	効率性重視の構 造調整	効率性を追求するにはどうすればいいだろうか。政府という経済主体は効率追求に適しているか。市場に任せれば、総てうまくいくのか。経済の自由化政策は効果を発揮できるのであろうか。	同 上	同 上

回	テ ー マ	内 容	執 筆 担 当 講 師 名 (所 属 ・ 職 名)	放 送 担 当 講 師 名 (所 属 ・ 職 名)
13	資本移動と通貨危機	通貨危機を引き起こす原因はどこにあるのか。なぜ、東アジアで通貨危機は発生したのだろうか。もう二度と深刻な通貨危機に直面することはないのだろうか。	高木 保興	高木 保興
14	政府の役割－ (1) : 「大きな政府」から「小さな政府」へ	途上国政府に期待される役割は、どのように変化してきたか。戦後の世界的成長期に当然と考えられていた政府主導の経済開発は、どこに欠点があったのか。	同 上	同 上
15	政府の役割－ (2) : 制度とインセンティブ 供与	『東アジアの奇跡』では「賢明な政府」と評価されたのに、10年も経たないうちに「無能な政府」と呼ばれるようになったのは、なぜか。これからの政府に期待される役割とは。	同 上	同 上

＝国際社会研究Ⅱ（‘02）＝（R）

－ 中国近代政治史 －

〔主任講師： 山田 辰雄（放送大学教授）〕

全体のねらい

歴史なくして現代を語ることはできない。なぜなら、現代は過去の歴史構造に拘束されているからである。その反面、過去は現代のすべてを説明することもできない。なぜなら、現代は過去に経験しなかった新しい現象を生み出すからである。本講は、現代の中国政治を意識しつつ、20世紀前半の中国近代政治史を扱う。

- ①各回の教科書に基づく講義は放送の半分とし、後の半分は各回の括弧内の問題について原資料を提示し、学生とともに分析の過程、論理構成、学界の動向等について学ぶ。
- ②各回の課題は、政治学・政治史の問題として一般性をもたせる。
- ③全体の流れとして、近代中国政治史に集権・独裁と自由・民主との対比を鮮明にする。
- ④中華人民共和国の政治を常に意識しておく。

回	テ ー マ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	中国近代政治史を学ぶために	学部での勉強の蓄積を踏まえて、大学院で中国近代政治史を学ぶために必要な問題を取り上げる。分析力・構成力の涵養、課題の選択、資料の収集、参考書、図書館・研究機関・本屋、語学、国際交流等の問題がそれである。（一つの論文ができるまで）。	山田 辰雄 (放送大学教授)	山田 辰雄 (放送大学教授)
2	清 末 の 政 治	19世紀の中国の王朝体制は、内なる矛盾と外国の圧力のなかで崩壊の危機に直面していた。この危機をいかに克服するかをめぐって、洋務運動・変法運動・革命運動が生まれ、中国の近代化の潮流が形成された。（改良と革命）。	同 上	同 上
3	辛 亥 革 命	1911年辛亥革命が起こり、清朝が崩壊した。革命勃発の原因と過程、軍隊の役割、議会制民主主義の成立と崩壊、2つの憲法、袁世凱の台頭、革命の指導権などの問題を通して、辛亥革命の性格を論じる。（代行主義）。	同 上	同 上
4	袁 世 凱 の 政 治	袁世凱は清朝の軍近代化の指導者であり、辛亥革命後政権を掌握した。彼は武力を基礎にして反対派を弾圧、議会制民主主義を破壊して、最後に帝制樹立を試みた。従来革命に対する反動と捉えられてきた袁の政治を現代的観点から再考する。（袁世凱政治の評価について）。	同 上	同 上
5	軍 閥 政 治	1916年の袁世凱の死から1928年の国民革命軍による北伐完成までは、軍閥混戦の時期と呼ばれる。軍閥混戦の過程を通して軍閥とは何か、どうして近代中国に軍閥が生まれたのか、軍閥の行動様式と歴史的な位置づけを論じる。（人物研究）。	同 上	同 上
6	中華革命党から中国国民党へ	1919年の中華革命党から中国国民党への転換は、中国革命の変容でもあった。この転換を促した要因として、軍閥の反乱、大衆運動の台頭、ソ連・コミンテルン・中共の働きかけ、帝国主義との対立等があった。（党・軍・大衆）。	同 上	同 上

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
7	中国共産党の成立 と国共合作への道	1921年の中国共産党の誕生は、新しい社会的変化を反映していた。その背後には第一次世界大戦、ロシア革命、新文化運動と五四運動等があった。誕生間もない中共は労働者・農民の組織を基礎にして国民党に接近していく。(中国共産党の組織論)。	山田 辰雄	山田 辰雄
8	国共合作の政治	1924-1927年国共両党は、反軍閥・反帝国主義の共通の目標の下に統一戦線を形成した(国共合作)。ここでは、国共合作の展開と崩壊の過程を扱い、あわせてその後の両党の発展を示唆する政治路線を明らかにする。(三民主義の解釈について)。	同 上	同 上
9	蒋介石の台頭と訓 政時期の諸問題	国民党は、蒋介石の指導下に1927年反共化し、28年には北伐を完成してひとまず全国を統一した。新政権は、孫文の理論に則り訓政時期(指導された民主主義)を開始したが、その統一の不完全さ故に後年に多くの問題を残した。(訓政・党の指導・大衆の政治参加)。	同 上	同 上
10	中国共産党のソヴ ィエト革命	1927年国共分裂後、中共中央は武装闘争に転換した。この基盤は労農兵からなるソヴィエト政権であった。党中央は都市中心の革命に重点を置いたが、国民党の弾圧に破れ、農村を基礎とした毛沢東が台頭する。(李立三と毛沢東)。	同 上	同 上
11	安内攘外政策と抗 日民族統一戦線政 策	1931年の満州事変の勃発は、激しく対立する国民党と共産党の再接近をもたらした。日本の侵略に対する両党の対応、民衆の抗日、国際関係と国内建設、西安事件などを通して両党の対立と接近の過程を論じる。(安内攘外論と抗日民族統一戦線論)。	同 上	同 上
12	抗 日 戦 争	1937-45年の時期を扱う。日中戦争は日米開戦により、太平洋戦争に拡大していく。日本軍の侵略、国共両党の協力と対立、戦争をめぐる国際関係が分析の対象となる。国共両党はまたこの戦争を通して戦後の力関係の基礎を築いた。(毛沢東の権力確立過程)。	同 上	同 上
13	国 共 内 戦	1945年日本の敗戦とともに国共両党の対立は激化する。アメリカによる両党の調停も失敗に帰し、46年から内戦が勃発する。土地革命、知識人の動向、インフレ、国民党の腐敗と軍事的誤りが中共の勝利に貢献した。(中国革命における中間派について)。	同 上	同 上
14	日中関係の150年	今日、日中間に歴史問題をめぐる対立が絶えない。中国近代政治史を踏まえ、日中両国民が相互に理解しあえる枠組みを提起したい。時代区分、多様な側面(相互依存、競存、敵対)、多国間関係の側面からこの問題を論じる。(日本の基本的立場と新しい枠組みを求めて)。	同 上	同 上
15	20世紀中国政治の 連続性	その時々現代中国の政治を取り上げ、歴史的観点から分析する。今回は、1989年の天安門事件を、20世紀中国政治の歴史的連続性の観点から分析する。(アイデンティティ、排他的支配、代行主義)。	同 上	同 上

= 数理システム科学 (' 0 5) = (R)

〔主任講師：熊原 啓作 (放送大学教授)〕

〔主任講師：砂田 利一 (明治大学教授)〕

全体のねらい

現代科学はコンピュータの発達とともに、多くのものが数量化され処理される。数量化されたデータに対して数学モデルがたてられ、数学的手法によって数学的構造が調べられ、その結果がフィードバックされる。このような方法で研究され理解される学問を数理科学と呼んでいる。この講義ではその数学的手法となる代表的な数学を、できるだけ具体例に即して解説する。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	現代数理科学の概要と特徴	現代数理科学の概要と数学モデルの意味、関連する現代数学の概観、種々の数学的手法とその特徴について解説する。放送では担当講師それぞれが各システムへの導入も述べる。	熊原 啓作 (放送大教授) 砂田 利一 (明治大学教授)	熊原 啓作 (放送大教授) 砂田 利一 (明治大学教授) 浦川 肇 (東北大学大学院教授) 志賀 徳造 (東京工業大学大学院教授)
2	線形システム 1 線形性, 線形写像	線形代数学で扱う線形変換は、比例関係の一般化であるが、さらに無限次元関数空間に一般化すれば、積分変換が自然に現れる。応用上も重要な変換の多くは積分変換である。また連立 1 次方程式を一般化したものが積分方程式である。この概説を与える。	熊原 啓作	熊原 啓作
3	線形システム 2 積分変換と固有関数展開	関数空間の内積とノルムを解説し、対称核を持つ積分作用素を導入する。実対称行列は直交行列で対角化できる。その一般化として、対称核をもつ積分変換に対するヒルベルト・シュミットの固有関数展開を述べる。	熊原 啓作	熊原 啓作
4	線形システム 3 微分方程式の境界値問題と固有値問題	自己随伴型の 2 階の線形常微分方程式の境界値問題を積分方程式に変換して、その解をグリーン関数を用いて表示する。またヒルベルト・シュミットの展開定理を用いて微分作用素の固有関数展開を求める。さらに工学で扱われる線形システムを解説する。	熊原 啓作	熊原 啓作

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
5	連続システム1 膜の振動問題	物理的な問題の定式化を述べて、太鼓の音の問題がディリクレ（ノイマン）固有値問題に帰着されるまでを述べる。	浦川 肇 (東北大学大学院教授)	浦川 肇
6	連続システム2 境界値固有値問題	ディリクレ（ノイマン）固有値問題の固有値がレーリー商によって特徴付けられること、および固有値の漸近的な性質を述べる。ディリクレ（ノイマン）固有値問題の固有値は、クーラントらによって創始された「有限要素法」により計算機で計算される。	浦川 肇	浦川 肇
7	連続システム3 有限要素法	有限要素法の数学的基礎を学ぶ。	浦川 肇	浦川 肇
8	連続システム4 等スペクトル問題	有名な「カツツの問題の解答」、すなわち、同じ音を出す、しかし形の異なる太鼓の例が「折り紙」によって作られること、そしてどうしてそれらの太鼓が同じ音を出すのか、そのからくりを解き明かす。	浦川 肇	浦川 肇
9	離散システム1 コミュニケーション・ネットワークとグラフ	数理学の多くの分野に、離散的モデルとしてのグラフが登場する。その1つの例としてコミュニケーション・ネットワークを取り上げ、効率性と経済性を兼ね備えたネットワークのモデルを、グラフの言葉で表現する。グラフの基礎概念と、その歴史的背景を解説する。	砂田 利一	砂田 利一
10	離散システム2 効率的ネットワークと離散的ラプラシアン	ネットワーク理論における「拡大定数」の概念を導入し、この定数が大きいグラフが効率的ネットワークのモデルであることを見る。さらに「拡大定数」を、幾何学的量である「チーガー定数」と比較し、さらにこれを計算量が少ない量と比較するため、「離散的ラプラシアン」の概念を導入する。	砂田 利一	砂田 利一
11	離散システム3 固有値とチーガー定数	「チーガー定数」と離散的ラプラシアンの「最小正固有値」とを比較する。多様体上のラプラシアンに対する固有値問題の類似として、「チーガーの不等式」を確立し、「最小正固有値」の大きいグラフが、効率的グラフを与えることを示す。最後に純粋に理論的問題とネットワーク理論との関わりについて解説する。	砂田 利一	砂田 利一

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
12	確率システム 1 確率の基本概念と 確率モデル	ランダムな現象を記述する確率モデルの基本概念である事象、確率変数、分布、独立性について説明し、大数の法則、中心極限定理などの確率論の基本原理を解説する。さらに具体的な確率モデルの例をいくつか取り上げる。特に $n \times n$ ゲームや最適戦略の問題から実生活にも有益な示唆が得られるであろう。	志賀 徳造 (東京工業大学大学院教授)	志賀 徳造
13	確率システム 2 人口論の確率モデル	人口動態を推定するための基本的なモデルとしてゴルトン・ワトソンモデル (GW モデル) を取り上げる。この GW モデルの解析には母関数の方法が有用で、確率 1 で絶滅が起こるか否かの判定の問題、絶滅時間の期待値やモーメントの計算、絶滅しないという条件のもとでの人口の振る舞いなども母関数を用いて解析できることを学ぶ。	志賀 徳造	志賀 徳造
14	確率システム 3 ランダムウォーク	グラフなどの離散的空間上のランダムな歩み (ランダムウォーク) は最も基本的な確率モデルで応用も広い。このモデルに対し再帰性 (出発点に必ず戻れるか?) の判定、それに関連して n ステップ推移確率の極限的振る舞いを調べる。その際、 n ステップ推移確率の積分表現および積分に関する漸近解析が有効に用いられる。	志賀 徳造	志賀 徳造
15	確率システム 4 相互作用のある確率モデル	多くの成分が互いに影響し合いながらランダムに変化する確率モデルは統計物理、集団遺伝学等と関連しながら近年、急速に発展してきた分野である。その中の基本的なモデルとして、投票者モデルを取り上げる。主たる問題は社会にコンセンサスが成り立つか否かを判定する問題であるが、それはランダムウォーカー達の出会い確率を求める問題に帰着される。	志賀 徳造	志賀 徳造

＝情報システム科学（‘02）＝（R）

〔主任講師：長岡 亮介（放送大学教授）〕

全体のねらい

IT(情報伝達技術)の発達と普及は、人々の日常生活まで巻き込む社会とその仕組みの大きな変容をもたらしつつある。技術的革新は高度技術のブラックボックス化によりこの技術の恩恵を享受するユーザ層を拡大することに成功したが、他方、この技術についての科学的、原理的な理解への道は閉ざされ、断片化した技術的「知識」の洪水の中で、いまやITは「作る側」と「使う側」という新たな『二つの文化』的断絶を産み出している。この困難を打開するために、ITの諸問題に、実践的と理論的の両方の視点を総合的に考慮してアプローチするものである。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	情報化の歴史(1)	講義の概要の紹介をかねて、コンピュータの基本概念および情報処理を巡る今日の問題を講ずる。ソフトウェアの歴史と今日の課題にも触れる。とりわけ、講義の全体に必要なコンピュータ環境の構築方法について解説する。networkについては後に詳しく講ずるが、受講生の利便のためにnetworkの利用についても実践的に解説する。	長岡 亮介 (放送大学教授)	長岡 亮介 (放送大学教授)
2	情報化の歴史(2)	情報伝達の基礎としてcodeの問題を取り上げる。情報伝達単位としてのbit、byteなどの基礎概念を論ずる。ASCII codeまた、日本語などmulti byte codeの仕掛けについて講義する。併せてfileの基礎概念としてbinary fileとASCII fileの相違を論ずる。	同 上	同 上
3	情報システムの基礎概念	情報処理単位としてのfile、volumeの概念とそれと不可分に結合するOS(Operating System)、出力、入力、デバイスを論ずる。Shell(Shell built-in command)との違いを理解する。redirection、pipe機能(情報(file)の保存、複製、削除、etc.)はshellとは無関係	同 上	同 上
4	情報伝達の基礎原理	応用ソフト(application software)の基本を講ずる。簡単なshell script(batch file)からawkなどのone liner、またcompileされたbinaryの実行形式fileまでを俯瞰する。	同 上	同 上
5	情報管理(1)	コンピュータ・アルジェブラ・システム(数式処理アプリケーション)や表計算ソフトを利用するというもっとも基本的なコンピュータ利用の可能性を講ずる	同 上	同 上
6	情報管理(2)	text editorの基本原理を見る。体系による漢字のコーディングの違いを理解する。ワードプロセッサとの違いを理解する。見掛けと実体の違いを理解する。(論理的と物理的の違い、論理行数、物理行数)、桁折り、TAB、全角、半角space、WYSIWYG	同 上	同 上
7	プログラミング(1)	text editorの基本機能を見る。(置換、検索、正規表現、insert、save)	同 上	同 上

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
8	プログラミング (2)	file system (filename), network (mount, nfs, samba), ln, alias, permission (owner, group, others)	長岡 亮介	長岡 亮介
9	プログラミング (3)	環境変数 (setenv PATH, PAGER, JSERVER), Shell 変数 (set), (高機能) shell の機能 (alias, history, command name completion, spell check, Shellsript, foreach, if-then, end, env, pushd)	同 上	同 上
10	印刷文書 (1)	WordProcessor, TeX, HTML, PDF, PostScript, 写植を比較的に論ずる。また、相互の変換可能性を論ずる。LaTeX の利用方法を入門的に解説する。MS-WORD, pLaTeX2e, mswordview, a2ps, dvipsk, etc.	同 上	同 上
11	印刷文書 (2)	D.Knuth の開発した LaTeX を LeslieLamport が macro package として簡易化した LaTeX の使い方の基本を講ずる。	同 上	同 上
12	データの加工と管理の基礎	LaTeX の可能性を探る。特に、図版の取り込み、数値データの処理など発展的な解説に及ぶ。(ghostscript, ghostview)	同 上	同 上
13	ヴィジュアルイゼーション	テキストデータを処理する簡易言語(sed, awk, perl)の入門的解説を行う。基礎データから LaTeX の文書を生成する方法など実践的な課題を扱う。	同 上	同 上
14	人工知能	数値データの可視化と統計処理の基本を講ずる (gnuplot, Ngraph) グラフ化の利点と問題点、グラフによる統計処理	同 上	同 上
15	インターネットと知の変容	暗号の必要性など、情報共有についての基本問題実践的な問題を考察する。	同 上	同 上

＝複雑システム科学（‘02）＝（TV）

〔主任講師：杉本 大一郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

現実の世界には多くの要素からなる複雑なシステムが多い。しかもそれらの要素は強く相互作用していて、非線形システムになっている。またシステムは孤立した存在ではなく、外界とエネルギーなどのやりとりのある開放系になっており、それをおして非平衡状態が維持されている。他方では、システムからいろいろな要素を剥ぎ取って単純な力学系に還元してしまっても、なおかつそこに複雑性が残るといふ本質的複雑性が埋め込まれていることが多い。この科目ではそのような本質的複雑性から始めて、それが自発的形態形成にどのようにつながっており、さらに自然界においてどのように発現しているかを論じる。自然界にある複雑なシステムを論じるときに、その非線形相互作用が本質的役割を果たしている様子とメカニズムを明らかにする。このような視点は、原因と結果の関係が単純なデカルト的論理を超えている自然現象や社会現象を扱わなければならないという、21世紀の要請に対処するために必要な基礎の一つになると考える。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	複雑システムの諸様相	いろいろな要素を剥いで行って単純なシステムに還元されても本質的に複雑性が残るもの、多数の要素が絡み合っているために複雑なもの、デカルト的論理と方法の限界、線形における原因と結果の関係、非線形における原因と結果の連鎖、非線形における複雑さ、要素の論理（性質）とシステム全体としてのグローバルな論理（機能）などについて論じ、この科目のイントロダクションとする。	杉本 大一郎 (放送大学教授)	杉本 大一郎 (放送大学教授)
2	複雑系としての生命科学（Ⅰ） ～構造的にとらえる生命の論理～	複雑系において、部分と全体の相補的な関係をとらえる立場 (complex system) と、各部分のこみいった組み合わせに着目する立場 (complicated system) の違いについてのべる。ついで、前者の立場の研究手法として、構成的アプローチと、大自由度の力学系を紹介する。	金子 邦彦 (東京大学教授)	金子 邦彦 (東京大学教授)
3	複雑系としての生命科学（Ⅱ） ～発生への力学系アプローチ～	内部ダイナミクスを持ち増殖する要素の相互作用系として、細胞の抽象的モデルを考える。これをもとにして多様性、分化、集団としての安定性、それをもたらす分化規則の生成を調べる。さらに生命現象における安定性と不可逆性を議論する。	同 上	同 上
4	複雑系としての生命科学（Ⅲ） ～ダイナミクスのシンボル化～	前回に見出された、ダイナミックな過程から分化されたタイプへの形成が、どのように固定され、情報として伝わっていくかを、進化の問題を例にとり示す。最後にこのような考え方が社会現象に適用できるのかを議論してみる。	同 上	同 上
5	計算機による自然の模倣（Ⅰ）	物理学など従来の自然科学は、自然界の複雑な現象を出来るだけ単純化することによっていくつかの基本法則を見出してきた。計算機の発達により、単純な基本法則から自然界の複雑な現象を再現することが可能になりつつある。	小柳 義夫 (東京大学教授)	小柳 義夫 (東京大学教授)
6	計算機による自然の模倣（Ⅱ）	並列処理による計算速度の飛躍的向上は、実験できない対象や未知の物質などについての予言を可能にした。これにより量子科学、天体物理などの科学研究だけでなく、工業生産、環境問題、遺伝子工学などの実用問題にも計算機が活躍している。	同 上	同 上

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
7	物性物理と「複雑系」	<ul style="list-style-type: none"> ・ はじめに ・ 相転移と臨界点 (対称性の破れとランダウの現象論; イジング模型と二元合金の模型; 平均場近似; 液相気相転移と臨界点) ・ 量子系の相転移 (ミクロな系と量子力学; 量子多体系; 量子融解転移) 	今田 正俊 (東京大学教授)	今田 正俊 (東京大学教授)
8	空間構造と時間構造の発生	<ul style="list-style-type: none"> ・ 空間構造 (欠陥と秩序の破壊; 複雑な周期性を持つ秩序) ・ 非平衡ダイナミクス (非平衡状態からの緩和; スピノーダル分解; 核形成) ・ 自己組織化 	同 上	同 上
9	強 相 関 量 子 系	<ul style="list-style-type: none"> ・ 電子系研究の歴史 ・ 多電子現象の多様性と複雑性 ・ 強い相関と整合効果 ・ 階層構造の出現 ・ 量子整合相転移と量子的な創発 	同 上	同 上
10	非平衡開放系とその維持	自然界にある非線形・非平衡・開放系には、非線形振動をしながら持続している状態 (例えば心臓) と、定常的に持続している状態 (例えば生命体) がある。そのような系は、平衡に近づこうとして起こる不可逆過程によって生成されるエントロピーを、外部の空間に捨てることによって定常状態を維持することができる。	杉本大一郎	杉本大一郎
11	非平衡構造の自発的形成	平衡状態から有限量だけ離れた非平衡系は、それを包むより大きい非平衡の中に、入れ子構造になって存在する。例えば生命界という非平衡は地球の非平衡の中に、地球の非平衡は太陽-地球系という非平衡の中で初めて存続し得る。しかし大きい非平衡形の中にある部分系がいつでも非平衡でありうるわけではない。非平衡構造が自発的に形成されるには、系の内部での相互作用が重要であることを、定量的な例で示す。	同 上	同 上
12	自然界にある複雑システム	自然界には本質的複雑性、それを要素としてもつ複雑なシステム、非線形的に込み入っているシステムなど、多様な現象がある。そのようなシステムの全体としての振舞を規定している縛りは何であろうか。複雑流体、気象と気候、地球内部構造の進化、プラズマの非線形現象を研究している 4 つの研究室を訪れ、この問題を考える。	同 上	同 上
13	「構造と機能」(I) ～現代的生命機械論～	構造がわかれば機能がわかるという現代生物学のパラダイムは DNA の 2 重らせん構造と蛋白質の立体構造の発見から生まれた。このパラダイムにのった最近の研究が生命の理解をどう進めたかを紹介する。特に機械文明にアナロジーをとる階層構造のトップダウン型アプローチを試みる。	永山 国昭 (岡崎国立共同研究機構教授)	永山 国昭 (岡崎国立共同研究機構教授)

回	テ ー マ	内 容	執 筆 担 当 講 師 名 (所 属 ・ 職 名)	放 送 担 当 講 師 名 (所 属 ・ 職 名)
14	「構造と機能」(II) ～蛋白質特異構造 の起源～	生命の第2の神秘、蛋白質の特異構造は生命科学の中心的テーマの1つである。ヒトゲノム解析後の中心課題として、全蛋白質構造決定の巨大プロジェクトが動き始めた。しかし個別の蛋白質の背後に普遍的な蛋白質構造言語があるはずだ。生命境界物質である蛋白質の構造特異性の起源を物理的に説明する最新理論を紹介する。	永 山 国 昭	永 山 国 昭
15	生命=自己複製系 ～偶然か必然か～	複雑システム研究の方法について、従来のアプローチとどこが同じでどこがちがうのかを整理する。その上で超複雑系である生命に関し、複雑システム的アプローチの有効性を吟味する。特に生命の誕生について、それが、非生物的物质過程の必然的帰結なのか、偶然の産物なのかを考察する。そして多くの2元論的対立の構図を乗り越える複雑システム生成の試論を展開する。	同 上	同 上

＝ 地球環境科学（'05）＝ (TV)

〔主任講師： 木村 龍治（放送大学教授）〕

〔主任講師： 藤井 直之（名古屋大学大学院教授）〕

〔主任講師： 川上 紳一（岐阜大学教授）〕

全体のねらい

地球は、大気、海洋、地殻、マントル、核などのサブシステムが集まった一つの巨大なシステムである。地球を構成するサブシステムは構成物質が異なるため、さまざまな時間スケールで変動している。また、現在の地球環境は、46億年にわたる地球の歴史的産物である。地球システム科学の立場から、地球のダイナミクスの研究方法や歴史解読のアプローチを講義し、地球環境と人間の関わりについて考察していく。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	地球システムからみた地球環境	私たちは変動する地球環境の中で生きている。天気の変り変わりや異常気象は、変動する地球環境を身近に感じることができる現象である。気候の変動には数十年から数百年スケールのものから、10万年周期の氷期・間氷期サイクルまである。さらに、プレート運動による大陸の離散集合の歴史は数億年といった長い時間スケールの中で起こる。さまざまな時間スケールで変動する地球環境を理解するには、地球をシステムとして捉える地球システム科学の考え方や研究手法が重要である。	木村 龍治 (放送大学教授) 藤井 直之 (名古屋大学大学院教授) 川上 紳一 (岐阜大学教授)	木村 龍治 (放送大学教授) 藤井 直之 (名古屋大学大学院教授) 川上 紳一 (岐阜大学教授)
2	地球システムの成立と特異性	地球環境は46億年前の太陽系の形成に始まる長い時間の経過の中で変化してきた歴史的産物である。地球には海があり、多様な生物が生息しているユニークな惑星である。惑星形成過程や生命の起源論、グリーンランドやオーストラリアで進められている初期地球環境の地球史的研究の現場を紹介しつつ、地球システムの成立とその特異性について考察する。	川上 紳一	川上 紳一
3	気象システム	毎日の天気予報に深く関係する気象の変化のメカニズムについて述べる。現在の天気予報は地球全体の気象循環のコンピュータシミュレーションを基礎として行われているが、シミュレーションの初期値を作成するために気象観測が必要である。気象はグローバルな気象循環からローカルな現象まで、さまざまなスケールの現象が階層構造をなしている。特に集中豪雨など気象障害をもたらすメソスケールの気象は特別なプロジェクト研究が必要である。現代の気象研究の最前線を紹介する。	吉崎 正憲 (気象庁気象研究所主任研究官)	吉崎 正憲 (気象庁気象研究所主任研究官) 木村 龍治
4	海洋システム	海洋は地球環境に大きな役割を占めているが、人間が陸地に住んでいるために、その実態を明らかにするのは容易ではない。しかし、海洋は陸地と同じような豊かな生物環境を構成している。海洋に関する物理、生物、化学、地学などのさまざまな側面を現代の海洋学はどのような方法で研究するのであろうか。特に、海洋研究船による現代の海洋調査について述べる。	小池 勲夫 (東京大学海洋研究所長)	小池 勲夫 (東京大学海洋研究所長) 木村 龍治

回	テ ー マ	内 容	執 筆 担 当 講 師 名 (所属・職名)	放 送 担 当 講 師 名 (所属・職名)
5	近未来の海洋観測	人工衛星の発展やIT革命によって、従来は不可能であった方法で、海洋の観測ができるようになった。従来は、海洋研究船による観測が主流であったが、現在、国際協力によって、無人の漂流ブイによる海洋観測が全世界で展開されている。そのプロジェクトを「アルゴ計画」という。また、エルニーニョのモニターのために、赤道太平洋で係留ブイによる観測が実施されている。それらの近未来を指向した海洋観測を、プロジェクトに関わっている研究者が説明する。	湊 信也 (海洋研究開発機構アルゴグループサブリーダー)	岡 正太郎 (海洋研究開発機構アルゴグループ研究員) 木村 龍治
6	気 候 変 動 I	地球は常に太陽から、ほとんど一定の光を受け続けているにもかかわらず、大気環境が常に変動しているのはなぜだろうか。変動には、さまざまな周期が存在する。短い変動は、雷雲や台風などの突発的な気象擾乱の発生による。天気の変化は、中緯度帯に形成されている偏西風の流体力学的な不安定による。季節変化は、太陽放射量の変化による。それらの原因はかなり解明されているが、1年より長い周期の変動もある。数年の変動はエルニーニョ現象に関係している。それより長い気候の変化は、海洋の変動と関係が深い。大気環境の変動特性について考察する。	木村 龍治	木村 龍治
7	気 候 変 動 II	1988年以來、地球環境問題が大きな社会問題になった。これをきっかけにグローバルな気候変化の研究が盛んになり、コンピューターシミュレーションによって、将来の気候予測を行うことが実施されている。東京大学気候システム研究センターは、日本の気候研究の中心的存在であるが、その所長を長く務めた住教授が現代の気候研究の最前線について語る。	住 明正 (東京大学教授)	住 明正 (東京大学教授) 木村 龍治
8	生 物 圏 と 地 球 シ ス テ ム	生物圏も地球システムの重要な構成要素である。深海底熱水生態系、珊瑚礁、干潟などの生態系を紹介し、それらが地球環境とどのように関わっているかを講義する。特に、地球表層の炭素循環に対する海洋微生物の役割について考察する。	川上 紳一	川上 紳一
9	固体地球と表層環境の カ ッ プ リ ン グ	過去の大規模火山噴火の事例紹介、その気候変動との関連性を論じる。さらに、地球の火山活動の特徴や時間変動を講義する。地球の火山活動は、プレートテクトニクスと密接に関わっていることを示す。また、大陸移動、超大陸の形成・分裂サイクルと表層環境、スーパーブームの活動などを講義する。	藤井 直之	藤井 直之
10	マ ン ト ル ダ イ ナ ミ ク ス	プレートテクトニクスの原動力やプレート内火山活動を理解するには、地球内部ダイナミクスを詳しく研究する必要がある。地震トモグラフィーによる地球の3次元構造モデルの研究、地球内部物質科学の知見を用いたその解釈、さらにマントル対流のコンピュータシミュレーションの結果を照会し、地球内部の変動のしくみを解説する。	藤井 直之	藤井 直之

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
11	地球磁場変動	地球には磁気圏がとりまいている。地球磁場の特徴とその時間変動を論じる。また、地球磁場の原因として地球中心核のダイナミクスを扱う。地球磁場の逆転現象、地質時代の地球磁場を研究する古地磁気学の原理を講義する。地球磁場の変動と地球環境の関連性を論じる。	藤井 直之	藤井 直之
12	地球史解読	地球の歴史を解読するには、地層や岩石に刻まれた過去の出来事を読み解く必要がある。K/T境界の粘土層の分析結果をもとに提唱された恐竜絶滅の天体衝突仮説を解説する。この仮説が地球史研究に与えたインパクトを紹介する。古生代末の生物大量絶滅事件に関する研究にも言及する。また、南オーストラリアの潮汐リズムを記録した堆積岩から地球自転周期や月軌道を復元する研究を現地での取材を含めて紹介し、地球史の解読のアプローチを紹介する。	川上 紳一	川上 紳一
13	地球を変えた 光 合 成	地球が誕生したころの大気には、ほとんどまったく酸素がなかった。現在の地球大気の20%は酸素分子でできており、性質が大きく変化した。その移り変わりを記録したさまざまな堆積岩から地球大気の変遷を読み解いていく。地球大気に酸素をもたらした最初の微生物として注目されているシアノバクテリアとその構築物であるストロマトライトについて、南オーストラリア、現生ストロマトライト、縞状鉄鉱床などの露頭の様子を紹介して、解説する。	川上 紳一	川上 紳一
14	全球凍結事件と多細胞動物の出現	約8億年前から6億年前の氷河時代の地層が世界各地に分布する。それらが堆積した緯度を推定する古地磁気学、氷河堆積物と縞状炭酸塩岩や縞状鉄鉱床の奇妙な組み合わせ。その謎解きから提唱された全球凍結仮説。そして、これらの氷河時代が終わって突然登場する多様な多細胞動物。全球凍結仮説を巡る研究現場（南オーストラリアの縞状鉄鉱床、氷河堆積物の露頭紹介）をレポートし、地球史解読の研究の進め方、検証可能な作業仮説の重要性などを論じる。46億年の地球と生物の歴史を振り返り、変動する地球環境と生物進化の関連性を明らかにする。	川上 紳一	川上 紳一
15	地球環境と 類 の 未 来	地球環境変動を地球システム科学のアプローチで研究する意義を総括する。また、地球環境と生物進化から私たち人類が歴史的存在であることを確認する。人類の出現とその地球環境への影響をグローバルかつ地球史的に捉え、多様な生物との共存していくためには何をなすべきか考察する。また、地球環境の理解には、地球科学の研究が不可欠なことを、オゾン層の破壊など具体例をもとに示す。	木村 龍治 藤井 直之 川上 紳一	木村 龍治 藤井 直之 川上 紳一

＝ 物質環境科学 I (' 0 5) ＝ (TV)

－ 分子から機能性物質・生体まで －

[主任 講 師 : 濱 田 嘉 昭 (放送大学教授)]

[主任 講 師 : 田 隅 三 生 (埼玉大学学長)]

全体のねらい

物質の織り成すすべての現象は、その基礎単位を構成する物質の性質とそれらが互いにどのように影響を与え合っているかで決まる。化学の立場では、分子が基礎単位であり、それらの相互作用の結果として、マクロの物体の存在形式と変化が理解できる。したがって、自然環境を物質レベルで考察する場合には、分子の性質とそれらがどのように相互作用しているかを知ることが重要である。すなわち、物質の階層的な解釈、相互作用の観点、変化の大きさと方向に関係する動的平衡の観点が重要である。また、環境という言葉は、ある系とその系の外との関係があることを前提にしているが、その内と外とを区別するものがあることになる。物質系では膜がそれに当たる。一方、膜は境界を定めるだけでなく、物質とエネルギーの移動を調節している場合が多い。これらについても考察することにする。本講義では、物質環境を化学の視点で捉え、解釈し、場合によると問題の解決の方法を獲得することを目的とする。ただし、現状でさまざまに論じられている環境問題を直接に取り上げるのではない。これにはまだ、原因や方法に未解決の問題があるし、立場の違いによる解釈や方針の違いも存在する。この講義では、それらに自然科学、特に化学の立場から正しく接近できるような講義を行いたいと考えている。

回	テ ー マ	内 容	執 筆 担 当 講 師 名 (所属・職名)	放 送 担 当 講 師 名 (所属・職名)
基礎的理解 (生活と物質)				
1	身の回りの物質と物質循環	われわれの日常生活にどのような物質が存在するのか。どのようなかかわりをもっているのかを考える。衣食住を支える材料、生命を構成する物質、人間活動を支える材料、地球・宇宙環境と物質、エネルギーを生み出す物質などについて整理する。物質は存在するだけでなく、さまざまな循環の中で、姿・形を変え、環境を維持すると同時に変化させている。自然、生命を含み、どのような物質が、時間・空間的にどのように変化しながら循環しているかを学ぶ。	田隅 三生 (埼玉大学学長) 濱田 嘉昭 (放送大学教授)	田隅 三生 (埼玉大学学長) 濱田 嘉昭 (放送大学教授)
2	標準・基準を決める	自然科学において得られた結果を正しく伝えるためには、自然現象を表現する言葉 (物理量) が厳密に定義されていること、その量が精度良く決められていることが必要である。これによって、物事を定性的・定量的に表現・伝達できることになる。ここでは、まず国際単位系 (SI 単位系) について学ぶ。なぜ SI 単位系が必要なのか、また SI 単位系がどのような仕組みでできているのかを解説する。次に、基礎物理定数について学ぶ。基礎物理定数がどのように決められているのか、また基礎物理定数を精密に決めることにどんな意味があるのかを実例を挙げながら解説する。最後に、精度良く決められた物理量の中には、データベースとして利用できるものがある。そのようなデータベースの例や使いかたについても紹介する。	高柳 正夫 (東京農工大学教授)	高柳 正夫 (東京農工大学教授)

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
3	分光環境計測	ある物質がどんな波長の光とどの程度相互作用（吸収したり放出したり）するかを調べることにより、その物質がどんな種類の分子からできているか、その分子がどのように存在しているのか、どの程度の量存在しているのかを調べることができる。このような方法を、分光計測とよぶ。ここでは、環境計測に用いられているいくつかの分光計測手法について、その原理、装置、解析法から実際の応用例までを実例を挙げながら紹介する。同時に、公定法や ppm など環境計測によく用いられる表記法についても解説する。	高柳 正夫	高柳 正夫
相と相互作用				
4	平衡と変化	一見、変化のないように見える物質の対象も、ミクロに観察すると激しい変化を起こしている場合もある。例えば、一見落ち着いて見える静水や空気中の分子は激しい衝突運動を行っており、その中に含まれる分子には激しい反応が起こっている可能性がある。すなわち、動的平衡にあると考えるべきである。また、物質系の変化の方向を決めるのはエネルギーとエントロピーである。これらに関して、基本的な理解をしておきたい。	濱田 嘉昭	濱田 嘉昭
5	相と相互作用	自然界の物質の示す性質や変化は、個々の分子の反応というより、集合体としての性質が関係する場合が多い。すなわち、分子が気体・液体・固体のどの相にあるかで、それらの示す性質は大きく異なる。水および二酸化炭素を例にとり、特にそれがわれわれの関わる物質環境の中で果たす役割について例示して解説する。最近、第4の相とも言うべき超臨界状態が注目されている。その特異な性質を利用した技術についても紹介する。	濱田 嘉昭	濱田 嘉昭
6	分子間相互作用	われわれが目にするのできるマクロの物体は、ミクロの分子で構成された系である。しかし、この集合体は分子が単純に集合しただけではない。分子と分子を結びつける相互作用の種類と特徴を調べ、それらがどのような物質の系を形作っているか、その結果、どのような性質として現れるかを調べる。分子が集合できる力の源泉にはさまざまなものがあるが、特に水素結合は本質的に重要である。水素結合をしている系の例と性質を学ぶ。（より、小さな力であるが Van der Waals 力などは、分子が集合してクラスタ→ミクロ構造→マクロの物体となる過程で重要である。その他の相互作用の種類と起源、それらの物質系の例を話す。）	濱田 嘉昭	濱田 嘉昭
7	高分子の構造	われわれの身の回りにある高分子は、大きな分子とも、構成繰返し単位が繋がった1次元の結晶ともみなすことができ、様々な性質を示し、生活に役立っている。高分子の構造は性質の基盤となっており、高分子の構造は、その構成要素である原子間の化学結合から理解することができる。原子は相互に影響を及ぼしあいながら、微少な振動を行っており、振動運動は構造を反映している。高分子の振動運動、振動を観測する実験法である分光測定法、振動の観測から得られる構造に関して解説する。	古川 行夫 (早稲田大学 教授)	古川 行夫 (早稲田大学 教授)

回	テーマ	内容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
8	高分子と機能	われわれの生活には高分子からできている製品が数多くあり、有機ELディスプレイに代表される有機電子デバイスも開発されている。それらの製品では、導体・半導体・絶縁体である様々な高分子の電気的性質や、色などの光学的性質が利用されている。高分子の性質は、高分子構造を基盤として、構成要素である電子の状態により決定されている。高分子における電子の状態、電子状態を観測する実験法である分光測定法、電子状態と性質に関して解説する。	古川 行夫	古川 行夫
9	有機分子の自己集合化	近い距離にある分子どうしには分子間力が働き、分子は自己集合化して様々な構造体を形成する。中でも両親媒性分子は、水中において疎水相互作用により自己集合化し、ミセルやベシクルといった会合体を形成する。膜分子の構造と会合体の構造の相関、そこにはたらく分子間力の原因についても触れつつ、生命活動の基本単位である生体膜について概観する。また、階層性を上げた構造体を示す機能の例として、膜を介したイオンの輸送現象についても触れる。	菅原 正 (東京大学大学院教授)	菅原 正 (東京大学大学院教授)
新機能材料および生命と分子				
10	自己複製するジャイアント・ベシクル	第9章では、両親媒性分子の自己集合化によるベシクル(袋状二分子膜)の形成について述べた。ところで、ベシクルの中でも光学顕微鏡で観察可能なジャイアント・ベシクルは、原始細胞のモデルとして関心を集めている。ジャイアント・ベシクルの二分子膜は、外部環境と内部の反応系を仕切る隔壁であると共に、膜自身が、生命活動の維持に必須な情報伝達・分子変換の場となりうる。ここでは、ジャイアント・ベシクルの二分子膜が自己の膜分子合成の反応場となることにより、膜分子が生産され、ひいてはベシクルが分裂して増殖するという、ベシクルの自己複製系のダイナミクスについて解説する。	菅原 正	菅原 正
11	光学活性分子と生命	左手と右手は互いに鏡像の関係にあり、そのまま重ね合わせることができない。分子にも同様の関係が存在する場合がある。例えば、糖やアミノ酸である。前者は重合してデンプンやセルロースになり、後者は蛋白質になる。すなわち、生命にとって必須の構成要素である。これらは、光の偏光面を回転させるなどの働きがあり、光学活性分子とも呼ばれる。原子の立体的な配置の違いが生命に決定的な役割を果たしている場合が多い。光学活性分子の働きについて説明し、それらを選択的に合成する方法、検出する方法などについて解説する。	濱田 嘉昭	濱田 嘉昭
12	分子の立体構造と生命	生命は外界からさまざまな分子を取り入れて、生体の構造材料あるいはエネルギー源として、さらに、情報の手段として用いている。味や匂いは外部との、神経伝達物質やホルモンは生体内での情報伝達物質である。また、健康や病気からの回復に薬を用いる。これらの分子がその機能を発揮する場合、その立体的な形と反応に直接関与する部位の性質が重要である。分子の立体構造と生命活動との関連を考察する。	梅山 秀明 (北里大学教授)	梅山 秀明 (北里大学教授)

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
13	生体膜:脂質と二分子膜	生命の基本単位である細胞は、膜によって外と内を仕切ることによって成立っている。これらの膜の構造を担うのはリン脂質等の両親媒性分子である。両親媒性分子は、水中では単分子膜、ミセル、二分子膜など様々な集合体を作る。生体膜の透過障壁や流動性といった機能は、脂質二分子膜の性質によっている。生体膜成分である脂質の構造、生体膜の基本構造としての脂質二分子膜の構造と性質を概説する。	遠藤 斗志也 (名古屋大学 大学院教授)	遠藤 斗志也 (名古屋大学 大学院教授)
14	生体膜:膜タンパク質と膜輸送	細胞を構成する生体膜は脂質二分子膜と膜タンパク質から構成されている。生体膜は、脂質二分子膜による透過障壁として機能するだけでなく、必要に応じて情報や物質の流れを媒介するインテリジェントなインターフェースである。こうした機能を担うのは、生体膜に配置された様々な膜タンパク質である。生体膜における膜タンパクの性質と構造、膜タンパク質が媒介する膜輸送の仕組みを概説する。	遠藤 斗志也	遠藤 斗志也
まとめと展望				
15	環境問題と物質	物質と環境の関係について、化学的観点からのまとめを行う。自然環境を空気、水、土と分けた場合、どのような物質が関与しているのか、何が問題とされているのか、どのような対策を講じればよいのかの問題提起と現状の対策について紹介する。	田隅 三生 濱田 嘉昭	田隅 三生 濱田 嘉昭

＝物質環境科学Ⅱ（'03）＝（TV）

－ 環境システムとエントロピー －

〔主任講師：中山 正敏（放送大学教授）〕

全体のねらい

いわゆる環境問題は、人間の生産活動の結果が人間の生活環境を悪化させるところから生じた。この講義ではその自然現象としての側面を理解するために必要な、物理学的な考え方について説明する。まず非平衡の場合を含めた熱力学の手法について述べる。この方法の限界を指摘し、いくつかの手法を紹介する。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	環境システム	一般に、生産や生命活動を行う能動系とそれを包む環境によって、環境システムが構成される。環境は、能動系に資源、エネルギーを供給し、廃棄物、廃熱を受け取る。それが大きくなり過ぎたことが、環境問題である。環境システムの特徴について概観する。	中山 正敏 (放送大学教授)	中山 正敏 (放送大学教授)
2	物質、エネルギーの保存則	系の変化における基本法則を考える。物質とエネルギーは保存される。物質変化の階層に応じて、分子、原子、核子の総数が一定である。系のエネルギーの増分は、系になされた仕事と加えられた熱の和に等しい。これを熱力学第一法則という。	同 上	同 上
3	エントロピーの増大則	自然界には、熱伝導、拡散などの不可逆な変化がある。その向きを指定する法則を考える。物質やエネルギーの無秩序度を表す状態量を導入し、これをエントロピーという。不可逆変化はエントロピーの増大する向きに起きる。これを熱力学の第二法則という。	同 上	同 上
4	熱 機 関	技術者たちが蒸気機関を作った後で科学者たちが、それで出来る最大の仕事量を考察した。カルノーの熱素説による考察がエントロピーの発見につながった。それでは、効率でなく能率を最大にしようとするとうなるだろうか。	白鳥 紀一 (法政大学客員教授)	白鳥 紀一 (法政大学客員教授)
5	開放系の熱力学	エネルギーや物質の出入のある開放系について、熱力学を考える。その場合には、自由エネルギーを導入すると便利であることを示す。また、エクセルギーを導入し、それが系が環境との平衡から外れている度合を表すことを示す。	同 上	中山 正敏
6	混 合 と 分 離	ヒトや生態系に悪い影響を与える物質が環境に散らばると環境問題になる。散らばっている有用な物質をいかに分離して集めるかが資源問題である。散らばるのは物の本性で、エントロピーの増大する過程である。資源環境問題を混合・分離の過程から考える。	同 上	白鳥 紀一
7	物質と放射	物質中の電子や原子などのミクロな粒子の持つエネルギーは、いくつかの特定の値に限られる。熱放射は空間の中を熱を伝える光（電磁波）である。そのエネルギーは、光子を単位として物質とやり取りされる。量子性と環境問題の関係について考える。また物質循環と放射のグローバルな状況について述べる。	中山 正敏	中山 正敏

回	テ ー マ	内 容	執筆担当 講 師 名 (所属・職名)	放送担当 講 師 名 (所属・職名)
8	エントロピーの原子論	マクロな量であるエントロピーと、系のミクロな状態との関係を考える。マクロには一つの状態にある系も、ミクロに見れば原子などの運動によって多数の異なる状態に存在できる。エントロピーは、対応するミクロな状態の総個数の対数に比例する。	白鳥 紀一	中山 正敏
9	熱 ゆ ら ぎ	マクロには熱平衡にある系も、ミクロにはその近くでゆらいでいる。環境の中にある系に対する環境のゆらぎの影響を調べる。また環境の中を動く系には抵抗力が働き、熱ゆらぎを越えた距離を動かすには、 kT 程度の仕事が必要なことを示す。	中山 正敏	同 上
10	情報とエントロピー	情報とエントロピーは相補的である。情報は磁気・電気などの物理量によって担われるが、それが意味のあるのは、物理量の熱ゆらぎが小さく、その値が保持される場合である。そのような場合には熱力学ではなく、システムダイナミクスによる研究が必要となる。	同 上	同 上
11	マクロなゆらぎ	環境の中では、風の変化のように、熱ゆらぎよりも大きなスケールのマクロなゆらぎが起こる。これは、系が熱平衡状態からずれると、外的な変化に対して大きな応答をするという性質を持つからである。マクロなゆらぎの特徴と、その影響について考える。	北原 和夫 (国際基督教 大学教授)	北原 和夫 (国際基督教 大学教授)
12	散 逸 構 造	外的条件を変えて、系の中の物質やエネルギーの流れを大きくして行くと、時間的空間的構造を持った新しい状態に移る。この構造を散逸構造という。散逸構造の一例は、流体が上下方向に循環する対流である。環境問題と散逸構造の関連について考える。	同 上	同 上
13	リサイクルと環境	リサイクルをすれば、資源の消費や廃棄物が減り、環境にいいはずだ。しかし、場合によっては、リサイクルに手間やエネルギーがかかったり、リサイクル処理中に毒性物質が放出されたりする。そこで、意味のあるリサイクルの条件について考える。	井野 博満 (法政大学教 授)	井野 博満 (法政大学教 授)
14	材料の環境負荷評価と選択基準	環境にいい材料の使い方は、リサイクルばかりではない。製品を長持ちさせることや、自然の物質循環に合った材料を選んで使うことも大事である。環境負荷評価(ライフサイクルアセスメント)の方法と、材料選択の基準について考える。	同 上	同 上
15	定常能動系と物質循環	能動系が定常であるためには、それに接する環境もまた定常でなければならない。物質に関しては閉じた地球では、物質が環境を循環することによってこれは果たされる。その際増大したエントロピーは、宇宙空間に棄てられる。現実の地球ではどうだろうか。	中山 正敏	中山 正敏

＝ 生命環境科学 I ('05) ＝ (TV)

－ 生物多様性の成り立ち－

〔 主任 講 師： 松本 忠夫 (東京大学大学院教授) 〕

全体のねらい

生命体は様々な地球環境のもとで、おそらく40億年近くかけて進化してきたが、その結果として、今日の大きな生物多様性が見られる。そのような多様な生命体の姿は、ゲノムの中の遺伝情報が表現型として表れたものである。本講義では、遺伝情報がどのようにして進化史の中で改変し、また現実によどのように発現されて多様化しているのかを環境との対比で見ることとする。さらに、野外自然における生物多様性の調査法を解説すると共に、人間活動が生物多様性の減少に大きく影響している現代の様相を見ることにする。

回	テ ー マ	内 容	執 筆 担 当 講 師 名 (所属・職名)	放 送 担 当 講 師 名 (所属・職名)
1	「生命環境科学 I」のねらい、生物多様性について	今日の生物の多様性が生じた理由は実にさまざまであるが、特に大きな理由として無機環境への適応性、生活資源の獲得力、そして生物間の相互作用がある。それらに関する様相を概観し、本講義全体のねらいを解説する。	松本 忠夫 (東京大学大学院教授)	松本 忠夫 (東京大学大学院教授)
2	様々な生物社会とその成立メカニズム	生物は多かれ少なかれ、同種個体が集団（群れ、群落、コロニーなど）を形成して生活しているものが多い。そのような集団を社会と見ることができ、いかなる理由でそれらの社会が成立しているのかについて、特に環境との関連で説明する。	松本 忠夫	松本 忠夫
3	植物の多様な繁殖様式と、動物との関係	植物では、動物とは個性が大きく異なり、動物にはみられない多様な性表現が存在する。ここでは、被子植物にみられる性表現と受粉様式の進化を解説するとともに、それには動物の影響が大きかったことを紹介する。また、植物が動物からの摂食に耐えるためのさまざまな適応戦略を説明する。	松本 忠夫 大原 雅 (北海道大学大学院教授)	松本 忠夫 大原 雅 (北海道大学大学院教授)
4	動物の多様な繁殖様式	通常の動物は有性生殖を行うが、中には単為生殖、多胚生殖、幼形生殖などの無性生殖を行うものがある。また、親による子の保護様式と関係して、卵生、卵胎生、胎生などが見られる。さらに哺乳類では雌親による授乳が発達している。本章では、このように多様な動物の繁殖様式を説明する。	松本 忠夫	松本 忠夫

回	テ ー マ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
5	植物の発生と環境 適応	植物は固着生物なので、環境に対して柔軟に適応する能力が進化の過程で発達した。中でも植物の生活を支えている光合成に関しては、環境適応が必須のため、光合成器官である葉の発生は、外界の環境に適応して実に大きな可塑性を発揮する。葉の発生の可塑性と環境適応との関係について、発生を制御する遺伝子の働きの視点から、現在の理解を紹介する。	塚谷 裕一 (自然科学研究機構助教)	塚谷 裕一 (自然科学研究機構助教)
6	動物の発生と環境 適応 (1) 諸事例	動物の中には、発生・発育過程において環境の影響を受けて、その形態や性質が大きく変化するものたちがいる。生存のための環境適応と解釈される。また、繁殖における戦略として性転換をする魚類、さらには昆虫類の環境適応としての多型現象にもふれる。そして、そのような多様な形態や性質をもたらす進化的要因および体内メカニズムについて説明する。	松本 忠夫	松本 忠夫
7	動物の発生と環境 適応 (2) 昆虫の翅形質 の例	昆虫類はその進化の中で翅を獲得することで陸上に大きく繁栄できた。しかし、昆虫によっては翅を形成しない種類もある。一方、チョウ類のように翅の色彩や斑紋が華美であったり、擬態していたり多彩な分類群がいる。ここではそのような昆虫類における翅形成の有無、色彩や斑紋の多様性などが成立するに至った進化的要因および翅形成の体内メカニズムについて説明する。	松本 忠夫 三浦 徹 (北海道大学大学院助教)	松本 忠夫 三浦 徹 (北海道大学大学院助教)
8	社会性生物における カースト分化	社会性生物は、集団で生活し、その中に少数の生殖者そして多数のワーカーや兵隊など非生殖者といったカースト分化が見られることを特徴としている。そして、陸域において大繁栄している。ここでは動物の社会性について解説する。そして、繁栄の鍵となっているカースト分化がもたらされた進化的要因およびカースト分化の分子生物学的メカニズムについておもにシロアリを例にして説明する。	松本 忠夫 三浦 徹	松本 忠夫 三浦 徹
9	社会行動の発現メ カニズム、 ミツバチの例	ミツバチは多様なハチ類の中でも最も高度な社会性を獲得した昆虫として、分子生物学の分野で近年、注目されつつある。そして、その多様かつ複雑な行動、特に、働きバチたちが利用するダンス言語（記号的言語）や、コロニーを防衛するための攻撃行動（利他行動）は、脳機能の進化という観点から興味深いものである。ここではミツバチを巡る分子社会生物学の現状を紹介し、その将来像を展望する。	久保 健雄 (東京大学大学院教授)	久保 健雄 (東京大学大学院教授)
10	菌類における環境 適応	菌類の環境適応は、意外に理解が乏しいが、菌類も外界の環境に対する適応的な反応を行なうことが知られている。ここでは特に、大型真菌類の子実体（いわゆる茸の部分）における環境適応をとりあげる。また重力に対しても子実体は顕著な反応を示す。これらが孢子散布に果たす役割を概説する。	塚谷 裕一	塚谷 裕一
11	菌類の形態形成メ カニズム	菌類の形態形成は、その組織構造の点でかなり特異である。例えば細胞性粘菌は、アメーバ状の細胞が集合した後、互いにシグナルをやりとりして、機能分担をしながら多細胞からなる形態形成を成し遂げる。また真菌類の子実体は、多細胞の器官であるが、基本的に菌糸が複雑にからまりあいながら作り上げられており、分化の程度は浅く、脱分化・再分化が容易に起こる。これらの形態形成メカニズムは未だ十分理解されていないが、特異な機構であり、注目に値する。	塚谷 裕一	塚谷 裕一

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
12	生物環境の調査法 (陸上生物)	植物群落は、陸上の生態系の一次生産を担い、また動物の生息空間の構造を大きく規定している。植物の種組成や種多様性、さらには動物の生息空間としての植物群落の構造を調査するための方法と、その結果の分析法についてまず紹介する。陸上の動物の調査法は、動物の種類に応じた様々な方法が知られているが、ここではその中から鳥類の個体数調査法を取り上げ、解説するとともに、調査結果を植物群落の調査結果と対応づけるやり方についても概観する。	加藤 和弘 (東京大学大学院助教授)	加藤 和弘 (東京大学大学院助教授)
13	生物環境の調査法 (水界生物)	水界にも多様な生物が生育・生息しており、その調査方法は生物の種類に応じて異なる。ここでは河川での生物調査を念頭に置き、一次生産の主体である付着藻類と、調査が比較的容易で環境指標性も高い底生無脊椎動物の調査方法について説明する。さらに、そのような調査によって得られたデータを分析して、種多様性の数値化や生物相の地点間での比較、さらには生物の生息環境の善し悪しの評価を行う手順についても解説する。	加藤 和弘	加藤 和弘
14	人間活動と生命環境科学(1) 生物の絶滅問題と生物多様性の価値	現在の地球における生態系の多様性、種の多様性、遺伝子の多様性に対しての人為の影響はたいへん大きい。そして、近代では非常に多数の生物が絶滅し、現在も絶滅の危機に瀕している生物が多い。特に熱帯多雨林域における森林群集全体の喪失は、生物多様性を一気に著しく減少させてしまうので重大問題である。ここでは、そのような生物絶滅の様相を説明し、絶滅をくい止める方策について考える。さらに、生物多様性の価値についても考える。	松本 忠夫	松本 忠夫
15	人間活動と生命環境科学(2) 環境に放たれた人工物質および移入種の影響	近年、人間は生活向上のために、実に様々化学物質を作ってきた。そして、現在はある意味では大変便利な時代となった。しかし、それらの化学物質そのものあるいは変形物は、環境に放たれたとき、生命体をおびやかす物質としても働くものがある。その様な物質として殺虫剤、除草剤などいろいろあり、内分泌攪乱、ガン誘発などが疑われていて、それらは生物多様性にも影響を与えていると思われる。そこでその様相および対策について説明する。ここでは、さらに、世界の他地域からの不用意な生物の移入が、在来生物相を圧迫している例についてもふれる。	松本 忠夫	松本 忠夫

＝生命環境科学Ⅱ（'02）＝（TV）

－環境と生物進化－

〔主任講師：石川 統（放送大学教授）〕

全体のねらい

生物の進化を環境との関わり合いに重点を置きつつ考察する。ここでとり上げる環境には、生物をとり巻く無機的环境ばかりでなく、細胞内環境、生体内環境、さらには1つの生物種にとっての異種生物の存在なども含まれる。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	生物進化の場としての環境	生物にとっての環境とは、物理的自然環境だけではない。細胞内環境、生体内環境、異種生物間相互作用等が生物進化にどのように影響するかを概観する。	石川 統 (放送大学教授)	石川 統 (放送大学教授)
2	原始地球環境と化学進化	原始地球の環境下で有機物が合成され、やがて生命が誕生した。それらの過程を概説するとともに、当時の生態系についても述べる。	山岸 明彦 (東京薬科大学助教授)	山岸 明彦 (東京薬科大学助教授)
3	生命の起源と RNA ワールド	生命の起源の頃には、RNA 分子が生命にとって不可欠の遺伝情報と触媒作用の双方を担っていたとする説が有力である。その根拠について概説する。	石川 統	石川 統
4	環境としての細胞	細胞は生物を構築する最小単位であるとともに、機能分子にとっては環境としての意味をもっている。細胞の起源にも触れつつ、その働きを解説する。	同上	同上
5	酸素と生物	原始地球上には酸素は乏しかったが、光合成生物の出現によって、その濃度は飛躍的に上昇した。そのことが生物進化に与えた影響について概説する。	同上	同上
6	真核細胞の起源	真核細胞は異なる種類の原核細胞が共生しあうことによって生まれたと考えられている。その根拠を紹介しつつ、細胞小器官の機能について述べる。	同上	同上
7	多細胞生物と環境	多細胞生物を構成する細胞や組織は、周囲の生体内環境との整合性の下に維持されている。多細胞生物の起源とともに生体内環境の実態について紹介する。	同上	同上

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
8	葉緑体からみた植物の進化	約20億年前、藍色細菌が宿主生物に細胞内共生し葉緑体となり植物が生まれた。葉緑体からみた多様な植物（マラリア原虫を含む）の起源と進化のしくみを解説する。	黒岩 常祥 (立教大学教授)	黒岩 常祥 (立教大学教授)
9	極限環境の生物たち	高温、低温、高圧、酸性、アルカリ性等さまざまな極限環境にも微生物が生育している。これらの環境に適応するための戦略を、とくに温度との関係を中心に解説する。	山岸 明彦	山岸 明彦
10	補食・被食関係と進化	補食者、被食者双方の戦略を述べるとともに、第三者の介在によってそれらがどのように複雑化するかを、いくつかの実例を挙げつつ解説する。	松本 忠夫 (東京大学大学院教授)	松本 忠夫 (東京大学大学院教授)
11	寄生：食住環境としての異種生物	寄生者にとっては、宿主生物の体が生きていく環境である。寄生者と宿主の間にみられる生存のための巧妙な駆け引きと戦略について考察する。	深津 武馬 (産業技術総合研究所主任研究員)	深津 武馬 (産業技術総合研究所主任研究員)
12	共生と共進化	密接な生物間相互作用である共生と、それに基づく相互依存関係の深まりである共進化について、実例に沿いつつ紹介し、その本質を考察する。	同上	同上
13	細胞内共生	究極の共生の形態である細胞内共生の例を主として分子細胞生物学的観点から紹介し、その生物進化および生物多様性増大における意味を考察する。	石川 統	石川 統
14	環境と遺伝子	環境要因によるDNA損傷を監視し、それを回避する機構について、主として発がん、老化、および生物進化との関係を念頭に置きつつ概説する。	三谷 啓志 (東京大学教授)	三谷 啓志 (東京大学教授)
15	環境に働きかける生物たち	生物は環境の資源を有効に利用するために、多少なりとも環境の改変を行う。それを大規模に行うサンゴ虫、シロアリ、ミミズ類などを例として、その生物学的意味を考える。	松本 忠夫	松本 忠夫

＝認知行動科学（'02）＝（TV）

－心と行動の統合科学をめざして－

〔主任講師：西川 泰夫（放送大学教授）〕

全体のねらい

認知行動科学は、自らの心と行動を総合的に問い豊かな自己認識を図ることを試みる新たな「心の科学」である。また、自律的個性的な自己実現にとって心身の健康問題は重要な課題の一つとなるので、あわせて具体的な実践と応用のための技術や方法論と、そのもとにある基本的な心観（パラダイム）や原理・理論を詳細に検討する。

回	テーマ	内容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	プロローグ －認知行動科学の めざすもの－	認知行動科学の大枠となるパラダイムを呈示し、当放送講義の全体像を概略紹介する。従来の「心の科学」（認知科学、認知論）ならびに「行動の科学」（行動論）の理論的な統合化のもとで総合的な自己認識と他者認識をはかり、自他における心身の健康問題や豊かで安全な社会形成への実践と応用のための技術・方法論のもとになる基本的な原理やパラダイムを詳細に吟味・検討する。	西川 泰夫 (放送大学教授)	西川 泰夫 (放送大学教授)
2	認知行動科学の基礎（1） －二大パラダイムの再吟味－	歴史上代表的な二大「人間観」である「認知（心）論」と「行動論」の統合化をはかり総合的統一人間科学「認知行動科学」を構築するために、各々の個別分野における心観、行動観を基本から再吟味する。また、心身問題への対応をめぐり両観点の比較検討を行う。	同上	同上
3	認知行動科学の基礎（2） －認知論－	二大パラダイムの統合における難問の一つである「心身問題」への取り組みをもとに、私の心と行動を統合的にいかにとらえ認識可能か検討する。第一の論点である「認知論」をふまえ心身の健康問題をはじめ自己認識をより良く達成するための実践法となる認知療法や認知的カウンセリングの基本原理や前提の検討を試みる。	同上	同上
4	認知行動科学の基礎（3） －行動の科学、行動論－	「心身問題」を吟味するさいのもう一つの論点である「行動論」の紹介を行う。この立場は、必要なことは心の解釈と説明を行うことではなく（あるいは、心やその概念を排除する）、なぜそう行動するのか、当該行動を制御している制御変数を行動の場、環境事象の中に特定することである。したがって、心は身体に還元される。では、行動の基本法則とは。また、自らの心身の健康維持促進を決定的に左右する行動様式とは。新たに提唱される「行動医学」、自律的健康維持のための「行動療法」、「行動修正・変容法」とは。	同上	同上
5	行動の科学（1） －I. P. パヴロフの条件反射学－	二大パラダイムの歴史的な成立経緯から、まず「行動の科学」における人間観を整理する。そのさいのキーワードの一つが「科学」である。この科学的認識活動による新たな「人間科学」とはどのようなものであったか。その第一歩となった条件反射学を再吟味する。「精神的（心理的）分泌」と名付けられた現象の解明がことの発端である。その結果、心とは決して不可思議な非物質ではなく、その物質的基盤となる脳のモデルへと展開する。	同上	同上
6	行動の科学（2） －J. B. ワトソンの行動主義－	自らの科学的な理解（自己認識）のために第三者により観察可能であり検証や反証のできる対象として選ばれたのが「行動（刺激－反応の結び付き）」に他ならない。そうした行動の形成と修正のための方法論や技術の背景となる「行動主義」の観点を考察する。 この基盤として、パヴロフの条件反射学、ならびに条件付け操作がある。また、なぜ「行動」を問題にするのか。彼の「行動心理学」、いな「行動の科学」を吟味する。	同上	同上

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
7	行動の科学(3) ー媒介過程論、動因論ー	行動の制御変数としての生体内部の過程への見直しと、その見えざる対象をいかに科学的に可視化するか。刺激変数と反応という外的観察可能な変数の操作から規定される刺激ー反応関係をもとにしたその間をつなぐ媒介物質過程をいかに科学的対象として取り出しうるか。この内的過程をあらためて「心」とよぶことが可能になるのか。その新たな「心」の機構と機能、ならびにその概念をめぐる展開の紹介。行動を左右する内的媒介変数としての「動機論」、「動因論」などを吟味する。	西川 泰夫	西川 泰夫
8	行動の科学(4) ーB. F. スキナーのオペラント心理学ー	実験行動分析学(オペラント心理学)を提唱するスキナー独自の観点の吟味と、その応用である応用行動分析学、行動療法をはじめ、教育工学、行動薬理学などを紹介する。スキナーの基本命題は、「なぜ生き物はそのように行動するか」と問うことである。またその答えは、生体の自発行動(オペラント行動)の表出場である同じ環境事象の中に当該行動の生起確率を左右する制御変数をみいだすこととみなす。そのさい、彼は、三項関係(機会刺激(弁別刺激)ーオペラント行動ー強化の随伴性)を基本として、独特の理論展開を図る。	同 上	同 上
9	パラダイム・シフト ー認知論の台頭、高次精神現象ー	台頭してきた新たなパラダイムである認知論、ならびに認知心理学に対する、反対の立場の急先鋒であるスキナーの態度は、当初から徹底しており一貫している。また批判してやまない。その理由は、彼の理論からみると、「認知論」は排除すべき代表的な「理論」の一つであるからである。では、「認知論」における主題であるあらゆる心的過程、高次精神事象や心の概念は、いかなる科学的根拠において不可欠と理解され、主張されるにいたったのであろうか。最終的な「認知革命」と称されるようなパラダイム・シフトが生じる過程での、多様な高次精神事象を取り扱った、また内容も身近な実験事例を紹介する。	同 上	同 上
10	コロンバン・シミュレーション計画 ーハトによる認知過程のシミュレーションー	コロンバン・シミュレーション計画とは、ハトを用いた認知過程のシミュレーション研究計画である。この計画は、オペラント行動心理学の提唱者であるスキナーの最晩年における研究計画である。当時、心理学の基本パラダイムは、行動論、行動心理学に代わって認知論、認知心理学へと移行し始めていた。これに徹底的反論を展開したのはスキナーである。彼が排除すべき「理論」の典型的理論である「認知論」を認めるはずもない。心や、高次精神現象と称される現象を、チンパンジー(霊長類)以下でしかないハト(鳥類)を用い行動的に形成し、記述する。9章で紹介した実験例への反証でもある。	同 上	同 上
11	「心の科学」(1) 認知革命ー「行動の科学」から「心の科学」への回帰ー	心理学の内部で繰り広げられていたパラダイム論争に加え、新たに心理学外での諸科学の興隆に伴い、心理学への多くの影響がおよぶにいたり、心理学は、それまでの「行動の科学」から「心の科学」への大幅な移行、回帰といってもよい変化が生じた。これを「認知革命」とよびさえる。それは、あらためて心的過程をはじめ、メンタルな概念での行動の説明が可能になるのに伴う、パラダイム・シフトに他ならない。その背後にある外圧ともいべき新たな展開は、情報理論、コンピュータ・サイエンス、数理言語学に起こった出来事による。情報理論を中心にその変遷を概括する。	同 上	同 上

回	テーマ	内容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
12	「心の科学」(2) ー 認知心理学の成立、システムを流れる情報の観点からー	新たな「心の科学」を目指す「認知論」に立脚した「認知心理学」の具体的な事例実験研究を紹介し、「心」の概念の再吟味を試みる。そのさいの中心的なパラダイムを一言で示すと、「心とは、情報の処理・操作システムである」、あるいは「心とは、システム・コントロール情報処理システムである」という言明、命題に集約されよう。このことは、あるまとまりをもつシステム全体を情報の流れの中で固有の機能を発揮するさまざまな下位システムの有機的集合体とみる立場でもある。この観点は、生物にとどまらず機械をはじめ多くの人工物、物理事象を含みそれらを共通の基盤に立って論ずる新たな道を開く。	西川 泰夫	西川 泰夫
13	「心の科学」(3) ー 心はコンピュータかー	いわゆる認知革命をもたらした大きなインパクトの一つが、コンピュータの発明にあることは論を待たない。その特色の一つとして、情報のコントロール・システム、情報の処理・操作システムであることをあげることができる。そして、心の基本的な営みに重ねて論じうる可能性を前章12章で議論した。さらには、その基本構成要素、ユニットが情報の流れの中で果たしている情報コントロールシステムとしての特色や機能を実証的に考察できた。この情報を直に担っているのが、記号系であることも指摘した。その意味では、コンピュータも人の心も同じく、記号の処理・操作システムであるという命題が成り立つ。では、「心は、コンピュータである」、という言明、命題は成り立つのであろうか。こうした可能性を論ずる新たな「心の科学」、「認知科学」の動向を紹介する。	同上	同上
14	「心の科学」(4) ー 「考える」とは、記号論理学をもとにー	心身問題の解決を探る現代の心の科学における基本方針は、システムを行き来する記号あるいは情報をキー概念として、脳を基盤とする物質的、物理過程をもとに一元論的な解消を目指すものといってよい。本章は、当の「記号」と「記号の処理・操作」それ自体を考察の対象とする。その記号の処理・操作とは、一定の規則に則って行われる「計算」である。日常の「考えること」に当たる。その基本の論理構造を、伝統的なアリストテレス論理学から、現代の記号論理学、命題論理学と述語論理学に則って吟味する。それは新に考える機械(コンピュータ)の可能性を開くとともに、心を機械とみる観点へと開かれる。この上で心身問題への新たな解決の糸口を探る。	同上	同上
15	エピローグ ー 「認知行動科学」; 「認知論」と「行動論」の統合と新たな展開ー	現代心理学の二大パラダイムの吟味を通して、私たちの最大の関心事の一つである「心とは何か」、「行動とは何か」に対する思索の後を追って現代の心理学のフロンティアの有様を概観してきた。心理学の統一理論の確立をはじめそこには多くの重要な課題が解決を待っている状況である。最大の論点の一つはデカルトを一つの原点とする「心身問題」にある。それは「擬似問題」であろうか。心などの用語の「記述レベル問題」であろうか。一方、物理自然諸科学は、「機械論」に立って一貫した世界観を確立してきた。それは心をいかに解くか、新たな段階を迎えている。「認知科学」がそれである。それは統一理論たりうるか、身近な話題を通じその可能性を探り、本書のとりまとめを行う。	同上	同上

＝ 生活科学 I (' 0 5) ＝ (R)

－ 食の科学 －

[主任 講 師 : 中谷 延二 (放 送 大 学 教 授)]

[主任 講 師 : 小城 勝相 (奈 良 女 子 大 学 教 授)]

[主任 講 師 : 菊崎 泰枝 (大 阪 市 立 大 学 大 学 院 助 教 授)]

全体のねらい

生活科学には主として人々の日常生活環境の中での衣、食、住および人間を対象とする研究分野がある。本科目ではヒトの生命維持に直接関わる「食」を現代の科学的知見を盛り込んで解説する。食に関する基本的概念を論じ、食品の機能、健康を維持・増進する機能性食品、食による生活習慣病の予防、高齢者の食生活など常にヒトの健康を視野に入れて論述し、理解を深める。

回	テ ー マ	内 容	執 筆 担 当 講 師 名 (所 属 ・ 職 名)	放 送 担 当 講 師 名 (所 属 ・ 職 名)
1	生活科学における食の科学	生活科学は人間の日常的営みの中で関わる様々な事象を科学的に分析し、解明する学問である。この「生活科学 I」では健康な食生活を目指すことに視点を置き、食品の機能から、食材、嗜好性、生活習慣病の予防、高齢者の食生活、食品衛生などを論ずる。	中谷 延二 (放送大学 教授)	中谷 延二 (放送大学 教授) 小城 勝相 (奈良女子 大学教授)
2	食品の機能	食品には 3 つの機能があるといわれる。我々の生命維持に関わる最も重要な栄養機能(一次機能)、感覚に訴える嗜好機能(二次機能)、生理的作用に関わる生体調節機能(三次機能)である。これらの機能を発現する成分を列挙し、その機能性を評価し、解説する。	中谷 延二	中谷 延二
3	世界の食料	世界の食料生産状況を地域別に概観し、地球規模での食料自給の現状に触れる。次いで急激に増加する人口と発展途上国における生活水準の向上がもたらす食糧需要増大に農業生産がどこまで対応できるかについて、食糧増産の技術的問題を検討し、食料の需給予測について代表的な研究例を紹介する。	谷口 肇 (中部大学 教授)	谷口 肇 (中部大学 教授)
4	日本の食料	飽食、グルメ、簡便が高度に進んだ日本の食の現状について整理し、戦後日本で進展した食品科学および食品製造技術の発展について紹介する。次いで狂牛病に代表されるような食の安全に対する懸念の増加と国際的に見ても異常に低い食料自給率の問題を取り上げ、日本の食のあり方について考察する	谷口 肇	谷口 肇
5	糖質の科学	糖質(炭水化物)はエネルギー源として最も獲得しやすい栄養素である。食材として米、麦などの穀類、いも類、豆類などがある。デンプンが主なエネルギー源であるが、ショ糖、グルコース、乳糖、麦芽糖などの糖類もある。オリゴ糖、多糖類(食物繊維も含む)についての多くの有用な機能も紹介する。	中谷 延二	中谷 延二

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
6	食品の嗜好性に関わる機能 —香、味、色—	食品の第二の機能といわれる嗜好性に関連する機能について概説する。我々の感覚を直接刺激する食品の香り、味の成分を化学構造から分類するとともに発現機構の複雑さについて触れる。食品の色は外観とともに見た目のおいしさ、食欲との深い関わりがある。食嗜好のファクターを考察する。	菊崎 泰枝 (大阪市立 大学大学院 助教授)	菊崎 泰枝 (大阪市立 大学大学院 助教授)
7	おいしさの科学 食肉のおいしさ	食肉のおいしさを構成する要素は、他の食品と同様に調理前の外観に関するものと、調理後口に入れてから知覚されるものに大別される。前者には赤身と脂肪の色、赤身のきめ、締り、脂肪交雑などがあり、後者には食感、味、香りがある。本講義では各種食肉について、それらがどのように成り立っているかを解説する。	沖谷 明紘 (日本獣医 畜産大学教 授)	沖谷 明紘 (日本獣医 畜産大学教 授)
8	生活習慣病と食生活	生活習慣病は加齢に付随して起こるものである。しかし名前の通り生活習慣によって、その発症が早くなることも悪化することもある病気である。それを防ぐには、何よりもその発症機構を知った上で食生活を見直すことが大切である。本講義では生活習慣病を引き起こす代表的な物質である活性酸素の作用について我々の最近の研究成果を含めて論じる。	小城 勝相 (奈良女子 大学教授)	小城 勝相
9	カルシウムと骨	人体のミネラルの約半分を占めるカルシウムはその99%が骨と歯に存在する。リン酸、コラーゲンとともに骨形成には重要な役割を演じているが、電解質として細胞分裂、血液凝固、神経活動の維持など生命現象にも大きく関与している。カルシウムの代謝をはじめ骨の健康に関わる生理的機構を論じる。	小城 勝相	小城 勝相
10	新しい食品の創出	食生活や運動習慣のアンバランス、生活環境で生じるストレスなどが原因で発症する生活習慣病が急増している現在、これらの疾病を医療、投薬に頼るのではなく、日常的に摂取する食品で予防する試みが広がってきた。そのひとつに特定保健用食品や栄養機能食品の創出、サプリメント類の増加が見られる。この経緯、背景を解説する。	中谷 延二	中谷 延二
11	日本人の食生活	国民栄養調査の結果から国民の栄養状態や食物摂取レベルの実態を概説する。その現状を踏まえ、わが国の少子・超高齢化社会を支えるべく、健康寿命の延伸と壮年死亡の減少をめざした食生活の改善策について考える。食と生活習慣病に関わる研究の具体例を例示しながら、食生活の面から健康の維持・増進を図るための指針を述べる。	菊崎 泰枝	菊崎 泰枝

回	テ ー マ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
12	高齢者の食生活	高齢社会を迎えたわが国では、単に長寿であるだけでなく、いかに健康で豊かに長寿をまっとうできるか、高齢者の生活の質の向上を図ることが重要な課題である。本講座は、高齢者のための食品の創出、調理上の工夫、高齢者用食器の創出など、生活の質の向上を食生活の面から支援する方策を述べます。	和田 淑子 (関東学院 大学教授)	和田 淑子 (関東学院 大学教授)
13	食中毒による健康被害の現状	私達は生物資源を食材として利用し、命をつないでいる存在であり、環境問題は直ちに食の問題として命の問題へと帰着する。本講座では食の安全性に関わる生物学的問題が身近な危機として再認識されることを促す目的で、食中毒を中心にわが国における健康被害の現情を紹介し問題点を考察する。	西川 禎一 (大阪市立 大学大学院 助教授)	西川 禎一 (大阪市立 大学大学院 助教授)
14	食中毒の基礎知識と環境問題	食中毒の生物学的要因を列举し、重要なものについてその生態や病原機構に関する基礎知識を講義する。また、本来自然に存在すると考えられるこれらの生物学的危害要因が実は私達の社会経済活動などと密接に関連している可能性を紹介し、食環境のありようについて受講生自身が考える糸口とする。	西川 禎一	西川 禎一
15	健康な食生活	若年層から高年齢層にわたって増加している糖尿病や肥満症、高血圧症などの生活習慣病の発症、高齢者の健康維持・増進など多くの課題が、私たちの食生活に大きく関わっている。それぞれ専門の立場から健康な食生活を論ずる。	中谷 延二	中谷 延二 小城 勝相 西川 禎一 菊崎 泰枝

＝生活科学Ⅱ（'02）＝（TV）

－すまいづくりまちづくり－

〔主任講師： 本間 博文（放送大学教授）〕

〔主任講師： 佐藤 滋（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

わが国の居住空間は、統計資料上の改善は目覚しいが、多様化するニーズへの柔軟な対応に欠け、地域としての居住環境はなおざりにされ、依然として多くの課題を抱えたまま改善のプロセスは明確でない。このような状況を変革し、居住者の生活に適合した居住空間づくりを実践するには、専門家にただそれを任せておくだけではなく、住民自ら積極的に関わることが必要であり、現にそのような状況が各所に見られようになり、そして確実に増えてきている。本講義は、そのような居住空間の改善に積極的に関わろうとする意欲を持つ住民が、様々な活動を行うために必要な、実践的な、そしてやや専門的な知識を習得することを目標とする。講義の前半で「すまいづくり」を、8章から「まちづくり」について解説する。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	執筆担当 講　師　名 (所属・職名)	放送担当 講　師　名 (所属・職名)
1	は　じ　め　に	集まって住む、そこにおける共同の意味をより積極的に追求しようとする動きが顕著になり、大きなうねりとして21世紀のすまいづくりのキーワードになりつつある。まちづくりにおいても第1の原則は住民地権者の参加である。本章では本講義の構成と狙い、各回の内容を概説し、居住空間造りに主体的に関わることを考える。	本間 博文 (放送大学教授)	本間 博文 (放送大学教授)
2	コーポラティブ方式 でのすまいづくり	1970年代に脚光を浴びたコーポラティブ方式でのすまいづくりは、一時の停滞期を過ぎ、今再び注目を浴びている。多様なライフスタイルの家族、世帯が共存する都市社会においてすまいづくりに主体的に関わることの重要性が見直されてきたためである。ゲストに中林由行コープ住宅推進協議会幹事長を迎えて、コーポラティブ方式のすまいづくりの変遷、その手法、典型事例などを紹介し、今後の住まい造りに有効な知見を得る。	同　上	同　上
3	スケルトン定借マ ンションによるす まいづくり	スケルトン定借マンションのねらいとその仕組みを紹介し、さらに今後の都市社会の中でどのような有効性を持つかを述べる。その上で、この方式を採用してすまいづくりを行った東京都世田谷区の2つのプロジェクトを取材し、この方式の可能性と課題を明らかにする。とくにプロジェクトを支援する立場のコーディネーター、設計者の役割や能力を検証する。併せてプロジェクトを進める上で発生する様々な問題を提示し、問題解決のための指針を示す。	同　上	同　上
4	コレクティブハウ ジング(1)	21世紀の社会は単に住まいを共同で造るだけではすまなくなっている。さらに進んで生活を共同化し、お互いに補い合って生活の質を高めていこうとする動きが主に北欧を中心に出てきている。どこでどのようにすむかというライフスタイルと住宅選択の一つである。欧米での先駆的な事例を紹介し、コレクティブハウスの可能性を探る。	小谷部 育子 (日本女子大 学教授)	小谷部 育子 (日本女子大 学教授)
5	コレクティブハウ ジング(2)	日本でのコレクティブハウジングの動向を紹介する。グループホームなど似通った用語が氾濫し混乱しているのでまず関連用語も含めてその定義を明確にする。同時にコレクティブハウジングの特徴、住宅形式、対象とする生活者像などを概観する。その上で、阪神・淡路大震災の復興事業の一環として神戸市に建設された兵庫県営片山住宅などの事例を紹介し、公営コレクティブの問題点、民営のコレクティブハウス建設の取り組みなどを紹介する。	同　上	同　上

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
6	環境と共生する住まい(1)	21世紀の住まいづくりは環境負荷をいかに軽減するかが重要な課題の一つである。建築と地球環境の問題を概観し、低環境負荷を実現するための基本的な知見を述べた上で、今後の取り組みについて考える。海外の先導的なすまいづくり、まちづくりの事例を合わせて紹介する。	小玉 祐一郎 (神戸芸術工科大学教授)	小玉 祐一郎 (神戸芸術工科大学教授)
7	環境と共生するすまい(2)	地域の自然的特性、社会的特性のポテンシャルを発見し、すまいづくりに生かすことは省エネルギー、省資源を実現して環境負荷を減らすだけではなく、地域の魅力を引き出し、良好な社会ストック形成に貢献する。東京世田谷の環境共生型集合住宅、岡山倉敷の伝統的民家再生などの事例をあげながら、環境と共生するすまいづくりを展望する。	同 上	同 上
8	復興まちづくり	阪神・淡路大震災の後の復興まちづくりは、今日のまちづくりの可能性と課題、そして限界を明らかにした。住民の主体性と行政の責任、そして専門家のリーダーシップ、さらに蓄積されたまちづくりの技術の有効性が試されたのである。主に神戸市野田北部地区における復興まちづくりの事例を追ってこの問題を解明する。	佐藤 滋 (早稲田大学教授)	佐藤 滋 (早稲田大学教授)
9	住み続けられるまちづくり	災害に脆弱な木造密集市街地で1970年代後半から、地域社会を基盤として住環境の整備を標語に掲げながら、広範な改善型まちづくりの試みが進められた。埼玉県上尾市仲町愛宕地区、長崎県長崎市曙町中道地区を事例に住環境の整備を進め「安心して住み続けられるまち」を目指したまちづくりの成果を振り返り展望する。	同 上	同 上
10	参加のまちづくり	まちづくりの第1の原則は使用者の参加ということで、1960年代以後建築や造園、都市計画の分野で取り組まれていた最大のテーマである。目標空間イメージの共有と実践、ユーザー参加、参加の技術とプログラム、デザインゲームなどのキーワードがどのように反映しているか、その取り組みを探る。この分野での実践を積み重ねてきた卯月盛夫早稲田大学教授をゲストに向かえて講義を進める。	卯月 盛夫 (早稲田大学教授)	卯月 盛夫 (早稲田大学教授)
11	町並み保存・町の資源を活かす	歴史的町並みの保存は、まちの資源がもっともあきらかな形で存在しているという点では、資源をいかす町づくりの最右翼にあるといえよう。しかし、それだけに住民の日々の生活そのものと深くかかわる。歴史的な町並みを現代の町づくりの資源としていかすとはどういうことなのか？ 町並み保存とは、何を、なぜ、どのように保存することなのか。埼玉県川越市を事例に取り上げ、具体的に考える。	福川 裕一 (千葉大学教授)	福川 裕一 (千葉大学教授)
12	まちをマネジメントする	都市の中心部は、その市民生活の中心になるだけでなく、外部の人をひきつけ、都市の経済基盤として重要な役割を果たしてきた。その中心市街地の衰退がはげしい。これをどう立て直すか。先駆的に取り組まれている滋賀県長浜市の試みに学ぶ。	同 上	同 上
13	まちのポテンシャルを表現する	都市と農山村を結ぶいわゆるマチは地域の交通の要衝であり古くから栄えた。しかし、その後の社会背景の変化を受けて現在ではかつての面影を失いつつあるが、歴史的資源を活かしながら新しい風景デザインの創造を機軸にまちづくりを展開し、内外へ向けて情報発信につとめるこころみが成果をおさめている。愛知県足助町の事例を取り上げる。	後藤 春彦 (早稲田大学教授)	後藤 春彦 (早稲田大学教授)

回	テ　　マ	内　　　　　　容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
14	まちづくりはひとづくり	島国という日本の国土を形成する骨格は、中山間や離島等の条件不利地域である。こうした、いわゆるムラにおいて、行政と住民を媒介する中間セクターとしてのまちづくり研究所等を設立し、地域資源を研究対象や教材としながら、地域づくりの中核を担うひとづくりをすすめる方法がこころみられている。新潟県高柳町を事例としてとりあげる。	後藤 春彦	後藤 春彦
15	まちづくりの時代	現在まちづくりの仕掛けがありとあらゆる形で始められている。それではまちづくりを切り開いていくためにどのような戦略があるのだろうか。まちづくりに取り組んでいる専門家、行政、住民のパートナーシップ、制度と仕組み、まちづくりの技術などについて様々な立場で関わっている人々へのインタビューを交えて探る。 最後にまちづくりは日本の独特の社会・文化が生み出した方法であると同時に、世界の各地で近代都市計画を乗り越えるためのさまざまな試みが行われている。台湾でまちづくりのリーダーとして活躍中の陳両全教授のインタビューを通して国政的に広がりつつある状況を紹介する。	佐藤 滋	佐藤 滋

＝ 健康科学（‘05）＝ (TV)

－人々の健康を支える基盤－

〔主任講師： 多田羅 浩三（放送大学教授）〕

〔主任講師： 瀧澤 利行（茨城大学教授）〕

全体のねらい

平均寿命世界一の社会は、世界一多様な健康状態の人たちが生活する社会であり、そのような社会が求めている新しい科学の役割こそ、「健康科学」が担わなければならないか。そうした観点に立って、講義ではヒポクラテス以来の人類の医学のあゆみ、また人々の健康を支える制度の構築に先駆的な取り組みをすすめてきたイギリスのプライマリケアの現状についての理解をもとに、21世紀の「健康科学」が、人々の多様な健康状態を支える科学として、どのような方向を目指すべきか、考えたい。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	医学のあゆみ その1	西洋医学の父といわれ、医神アスクレピオスを奉じて活躍した、ヒポクラテスの医学の、症状の観察、液体病理学、瘴気論という方法と考え方、またヒポクラテスの医学を継承したローマ時代の医師、ガレノスの生氣論を中心に、その内容、特徴について学び、西洋医学の原点を確認したい。	多田羅 浩三 (放送大学教授)	多田羅 浩三 (放送大学教授)
2	医学のあゆみ その2	人間の発見をモットーとする、ルネッサンスという時代を迎え、ヴェザリウスの解剖学が生まれ、ハーベイ、ラマツツイーニ、モルガーニ、ビシャー、シュヴァン、ウイルヒョウらによるヒポクラテスの液体病理学への挑戦をつうじて得られた人間の疾病の本態についての理解、またスノー、パスツール、コッホ、フレミングらによる瘴気論への挑戦、ナイチンゲール、ペッテンコーフェルらによる瘴気論の継承によって進められてきた疾病への闘いのあとをたどり、その特徴について考えてみよう。(パスツール以下は、医学のあゆみ その3で講義)	多田羅 浩三	多田羅 浩三
3	医学のあゆみ その3	ヒポクラテスの医学において、最も重視されたのは症状の詳細な観察と記録である。その伝統を継承したのは、シデナム、ブールハーヴェであり、産業革命を背景に登場してきた病院を舞台に区分収容という方法を取り入れ、症状の中に疾病を発見するという診断学の手法を明らかにしたのがブライトである。3回の講義のまとめとして、長いあゆみを経て到達した現代の医学の特徴をふまえ、21世紀の健康科学の目指すべき方向について考えてみたい。	多田羅 浩三	多田羅 浩三
4	イギリスのプライマリケアに学ぶ その1 人々の健康を支えるシステム	イギリスでは、1911年の国民健康保険制度の発足以降、公衆衛生、一般医の医療の上に、病院の医療が重ねられるよう、プライマリケアの管理システムをどのように構築するか、1948年の国民保健サービスの実施を経て、100年に近い取り組みがすすめられてきた。講義では、その意義、特徴について考えてみたい。現地にオックスフォード・プライマリケア・トラストを訪問し、現状や課題について話しを聞き、紹介したい。	多田羅 浩三	多田羅 浩三
5	イギリスのプライマリケアに学ぶ その2 人々の健康を支える施設	プライマリケアの中核を担っているヘルスセンター、また地域の多様な住民を対象にした母子保健事業の拠点となっているファミリーセンター、在宅での療養を中心にしたケアをすすめるために設置されている成人用、小児用のホスピスなどが、人々のプライマリケアを支えている。オックスフォードに設置されている、これらの施設を訪問し、施設の特徴や課題について、話しを聞き、紹介したい。	多田羅 浩三	多田羅 浩三

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
6	イギリスのプライマリアケアに学ぶ その3 人々の健康を支える多様な専門職	地域にあって、疾病ではなく人間を診るという理念のもとに活躍している一般医、また健康課題のよき相談相手として活躍している保健師、ナイチンゲール以来の伝統の中で在宅看護を担っている地区看護師など、多様な専門職によって、人々の健康は支えられている。これらの専門職の人たちをオックスフォードに訪問し、その仕事ぶりを紹介したい。	多田羅 浩三	多田羅 浩三
7	現代社会における健康問題の多様化	現代社会における健康問題は先進国においては、ライフスタイルの変化にともなう生活習慣病を中心とした慢性疾患と社会構造の複雑化に起因する心身のストレス性疾患が増加しており、発展途上国では貧困による栄養障害や感染症がなお健康阻害要因として大きな位置を占めている。文明化の過程で疾病像がどの様に変化するかを検討しながら、現代社会における栄養、運動、こころの健康問題について検討してみよう。	瀧澤 利行 (茨城大学教授)	瀧澤 利行 (茨城大学教授)
8	ヘルスプロモーションと健康増進	こんにちは、多様化した健康問題を解決するための国際的動向としてヘルスプロモーション運動が展開されている。個人の健康向上のためのスキルアップや技術向上と社会的環境整備の両面を指向したこの活動は、先進諸国においても発展途上国においても共有できる理念・方法として普及している。ここでは、その理論的背景と具体的構成要素について、考察を加える。	瀧澤 利行	瀧澤 利行
9	健康管理・健康教育の新たな動向	急性疾患から慢性疾患への疾病像の変化にともない、プライマリアケアの重要性が提起されるようになって久しいが、こんにちはではさらに健康管理においては根拠にもとづく健康管理(EBHC)やケアの質管理の問題が論じられ、健康教育においても行動変容からさらに住民参加型の健康教育へと方法論が拡大している。ここでは、専門家の裁量や経験性への依存にとどまらず、情報の共有による創造的・双発的な健康管理と健康教育の動向を検討する。	瀧澤 利行	瀧澤 利行
10	健康と文化	人々の健康に関する働きかけは、前回までの講義で明らかにされたような科学的方法論による追求とともに、個別の地域や集団の文化性に強く規定される。人々の健康増進をその生活の次元に合わせて融和的に実現するためには、対象集団の文化的特性や地域の実情を十分に知る必要がある。ここでは地域への保健活動の前提としての健康と文化的特性との関係を主要な理論や実例を通して考えていくことにする。	瀧澤 利行	瀧澤 利行
11	人々の健康を支える事業・成果と展望	わが国の公衆衛生は、保健所の機能を基盤として成長してきた。近年、多くの事業が保健所から市町村へ移行している。市町村が実施している母子保健事業、老人保健法による保健事業、介護保険事業計画、健康日本21地方計画などについて、大阪府摂津市を訪問し、現状を中心に、その実績から、人々の健康を支えている事業の役割、成果、展望などについて考えてみよう。	多田羅 浩三	多田羅 浩三
12	健康の危機管理	人々の健康を支えるという課題について考えた場合、人々の健康は、大きな公害や震災、流行病などによって大きな被害を受けてきた。それらの経験から学ぶことは極めて多く、貴重であると思われる。とくに戦後、わが国が経験した水俣病やイタイタイ病、阪神淡路大震災、大腸菌 O157 食中毒、バイオテロ、SAHS などの事例を振り返り、危機管理の基本的なあり方について考えてみたい。	多田羅 浩三	多田羅 浩三

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
13	公衆衛生の役割と 展望	人類の公衆衛生は、19世紀、産業革命を背景とした人口の都市への集中と国際的な経済交流の発展を背景とした感染症の流行という事態に直面して生まれた社会の制度である。フランクやチャドウィック、ラムゼイ、シモンらの活躍によって構築されてきた、公衆衛生の伝統について学び、とくに社会の関与が人々の健康に対し、どのような役割を担うことができるか、公衆衛生の展望について考えてみたい。	多田羅 浩三	多田羅 浩三
14	健康日本 21 の意義 － 国民の責務と 人々の健康－	西洋医学は、人類の疾病への闘いに大きな成果を挙げた。その現代の優等生は日本である。昭和 61 年には男女ともに平均寿命世界一の記録を達成した。そのような実績にもかかわらず、わが国の生活習慣病による死亡数は激増している。平均寿命世界一の社会は、最も多様な健康状態の人たちが生活している社会である。結果として、人々の生活習慣、医療保険制度、保健事業や福祉事業のあり方が厳しく問われている。そのような状況の中ですすめられている、健康日本 21 の意義について考えてみたい。	多田羅 浩三	多田羅 浩三
15	人々の社会を 支える制度	人類の歴史の中で生まれ発展してきた制度の中で、とくにイギリスの歴史にみられる、陪審制度、議会制度、大学、修道院の解体と救貧法、プロフェッションの誕生、医療保障制度の成立などにフォーカスをあてて、長い歴史の中で人々の社会を支える制度が築かれてきた歴史について考えてみたい。その中で、講義の最終回として、人々の健康を支える基盤が目指すべき方向について、考えてみたい。	多田羅 浩三	多田羅 浩三

＝精神医学（‘02）＝（R）

〔主任講師： 仙波 純一（放送大学教授）〕

全体のねらい

この科目は臨床心理士養成コース大学院の科目として作成されたものである。したがって、医学的な知識がなくとも、精神医学の役割を理解できるように工夫されている。診断学は簡単な記述にとどめ、精神科疾患を提示し、その治療の道筋を把握できるように作成した。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	精神医学とは何か	医学における精神医学の占める位置を説明し、次に精神医学の簡単な歴史と現状について述べる。精神症状を把握するための精神医学的面接法、臨床検査法、および診断法の概略を述べる。	仙波 純一 (放送大学教授)	仙波 純一 (放送大学教授)
2	総合失調症（精神分裂病）（1）	精神医学の最大の課題のひとつである総合失調症（精神分裂病）をとりあげ、その疫学、症状、推定されている成囚などについて述べる。	石丸 昌彦 (桜美林大学教授)	石丸 昌彦 (桜美林大学教授)
3	総合失調症（精神分裂病）（2）	総合失調症（精神分裂病）の治療法すなわち、薬物療法、精神療法、社会復帰療法などについて述べる。	同 上	同 上
4	気分障害（1）	従来の診断名では躁うつ病とよばれる気分障害をとりあげ、その疫学、症状、推定されている成囚などについて述べる。	仙波 純一	仙波 純一
5	気分障害（2）	気分障害の治療法を構成する薬物療法と精神療法の役割を述べる。	同 上	同 上
6	不安障害とその周辺	伝統的には神経症と呼ばれてきた疾患群を不安障害としてとりあげ、その主なものについて、疫学、症状、治療法などを述べる。	仙波 純一	仙波 純一
7	摂食障害・人格障害	拒食症・過食症などの摂食障害の疫学、症状について、また境界性人格障害などの人格障害の概念、特徴について述べる。	同 上	同 上

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
8	薬物アルコール依存	社会問題化しているアルコール依存症、覚醒剤依存症などの疫学、症状、治療について述べ、その推定されている機序にも言及する。	石丸 昌彦	石丸 昌彦
9	身体疾患による精神障害	中枢神経系疾患の部分症状として現れる精神症状について解説する。精神科領域で扱われることの多いてんかんについても概略を述べる。	仙波 純一	仙波 純一
10	老年期の精神障害	高齢化社会で問題となる老人性痴呆や老年期のうつ病をとりあげ、その疫学、類型、症状、治療について述べる。	石丸 昌彦	石丸 昌彦
11	児童青年期の精神障害	小児期に明らかとなる広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害などについて述べる。	市川 宏伸 (東京都立梅ヶ丘病院院長)	市川 宏伸 (東京都立梅ヶ丘病院院長)
12	精神科治療(1)	精神科治療薬の種類とその推定される作用機序について述べる。いくつかの精神科特殊療法にも言及する。	仙波 純一	仙波 純一
13	精神科治療(2)	精神科治療における心理・精神療法をとりあげ、その基本原則について述べる。いくつかの特殊精神療法にも言及する。	石丸 昌彦	石丸 昌彦
14	精神医学と法律	同意の得られない治療は精神保健福祉法に基づいて行われる。また刑事責任能力などについて司法上の問題が生じることもある。このようなときの精神医学と法の関わりを示す。	仙波 純一	仙波 純一
15	地域精神医療	精神障害者が地域に住み満ち足りた生活や活動を行えるために地域で行うべき精神医療や福祉について述べる。	同上	同上

＝経営システム I ('02) ＝ (R)

－ 企業 の 公 的 経 営 －

〔主任講師： 佐々木 弘 (放送大学教授) 〕

〔主任講師： 加護野 忠男 (神戸大学大学院教授) 〕

〔主任講師： 山田 幸三 (上智大学教授) 〕

全体のねらい

受講者が関心をもつテーマや修士論文で取り上げようとするテーマをより広い学習分野の中から選択できるよう「経営システム I」は、講義内容を大きく、二つ――前半では私企業（民間企業）を対象とし、後半では公企業を対象とする――の部分から構成させるよう努力した。それぞれの分野の重要問題を簡潔に学習していこう。

回	テ ー マ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	環境の中で生きる 企業	企業は経済社会という経営環境の中で活動する組織体であり、その環境とのさまざまなやり取りの巧拙が存続に影響を及ぼす。しかし、企業は環境に対して単に受動的に適應するだけでなく、自らの戦略的な活動によって発展・成長を遂げる。	加護野 忠男 (神戸大学大学院教授) 山田 幸三 (上智大学教授)	山田 幸三 (上智大学教授)
2	経営戦略の内容と 機能	経営戦略は、企業と環境とのかかわり方を将来的志向的に示す構想であり、能動的な活動によって経営環境に適應していくために不可欠な役割を果たす。ここでは、経営戦略の内容と機能について概観しておくことにしよう。	同 上	同 上
3	全 社 戦 略	経営戦略は、組織の階層の違いを反映して事業戦略と全社戦略とに分けることができる。全社戦略は事業構造の戦略とも呼ばれ、企業全体に関する課題を広範で長期的な視点から分析して事業戦略の整合性を検討する。ここでは、全社戦略の内容と課題を説明する。	同 上	同 上
4	事 業 戦 略	事業戦略は、競争と不可分の関係にあり、「誰に」「何を」「いかに」という 3 つの問題に答えて差別化を図る必要がある。しかし、製品やサービスのレベルではなく、事業システムという仕組みのレベルで競争相手との差別化を実現することが本質的な課題である。	同 上	同 上
5	事業システムの構築	事業システムでの競争優位は目立たないが、競争相手による模倣が難しく持続するという性質をもっている。ここでは、事業システム構築のための基本的な選択と事業システムの設計のための基本的な論点について考える。	同 上	同 上
6	情報化時代の事業 システム	1990 年代以降の競争では、品質に加えてスピードや俊敏性がキーワードとなっている。情報化の進展は、戦略の実現に必要な組織の俊敏性を高めるために重要な役割を果たす。情報とコンピュータネットワークの特性に見合った事業システム作りが求められている。	同 上	同 上
7	日本企業の戦略課題 (1)	コーポレート・ガバナンスは、企業の健全な発展を促すために、どのような制度や慣行をつくるべきかということを経営上の基本的な問題とする。ガバナンスの問題は、現代企業が全体として取り組むべき問題となっている。ここでは、最近の動向と問題にも言及する。	同 上	同 上

回	テ ー マ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
8	日本企業の戦略課題(2)	最近の日本型経営に対する評価は、かなり厳しいものがある。日本企業の経営に改めるべきところは多いとはいえ、簡単に切り捨てて欧米のやり方を真似てうまくいくものではない。ここでは、経営戦略と人事制度について、これまでの特質を理解し、その強さと弱さを考える。	加護野 忠男 山田 幸三	山田 幸三
9	公企業とは何だろうか	公企業とは何だろうか。資本主義体制下においても、なぜ私企業だけで、すべてをやれないのか。公企業の存在理由や意義は何か。公企業は(私企業に比して)どのような経営原則に基づいて経営されているのか。	佐々木 弘 (放送大学教授)	佐々木 弘 (放送大学教授)
10	公企業と公益企業	公企業としばしば混同されるものに、公益企業という用語がある。そこで、公益企業とは何か。公企業との相違点はどこにあるのか。具体的にはどのような産業群にみられる企業をいうのか。できれば、近年の公益企業規制改革の動向にも触れてみたい。	同 上	同 上
11	公企業の経営形態(その1)	公企業とひとくちでいっても、実際には、公企業は様々な経営形態をまとめて存在している。そこで、公企業の経営形態を類型化して示したうえで、その主要な形態のいくつかをとり出して、その特徴や課題を明らかにしていくことが必要となる。	同 上	同 上
12	公企業の経営形態(その2)	前章につづいて、ここでは、近年特に世間の広い関心を集めている「第三セクター」形態をとりあげ、その理論と実際、いくつかの問題点などを指摘したい。	同 上	同 上
13	公企業の経営効率化をいかに促すか(その1)	公企業の経営効率化をいかに促すか。物価安定政策会議や経済企画庁(現内閣府)での議論、さらには、欧米における動向等を参考にしつつ、公企業の経営効率化への方策をいくつかの視点から論じる。	同 上	同 上
14	公企業の経営効率化をいかに促すか(その2)	最近、PFI方式や独立行政法人制度をはじめ、上下分離論方式や多様な経営委託など、公的サービスの供給方式の多様化が注目されるようになった。このような流れの中で、公企業はどうあるべきかを考えてみよう。	同 上	同 上
15	公企業の経営多角化	私企業の場合と同様、公企業にあっても、経営資源を活用しながら、経営多角化が模索される。現行制度上、この問題はどのように取扱われるのか。いくつかの実際上のケースにもできるかぎり言及しながら、この問題がもつ意義や課題を明らかにする。	同 上	同 上

＝経営システムⅡ（'05）＝（R）

－ 経営者機能 －

〔主任講師：吉森 賢（放送大学教授）〕

全体のねらい

今日の市場経済において企業経営者が果たす役割は極めて重要であることは論を待たない。この講義は経営者の機能を企業の継続性、適法性、効率性の確保と定義する。具体的には経営者の役割を企業文化、経営理念の維持・改変、企業倫理、企業統治、経営戦略の策定と実施の視点から考察する。講義はまず日米欧比較により大企業経営者の社会的威信がどのように異なるかを歴史的に概観し、それが各国の企業および産業そして経済発展にどのような影響を及ぼしたかを検討する。最後に経営者報酬、世界の模範的経営者から何を学ぶかを考える。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	経営者の社会的威信－日本、ドイツ、アメリカ	経営者は社会によりその正当性が認められて初めて十分その機能を発揮できる。しかし歴史的、宗教的その他様々な要因によりその社会的威信には国により大きな差が存在した。その背景を日本の儒教、仏教、武士道、そしてドイツとアメリカにおけるプロテスタンティズムの社会的教義により分析する。	吉森 賢 (放送大学教授)	吉森 賢 (放送大学教授)
2	経営者の社会的威信－フランス、イギリス	前回に続きフランスに関してはカトリシズムの教義の視点から、フランスとイギリスについては貴族的価値観の観点から両国における経営者の社会的威信との関係を明らかにする。それが両国の経済発展にいかなる影響を与えたか、また今日いかなる形で経営者行動を規定しているかを考察する。	同上	同上
3	経営者行動の特質	一国の経営者の意思決定の様式、リスクおよび革新への態度、誘因と報酬、企業との一体感、長期的ないし短期的視野、従業員への態度などもそれぞれの国の文化的要因により決定される。日米欧におけるその違いを国際比較調査の結果に基づいて明らかにし、それが経営成果に与える影響を考察する。	同上	同上
4	経営者と国家	経営者と政治・行政との関係も経営のあり方と成果に大きな影響を与え、企業統治と国家統治の接点に関する問題でもある。このような政官民の関係がいかなる歴史的背景の下に発生したのか、いかなる契機と相互利益を目的として維持されているのかを日米欧の実態比較を通じて理解する。	同上	同上
5	企業理念と企業文化	経営者が最初に取り組むべき問題は企業理念と企業文化である。これらは企業の個性を規定し、経営者機能の基本的内容を決定する。これらはいったん従業員により共有されると永続する傾向がある。環境変化に対応すればこれらは強力な競争力の源泉となり得る。その形成過程、従業員による共有過程を明らかにする。	同上	同上

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
6	企業倫理	第二の経営者機能は企業倫理である。その問題領域を定義し、その制度化と順守体制のあり方を倫理行動基準、組織、教育などの視点から明らかにする。次に社会的責任と倫理的投資の意義を考察し、これと経営成果との関係を究明する。さらに内部告発の問題を取り上げ、その是非、制度化について実例を通じて理解する。	吉森 賢	吉森 賢
7	企業戦略	第三の経営者機能は経済的妥当性のある戦略の策定と実施である。戦略の前提となる消費者行動の国際比較を行った後、戦略を定義し、その問題領域を事業分野、中核能力の規定、多角化、製品・サービス戦略、製品ポートフォリオ、製品ライフサイクル、成長戦略、合併・買収、統合戦略、競争戦略などを概観する。	同上	同上
8	経営者と株主	第四の経営者機能は企業統治である。所有と経営の分離を特質とする近代大企業における株主による経営監視の手段とその有効性を検討する。株主総会の機能、個人株主と機関投資家の経営監視機能を日米欧の実態について概観する。また経営者による対株主広報活動（IR）について考察する。	同上	同上
9	取締役会改革・日本	日本における取締役会改革の歴史を概観し、2003年の改正商法により企業は監査役を維持する従来型取締役会と、監査役を廃止し代わりに取締役会に三種の委員会を設置する改革型取締役会のいずれかを選択できる。これらの内容を考察し、選択制による改革の実施状況を検討し、今後の問題点を指摘する。	同上	同上
10	取締役会改革・アメリカ	アメリカにおいては2001年のエンロン他の大企業不祥事以降、大規模な取締役会改革が実施された。この不祥事が生じた原因と内部告発により表面化した過程を明らかにする。このような不祥事防止のため取られたサーベンズ・オクスレー法を中心とする様々な改善措置を検討する。	同上	同上
11	取締役会改革・イギリス、ドイツ、フランス	イギリスにおいては統合規範、ドイツにおいては行動規範、フランスにおいては新経済規制法の形で取締役会改革が実施された。改革に至る背景、その推進主体、改革の方式（自主規制または法規制）、改革の内容を比較検討する。また改革の実施状況と実効性を評価する。	同上	同上
12	同族大企業の企業統治	同族大企業における企業統治のありかたは公開大企業とどう異なるかを検討する。エージェンシー理論によれば、所有と経営が一致していれば高い経営成果が得られるという仮説が導かれるが、はたしてそうなのかを究明する。同族大企業における企業統治の特殊性を主としてドイツの実例により考察する。	同上	同上
13	外部監視と規制機関	外部監視は格付機関、証券アナリスト、マスコミなどの他に規制機関として証券取引委員会、証券取引所、公正取引委員会などがあるが、これらがどのように経営監視を行うか、その監視の有効性はどうかを日米欧について比較検討する。また法執行の実態には日本と他国に大きな違いがあるのでこの点も考察する。	同上	同上

回	テ ー マ	内 容	執 筆 担 当 講 師 名 (所 属 ・ 職 名)	放 送 担 当 講 師 名 (所 属 ・ 職 名)
14	経営者への誘因と報酬	大企業の経営者には高度な知識、経験、将来への洞察力、問題の分析力と決断力、リスクを取りつつ革新を行う企業家精神と体力が要求される。このような希少な人的資源への貢献をいかに経済的ないし非物質的方法で報いるかについて考察する。特に経営者報酬とその基礎をなす経営者評価について検討する	吉 森 賢	吉 森 賢
15	世界の模範的経営者に学ぶ	模範的経営者とは既述の経営者機能を履行し、それにより長期間にわたり高い業績を実現した経営者である。またそのような経営者はその経営能力の他に高い倫理観を有し、従業員により尊敬される経営者である。日本以外の米欧にこれらの模範的経営者を求め、日本の経営者と企業人の参考に供する。	同上	同上

＝ 経済政策 I (' 0 5) ＝ (TV)

－ 現代政策分析 －

〔 主任 講 師 ： 林 敏彦 (放送大学教授) 〕

全体のねらい

政府の経済政策は、民間経済活動が円滑に行われるための制度的および経済的基盤を整え、市場制度を補完し、必要に応じて自ら市場に参加して、効率的で、公正で、よりよい資源配分の実現を目指すことを目標とする。この講義では、現代の経済政策が果たすべき役割について、理論的、実証的に検討する。

回	テ ー マ	内 容	執 筆 担 当 講 師 名 (所属・職名)	放 送 担 当 講 師 名 (所属・職名)
1	経済政策はなぜ必要か	政府が行う政策のうち、ひとつひとつの経済生活に直接影響するものを経済政策と呼ぶ。日本のような市場経済において、経済政策はなぜ必要なのだろうか。シカゴ学派の考え方と制度学派の考え方を比較検討してみよう。	林 敏彦 (放送大学教授)	林 敏彦 (放送大学教授)
2	社会の厚生	政策効果は、社会全体の厚生を基準にして判断されなければならない。社会的厚生は、市民主権の原則のもとに、効率性と公正さを追求することによって高まる。経済政策決定、実行過程への参加のあり方も重要な政策評価の対象となりうる。	同 上	同 上
3	カルドア＝ヒックス基準	政策がひとつひとつの全員一致で支持される場合には問題ないが、一般にある政策がとられれば、それによって新しく利益を受ける人と利益を失う人が現れる。利害得失を超えた政策判断はどのような基準に基づいて行えばよいのだろうか。	同 上	同 上
4	市場の成功と失敗	市場メカニズムによって最適な資源配分が実現されるというのはどういうことだろうか。市場はどのような場合に成功し、失敗するのだろうか。どのような財でも市場取引に委ねることで社会的最適が実現されるのだろうか。	同 上	同 上
5	外部効果と政府の役割	企業や消費者の経済活動が、契約当事者以外の第3者に影響を及ぼすことを外部効果という。外部効果の例としてはどのようなものがあり、外部効果が存在すれば市場が失敗すると言われるのはなぜだろう。	同 上	同 上
6	公共財	社会の構成員が同じ量だけ消費するしかないサービスは、公共財と呼ばれる。市場は公共財の最適供給に失敗するというのはどういう意味なのか。公共財のただ乗り問題とは何か。公共財は政府が供給すべきなのだろうか。	同 上	同 上

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
7	不確実性と情報	金融活動に限らず経済活動のほとんどは不確実性にさらされている。リスクと不確実性には民間の保険だけで対応が可能だろうか。情報が偏っている場合、市場はうまく機能するだろうか。何らかの政府の介入は必要だろうか。	林 敏彦	林 敏彦
8	政府の失敗	外部効果、公共財、情報の偏在などがある時、市場は失敗すると言われる。では、それらを補正する政府は失敗しないのだろうか。投票のパラドックス、政府の活動に伴うエイジェンシー費用などについて見てみよう。	同 上	同 上
9	政策分析	政策の立案、策定、実行には膨大な情報と専門的知識が必要とされる。費用・便益分析、産業連関分析を紹介し、政策アイデアの市場のあり方、および民主主義と政策分析専門家との関係について考えてみよう。	同 上	同 上
10	マクロ財政政策	経済全体に占める政府の経済活動が大きくなった今日、政府は景気や雇用、物価や国際収支など、マクロ経済の運営に大きな役割を担うと考えられている。政府は財政政策によって、マクロ経済をどこまでコントロールできるのだろうか。	同 上	林 敏彦 ゲスト出演 吉川 洋 (東京大学教授)
11	金融政策	市場経済が円滑に機能し、貯蓄が有意義な投資に円滑に向けられるためには、金融システムおよび通貨供給が適切に運営されなければならない。現代の日本が直面する制度的、政策的課題は何だろうか。	同 上	林 敏彦 ゲスト出演 岩田 一政 (日本銀行副 総裁)
12	労働政策	日本の家計所得の8割を占めるのは勤労所得である。労働市場にはどのような変化が起こっているのだろうか。人々の働き方に変化が見られるのだろうか。日本の労働政策について考えてみる。	同 上	林 敏彦 ゲスト出演 大竹 文雄 (大阪大学教授)
13	通信政策	情報通信技術の社会的経済的インパクトは大きい。日本政府は、ネットワークインフラからデジタルコンテンツまでの情報通信産業にどのような規制政策や産業政策で臨んでいるのだろうか。	同 上	林 敏彦 ゲスト出演 中村 伊知哉 (スタンフォ ード日本セン ター)
14	地域経済政策	地方自治体も経済政策を担当している。その中から、国レベルとは異なる自治体の政策手段選択上の制約、地域間競争の激化、地域経済ビジョン政策、利用者による都市のガバナンスの問題などについて考えてみよう。	同 上	林 敏彦 ゲスト出演 石井 正弘 (岡山県知 事)

回	テ ー マ	内 容	執 筆 担 当 講 師 名 (所 属 ・ 職 名)	放 送 担 当 講 師 名 (所 属 ・ 職 名)
15	国際的課題	近年、マクロの政策協調、国際紛争と安全保障、地球温暖化・オゾン層破壊・種の多様性などのグローバルな環境問題等、国際的広がりをもつ政策課題の重要性が増している。世界政府なき国際公共政策は可能なのだろうか。	林 敏彦	林 敏彦 スタンフォード日本センターでの米国学生の授業風景。

＝ 経済政策Ⅱ（'05）＝（R）

〔主任講師：土居 丈朗（慶應義塾大学助教授）〕

全体のねらい

経済政策の中心である、財政政策と金融政策について、わが国の制度と理論を学ぶ。この講義で主立って取り上げる内容は、社会保障、公共投資、地方財政、租税、財政投融资、国債管理政策、金融政策についてである。これらの政策に関して、どのような仕組みの制度に基づいて運営されているか、そしてその政策効果を高めるには理論的にみてどのようにすればよいか、などについての理解を深める。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	財政制度（1）	わが国の財政制度を概観し、データを用いてその現状を解説する。日本のマクロ経済における財政の位置付け、その国際比較、国民を取り巻くわが国の財政制度、わが国における国家財政の仕組みなどについて扱う。	土居 丈朗 (慶應義塾大 学助教授)	土居 丈朗 (慶應義塾大 学助教授)
2	財政制度（2）	第1回に引き続き、わが国の財政制度を概観し、データを用いてその現状を解説する。国の予算・決算過程、近年における国家財政の動向などについて扱う。	同 上	同 上
3	租税制度	わが国の租税制度を概観し、データを用いてその現状を解説する。租税原則、国の税制、地方の税制、データで見た近年における税収の動向などについて扱う。	同 上	同 上
4	租税の経済理論	経済理論に基づいて、租税制度のあり方を議論する。最適課税理論、理論からみた所得税や消費税のあり方、資産課税のあり方、わが国における税制改革の行方などについて扱う。	同 上	同 上
5	社会保障（1）	わが国の年金制度を解説し、経済理論が示唆する今後のあり方について議論する。公的年金制度、企業年金などの公的年金を取り巻く諸制度、年金の財政方式、公的年金改革のあり方などについて扱う。	同 上	同 上
6	社会保障（2）	わが国における医療保険、介護保険の制度を解説し、経済理論が示唆する今後のあり方について議論する。医療保険制度、介護保険制度、これらを総合的に見た社会保険改革のあり方などについて扱う。	同 上	同 上
7	公共投資	わが国の公共投資について、制度と現状を解説する。これまでの公共投資の動向、公共投資の分野間配分・地域間配分、経済理論から見た公共投資のあり方などについて扱う。	同 上	同 上

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
8	地方財政(1)	わが国の地方財政制度を概観し、データを用いてその現状を解説する。国と地方の財政関係、地方税制、地方交付税制度、地方債制度などについて扱う。	土居 丈朗 (慶應義塾大 学助教授)	土居 丈朗 (慶應義塾大 学助教授)
9	地方財政(2)	第8回の内容を踏まえて、近年におけるわが国の地方分権改革について議論する。わが国の地方財政制度は、これまで中央集権的であるといわれてきた。近年になって、それを分権化する動きが進んでいる。地方分権改革の内容や、経済理論から示唆される今後の行方などについて扱う。	同 上	同 上
10	財政投融资と地方債	国の金融活動の1つである財政投融资について理解を深める。財政投融资は、郵便貯金や年金積立金として集められた資金などを用いて、特殊法人や地方自治体などに貸し出す制度である。その仕組み、近年における改革の動き、そして財政投融资と地方債の関係などについて扱う。	同 上	同 上
11	財政と金融	これまでの講義で扱った財政政策を踏まえ、財政政策と金融政策の関係を議論する。財政金融政策に関するマクロ経済理論、財政政策と金融政策の役割分担などについて扱う。	同 上	同 上
12	金融政策	わが国の金融政策を取り巻く制度を概観し、データを用いてその現状を解説する。金融指標の見方、金融政策の手段と目標、中央銀行の独立性、インフレ・ターゲティングなどについて扱う。	同 上	同 上
13	国債管理政策	わが国の国債管理政策を取り巻く制度を概観し、データを用いてその現状を解説する。公的債務の範囲、国債の累増、国債の満期構成、国債管理政策のあり方などについて扱う。	同 上	同 上
14	経済政策の政治経済学	経済政策の政治的意思決定に関する経済分析について解説する。公共選択論、民主主義の経済分析、官僚制の経済分析、政治経済学的に見た日本の経済政策などについて扱う。	同 上	同 上
15	経済政策のあり方	これまでの講義のまとめとして、わが国におけるこれまでの経済政策がどのように行われてきたかを展望し、今後の経済政策の課題について議論する。その中で、近年着手した改革として、財政投融资改革、特殊法人改革、公会計改革などについても触れる。	同 上	同 上

＝ 地方自治政策 I (' 0 5) ＝ (TV)

－ 自治体と政策 －

[主任講師： 天川 晃 (放送大学教授)]

[主任講師： 澤井 勝 (奈良女子大学教授)]

[主任講師： 北村 喜宣 (上智大学大学院教授)]

全体のねらい

分権改革後の自治体は、自治体運営（ガバナンス）の主体としての責任が大きくなった。都道府県、市町村を問わず、それぞれの自治体は、地方制度の枠組みの中で、自らが持つさまざまな資源を活用しつつ住民の求める政策を展開することになった。この科目では、政策主体としての自治体という観点から、制度、政策など自治体が当面する課題について検討する。

回	テ ー マ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	自治体と政策	講義全体のイントロダクション。自治体の活動はあるサイクルを持って展開される。4年毎に行われる選挙のサイクルと、1年毎に編成される予算のサイクルである。また、自治体はさまざまな種類の政策を展開するが、個別政策のサイクルがある。これらがどのように交錯するのかについて検討する。	天川 晃 (放送大学教授)	天川 晃 (放送大学教授)
2	自治体の制度	憲法と地方自治法にある現行の自治体の制度とその歴史的背景を説明する。とくに、中央政府と自治体の関係、自治体における長と議会の関係などを中心とし、自治体制度と民主主義の発展の関連について考える。	同 上	同 上
3	組織・人事管理	自治体組織の内部管理をめぐる問題を説明する。自治体は公平で効率的な行政を展開するために、通常の行政組織のほかに行政委員会や第三セクターなどさまざまな形態で行政を行っている。また有能な人材を確保・育成するための人事管理問題についても検討する。	同 上	同 上
4	予算編成	自治体の予算編成をめぐる問題を考える。歳入と歳出について基本的な理解を得ると共に、予算編成のスケジュールと決算過程、および最近の自治体における予算改革について理解する。	澤井 勝 (奈良女子大学教授)	澤井 勝 (奈良女子大学教授)
5	条例による政策の形成	自治体行政が活動する根拠としての条例・要綱・協定の法的性格を説明する。とくに、分権改革によって拡大した条例制定権の内容を解説し、積極的な条例制定を可能にするための行政組織のあり方や政策法務の発想についても触れる。	北村 喜宣 (上智大学大学院教授)	北村 喜宣 (上智大学大学院教授)

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
6	法律・条例の実施	違反是正に関する法律と条例の仕組みを解説し、そのシステムが実際にどのように用いられているのかを理論的・実証的に検討する。	北村 喜宣	北村 喜宣
7	土地利用と環境管理	自治体がこれまで実施してきた土地利用政策や環境政策を振り返り、国の政策を先導してきたことを説明する。そこで用いられる行政手法の特徴や法律との関係についても解説する。	同 上	同 上
8	高齢化社会と福祉	自治体の福祉行政をめぐる問題を考える。これからの高齢社会と少子社会における福祉政策の中心となる、地域福祉計画と介護保険事業との関係を考える。さらに、福祉におけるガバナンス改革とボランティアについて理解を深める。	澤井 勝	澤井 勝
9	情報公開と行政手続	自治体の情報公開と行政手続の仕組みについて説明し、透明性と公平性の確保のために、今後、どのような発展が望まれるかについて解説する。パブリック・コメント制度についても触れる。	北村 喜宣	北村 喜宣
10	住民自治と住民参加	自治体の住民自治を実現するための諸制度、議会、選挙、住民投票などの制度を説明するとともに、個別の政策過程における住民参加をめぐる問題も検討する。	天川 晃	天川 晃
11	自治体の対外関係	自治体の近隣自治体との関係、市長会や議長会など自治体間の水平的全国組織との関係、さらに国際化をめぐる問題など、自治体の「対外関係」をめぐる諸問題を検討する。	同 上	同 上
12	税財政構造	中央地方関係の中で地方税財政の構造を説明する。特に地方交付税について理解を深める。その上で、国庫支出金と地方債、地方税の関係を理解する。税のあり方についても検討する。	澤井 勝	澤井 勝

回	テ ー マ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
13	自治体の理念と 歴史（1）	分権改革の実績と課題について検討する。特に、三位一体改革など税財政改革の背景と意味を考える。法律の解釈権が地方自治体に付与され、国と地方自治体が対等な関係であることを支える財政改革について検討を加える。	澤井 勝	澤井 勝
14	自治体の理念と 歴史（2）	「地方自治は民主主義の学校」という理念が語られるが、実際の地方自治の歴史はどうであったのか。地方自治の歴史をたどりながら、理念と現実について検討する。	天川 晃	天川 晃
15	地方自治の国際 比較	日本の地方自治のあり方の特質を明らかにするには、諸外国の地方自治との比較検討が必要である。ヨーロッパにおける地方自治をめぐる動きやアジアでの動きと比較しながら、日本の自治体の特質を考える。	同 上	同 上

＝地方自治政策Ⅱ（‘04）＝（R）

－自治体・住民・地域社会－

〔主任講師： 倉沢 進（東京都立大学名誉教授）〕

〔主任講師： 小林 良二（東京都立大学教授）〕

全体のねらい

日本の地方自治は、明治以降の中央集権的政策のもとで、地方統治機構として機能してきたが、近年地方分権・住民自治など住民を主体とした自治的な地域社会運営をめざす、新しい動向が生まれてきた。従来の自治行政のからを破るさまざまな動きに注目しつつ、コミュニティ論に立脚した自治と地域社会の在り方を探る。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	地域生活とコミュニティ	地域生活－地域性と共同性、伝統的地域社会とその解体、社会目標としてのコミュニティ。コミュニティ行政の展開。	倉沢 進 (東京都立大学名誉教授)	倉沢 進 (東京都立大学名誉教授)
2	日本の地域社会と自治体	日本の伝統的地域社会、都市化－伝統的地域社会の解体、自治制度の展開と町内会。	同 上	同 上
3	コミュニティの社会理論	コミュニティ論の二つの流れ、コミュニティ理論の系譜、コミュニティの社会理論。	同 上	同 上
4	まちづくりと市民	まちづくりと市民、まちづくり参加の変遷、市民によるまちづくり、地方分権時代のまちづくり。	斉藤 進 (産能大学教授)	斉藤 進 (産能大学教授)
5	まちづくりの仕組み	まちづくりとマスタープラン、市町村の総合計画、都市計画とマスタープラン、マスタープランづくりの今後。	同 上	同 上
6	まちづくりの手法	参加型まちづくりの取組みと背景、まちづくりワークショップ、まちづくりワークショップの進め方、まちづくりワークショップの成果と展望。	同 上	同 上
7	まちづくりと自治体行政	地方分権と自治体まちづくり、成熟都市型社会とまちづくり課題、協働型まちづくりと市民。	同 上	同 上

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
8	地域、自治体と福祉	ケアの時代の福祉、介護サービスの担い手、ケアの時代における地域の役割。福祉国家の発展に伴って、自治体は住民に対してさまざまな社会サービスを、提供するようになった。自治体は各種の社会サービスをどのような仕組みによって提供してきたか、又今後それがどのように変化するかについて考える。	小林 良二 (東京都立大学教授)	小林 良二 (東京都立大学教授)
9	社会福祉サービスへの住民参加	社会福祉サービスの拡大とその背景、住民参加型の在宅福祉サービスの登場、参加型住民サービス活動と行政。	同 上	同 上
10	社会福祉計画とモニタリングへの参加	社会福祉における計画参加の基礎、住民の計画参加のための施策、市民によるモニタリング活動、計画参加と住民。	同 上	同 上
11	地域社会と住民の学習活動	地域社会と教育・学校、学習活動の場と社会教育施設、自治体の事業としての社会教育。	鈴木 眞理 (東京大学助教授)	鈴木 眞理 (東京大学助教授)
12	自治体の学習支援活動	地域社会における住民の学習機会・資源、学習活動としてのボランティア活動、自治体の自己変革と生涯学習支援。	同 上	同 上
13	社会的不平等と空間構造	社会的な不平等と空間構造、社会的な不平等の多元性、空間的不平等と階層的な不平等。	倉 沢 進	倉 沢 進
14	自治体行政と住民	住民参加、町内会・自治会、町内会の行政補完とボランティアソシエーション。	同 上	同 上
15	自治体と社会調査	自治体にとっての社会調査、標準化調査の企画を実施、調査主体の問題。	同 上	同 上

＝芸術文化政策 I (' 0 2) ＝ (TV)

－社会における人間と芸術－

〔主任講師： 徳丸 吉彦(放送大学教授)〕

〔主任講師： 利光 功(大分県立芸術文化短期大学長)〕

全体のねらい

芸術と人間の関係は社会によって大きく規定されている。芸術の保護・抑圧、芸術伝承の断絶と保証も、それぞれの社会がとっている政策によって大きく左右される。この講義は、社会における諸芸術と人間の関係を、過去・現在・将来にわたって、芸術文化政策の観点から多面的に考察するものである。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	序論、芸術文化とその政策	最初に芸術と芸術文化政策の意味について考察し、芸術が社会に対して働きかける作用を有することを明らかにする。この働きかけの反応の現れたものが芸術文化政策であり、その主要な内容を概観して、講義全体の導入を行う。	利光 功 (大分県立芸術文化短期大学長)	利光 功 (大分県立芸術文化短期大学長)
2	古代からの芸術理論に見られる芸術文化政策的要素	古代のギリシャ・中国以来の芸術の理論には、さまざまな形で文化政策への言及が見られる。とくに、アリストテレスの『政治学』・墨子の『非楽論』を出発点として、その後の理論から芸術文化政策に関する見方を抽出する。	徳丸 吉彦 (放送大学教授)	徳丸 吉彦 (放送大学教授)
3	近代社会における芸術文化政策	芸術と社会との関係で重要な意味をもつ制度を近代社会を中心に考える。パトロン制度、検閲、公演・出版の許可などの変遷を扱う。	同 上	同 上
4	20 世紀における全体主義的な芸術文化政策	旧ソヴィエト連邦やナチズム時代のドイツのような全体主義国家においては、国家の政治目的に合致する芸術文化を助成し、反対する芸術文化を抑制する政策がとられる。ここでは政治に翻弄され、ナチによって廃校に追いこまれたバウハウスの事例を取り上げる。	利光 功	利光 功
5	明治時代における美術政策	明治維新によって近代国家の仲間入りをした日本の場合には、明治政府の芸術文化政策が、今日まで影響を及ぼしている。ここでは、美術に焦点を合わせて、工芸振興や美術教育の施策を検討する。	同 上	同 上
6	明治時代における服飾文化政策	服飾も文化であり、芸術である。明治における頭髪や服飾に関する政策が現在まで日本に大きな影響を及ぼしていることは自明であろう。この問題を芸術文化政策という広い座標において考察する。	小池 三枝 (お茶の水女子大学名誉教授)	小池 三枝 (お茶の水女子大学名誉教授)
7	明治時代における音文化政策	音楽や音に関しても、明治は現在の日本に決定的な影響を与えている。西洋音楽の普及だけでなく、日本音楽もこの時代に大きな変質を経験している。こうしたことへの芸術文化政策の役割を再検討する。	徳丸 吉彦	徳丸 吉彦

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
8	芸術文化政策としての芸術教育	明治時代の芸術文化政策の影響がいまだに強く持続しているのが、芸術教育の領域である。音楽教育を例にして、現在の日本における音楽のあり方、音楽産業、楽器産業等と教育との関係を考察する。	徳丸 吉彦	徳丸 吉彦 田中 健次 (茨城大学教授)
9	国を越えた芸術文化政策、多文化社会における芸術文化政策	芸術文化政策は一つの国や文化の中だけで完結するとは限らない。日本がヴェトナムを援助して、ヴェトナム宮廷音楽を活性化させた作業は国を越えた政策の例である。また、ロサンゼルス为例に多文化社会における芸術文化政策を考える。	同 上	徳丸 吉彦
10	少数民族に関する芸術文化政策	現代の産業化と国際化の傾向の中で、犠牲になりやすいのは、少数民族の芸術である。このための芸術文化政策はどうあるべきかを、ヴェトナム少数民族の伝統芸能を記録するための日本・ヴェトナムのプロジェクトを例に考える。	同 上	徳丸 吉彦 山口 修 (大阪大学名誉教授)
11	地域社会の芸術文化政策	国のレベルではなく、さまざまな規模の地域社会における芸術文化政策を考える。日本では宮崎県全体と宮崎県椎葉村の事例を、また、外国ではスウェーデンにおける民俗音楽の復活プロジェクトを例にして、この問題を考える。	同 上	徳丸 吉彦
12	美術館の思想と実際	国立美術館と公立美術館の設立と運営は、それぞれ国と地方公共団体の芸術文化政策の一つの現れである。ここでは特にここ30年の間に数多く設立された公立美術館の抱える諸問題について検討する。	利光 功	利光 功
13	音楽博物館の思想と実際	音楽を聴き、楽器に触れることができ、また、音楽に関する調査ができる場所が音楽博物館である。日本（浜松）と外国（スウェーデンのストックホルム）の典型的な例を出発点にして、音楽情報と音楽博物館のあり方を考察する。	徳丸 吉彦	徳丸 吉彦
14	現在における芸術文化政策	日本の文化庁、国立劇場、県立劇場等における意思決定の方法と現実の運営を検討することにより、いままでの講義で提出した問題を整理する。	同 上	徳丸 吉彦 海老澤 敏 (新国立劇場副理事長)
15	新しい芸術文化政策を求めて	芸術文化政策の立案も含めて、政策の実行ないし実現には、芸術家・作品とそれを享受する人々をつなぐアート・マネージメントが重要な役割を果たす。アート・マネージメントの課題と、この分野の人材の育成について考える。	徳丸 吉彦 利光 功	徳丸 吉彦 利光 功

＝芸術文化政策Ⅱ（‘02）＝（R）

－政策形成とマネージメント－

〔主任講師： 根木 昭（東京芸術大学教授）〕

全体のねらい

「芸術文化政策」は、今日重要な政策領域となっている「文化政策」の一部を構成する。本講義では、芸術文化を含む文化政策全般について、学問としての体系化の視点、アートマネージメントとの異同、その変遷、背景、形成過程、構造と枠組み、文化施設の設置・運営、まちづくりとの関連、今後の方向を中心に考察する。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	「文化政策学」確立の視点と「芸術文化政策」	今日、文化政策は、重要な政策領域の1つとなっており、政策科学の立場から、その学問としての体系化が急がれている。本章では、「文化政策学」確立の視点について考察するとともに、併せて、文化政策全体の中での「芸術文化政策」の位置づけを眺める。	根木 昭 (東京芸術大学教授)	根木 昭 (東京芸術大学教授)
2	アートマネージメントと文化政策	本章では、企業によるメセナ活動の実態と、これを背景に文化経済学、アートマネージメント論が提唱され、文化経済学会（日本）が設立された経緯を跡づける。また、アートマネージメントと文化政策の異同、相互の関連、将来の統合の可能性について考察する。	同 上	同 上
3	文化政策の変遷 －「芸術文化」を中心として－	文化政策は、これまで多くの変遷を遂げてきた。本章では、「芸術文化政策」に焦点を当て、戦前を3期、戦後を4期に分け、その変遷の跡を概観する。特に、戦後の第4期（1990年以降）の動向を押さえることにより、芸術文化政策の今日的課題を把握する。	同 上	同 上
4	文化政策の背景	文化政策の背景を成すものとして、①文化の内容への不関与の原則、②「文教」政策への位置づけ、③日本文化の形成過程から導き出される方向性、④1980年代の時代状況、の4つが措定される。本章では、これらの意義について考察し、今後の立脚点とする。	同 上	同 上
5	文化政策の形成過程	本章では、政策形成の一般的なプロセスとともに、国（文化庁）の文化政策の形成過程を把握し、また、非常時（大震災）における文化政策の変質を兵庫県について眺める。さらに、文化庁の文化政策策定機関による諸提言の軌跡をたどり、政策対応の結果を分析する。	同 上	同 上
6	文化政策の構造 (1) －「文化の振興と普及」の枠組みと芸術文化支援行政－	本章では、国（文化庁）の文化政策の対象領域の中核を占める「文化の振興と普及」に関わる全体的な枠組みについて、「文化の頂点の伸長」と「文化の裾野の拡大」に分けて概観するとともに、特に、「芸術文化支援」に関わる施策（＝支援行政）について、詳細な実態把握と考察を行う。	同 上	同 上
7	文化政策の構造 (2) －関連領域の拡大と「自治体文化行政」－	本章では、近年顕著になっている他の政策領域（他省庁）の文化への接近と、文化庁の政策庁としての位置づけについて眺める。また、地方公共団体の文化政策について、いわゆる「自治体文化行政」の発展と停滞の跡を探り、今後の方向について考察する。	同 上	同 上

回	テ ー マ	内 容	執 筆 担 当 講 師 名 (所属・職名)	放 送 担 当 講 師 名 (所属・職名)
8	文化政策の構造 (3) —文化法制と文化 予算—	本章では、文化法制の全体像と地方公共団体の文化振興条例を概観するとともに、「文化権」と「文化基本(振興)法」に関わる課題について考察する。また、国(文化庁)と地方公共団体の文化予算について、これを構造的に把握するとともに、諸外国との比較を行う。	根 木 昭	根 木 昭
9	文化施設の設置・運営 —設置者行政—	文化施設の設置・運営(=設置者行政)は、文化政策の重要な柱の1つである。また、各種文化施設の中でも、劇場・ホールと博物館・美術館がその双璧を成している。本章では、国、地方公共団体を通ずる文化施設の全般的な概況と今後の在り方について把握する。	同 上	同 上
10	文化会館(1)	今日、公立の文化会館は、地域舞台芸術の創造の場として重要な地位を占めている。本章では、文化会館の意義、すなわちその性格と概念について把握するとともに、公民館との相違を眺めることにより、社会教育行政と文化行政との異同を概観する。	同 上	同 上
11	文化会館(2)	本章では、文化会館について、これまで提起されてきた問題点、特にソフト面の脆弱という指摘を踏まえ、貸館性から創造性への転換、地域舞台芸術創造の拠点としての役割を考察するとともに、文化会館をめぐる課題と経営的視点の必要性について考察する。	同 上	同 上
12	美術館(1)	美術館は、社会教育機関である博物館の一種であるが、文化政策の主要な対象となっている。本章では、社会教育施設・文化施設・研究施設としての博物館一般の性格を踏まえつつ、美術館の意義・機能について考察するとともに、美術館の概念と性格を把握する。	同 上	同 上
13	美術館(2)	本章では、社会教育政策・文化政策・学術政策の中における美術館の位置づけ、美術館政策と文化政策への収斂について明らかにするとともに、美術館一般に関わる政策と国立美術館(2001年4月から独立行政法人に移行した)を国が設置する意味について考察する。	同 上	同 上
14	まちづくりと文化 政策	本章では、文化施設と都市景観との関連(ハード面の意味)について考察するとともに、まちづくりにおける文化政策の位置づけを、地方公共団体の文化振興指針の中に探る。また、滋賀県長浜市の「黒壁ガラススクエア」を例に、まちづくりの在り方の1つを眺める。	同 上	同 上
15	文化政策の今後の 方向	これまでの総括として、文化政策の背景にある普遍化と個性化の方向を押さえ、特に芸術文化政策における新たな課題を確認するとともに、これらを踏まえて、文化政策の中核領域の一層の深化、関連領域への拡大と、「総合文化政策」確立の必要性を提示する。	同 上	同 上

＝福祉政策Ⅰ（'02）＝（R）

－福祉社会の政策課題－

〔主任講師： 松村 祥子（放送大学教授）〕

〔主任講師： 大森 彌（千葉大学教授）〕

全体のねらい

少子高齢化やサービス産業化の中で深刻化する人々の生活問題解決に有効な福祉政策をどのように築いていけばよいのだろうか。1990年代から進められている我が国の福祉改革では、社会福祉における「選別主義から普遍主義への転換」「福祉サービス供給主体の多様化」「地方分権化」そして「住民参加」などが推進されている。特に具体的な福祉政策を福祉計画で示し、目標値達成にむけての執行さらにそれを評価するといった展開が広がってきているが、立案や実施に必要な理論的、実践的知識や技術の不足から生じる問題も少なくない。福祉政策の新しい波の中での課題を多角的に検討することによって、福祉の供給者と利用者が連携して福祉社会を構築する道しるべとしたい。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	福祉政策の特質	福祉政策は人々のくらしに安心を保障する政策の束である。少子高齢化が進む中で、福祉政策の分野において、政府が、誰を対象に、どのような量と質の財とサービスを、誰の負担で、いかに供給するのかは、政府への信頼と正統性の基礎ともなる重要性をもっている。こうした観点に立ち、福祉政策の特質を捉える主要な視点を解説する。	大森 彌 (千葉大学教授)	大森 彌 (千葉大学教授)
2	福祉政策の新たな波(1) －進む社会保障構造改革－	1990年代からわが国で起こった福祉政策の変化を、「基礎構造改革」という観点から、主として制度改革に焦点を当て、その変化の経緯と内容を解説する。そこに、従来の福祉観、老人観、低所得者観の転換、措置制度から利用制度への転換、市町村中心主義への転換など、パラダイム転換ともいべき大きな変化を見出すことができる。	同 上	大森 彌
3	福祉政策の新たな波(2) －福祉分野の分権改革－	地域住民とその代表機関の自己決定権を拡充する分権改革によって、これまで集権主義の強かった社会福祉の分野に、どのような変化が生じているのか、今次の分権改革の特質に触れつつ、従来の国などの関与がどのように縮減され、緩和されたかを解説し、社会福祉事業の市場化に言及する。	同 上	大森 彌 松村 祥子
4	児童家庭福祉政策(1) －健やかな子どもの成長促進－	児童福祉法には、「国及び地方公共団体は、児童の保護者とともに、児童を心身ともに健やかに育成する責任を負う」(第二条)と明記されている。今、我が国で成長する子どもたちの抱えるさまざまな問題をみると、この条文が空しく思えるほどである。しかし、国や地方公共団体が無策であるわけではなく、多くの施策が実施されている。ではなぜ子どもの生活改善ができないのであろうか。この章では、少子化の進む我が国での児童福祉改革の方向と内容を検討したい。	松村 祥子 (放送大学教授)	松村 祥子
5	児童家庭福祉政策(2) －制度・実践・利用の乖離を克服するために－	児童家庭福祉政策と制度は政治と行政のイニシャティブによって作られるが、制度を運用していくためには、公私の組織とサービスの担い手が必要である。また、制度が公平に効果的に機能するためには、利用者の意識や態度も適切でなければならないだろう。政策(policy-政府の施策)が制度(institution-社会的な仕組み)になり、実践(practice-環境を変化させる活動)をへて生活改善の実を挙げる全過程(process)を検討することによってはじめて政策の有効性の検証ができる。ここでは、児童家庭福祉分野でのトピックを取り上げて、真に児童家庭を支援するために必要な方策を検討してみたい。	同 上	同 上

回	テーマ	内容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
6	高齢者福祉政策 (1) －自律と連帯の高 齢期生活保障の構 築－	「21世紀福祉ビジョン」で提案された総合的福祉ビジョンが最も具体的に展開されているのは、高齢者福祉政策の分野である。そこでは、新ゴールドプランと介護保険導入に見られるような新介護システムへの移行がはかられた。又、雇用や余暇政策からも自律と連帯の高齢期生活保障が目指されている。	松村 祥子	松村 祥子
7	高齢者福祉政策 (2) －高齢者福祉の変 化と高齢者生活－	国際的にみても、日本の歴史の中でも、平均的には決して低い生活水準にあるとはいえないのに、今日のわが国の老若男女の多くは高齢期への生活不安を強く感じている。こうした中で、高齢者福祉に携わる公私の機関の職員や研究者、教育者は漫然とした取り組みをするのではなく、長期的な目標意識と鋭い現実感覚を合わせた施策を推進しなければならないだろう。急速で高度な高齢化への日本の挑戦に世界の視線が集まっている。特に21世紀の国際社会の共通価値とされる「各世代の生活の質の推進」という文脈での高齢者福祉のあり方が追求されなければならないと思われる。	同上	同上
8	障害者福祉政策 －ノーマライゼー ションの実現－	障害者基本法(1993年)では、障害者福祉の基本理念として、すべての障害者の個人としての尊厳、人権保障、社会参加の重要性が唱えられている。「障害者プラン～ノーマライゼーション7ヶ年計画」等では地域における生活支援が展開されている。しかし、経済停滞下での障害者雇用の困難、保健と医療と福祉の統合化という名の下での保護の低下等、多様な政策課題が未解決である。さらに障害者とその家族の高齢化等への対応は緊急課題となっていること等を取り上げる。	同上	同上
9	生活保護政策 －セーフティネッ トとしての機能－	国民生活の最低限(ナショナルミニマム)を守る生活保護制度は他の諸制度を補足する安全網(セーフティネット)として重要な機能を果たしている。経済社会の変化を反映する保護率、保護水準、被保護世帯の類型等から現代の貧困の状況とそれへの対応策を示す。又、国の制度でありながら保護率の地域差が大きいこと、世帯単位の原則の中で個人単位の必要が高まっていること、資産調査のあり方が他の国と較べて厳しいこと、保護基準の設定が適切かどうかということ、そして、保護を受けられない多くの人がいること等、現行制度をめぐる論点から政策課題を明らかにしたい。	同上	同上
10	地域福祉政策 －住民と行政と民 間活動のパートナ ーシップ－	人々の生活の拠点である地域社会は、社会福祉の利用と供給の交差点でもある。経済社会構造の変化の中で、家庭と職場の通過点となった地域社会を再編して新しい生活安定のネットワークを作らねばならない。これまでバラバラにおこなわれてきた施設福祉と在宅福祉をつなぎ、公的福祉と民間福祉が協働する場としての地域のあり方と地域福祉政策の課題を検討したい。	同上	大森 彌
11	危機管理政策 －災害対応の福祉 政策－	天災や人災による危機的状況に際して、人命救助、救援物資の支給及び生活再建にむけての支援をするのは行政の大きな任務である。被害を最小にし、すみやかな生活再建を促進するためには、災害発生後の適切な対応だけでなく、通常体制の見直しも必要であろう。阪神・淡路大震災等の経験をふまえて国や地方自治体の危機管理体制がどの様に变化したのかを示す。また、今後に向けての課題を明らかにする。	秋山 智久 (大阪市立大 学教授)	秋山 智久 (大阪市立大 学教授)

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
12	福祉の法律と政治	社会福祉政策を実施していく際に根拠とされる福祉法律には社会福祉の組織に関する法、社会福祉サービスに関する法、財政に関する法、権利救済に関する法等がある。福祉改革の中で、どのような法制が作られているのか。その内容と意味について検討する。社会福祉政策を形成し、実施するプロセスでは政治が大きな影響力を持っている。行政等により立案された政策を論議決定するだけでなく、政党による政策立案も政治の中で行われている。福祉をめぐる政治の今日的状況と問題点を示す。	柄本 一三郎 (上智大学教授)	柄本 一三郎 (上智大学教授)
13	福祉サービスの供給体制	社会福祉の供給体制となる福祉行政と言え、中央政府をピラミッドの頂点とする行政組織と公費の配分というとらえ方がわが国では一般的であった。しかし民営化や地方分権化の中で、公私の多様な福祉資源をどう組織化していくのが、最大の課題となっている状況を示す。	同 上	同 上
14	福祉の資源 －財源と人材－	福祉政策に関する国、都道府県及び市町村の関係が変化の中で、それぞれの立場の責任と活動内容の再編が進んでいる。特に人口構造や経済環境の変化に対応するためにどのように社会福祉の財源や人材の質量を確保するかが大きな課題となっている。	松村 祥子	大森 彌 松村 祥子
15	福祉政策の目標と評価 －生活の豊かさ、地域の豊かさを目指して－	福祉政策の実施のためには、対象者のニーズの把握と十分な質量を備えたサービス供給システムの構築が不可欠である。ここでは、福祉政策の目標達成に向けて策定されている各分野の社会福祉計画と政策評価について検討する。さらに福祉の土壌を耕し豊かな生活と地域社会を築くための福祉の町づくりと福祉教育の方向も示したい。	大森 彌 松村 祥子	同 上

＝福祉政策Ⅱ（‘02）＝（R）

－ 障害者施策の展開 －

〔主任講師： 三ツ木 任一（放送大学名誉教授）〕

〔主任講師： 佐藤 久夫（日本社会事業大学教授）〕

〔主任講師： 大曾根 寛（放送大学教授）〕

全体のねらい

介護保険制度の実施、社会福祉基礎構造改革、成年後見制度の導入、地方分権の推進など、社会システムが大きく変化の中で、障害者施策もまた急激な変革を求められている。障害者施策の展開の過程、個々の施策課題における先進的な実践事例の検討を通して、今後の障害者施策の基本的な方向を探りたい。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	障害者施策の基本理念	人権の尊重、ノーマライゼーション、自立と社会参加の促進、当事者主体など、障害者施策の基本理念の本来の意味を、従来の考え方と対比して理解するとともに、私たち自身のパラダイム転換を図る。	三ツ木 任一 (放送大学名誉教授)	三ツ木 任一 (放送大学名誉教授)
2	障害者施策の法体系	わが国の障害者施策に関する法律は多岐にわたっている。それらを体系的に把握するとともに、近年の法改正の動向、主要な法律の内容、今後の課題などについて理解を深める。	大澤 隆 (岩手県立大学教授)	大澤 隆 (岩手県立大学教授)
3	障害者施策の行財政	障害者施策に関する行政機関、財政構造を、省庁統合、地方分権の推進の動向を踏まえて理解する。また、障害者施策における国、地方自治体の役割分担とそれを支える財政的基盤について検討する。	同上	同上
4	障害者施策の計画	国、地方自治体の障害者施策の計画について、その策定過程、主要な施策課題と実施結果などについて具体的な事例を通して理解し、今後の計画の策定、実施、評価のあり方を検討する。	三ツ木 任一	三ツ木 任一
5	障害の概念と障害者の実態	「WHO 国際障害分類」の改訂の動向、障害の新たな概念を理解するとともに、障害の認定に関するさまざまな課題、障害者施策の対象としての障害者の実態について検討する。	佐藤 久夫 (日本社会事業大学教授)	佐藤 久夫 (日本社会事業大学教授)
6	障害児教育	障害児教育の動向と現状を概観しながら、障害児教育のさまざまな課題とその改革の方策を、国際的な動向を踏まえながら検討する。	石渡 和実 (東洋英和女学院大学教授)	石渡 和実 (東洋英和女学院大学教授)
7	就 労 支 援	障害者雇用、福祉的就労の動向と現状を概観しながら、福祉的就労から雇用への統合をめざす先進的な事例を通して、新たな就労支援のあり方を検討する。	大曾根 寛 (放送大学教授)	大曾根 寛 (放送大学教授)

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
8	地域生活支援	障害をもつ人たちの地域生活の動向と現状を概観しながら、地域生活に不可欠な住まい、所得、介助・見守り、地域活動、家族支援などの支援サービスのあり方を検討する。	中野 敏子 (明治学院大 学教授)	中野 敏子 (明治学院大 学教授)
9	障害者施設	障害者施策の中核として進展してきた障害者施設の動向と現状を概観しながら、抜本的な変革を要請されている入所施設、地域での新たな居住の場の整備、自立をめざすリハビリテーションサービスのあり方を検討する。	同 上	同 上
10	当事者活動	障害者施策を推進させてきた障害者運動の動向と現状を概観しながら、施策決定過程への参加・参画、当事者主体のサービス提供、行政、専門職との連携のあり方を検討する。	三ツ木 任一	三ツ木 任一
11	権利擁護	権利擁護を推進させてきた当事者、関係者の活動の動向、権利擁護の現状を理解するとともに、障害をもつ人たちの人権保障システムのあり方を検討する。	石渡 和実	石渡 和実
12	まちづくり	福祉のまちづくりの動向と現状を概観しながら、各地の先進的な実例を通して、まちづくり、バリアフリーの本来のあり方を検討する。	大曾根 寛	大曾根 寛
13	マンパワー	障害者施策に関わる多様な専門職の動向と現状を概観しながら理解するとともに、専門職、当事者、ボランティアとの効果的な連携のあり方を検討する。	同 上	同 上
14	国際交流	国連を中心とした国際交流の動向と現状を理解するとともに、国際的にみた障害者施策の重要課題とわが国の果たすべき役割を検討する。	佐藤 久夫	佐藤 久夫
15	障害者施策の展望	急激に変化する社会的状況において、障害者施策はどうあったらよいのか。これまでの学習を総括して、今後の障害者施策の基本的な方向を探る。	大曾根 寛	大曾根 寛

＝法システム I (' 0 2) ＝ (TV)

－ 比較法システム論 －

〔主任講師： 六本 佳平（放送大学特任教授）〕

全体のねらい

伝統文化との相克のなかで独自の近代西洋型法システムを確立しつつある日本との比較において、近代西洋型を共有しつつも興味深い差異を示す英・米・独・仏・伊の特徴を現代の環境下で探る。また中・韓・ベトナム・タイ・マレーシアについて、近代化の政治的経緯、伝統文化、国際環境等を背景に、アジアにおける近代型法システムの形成過程を分析する。特に、裁判制度、法律家、国民の法意識の流動する現状を映像で活写する。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	法システムを比較する	序論として、法システム概念、そのあり方が政治・経済・社会・文化に対して及ぼす機能的意義と逆にそれらから受ける影響、および大きく近代化と呼ばれる社会変化における近代型法の意義などについて概説し、日本を中心として一方で西洋諸国、他方でアジア諸国を見る比較分析の視座を設定する。	六本 佳平 (放送大学特任教授)	六本 佳平 (放送大学特任教授)
2	日本の法システム (1)	諸外国の法システムとの比較の基準となる日本の法システムについて概説し、その中心的構成要素である裁判制度および法律家の制度、およびその実際の作用や法文化との関係について説明する。日本法の今日までの発展過程のこの観点からの特色を概説し、諸外国との比較分析の意義について述べる。	同 上	同 上
3	イギリスの法システム	(以下の 5 章では、西洋諸国の法システムの歴史的・文化的特色・現代の諸問題を、日本との比較を念頭におき、裁判制度・法律家・法役務のあり方を中心に、各国の特徴的な面に焦点を合わせて描き出す。) イギリス：コモン・ロー、法律家と自治の伝統、法曹一元制、バリスタ・ソリシタの一元化、裁判官の地位、国民の法利用とソリシタ制の特色、法律助言・扶助等	同 上	同 上
4	アメリカ合衆国の法システム	(同上) アメリカ：連邦制、違憲審査制、陪審制、ロースクールの役割、弁護士の職域・業務形態の多様性、弁護士費用制等。	同 上	同 上
5	ドイツの法システム	(同上) ドイツ：大陸型の法、国家試験と法曹養成制度、大陸型裁判官の地位、参審制、弁護士・企業弁護士・公証人、法定弁護士報酬制度、弁護士事務補助員制度等。	同 上	同 上
6	フランスの法システム	(同上) フランス：法的人材養成制度、大学法学部の役割、陪審制、裁判官の特色、女性裁判官の進出、諸種の弁護士の統合、社会変化への対応、ヨーロッパ統合と法律家等。	同 上	同 上
7	イタリアの法システム	(同上) イタリア：大学法学教育の伝統、法曹養成制度とその改革、裁判と政治、弁護士過剰問題、国民の法・裁判観等	六本 佳平 山口 浩一郎 (放送大学教授)	六本 佳平 山口 浩一郎 (放送大学教授)

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
8	欧米の法システム —討論1—	以上の諸国の法システムの観察を、欧米の西洋近代型法システムの中の個性の違いや、それらとの比較の観点から日本の特色を再度振り返る観点から、専門家ゲストを交えて討論形式で総括する。	六本 佳平	六本 佳平
9	韓国の法システム	(以下の6章では、各国の近代化の政治過程の特色、西洋法制度の影響ないし導入、伝統的秩序の特色、第二次大戦後の政治変動との関係等を背景とし、近代法システムの形成における独立の司法部、法律家の形成、伝統的国民意識や現代の国際化の影響を含めて、日本との比較の枠組みを論ずる。) 韓国：大統領制の意義、儒教文化の影響、日本の法制度の影響と相違点、司法制度改革、国際化の影響等	同 上	同 上
10	中国の法システム	(同上) 中国：法システムの制度的枠組み、社会主義的市場経済の発展における法の役割、法律家の創出、紛争処理過程の特色、国際取引における諸問題等。	同 上	同 上
11	タイ国の法システム	(同上) タイ：君主制民主主義の法システムの概観、大陸法系の法システムの下でのイギリス法制度の影響、法律家の制度、近年の司法制度の改革、伝統的紛争処理過程と民衆の法意識、経済の国際化の影響等	同 上	同 上
12	マレーシアおよび ベトナムの法システム	(同上) ベトナム：現代ベトナム法システムの概観、伝統文化の影響、日本による法整備援助、法律家の創出、経済発展における法システムの役割等。 マレーシア：イギリス法制度の影響、法学教育・法曹養成制度、民衆の法・裁判意識、国内サブカルチャの問題、経済の国際化の影響等	同 上	同 上
13	アジア諸国の法システム —討論2—	(同上) 以上のアジア諸国の現代の法システムの観察を総括し、アジアにおける近代法システムの形成過程の特色や課題、また日本の法システムとの関係や比較について、専門家ゲストを交えて討論形式で論じる。	同 上	同 上
14	日本の法システム (2)	日本の法システムは、急激な社会変動の下で、司法制度改革を中心として近年大きく変化しつつある。この章では、法務の形態に焦点を合わせて、新たな法と社会のあり方への模索の過程と課題を探る。	同 上	同 上
15	総括と展望	以上の全体を総括し、近代西洋型法システムとそのアジア地域での形成のさまざまなあり方、日本の法システムとの相互作用関係、経済発展や政治的民主主義・自由主義との機能的関係、将来の発展方向等について、専門家ゲストを交えて討論形式で論ずる。	同 上	同 上

＝法システムⅡ（'02）＝（R）

－市民運動と法－

〔主任講師： 山口 浩一郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

近年、政府や企業とならんで、社会のいろんな面で重要な役割をはたすようになってきたものに市民団体の活動がある。このような活動は非営利組織（Nonprofit Organization. NPO）といわれている。この講義では、このような市民活動の諸相をとりあげ、多面的に考察する。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	市民活動の概観	わが国では阪神大震災の際に注目されたが、市民活動（NPO）はいろんな形で存在している。第1回は、講義の導入として、市民活動の特徴、現状、他の組織（政府、企業）との関係などを概観する。	山口 浩一郎 (放送大学教授)	山口 浩一郎 (放送大学教授)
2	市民活動団体と法	1998年、わが国では、市民活動団体の法人化をみとめる特定非営利活動促進法（NPO法）が制定された。これにより、市民活動の組織化が以前より容易になった。第2回は、この法律の立法経緯と団体の法人化、管理運営等法律の内容を説明する。	同 上	同 上
3	市民活動団体のマネジメント	市民活動をおこなう団体も、団体である以上、組織としての管理運営が必要である。事業遂行、事業評価、成員管理、資金調達などの問題がある。第3回はこれらの点について考えてみる。	同 上	同 上
4	フィランソロピーとボランティア	市民活動の発展には、それを支える助成・支援団体とボランティアが必要である。企業や労働組合がおこなっている社会貢献活動も無視できない。第4回は、市民活動を支えたり、併行しておこなわれる活動を取りあげる。	同 上	同 上
5	環境の保全と保護	市民活動の1つの分野は環境保全とか自然保護である。ナショナル・トラストがよく知られているが、他にもリサイクル運動とか街づくり・村づくりなどがある。第5回はこれらの活動についてみる。	同 上	同 上
6	災害の予防と救援	わが国で市民活動が阪神大震災のときに注目されたように、災害時の救援・復興運動は市民活動の重要な分野である。外国では民間防衛という組織があり、災害救援とか地域の安全活動がおこなわれている。第6回はこれらの活動について考える。	同 上	同 上
7	教育と文化	現代社会では、教育の中心組織は公教育としての学校であるが、最近はフリースクールの教育、シンクタンクによる研究が登場している。文化や芸術の面でも、保存や創造等いろんな活動がみられる。第7回はこれらの活動について考える。	同 上	同 上

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
8	社会福祉	政府のおこなう医療・福祉とならんで、これらの関連サービス分野で市民活動の存在は見落とせない。障害者の支援もそうである。社会福祉協議会などの活動も含め、第8回はこれらの点について考える。	山口 浩一郎	山口 浩一郎
9	消費者問題	消費者保護の市民活動は古くから存在した。最近は、その活動も欠陥商品から悪徳商法などに拡大されてきている。第9回は、被害者である消費者の救済を中心に、どのような活動がなされているかを考える。	同上	同上
10	人権と平等	21世紀の社会では、人権や平等が一層推進されるであろう。人権擁護や差別の撤廃も市民団体の活動分野である。市民オムブズパーソンなどを含め、第10回はこれらの活動について考える。	同上	同上
11	国際活動	市民活動は国内だけでなく、国境なき医師団の活動のように国際レベルでもおこなわれている。第11回は、技術援助、環境保護、国際福祉、文化交流などから適切な事例をとりあげ、国際活動を概観する。	同上	同上
12	食品の安全	食品の安全は21世紀の大きな課題である。遺伝子組みかえ食品や収穫後使用農薬など人体に深刻な影響を与える、第12回は、実際にこの分野での活動にたずさわってきた方から話をうかがい、その経験を学ぶ。	神山 美智子 (弁護士)	神山 美智子 (弁護士)
13	市民相談	現代社会では、社会生活をしていくうえでいろんな知識が必要になる。税金、福祉、訴訟等问题をかかえて困っている人は多い。このニーズに答えるのが市民相談である。第13回は、この分野に詳しい方から話をうかがう。	六本 佳平 (放送大学特 任教授)	六本 佳平 (放送大学特 任教授)
14	市民活動の展望	これまでの講義で、市民活動が現代社会で重要な存在に成長してきたことがわかった。そこで、第14回は外国の状況を考察して、今後のわが国の市民活動の将来を展望する。	山口 浩一郎	山口 浩一郎
15	市民活動の課題	市民活動が今後十分発展していくには、どのような課題が解決されなければならないか。第15回は、講義のしめくりとして、この問題を法制、人的資源、情報、財政などの点から考えてみる。	同上	同上

＝法システムⅢ（'02）＝（R）

－ 情 報 法 －

〔主任講師： 宇賀 克也（東京大学大学院教授）〕

〔主任講師： 長谷部 恭男（東京大学大学院教授）〕

全体のねらい

情報に関する法律問題について、憲法、行政法、民法、知的財産法、刑法の観点から多角的に分析するとともに、情報倫理の問題、図書館の機能についても解説する。情報のデジタル化、ネットワーク化に伴う問題に比重を置くが、基礎的な法原則についても十分な理解が得られるように配慮する。

回	テ ー マ	内 容	執 筆 担 当 講 師 名 (所属・職名)	放 送 担 当 講 師 名 (所属・職名)
1	情 報 法 の 概 要	情報法の講義においては、憲法、行政法、民法、知的財産法、刑法という法律学の視点で情報に関する諸問題を取り扱うとともに、情報倫理の問題や図書館の機能についても解説する。初回は、その全体の概要を説明する。	宇賀 克也 (東京大学大学院教授) 長谷部 恭男 (東京大学大学院教授) 他分担協力者	全 員
2	憲 法 上 諸 原 則	表現の自由、プライバシー、知る権利、財産権など、情報法に関わる憲法原理について概略を説明し、あわせて異なる憲法原理が対立する可能性について触れる。	長谷部 恭男	長谷部 恭男 (東京大学大学院教授)
3	情 報 倫 理	インターネットなどのコンピュータネットワーク社会の秩序を保つには、従来の法律による規制だけでなく、情報倫理と呼ばれる規範が必要となっている。この情報倫理について、具体的な問題を通して、さまざまな側面から考えていく。	山口 和紀 (東京大学教授)	山口 和紀 (東京大学教授)
4	放 送 制 度	放送の規律根拠、番組編集準則、集中排除措置、NHKと民間放送の二本立て体制など、放送制度の基本原則について説明し、多メディア化・多チャンネル化に伴うこれらの原則の変容について触れる。	長谷部 恭男	長谷部 恭男
5	通 信 制 度	電気通信事業は、20世紀最後の30年間に、国家による独占（あるいは国家によって保護された独占）事業から、その民営化および競争の導入へと大きな変革を遂げた。この章では、通信事業に関わる法制度を概観した後、通信事業の特質を検討し、さらに通信の秘密について説明する。	同 上	同 上
6	情 報 公 開	政府情報の原則公開の理念に立脚して、国民・住民等に情報開示請求権を付与する情報公開法・情報公開条例の基本的構造がどうなっているのか、電磁的記録の情報公開についてはどのような問題があるのかを解説する。	宇賀 克也	宇賀 克也 (東京大学大学院教授)
7	個 人 情 報 保 護	個人情報保護の法制度が備えるべき基本的要素は何かをOECD8原則、EU指令等を参照しつつ検討し、わが国の個人情報保護に関する法制度の特徴を説明する。あわせて、行政情報化に伴う個人情報保護の課題につき述べる。	同 上	同 上

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
8	行政情報化	行政情報化推進基本計画に基づく国の行政情報化の推進状況と今後の課題、とりわけ、申請・届出という行政手続のオンライン化に関する法律問題を検討する。	宇賀 克也	宇賀 克也
9	データベースのサービスとコンテンツ	文献や図書については多くのデータベースサービスが、ネットワークを介して利用者に提供される。このようなサービスの基本概念と仕組みについて説明する。 (1)データの分類 (1.1)1次情報と2次情報 (1.2)ハイパーテキスト (1.3)テキストとマルチメディア (2)データベース・コンテンツの作成法 (3)情報検索システムの仕組み (4)統合メディア環境を目指して	中川 裕志 (東京大学大学院教授)	中川 裕志 (東京大学大学院教授)
10	電子商取引 (その1)	取引に関する情報がデジタル化・ネットワーク化されることで、紙を前提として行われてきた取引に大きな変化が生ずる。これが電子商取引である。では、いったいどのような電子商取引が発展しようとしているのだろうか。また、そこに含まれる法的問題はどのようなものだろうか。これらについて、国際的な視点を含めて考えたい。	内田 貴 (東京大学大学院教授)	内田 貴 (東京大学大学院教授)
11	電子商取引 (その2)	インターネットを通じた電子商取引においては、相手が誰であるか、また送られてきた情報が改ざんされていないかを確かめることが難しい。このセキュリティ上の問題を解決するために考案された電子署名と、それをめぐる法制度を中心に、電子商取引についての法律問題をより掘り下げて検討する。	同 上	同 上
12	知的財産法 (その1)	特許法、著作権法、不正競争防止法などの知的財産法は、情報の財産的価値を保護するための法として捉えることができる。この観点から、知的財産法が、どのような目的で、いかに設計されているかということ概観する。	井上由里子 (神戸大学大学院助教授)	井上由里子 (神戸大学大学院助教授)
13	知的財産法 (その2)	デジタル化、ネットワーク化の進展に伴って、知的財産法に関する新たな問題が次々に生じている。個々の論点につき、国際的動向も踏まえて検討する。	同 上	同 上
14	情報の刑法的保護	情報を刑法でどのように保護するかについては、国家機密、財産的情報、個人情報など、その性質に応じた議論が必要である。現行法における情報の刑法的保護を概観した後、将来のあるべき姿について検討することにした。	佐伯 仁志 (東京大学大学院教授)	佐伯 仁志 (東京大学大学院教授)
15	インターネットと刑法	インターネット上の様々な不正行為に対して、既存の刑罰法規をどこまで適用することができるのか、適用できない場合にどのような刑罰法規が新たに設けられたのか、今後設けられるべきなのか、といった点を検討することにした。	同 上	同 上

＝技術社会関係論（‘04）＝（R）

〔主任講師：森谷正規（放送大学教授）〕

全体のねらい

日本は技術を大きく進ませ産業を発展させて、とても豊になったようであるが、環境問題、廃棄物処理、交通渋滞・事故、防災の不備、医療・福祉・教育の後れなどの社会問題が山積している。それは「社会」に向けた技術が進まないからであり、なぜ進まないのか、どうすれば進めることができるのか、技術と社会の関係を深く考えて、よりよい技術のありかたを考える。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	I 技術社会関係のあり方 技術進展の変革	技術は「産業」「家庭」「社会」に向けられるが、「社会」に向ける技術が後れている。したがってさまざまな社会問題が激化しているが、なぜこうした技術が後れているのか、これまでの技術進展の全体を見通して、問題点を挙げ、変革の必要性を指摘する。	森谷 正規 (放送大学教授)	森谷 正規 (放送大学教授)
2	技術社会関係の基礎	技術は一般に市場をもとにした経済原理によって進展していくが、「社会技術」は経済原理が効きにくいものが多い。その「社会技術」をどのようにすれば進ませることができるのか、技術と社会の関係の基礎をしっかりと把握しておく。	同 上	同 上
3	技術に果たす政治の役割	「社会」において強いニーズがある技術がいつこうに進展しない場合、政治がそのニーズを正しく把握して、技術が進むような何らかの「仕組み」を作り出す必要がある。現代は技術に果たす政治の役割が大きくなっているのであり、それについて深く考える	同 上	同 上
4	「社会技術」を進める制度	「社会技術」を進めるために政治が作る「仕組み」の主なものは制度である。それには、各種の規制による採用の義務づけ、経済的な不利を補う補助金、税の優遇措置などがある。その財源として環境税などが必要になる。	同 上	同 上
5	「社会技術」を進める組織	「社会技術」を進める組織は、実施主体としては企業が主であるが、その企業をより積極的に組み込むためにPFI（プライベート・ファイナンス・イニシアティブ）を活用する。また、企業と生活者の間で調整をするNPO、NGOも大きな役割を果たすことが期待される。	同 上	同 上
6	II 各分野毎の課題と対応 エネルギー・環境	環境破壊が地球規模に広がって深刻になっているが、その主たる原因はエネルギー（化石燃料）の大量消費である。これからエネルギーの使用をいかに抑え、新しいエネルギー供給によって環境破壊を防ぐかが大きな課題である。	同 上	同 上
7	廃棄物処理	廃棄物は、都市ゴミ、家電・自動車など大型ゴミ、各種の産業廃棄物など非常に多様なものがあり、それぞれに対応しなければならない。いかに廃棄の量を減らすか、どのように処理しサイクルするのか、それをいかに進めるのかの方策を示す。	同 上	同 上

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
8	都市内交通	都市では、鉄道ははなはだしく混雑しているが、混雑緩和にいっこうに進まず、道路交通は、渋滞、事故がいつそう深刻になっている。なぜ抜本的な対策が立てられないのか、どのようにすれば改善に向かうのか、その方向を明らかにする。	森谷 正規	森谷 正規
9	都市問題	日本の都市は、景観、アメニティが欠如しており、ヒートアイランド現象が問題化している。また、地震への防災が不備である。これらの重大な都市問題がなぜ解決に向かわないのか、いかに対応できるのかを考える。	同 上	同 上
10	医療・福祉・教育	医療・社会・福祉にも問題が多々あるが、その解決には、主としてIT（情報技術）が利用できるはずである。ITが急速に進む時代であるにもかかわらず、なぜ、これらの分野では利用が進まないのか、いかにして進めていくかを考える。	同 上	同 上
11	課題と対応のまとめ	五つの分野の課題と対応を示してきたが、それに関して挙げた多くの技術について、いかに進めるべきかの視点からいくつかのタイプに分けてまとめる。政府、自治体が進めるべきもの、事業者が力を注ぐべきもの、生活者の意識にかかわるものなどがある。	同 上	同 上
12	Ⅲ良好な技術社会 関係を目指して 企業が果たす役割	「社会技術」を進めていくには、開発者として、またサービス提供者としての企業が果たす役割が大きく、各企業に自主的な努力が求められる。その具体的な行動として現れているグリーン調達、環境会計、ゼロエミッションなどについて、その状況を明らかにする。	同 上	同 上
13	市民が持つべき意識	さまざまな社会問題に対して、市民は被害者であるばかりではなく、問題を生じる当事者の一人である場合も多い。そうした社会問題の中での市民の行動をとらえて、問題解決のためには各人がいかなる振る舞いをすべきか、その意識のあり方について考える。	同 上	同 上
14	国際社会に向けて	急速に発展しているアジア諸国において、社会問題はこれから激化していく。温室効果ガスの削減、廃棄物リサイクル、交通渋滞・事故の緩和などの諸問題について、日本が寄与できるものは大きい。海外に向ける日本の技術の有力な発展方向である。	同 上	同 上
15	望ましい技術の進展	21世紀において技術が進んでいく方向を挙げて、その中で「社会技術」の位置付けを明確にして、それが最も重要な将来技術であることを明らかにする。その上で、全体として望ましい技術進展のあり方を示す。	同 上	同 上

＝環境マネジメント（'02）＝（TV）

－環境問題と企業・政府・消費者の役割－

〔主任講師： 山口 光恒（慶應義塾大学教授）〕

全体のねらい

環境問題の対象が、従来の公害問題から、地球温暖化・オゾン層破壊などの地球規模の環境問題に拡大している。これに伴い企業、消費者、政府などの役割に大きな変化がみられる。本講座ではこれら当事者の新たな役割を探ると共に、地球温暖化、廃棄物問題、環境保護と自由貿易の両立については特に章を設けて検討する。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	地球環境問題とは	はじめに、公害問題との対比で地球環境問題の特徴を述べる中で、持続可能な発展 (sustainable development) につき説明する。次いで地球環境問題の原因と本質を探り、政府、企業、消費者等の役割に簡単に触れる	山口 光恒 (慶應義塾大学教授)	山口 光恒 (慶應義塾大学教授)
2	地球環境問題と企業	企業が変わらねば環境問題は解決しない。企業を動かす主体である政府、消費者・NGO、企業、自治体、金融機関、投資家等と企業の間接関係を考える。次に、企業を取り巻く世界の情勢及び日本企業の対応を概観し、企業経営と環境問題の関わりに触れる。	同 上	同 上
3	ISO 環境管理システム	国際標準化機構 (ISO) での環境管理標準化の経緯を振り返り、このうち特に第三者認証の対象でもある ISO14001 環境管理システム制定を巡る国際会議での日米欧の立場を解説する。その上で、14001 のポイントと日本企業の対応を海外の事例も含めて紹介し、認証取得の意義について考察する。	同 上	同 上
4	製品面での環境配慮 (LCA)	製品面での環境配慮の中核となるのは、製品の製造・使用・廃棄のライフサイクル全体を通じた環境への影響評価 (LCA) である。ISO の LCA 規格の内容を説明し、オランダで研究が進められているエコ・インディケータを紹介し、その後日本の状況を概観する。それと並んで LCA 手法による製品比較広告の困難性も検証する。	同 上	同 上
5	環境問題への経済学による診断と処方箋	環境政策の目標は、環境問題をどう診断するかに依存する。経済学による環境問題の診断とそこから出てくる処方箋について論じる。経済学による診断とは「外部負経済」という捉え方であり、そこから出てくる環境政策の目標は効率性の追求となる。また、代表的な処方箋は課税による外部負経済の内部化である。	岡 敏弘 (福井県立大学教授)	岡 敏弘 (福井県立大学教授)
6	環境政策の諸手法	外部負経済の内部化という観点から、環境政策の諸手法を体系化する。諸手法は、課税、政府規制、賠償と責任にくくられる。ここでは特に、政府規制と賠償・責任に焦点を当て、それらが外部負経済たる環境汚染を制御するメカニズムを解明する。	同 上	同 上
7	いわゆる経済的手法	環境政策の手段のうち、近年注目を集めている「経済的手法」の理論上の意義と現実とについて述べる。経済的手法とは課税と排出権取引である。課税は5でも述べたが、近年注目されている形態は「ボーモル＝オーツ税」と言われているものである。補助金政策についても論じる。	同 上	同 上

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
8	政府規制と費用便益分析、経済と倫理	合理的な政府規制のための手法としての費用便益分析の理論と限界について論じる。その限界から出てくる費用効果分析の意義についても述べる。また、経済的効率性と、衡平や正義の概念との関係を論じ、その中に、環境政策をめぐる諸論点を位置づける。	岡 敏 弘	岡 敏 弘
9	消費者、NGO の役割	消費者は企業行動を変える有力なアクターである。欧米を中心にグリーンコンシューマーの動きを探る。消費者は住民でもある。日本の廃棄物処分場建設にみるごとく環境保護面での住民の役割も大きい。NGO（非政府組織）は政策提言能力を持ち、実際の環境政策に影響を与えている。日米欧の NGO の実態に迫る。	山口 光恒	山口 光恒
10	地球温暖化 (IPCC 第3次報告)	1990年のIPCC（気候変動に関する政府間組織）第1次報告は気候変動枠組み条約締結に、95年の第2次報告は京都議定書採択に大きな役割を果たした。講義では2001年の第3次報告を中心に、温室効果ガス排出見込みとその影響、それに対する適応策と防止軽減策等につき解説する。	同 上	同 上
11	地球温暖化 (気候変動枠組み条約と京都議定書)	1994年発効の気候変動枠組み条約の背景と内容、基本理念を解説し、問題点を探る。次いで1997年に採択され、先進諸国に初めて数量目標を課した京都議定書の内容と、ここで新たに導入された排出権取引等の「京都メカニズム」等について検討し、京都議定書全体の評価を行う。	同 上	同 上
12	地球温暖化 (議定書の論点と国内対策)	EU、英・独・仏・伊各国及び日本の国内政策の比較検討を行う。この中でドイツと日本の産業界による自主協定の比較も行う。日本については経済産学省や環境省の委員会による目標達成シナリオについて検討を加える。次いでアメリカの京都議定書離脱について論じ、科学と民主主義の矛盾をつく。	同 上	同 上
13	廃棄物問題 (拡大生産者責任 その1)	廃棄物政策の主流になりつつある拡大生産者責任（EPR）の内容を説明し、2001年発刊のOECDガイダンスマニュアルの内容と問題点を詳細に論じる。この中で日本において誤解が多い処理費用「負担」問題と処理費用先払い・後払い問題の関係についても論じる。	同 上	同 上
14	廃棄物問題 (拡大生産者責任 その2)	拡大生産者責任の日本への適用につき容器包装リサイクル法、家電リサイクル法、資源有効利用促進法、次いで自動車リサイクルを例に詳細に論じる。この中で容器包装リサイクル法については費用便益分析に触れ、家電リサイクル法についてはEUとの比較を行う。最後に従来の廃棄物政策で抜けていた点は何かを指摘する。	同 上	同 上
15	自由貿易と環境保護	環境政策が自由貿易の阻害要因となるケースが出ている。環境条約非加盟国に対する貿易制裁措置と自由貿易の衝突がその典型である。この他日本の温暖化政策やEUの廃電気電子機器指令案を巡り、環境規制が結果として貿易障害となる具体的事件が発生している。環境と貿易の両立をはかる方策につき検討する。環境政策が自由貿易の阻害要因となるケースが出ている。環境条約非加盟国に対する貿易制裁措置と自由貿易の衝突がその典型である。この他日本の温暖化政策やEUの廃電気電子機器指令案を巡り、環境規制が結果として貿易障害となる具体的事件が発生している。環境と貿易の両立をはかる方策につき検討する。	同 上	同 上

=環境工学（'03）=（TV）

〔主任講師：鈴木基之（放送大学教授）〕

全体のねらい

環境工学は、環境問題の解決手法開発の学問である。環境問題そのものは、過去半世紀の間に大きく変化し、従ってその問題の解決のための哲学も変化している。工学は単なる個別の技術開発ではなく、将来ビジョンに基づく統合的なシステム確立を念頭において、そのために科学技術を総動員することが求められる。地球上の限られた資源の量、限られた自然環境の恩恵という制限の中で、ますます人間活動が増大していくことが予想されている現在、人類がの活動を持続していくために何が必要とされるのか、何が可能なかが今問われており、この答えを見出すための「考え方」を学ぶことが重要である。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	環境問題の発生	過去 50 年位の間に人間活動の拡大・活性化によってそれを取り巻く自然環境との間に相克が生じてきた。すなわち、人間活動による環境の劣化が生じ、これが人間の生存そのものに制約を与えることとなった。環境問題の発生、変化を概括し、その解決のために工学がどのようにかかわっていくことになるのかを考えてみよう。	鈴木 基之 (放送大学教授)	鈴木 基之 (放送大学教授)
2	物質収支と速度論	生産活動、人間活動から環境に影響を与える物質はどのように派生するのか、環境中に流出した物質はどのような挙動をとるのかなどを定量的に理解するうえで基本となる物質収支の考え方、変化の速度論などについて基本的な考え方を概説する。特に窒素の環境を例にとって色々な形の変化を見てみよう。	同 上	同 上
3	有害物質対策・生活環境保全・自然環境保全	環境変化の影響は色々な面から考察される必要がある。人間活動から派生する物質が及ぼす人体健康への直接的な影響、自然生態系への影響等様々な形の悪影響の可能性（リスク）をどのように考え、評価するのかを考えてみよう。	同 上	鈴木 基之 ゲスト 中西 準子 (独立行政法人産業技術総合研究所化学物質リスク管理研究センター長)
4	処理技術概論（1） 上水処理	水環境の劣化に伴い安全な飲料水確保のために種々の技術が用いられる。色々な飲料水の問題を概説するとともに、我が国の飲料水処理において生じている水源の劣化、原水の水質汚濁の問題に対応するための水処理技術に関する工学の基礎を解説し、沖縄の北谷浄水場を例として新しい処理法を紹介する。	同 上	鈴木 基之 ゲスト 真柄 泰基 (北海道大学教授)
5	処理技術概論（2） 排水の処理	人間活動から派生する排水を環境中に排出するためには十分な処理をする必要があるが、特に水域を健全に守るために、滅菌技術の適用も重要である。有害な細菌、ウイルス、原虫等に対応する処理技術の中で、新しい可能性を有する手法として、紫外線処理についての検討を示す。	同 上	鈴木 基之 ゲスト 大垣 真一郎 (東京大学大学院工学系研究科教授)

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
6	処理技術概論(3) 排出ガスの浄化	大気を通じて人体、生態系に影響を与える有害物質の存在も重要である。近年重要となっている室内空気環境の問題として、新しい建材などが原因となって生じている室内空気汚染(シックハウス)に対する工学的な解析等の例を紹介し、この問題の対応を考えてみよう。	鈴木 基之	鈴木 基之 ゲスト 村上 周三 (慶応大学教授)
7	処理技術概論(4) 固体廃棄物の取り扱い	活発化する人間活動から発生する固体廃棄物は、その処分場の不足や、投棄された廃棄物が生む環境破壊など多面にわたる問題を生じている。廃棄物とされるものであっても有価物質は多く、その例として生物系の廃棄物に関する資源化の状況と今後の方向を考えよう。	同 上	鈴木 基之 ゲスト 迫田 章義 (東京大学生産技術研究所教授)
8	システムの考え方の重要性-統合的な考え方	環境問題は多くの個別の問題として考えられがちであるが、実はその多くの事柄は色々なルートを通じてお互いに関連している。廃棄物問題の解決にも、単に人間活動からの廃棄される物質の問題ではなく、生産プロセスも含んだ地域における総合的物質循環の考え方が必要になる。このようなシステムにおける物流に対する取り組みを紹介する。	同 上	鈴木 基之 ゲスト 藤江 幸一 (豊橋科学技術大学教授)
9	資源化手法	廃棄物を最小にすることは最終的には資源の有効利用を図ることにつながる。このためには資源生産性という概念など、色々な新しい考え方が必要となる。世界の資源の利用状況を概観し循環型社会を構成していくための技術的方策、社会的方策などについて考えてみよう。	同 上	鈴木 基之 ゲスト 山本 良一 (東京大学教授)
10	地域での循環型社会の形成	循環型社会を構築していくためには自治体、地域、国など種々の単位での検討が必要であろう。このような方向での取り組みの例として屋久島における研究プロジェクトの取り組みにおいて物質循環を検討している例をみてみよう。またカルンポーにおける工業ネットワークの例も紹介される。	同 上	鈴木 基之 ゲスト 藤田 晋輔 (鹿児島大学教授)
11	環境のモデル化とモデルの効用	環境という大きなスケールを持ち、種々の単位プロセスが複雑に絡み合った対象の将来の変化を予測するには、実験などという手法は通常取りえず、数理モデルを構築することにより予測をすることになる。環境のモデル化とはどういうことか、どのようなどころに有効性があり、問題があるのかを考えてみることにしよう。	同 上	鈴木 基之 ゲスト 松岡 譲 (京都大学教授)
12	水循環と地域水資源	地球上の水は海域には大量に存在するがこれは塩水であり、太陽エネルギーを受けて蒸発し、降水となって地上に戻ってくるわずかの水が淡水資源として人間活動、陸上生態系を支えている。食料生産もその持続性は水資源にかかっている。世界的な水危機を迎える今、水問題に工学としてどのようにかかわるのかを考えてみよう。	同 上	鈴木 基之 ゲスト 沖 大幹 (総合地球環境学研究所)

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
13	地球温暖化と工学の対応	地球温暖化は主として化石燃料の燃焼に伴う二酸化炭素ガスの発生により大気温室効果が増すことにその原因があるとされている。この温暖化問題に対応する工学の取り組みの一つの例として、都市の種々の活動におけるエネルギー利用と、これにより発生する二酸化炭素量をどう考えるのかを見よう。	鈴木 基之	鈴木 基之 ゲスト 花木 啓祐 (東京大学大学院工学系研究科教授)
14	干潟など、環境の保全・利用	自然環境は身近なところを考えたとしても、色々な形で人間活動の影響を受けて、劣化しておりまた同時に環境浄化という機能の面で大きな役割を果たしている。自然環境の果たすべき機能を十分に活かし、かつ保全するためにどのような工学的な配慮が可能なのかを考えてみよう。ここでは干潟という特殊・特徴的な生態系の場を例として考えてみよう。	同 上	鈴木 基之 ゲスト 岡田 光正 (広島大学教授)
15	問題解決型から着地点誘導型へ	人間活動は全ての面で環境と何らかの相互作用を有している。最終的に人類の活動を持続していく条件としてなにを考えていく必要があるのか、特に生態系を保全する方向での生物多様性という考え方を紹介する。また有限な資源と環境の下で人間活動のあるべき姿を考えていくためにはどのようなパラダイムの変更が必要なのかを考えてみよう。	同 上	鈴木 基之

＝都市計画論（‘02）＝（TV）

－私達の都市をいかにデザインするか－

〔主任講師： 香山 壽夫（放送大学教授）〕

全体のねらい

私達の生活する都市を、どのようにつくるのか。そもそも、都市とは何なのか。近代の都市設計理念は何を作り出したか。それは、今どのような問題に直面しているか。今日の都市に求められているものは何か。それを解決するための方法は何か。こうした問題について具体例に即して考察する。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	美しい都市をどのようにつくるのか	1) 今私達の住む都市はどのような状態にあるのか 2) 都市空間とは何か 3) 都市空間はいかにつくられるか－計画者と生活者	香山 壽夫 (放送大学教授)	香山 壽夫 (放送大学教授)
2	美しかった日本の都市	1) 消えた町－江戸 2) 商人・職人の町－下町 3) 武家の町－山の手 4) 宗教と遊興のための空間－社寺・広小路 5) 続いて消えていった町－美しかった他の地方都市	同 上	同 上
3	都市のかたち－ (1)－身体的都市空間と計画的都市空間	1) 都市はどのように形づくられるか 2) 原始的共同体の都市 3) 古代の計画的都市 4) 中世西ヨーロッパの都市 5) バロックの都市	同 上	同 上
4	都市のかたち－ (2)－都市と田園	1) 産業革命の生んだ都市の悲惨 2) 理想的都市の夢 3) ハワードの「庭園都市」の理念 4) 「庭園都市」の実例 5) 「庭園郊外」の展開	同 上	同 上
5	都市のかたち－ (3)－合理主義と革命願望	1) モダニズムの都市デザイン 2) ル・コルビジエの「ユルバニズム」 3) CIAMの活動とアテネ憲章 4) CIAMの理念の展開 5) 合理主義と革命願望の源流 6) 荒涼たるシャンディガール	同 上	同 上
6	近代日本はどのような都市をつくってきたか－ (1) 明治より大戦まで	1) 文明開化は都市にとって何であったか 2) 対外イメージのための欧風化 3) 道路拡張のための「市区改正」 4) 都市計画法と震災復興 5) 郊外住宅地と満洲新都市	同 上	同 上
7	近代日本はどのような都市をつくってきたか－ (2) 終戦より今日まで	1) 戦災復興 2) ニュータウン建設 3) 都市高速道路 4) 超高層ビルと空地 5) メガストラクチャー提案の終わりと都市デザインの始まり	同 上	同 上

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
8	都市共同体は再建できるかーモダンイズムの都市デザインに対する反省	1) 都市再開発とは何だったか 2) アメリカにおける反省の動き 3) ヨーロッパにおける反省の動き	香山 壽夫	香山 壽夫
9	都市の持続性は回復できるかー町並み保存と建築再生	1) 町並み保存を目指す様々な動き 2) 現在行われている町並み保存の様々な手法 3) 何故町並みは保存されねばならないか 4) 都市は歴史の中で形成される	同 上	同 上
10	都市デザインの要素ー (1)ー都市集合住居	1) 住居は全て集合住居である 2) 良い都市は全て良い住居の型を持つ 3) 最近の日本の興味深い実例	同 上	同 上
11	都市デザインの要素ー (2)ー道と広場	1) 歩く人のための道と広場をつくろう 2) 不毛なるシャンゼリゼへの憧れ 3) 細道・裏道・原っぱ・空地の大切さ	同 上	同 上
12	都市デザインの要素ー (3)ー人を呼び集める建築空間	1) 劇場 2) 学校 3) 市場	同 上	同 上
13	都市デザインの要素ー (4)ー水と緑	1) 身近に自然がなくては生きられない 2) 身近な緑 3) 手でふれられる水辺	同 上	同 上
14	都市デザインの要素ー (5)ーかくれた小さな仕掛け	1) 門としきり 2) 聖なる場所 3) 高台と階段	同 上	同 上
15	私達の都市をいかにデザインするのか	1) 社会の秩序は都市空間によって作り上げられる 2) 地域共同体はいかにしてひとつのまとまりをつくり得るか 3) 地域共同体が自らの都市をつくることはいかにして可能か	同 上	同 上

＝教育文化論（'05）＝（R）

－人間の発達・変容と文化環境－

〔主任講師：住田 正樹（九州大学大学院教授）〕

〔主任講師：鈴木 晶子（京都大学大学院教授）〕

全体のねらい

教育文化は、ある社会の人々の間に広く見られる教育や発達についての信念・価値、態度、感情などの伝統的な志向パターンというほどの意味である。個々の人々は、日常生活のなかで、とくに意識することなく、こうした教育文化に規定されて教育についての信念・価値、あるいは態度・思考といった教育観、教育意識を形成していく。この講座では、教育文化が人々の教育観や教育意識、そして人間の発達をどのように規定しているか、また方向づけているか、について考える。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	教育文化とは何か	<p>教育文化についての概念は、未だ必ずしも明確にされているわけではない。それだけにいろいろなアプローチが可能である。</p> <p>第1回は、教育文化をどのように捉えることができるか、また本講座ではどのように捉えたかについて講師2人が対談形式で説明していく。</p>	<p>住田 正樹 (九州大学大学院教授)</p> <p>鈴木 晶子 (京都大学大学院教授)</p>	<p>住田 正樹 (九州大学大学院教授)</p> <p>鈴木 晶子 (京都大学大学院教授)</p>
2	教育的まなざしの誕生	<p>近代学校教育の制度化に伴い、職業教師に専門的知見を提供するために成立した教育学という学問。その学問の発現場に立ち返り、近代科学的な発想が教育を見る眼、その教育的まなざしをどのように規定しているのかみてみよう。</p>	鈴木 晶子	<p>鈴木 晶子</p> <p>弘田 陽介 (日本学術振興会特別研究員)</p>
3	教育的まなざしの増殖	<p>近代教育および近代教育学を規定している教育的まなざしが、今日私たちが教育について考えたり、語ったりしている際に、どんな働きをしているのか、またそうしたまなざしはいかにして増殖するのか、その仕組みを探ってみよう。</p>	鈴木 晶子	同 上
4	教育を語る言葉	<p>教育を見る眼、教育的まなざしが、社会や文化の枠組みによって強く縛られてしまっていることは、教育について語るその言葉の貧困という状態となって現われてくる。教育を語る言葉について考えてみよう。</p>	<p>皇 紀夫 (大谷大学教授)</p>	<p>皇 紀夫 (大谷大学教授)</p> <p>鈴木 晶子</p>
5	教育を語る言葉の「病」	<p>人間が人間と成り行くなかで、読む、書く、話すという言葉との出会いはその変容を大きく規定している。私たちはどのようにして言葉と出会い、言葉を通して変容していくのだろうか、言葉の働きを探ってみよう。</p>	皇 紀夫	同 上

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
6	言葉と教育と臨床	言葉と身体は実は不可分の関係にある。近代教育の制度化とともに、言葉や身体はどのように変化してきているのだろうか。それは人間の生きる意欲や力の源ともいえる情念や欲望の発露形式の変容とみることもできる。	鈴木 晶子 弘田 陽介	鈴木 晶子 弘田 陽介
7	教育のなかの風景 －死ぬこと・生きる こと	いかに死に、いかに生きるか、これは人間一人ひとりにとって固有の主題である。個々の人間の人生の旅路で出会う風景は様々である。教育とはその個性をこそ愛おしむべき営みである。人間としての普遍性と個人としての特性とをともに扱うことのできる教育文化の再生は可能だろうか。	鈴木 晶子	鈴木 晶子 皇 紀夫
8	育児文化の変容	今日、育児不安や育児ノイローゼ、また虐待など育児を巡っての問題が噴出しているが、育児についての考え方や行為は、どのように変化してきたのか。今の親は育児についてどのように考えているのか、今日の育児問題の背後にある社会的・文化的条件を考えてみる。	住田 正樹 田中 理絵 (山口大学講 師)	住田 正樹 田中 理絵 (山口大学講 師)
9	子どもの遊びと遊 び文化	遊びと遊び方とは異なる。遊びの変化を捉えるためには、遊び方の変化を捉えねばならないが、そもそも遊びは子ども発達にとってどのような意味があるのか、そして子どもの遊びはどのように変化しているのかについて考えてみる。	住田 正樹	住田 正樹
10	学歴社会の変貌 －学歴インフレの 時代－	高学歴化が進行すると、学歴インフレが生じ、学歴の価値が下がる。しかし今日にあっても、依然として学歴獲得競争は激しい。どうしてなのか。学歴インフレの時代にもかかわらず、子どもも親も学歴獲得競争に邁進する理由を考えてみる。	住田 正樹 田中 理絵	住田 正樹 田中 理絵
11	メディア環境の形 成と拡大	現代のメディアは巨大化、多様化、複雑化してわれわれの環境を形成しているが、取り分けエレクトロニクス系メディアの進展はめざましい。こうしたメディアが拡大していった教育環境・文化環境をどのように形成しているのかについて考えてみる。	住田 正樹	同 上
12	ジェンダーの世界	「男らしさ」、「女らしさ」という概念は社会的・文化的条件によって規定される。今日の日本にあっては、どのような条件が男らしさ・女らしさを規定しているのか、そしてその内容はどのように変化してきたのか。	住田 正樹 田中 理絵	同 上

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
13	子ども観の世代差 ー子どもはどう変わったかー	子どもに対する人々の常識的な観念を子ども観というが子ども観も近年大きく変わってきた。人々の子どもに対する態度や行動は、その社会の子ども観によるところが大きい。子ども観は近年どのように変化してきたか。	住田 正樹	住田 正樹 田中 理絵
14	子どもたちの生活 世界と自己意識の 変容ー社会・世間・ コモンズの観点か らー	子どもを取り巻く社会環境はどのように変わってきたのか。日本人に特有と言われる行動や態度の準拠枠としての「世間」は、これまで良くも悪くも個人の自己性を規定してきたが、私生活中心となった現代の日本で育つ子どもたちの生活世界はどうなっているのか、社会化・共同化の観点からとらえる。	南 博文 (九州大学大 学院教授) 園田 美保 (鹿児島女子 短期大学講 師)	南 博文 (九州大学大 学院教授) 園田 美保 (鹿児島女子 短期大学講 師)
15	教育文化論の課題	講師2人の対談形式によるまとめと今後の課題。教育文化の研究の必要性和研究を進めていく上での今後の課題あるいは可能性について述べる。	住田 正樹 鈴木 晶子	住田 正樹 鈴木 晶子

＝ 教育経営論（‘04）＝（R）

〔主任講師： 新井 郁男（放送大学教授）〕

全体のねらい

わが国を中心とした現下の教育改革の方向に照らして、これからの教育経営の在り方について、単なる理論の紹介というのではなく、内外の実践を紹介もまじえながら、わたしの考える教育経営論を展開する。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	教育経営の原理1 －計画性	教育経営の基本的原理の一つとして、プラン(Plan)－ドゥ(Do)－シー(See)といった計画性の原理について考える。	新井 郁男 (放送大学教授)	新井 郁男 (放送大学教授)
2	教育経営の原理2 －多様な教育観の調整	教育経営においては、教師や保護者などの多様な教育観を調整することが重要であること、調整するためのさまざまなストラテジーについて考える。	同 上	同 上
3	教育経営の原理3 －柔軟な教育課程経営	教育の重要な側面である教育課程の経営に当たっては、目標、時間、空間、教職員組織、などについて柔軟な姿勢をとることが重要であることについて考える。	同 上	同 上
4	学校の創造性	これからの学校は、それぞれの実態をふまえながら特色を出していくことが求められているが、その課題を達成するにはどうしたらよいかについて考える。	同 上	同 上
5	学校に基礎を置いたカリキュラム開発	学校の創造性において最も重要な課題であるカリキュラム開発を各学校が主体的に行う場合のアプローチについて考える	同 上	同 上
6	カリキュラムと学校組織	新しいカリキュラムを開発し、それを実際に機能させるためには、学校組織の改革の重要であることについて述べる。	同 上	同 上
7	教授組織の革新	新しいカリキュラムの導入に対応する学校組織の観点としてティーム・ティーチングの意義などについて考える。	同 上	同 上
8	地域社会学校の創造1	学校と地域の連携を密にした地域社会学校について、アメリカで展開された論やわが国の第2次大戦後の動向、最近の動向などを踏まえて、地域社会学校を経営していくにはどうしたらよいかについて考える。	同 上	同 上

回	テ ー マ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
9	地域社会学校の創造2	第8回を受けて、現在、現在再び地域社会学校の理念が復活していることの拝啓や意義などについて考える。	新井 郁男	新井 郁男
10	地域社会学校の創造3	地域社会との連携を深めている、わが国のさまざまな実践例に目を向けながら、その意義や課題などについて考える。	同 上	同 上
11	学校経営におけるリーダーシップ1	校長などの管理職や指導的な立場にある教員などのスクール・リーダーの問題について、ウェーバーの指導者論などを紹介しながら考える。	同 上	同 上
12	学校経営におけるリーダーシップ2	教育経営が適切に遂行されるには校長をはじめとするスクール・リーダーがどのような役割を果たさせばよいかについて、具体的な例を出しながら考える。	同 上	同 上
13	開かれた学校経営1	現下の教育改革において重視されている「開かれた学校」とは何か、そのような学校を創造するためには教育経営はどのように転換しなくてはならないのかについて考える。	同 上	同 上
14	開かれた学校経営2	開かれた学校をめざす開かれた教育経営の具体的な対応の問題として、学校評議員制度、P T A、学校選択、行政との関係などについて考える。	同 上	同 上
15	学校組織体としての学校の創造	1回から14回までに考えたことを、学習組織体としての学校の創造という観点から整理して、今後を展望する。	同 上	同 上

＝学校システム論（‘02）＝（TV）

－子ども・学校・社会－

〔主任講師： 竹内 洋（京都大学大学院教授）〕

全体のねらい

「学校」という言葉も実態も、いまのわれわれにとって自明すぎることである。しかし、学校は人類の文明のある段階で発明された人工装置である。人類が発明した学校という人間形成の装置が、社会の変化のなかでどのように変貌してきたのか。そして、いまなぜ学校の秩序の揺らぎが問題化されるのだろうか。文明の装置としての学校の可能性と不可能性を浮かびあがらせ、21世紀の学校像を描きたい。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	学校が輝いた時代	第2次世界大戦後、人々は教育の拡大によって悲惨と不幸からの脱出することを願った。新潟県佐渡島両津街を事例としながら、戦後の貧困の中から人々が学校創設にたちあがった時代をみることによって、学校と教育が輝きをもって出発した時代をあらためてふりかえり、半世紀の間にわれわれが得たもの失ったものを考える。	竹内 洋 (京都大学大学院教授)	竹内 洋 (京都大学大学院教授)
2	新中間層と教育	わが国の学校教育の拡大をリードしたのは、都市新中間層である、と言われる。ここでは、戦前期におけるこの階層の形成、およびこの階層と学校教育とのかかわりを分析することにより、現代日本の教育意識の起源について考えてみたい。	高橋 一郎 (大阪教育大学助教授)	高橋 一郎 (大阪教育大学助教授)
3	大衆化する教育意識 ～ピアノの普及をめぐる～	戦後日本における家庭用ピアノの普及を分析することにより、「教育する家族」という社会意識が、中間層をこえて大衆層へと広がっていった過程、および、この大衆化をもたらした社会的要因について、考える。	同 上	同 上
4	人口からみる子どもと学校	人口構成の変化ほど、日本の学校教育に大きな影響を与えてきた要因は他にない。最近の大学改革を見てもわかるように、誰もが操ることのできない絶対的な事実として、18才人口の減少があった。子供数の変化に対する教育政策の対応や教員の年齢構成などを例にしながら、理念よりも人口構成の変化が学校教育を動かす側面を検討する。	岩井 八郎 (京都大学大学院教授)	岩井 八郎 (京都大学大学院教授)
5	美徳の博物館 ～学校組織の社会学～	学校のカリキュラムや教育目標をみれば、社会において何が望ましいかが、多様に提示されている。一方、それらは望ましくない事実を発見するための指針でもある。学校の外側で作上げられた望ましさの基準の下で、学校は組織として存続しなければならない。組織としての学校をみる社会学的視点を提示する。	同 上	同 上
6	学校文化の身体化	ひとくちに学校といっても課程や規模、伝統、男女比率、進学率などがそれぞれに異なっているのに応じて規律に対する考え方も異なり、生徒の気質や文化も異なっている。こうした違いを風土と文化という観点から整理し、検討してみよう。	黄 順 姫 (筑波大学助教授)	黄 順 姫 (筑波大学助教授)

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
7	女学生文化 ～羨望と嫌悪のま なざしのなかで～	女学生という存在は、それまでの女性についての規範や秩序を破る新鮮さを期待されながらも、一方では常に「墮落」しやすい危なっかしい存在という目でみられてきた。それでは、女学生のどのような行動や生活態度が「墮落」あるいは「不良」ととらえられたのだろうか。そして、当の女学生たちはそうしたまなざしの下でどのように行動し、日常生活を生きてきたのだろうか。ここでは、「墮落」女学生や「不良」女学生をめぐる言説や実態を通して、羨望と嫌悪の二面感情でとらえられてきた女学生の表象とその文化を探ってみたい。	稲垣 恭子 (京都大学大 学院助教授)	稲垣 恭子 (京都大学大 学院助教授)
8	女学生の物語・物語 としての女学校	女学生を主な登場人物とする小説は、明治20年代あたりから出現し明治30年代には大衆的人気を得るようになった。女学生の生活実態をうかがい知る機会が少なかった当時においては、女学生の実態をある程度反映しながらも多分に外から創り出された表象である女学生小説が、現実の女学生のイメージを規定し、また女学校教育にも少なからず影響を与えたと思われる。ここでは、女学生のパブリック・アイデンティティをつくり上げる上で女学生小説がどのような意味と役割を果たしたのかを考えてみたい。	同 上	同 上
9	学校・暴力・ことば の力	学校はその基礎が整った明治の時代から絶えることなく暴力の影につきまわられてきた。しかし、1980年前後を境に全国の中学校に吹き荒れた校内暴力の嵐は、いかなる意味でもことば(理屈)を背景にしていないという点で、それまでの暴力とはまったく性格を異にするものであった。この校内暴力への対処という困難な仕事に身を挺してあたってきた教師たちの話をもとに現代における教育の意味をあらためて考えてみることにしたい。	山本 雄二 (関西大学教 授)	山本 雄二 (関西大学教 授)
10	教育問題と責任の 帰属 ～「いじめ」自殺事 件をめぐる	「いじめ」はそれが死と結びついていると認識されたときから社会問題になり、やがて学校問題になった。それは学校が責任を問われるべき問題になったことを意味していた。責任は裁判で問われた。 ここでは「いじめ」自殺裁判の事例を通して、裁判で学校教育の何が問われたのか、判決文の論理構成を追いながら検討する。	同 上	同 上
11	記憶のなかの学校	学校システムは同窓会システムとの関係のなかで機能する。同窓生達は記憶のなかの学校としての母校へ経済的・心理的援助をする。一方、母校に対し文化的正統性を押し付ける。学校と同窓会の象徴的権力関係を解明しよう。	黄 順 姫	黄 順 姫
12	パブリック・スクー ルというノスタル ジア(1)	英国のパブリック・スクールは全人教育がなされる学校の理想型として多くの国で模倣された。日本では、戦後すぐに池田潔が自らの体験をもとに書いた『自由と規律』が多くの人に読まれ、学校の模範とされた。パブリック・スクールがどのようにして理想の学校になったかを見る。	竹 内 洋	竹 内 洋

回	テーマ	内容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
13	パブリック・スクールというノスタルジア(2)	内容は12回と同じ	竹内 洋	竹内 洋
14	反抗少年トニー・ブレアとパブリック・スクール	変化の激しい現代社会の中で学校の模範といわれたパブリック・スクールはどのように伝統を守り、21世紀に適応をしているのだろうか。ブレア首相やワーズワースの母校であり、近年『ハリー・ポッター』で有名になったフェテス・カレッジを訪問して、学校教育における保守と革新について考える。	同上	同上
15	学校・教育・学び	学校と教育、学びの意味について統括的に考える。	同上	同上

＝教育課程編成論（‘02）＝（R）

－学校で何を学ぶか－

〔主任講師：安彦 忠彦（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

学校の教育課程ないしカリキュラムについて、その編成の基礎となる哲学的・思想的原理とともに、教育課程の歴史的・社会的背景、学習者の発達・要求・能力・適性・個性などの心理的・生理的特性、教育内容としての知識・経験・技能・技術・価値などの文化内容の範囲と特質などをきめ細かく吟味し、望ましい編成方法を考える。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	教育課程とカリキュラムと教育内容	教育課程という用語は一部の、とくに教育界の人々の間ではよく使われるが、あまり一般的ではない。他方カリキュラムという用語も学界の方でよく使われる。さらに教育内容という用語も似た意味のことばとして用いられる。その異同・関連について整理する。	安彦 忠彦 (早稲田大学 教授)	安彦 忠彦 (早稲田大学 教授)
2	教育課程の哲学的 思想的原理の検討 (1)：存在論的基礎	教育課程をどういうものにするかについては一定の哲学的・思想的立場を決めなければならない。1回目は、どんな内容のものを選んで教えるのかの基準について、その哲学的な立場の相違が具体的な教育課程をどう変えるのか検討する。	同 上	同 上
3	教育課程の哲学的 思想的原理の検討 (2)：認識論的基礎	教育課程をどういうものとして作るのかは、人間の認識をどういうものとするかによって決まる。2回目の検討は、どんな認識のとらえ方があり、それによって具体的な教育課程がどういう違った姿を示すことになるのかについて検討する。	同 上	同 上
4	教育課程の歴史的・社会的背景の分析と批評	教育課程をつくる上で最近注目されている研究分野が、教育課程の歴史的規定性、また社会構造との相互関係についての分析・批判研究である。種々の差別の再生産、歴史的諸要因による妥協的産物としての教科の創設などの研究の上で、自覚的に教育課程づくりを行う必要がある。	同 上	同 上
5	教育課程の構成における三本柱と社会的要請の吟味	学校の教育課程は必ずその時代の社会的要請を受けてつくられる。ただ、その社会的要請の性質をよく吟味しないと、数年間で必要とされなくなるものもあつたり、政治的に一面的であつたりして、本来の成果をあげられない。教育学的観点からこの点を吟味する。	同 上	同 上
6	学習者の心理的・生理的要求：(1)発達段階について	学校の教育課程は他方で子ども・学習者の心理的・生理的特性を無視しては作れない。1回目は、学習者の発達段階・発達特性について検討し、その上で学習者の学習がいかにか効果的に進められる教育課程になるかを探ることが必要となる。	同 上	同 上
7	学習者の心理的・生理的要求：(2)個性・適性について	学校の教育課程と学習者との関係で、もう一つ重要なのは学習者の個性・適性をどうとらえるか、そしてそれに対する適切な教育課程をどうつくるか、という課題である。これは、必修と選択、個別化や個性化、能力差、学力差などの問題に関係する。	同 上	同 上

回	テ ー マ	内 容	執 筆 担 当 講 師 名 (所 属 ・ 職 名)	放 送 担 当 講 師 名 (所 属 ・ 職 名)
8	学問的要請としての学校知の吟味：理論知と体験知	学校の教育課程は学問の世界と切り離せない。学校で教える知識＝「学校知」は基本的に学問的な「理論知」であるが、これと「体験知」をどうつないで効果的な学習にしようかが教育課程編成上の基本的な問題の一つであり、そこに教職の専門的独自性もある。	安彦 忠彦	安彦 忠彦
9	教育内容の組織化と人格・学力との関係	教育課程を通して教えられる教育内容がどう組織化されるか、という問題は、教育課程が子ども・学習者の人格と学力をどのようなものとして形成するか、という問題と表裏の関係にある。教育内容の組織化の考え方や程度によって、人格や学力の特性が規定されよう。	同 上	同 上
10	教育課程の構成・教育課程の内部要素と外部要因	教育課程の構成を試みる上で、教育課程の構成要素が何であるかを明確にするとともに、この内部要素の効果を規定する外部要因がある。教職員や施設・設備などを視野に入れた上での構成でなければ、現実的な構成論にならない。	同 上	同 上
11	教育課程の古典的類型	教育課程をどうつくるかについては、教師はデザイナーという自覚をもって、これまでのタイプ・類型の中で主要なものをはきちんと押さえる必要があり、それぞれの長所・短所を細かく知り、目的に応じて使い分けができるのでなければならない。	同 上	同 上
12	教育課程のハイブリッド・モデル	現在では、特定のタイプの教育課程だけですべてのことを教えようとする試みは、あまりに粗雑なものであったとの反省がなされ、これからはいくつかのタイプの教育課程を、目標の違いに応じて組み合わせる、という混合型が求められている。	同 上	同 上
13	教育課程の経営	教育課程を編成するという作業は、大きく教育課程の経営の一部分を成している。教育課程経営が学校経営の中心であり、このような位置づけの上で、教育課程のすべての部分を絶えず改善していくシステムをつくることが求められる。	同 上	同 上
14	教育課程の評価	教育課程を実際に展開し実施していけば、その結果について評価するのが当然である。授業を通して絶えずつくり直し、予期せぬ結果をも含めてとらえながら教育課程をつくり変える教師の役割が決定的な重要性をもつことを明確化する。	同 上	同 上
15	教育課程と教師：デザイナーとしての教師・カリキュラムの一部としての教師	教育課程が実施されているとき、その立案者と実行者は教師である。子どもや学習者にとって、その教師の指導法、人間性や言動、考え方は基本的に学ぶべき内容の一部となる可能性が常にあり、単に教育課程を実施しているだけの存在ではない。とくに低年齢の子どもには重要である。	同 上	同 上

＝認知過程研究（‘02）＝（R）

－知識の獲得とその利用－

〔主任講師： 稲垣 佳世子（千葉大学教授）〕

〔主任講師： 鈴木 宏昭（青山学院大学教授）〕

〔主任講師： 亀田 達也（北海道大学大学院教授）〕

全体のねらい

ここでは高次の認知過程、思考における知識の獲得と利用に焦点をあてる。上手な問題解決や、物事のよりよい理解には「理解力」や「問題解決力」といった一般的な能力ではなく、その領域に関する「知識」が重要な役割を果たすことを知る。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	認知過程を研究するとは	「認知過程」を研究するとはどのようなことかについての道案内をする。教育場面や日常場面での私達のさまざまな活動の多くは問題解決と理解の過程と捉えられること、認知過程研究で使われる知識や推論など重要な概念について解説する。	稲垣佳世子 (千葉大学教授)	稲垣佳世子 (千葉大学教授) 波多野誼余夫 (放送大学教授)
2	子どもが世界を理解する仕方	子どもはかなり早い時期から特別教えられていないにもかかわらず、世界の重要な諸側面を切り分け、それぞれに異なる因果的な説明を適用できるという点で、今まで考えられてきたよりも有能な存在であることを示す。	同 上	稲垣 佳世子
3	知識の大幅な組み替え	日常生活場面や学校場面で獲得した知識の多くは、新しく情報を取り入れるたびに少しずつ改変されるが、時として大幅な組み替えに至ることがあるという事実やその過程で「誤概念」とよばれるものが現れることがあることを示す。	同 上	同 上
4	熟達者と初心者のちがい	熟達者と初心者はどこがどう異なるのだろうか。主にスポーツや芸術、職業場面での熟達者を例にしながら、熟達者の豊かで構造化された知識を明らかにする。	大浦 容子 (新潟大学教授)	大浦 容子 (新潟大学教授)
5	熟達化の社会・文化的基盤	初心者が熟達者になっていく過程は、初心者が熟達者のコミュニティに実践活動を通じて参加していくことである。熟達化の過程で他の人々や文化がつくり出した道具についてのメンタルモデルを作っていくことを明らかにする。	同 上	同 上
6	問題解決の基本的図式	問題解決過程の研究によく用いられてきたパズルを題材にして、問題とは何か、またその解決とは何かを説明する。そして問題空間の探索、ヒューリスティック、問題表象、及びその変化についての解説を行う。	鈴木 宏昭 (青山学院大学教授)	鈴木 宏昭 (青山学院大学教授)
7	教科学習における問題解決	算数や理科などの教科における問題解決プロセスの特徴についてまず解説する。次に、教科の学習を困難にする原因を転移、素朴概念から説明する。最後に、この困難を克服する方法として自己説明を取り上げる。	同 上	同 上

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
8	機械の操作における問題解決と理解	人間がコンピュータなどの複雑な機会を学習し、理解を深める過程についての講義を行う。まず機械操作の自動化のメカニズムについて論じ、次に機械に対するよりよい理解を支えるメンタルモデルの役割、獲得について論じる。	鈴木 宏昭	鈴木 宏昭
9	演 繹 推 論	いわゆる形式的推論の問題が与えられた時でさえ、人はこれを形式的に解くことは稀である。その代わりに実用的推論のスキーマを使ったり、メンタルモデルをつくることによって、これを解こうとすることを示す。	波多野 誼余夫 稲垣 佳世子	波多野 誼余夫
10	類推の図式と制約	類推は学習や創造的思考において重要な役割を果たすことが知られている。まず日常的な例を用いて、類推のプロセスと基本図式を説明する。次に、制約という観点から人間の類推のメカニズムを解説する。	鈴木 宏昭	鈴木 宏昭
11	推論における社会的バイアス	人々が社会的事象について行う推論にはさまざまなバイアス（偏り）があることが知られている。その主なものを紹介し、それらがなぜ簡単には消去されないかを考える。	亀田 達也 (北海道大学 大学院教授)	亀田 達也 (北海道大学 大学院教授)
12	認知と社会的相互作用	推論は個人の頭の中で生じるとはいえ、その個人を取りまく文脈、とくに異なる立場の他者の存在によって強く影響されること、逆に他者との相互作用を通して推論や認知が促進されることを示す。	同 上	同 上
13	理解を求める活動	思考の大きな目標のひとつは理解、すなわち世界の有り様について仮説をたてることである。この過程は様々な対立仮説からの予測を吟味するという時間と労力を要するものであるが、人は本来理解を求める傾向をもつといわれている。	稲垣 佳世子 波多野 誼余夫	波多野 誼余夫
14	談 話 理 解	談話理解の研究のために、いわゆる認知心理学でとりあげられてきた実験はどのようなもので、そこから明らかになったことは何か、未解決な問題は何かを検討する。合わせて談話の産出（作文など）についてもふれる。	秋田 喜代美 (東京大学大 学院助教授)	秋田 喜代美 (東京大学大 学院助教授)
15	教室における談話	教室学習における教師と生徒、生徒同士の談話を調べることによって生徒の思考を促す教師のことばや子どもの発言がどのようなものかを検討する。こうした談話については文化差のあることも知られている。	同 上	同 上

＝教授・学習過程論（‘02）＝（TV）

－学習の総合科学をめざして－

〔主任講師： 波多野 誼余夫（放送大学教授）〕

〔主任講師： 永野 重史（国立教育政策研究所名誉所員）〕

〔主任講師： 大浦 容子（新潟大学教授）〕

全体のねらい

ヒトという種は、単に生物として進化してきたばかりでなく、文化という人工物の体系を作り上げ、それを各個体が学習により内化することで有能さを増大させてきた。その意味で広義の学習ないしそれを援助する教育が決定的に重要なことは確かだし、子どもの側には成人の行動様式を真似ようとする傾向、おとなの側には子どもに教えようとする傾向が元々備わっているらしい。さらに、実践と並行させて学習の援助をある程度意図的、計画的に行おうとする試み（例えば徒弟制度）も、古い歴史を持つ。こうした広義の教育＝学習の援助の過程について考えるところから始めたい。「教育」というと小学校、中学校など、学習者の将来の生活のための一般的な準備を行う機関での教育のことを指すと受けとられがちだが、学校は多様な教育の機会の一つにすぎず、まして今日見られるような欧米型の学校が普及したのはわが国でもここ百年たらずのことではかない。制度としての学校は、人々の全面的な支持を得ているといえないどころか、それに対する非難や批判が高まりつつあるようだ。しかし、今日の高度に技術化された社会の教育において学校が占める位置は無視できないものである。ここでは、学校の独自の役割が何かを吟味するための知的基盤を提供したい。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講 師 名 (所属・職名)	放送担当 講 師 名 (所属・職名)
1	発達、学習、社会化	最近の比較認知科学や進化心理学に基づき、ヒトの生物学的特徴とその由来について論じる。その発達の過程で、文化という人工物の体系を各個人が学習により内化すること、こうした広義の学習ないしそれを支援する教育が決定的に重要なことを述べる。	波多野誼余夫 (放送大学教授)	波多野誼余夫 (放送大学教授)
2	人間行動の生物学的基盤	ヒトにもっとも近い種である、チンパンジーをはじめとするヒト以外の動物の社会的知能、認知や学習についての最近の報告から、人間行動がいかなる生物学的基盤を持っているのか考える。	同 上	藤田 和生 (京都大学大学院教授)
3	言語を生み出すのは「本能」か	米、欧で大ベストセラーになった言語の生得なる基盤を証明するピンカーの著書と、これに対する、言語獲得の社会的、実用的基盤を強調する立場からのトマセロの批判を手がかりに、言語の本質を論じる。	同 上	波多野誼余夫
4	素 朴 理 論	最近の概念発達研究によれば、乳幼児はかつて考えられていたよりもずっと知的に有能な存在であり、世界の限られた側面についてはあるが、特徴的な因果的説明を行うことのできる知識の体系を持つという。このことを実験的に示す。	同 上	同 上
5	言 語 と 思 考	子どもの用いる言語が彼らの思考をどのように形成するか、異なる様式の言語コミュニケーションが要求されることで彼らの学習がどれほど困難なものとなるか、読み書き能力の習得がいかに知的発達と関わるか、などを検討する。	永野 重史 (国立教育政策研究所名誉所員)	永野 重史 (国立教育政策研究所名誉所員)
6	熟 達 化	初心者と熟達者の知識、技能の差異、さまざまな領域における熟達化の諸相、熟達の型の違い、熟達を促進する経験などについて述べる。	大浦 容子 (新潟大学教授)	大浦 容子 (新潟大学教授)

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
7	教育の諸相	教育とは広く学習を援助しようとする意図的、意識的な営みであり、学校教育はそのごく一部にすぎない。徒弟制や実践への参加という形態での教育のもつ強みや限界について考える。	大浦 容子	大浦 容子
8	問題解決と理解	構成主義の学習観では、知識は伝達されるのではなく、問題解決や理解活動の過程で、次第に構成、洗練、改定されると考える。この意味で教育活動の中心となる問題解決や理解活動に関し、これまで行われてきた研究成果を総覧する。	波多野 誼余夫	波多野 誼余夫
9	学習における協調	学習はしばしば対人的相互交渉のなかで行われるが、とくに協調的学習はさまざまな促進的効果を持つ。他者に説明する過程で自らの考えを外化し、内省の対象にすることができるし、相互の考えを持ち寄ることで創造的な発展も期待しうる。	同 上	三宅 なほみ (中京大学教授)
10	学習環境のデザイン	学習の科学は、いかに教えるべきかの処方せんを提供するわけではないが、それを考える基盤を提供する。学習目標により効果的な学習環境のデザインは異なるが、ここではとくに新しい事態に柔軟に適応しうる学習者を育てる環境デザインの原理について考察する。	同 上	同 上
11	動機づけ、転移	学校での学習においては学習者をいかに動機づけるかが、くりかえし問題になってきた。また、学校で学習した知識や技能が、学校外の問題解決に転移しにくいこともくりかえし指摘されている。こうした問題についての学習科学からの示唆を論じる。	永野 重史	永野 重史
12	教育における情報技術	コンピュータは、単に技能の習熟を苦痛なしに行わせたり、理解のためのさまざまな事例を効果的に提示するにとどまらず、なかば時空を超えた相互交渉とそれにもとづく学習の展開を可能にする。こうした方向の試みを紹介する。	波多野 誼余夫	大島 純 (静岡大学助教授)
13	教育のための評価	評価には、学習者の状態を知って教育計画を立案したり修正したりする、という側面と個々の学習者に成績を付与するという側面があるが、従来は両者がはっきり区別されず、そのため評価が教育活動に生かされないことが少なかった。教育活動の一環としての評価について述べる。	永野 重史	永野 重史
14	学習の認知神経科学	脳と心の関連についての関心が高まるなか、高次の学習の理解にも、認知神経科学からの寄与が期待されるようになった。急速に進展しつつある認知神経科学からの知見のうちで、学習科学にとって見落とせないのはどんなことか、今後期待されるのはどんな発展かを論じる。	波多野 誼余夫	酒井 邦嘉 (東京大学大学院助教授)
15	文化の中の学習	学習すなわち知識獲得の過程は、社会文化的文脈により直接に影響されるのみならず、社会文化的価値の内化された形態ともいべきメタ認知的信念(例えば学習観)によっても影響される。したがって、教育技術を輸出入することには慎重でなくてはならない。	同 上	北山 忍 (ミシガン大学教授)

＝現代身体教育論（‘02）＝（R）

〔主任講師： 生田 香明（大阪大学教授）〕

全体のねらい

身体の形態と機能は、生涯の1/4を占める成長期で発育・発達し、3/4を占める加齢期で老化・衰退する。本書では、60年間にわたる長期加齢期の身体諸機能の老化が、20年間という短期成長期における運動を含めた生活習慣の影響を受けること、また100歳の長寿をまっとうするために、20歳以降の加齢期において適切な運動の実践が重要であること、そして、それらの運動をどのように行うべきか、それらに関する科学的な知識を提供することにある。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	執筆担当 講　師　名 (所属・職名)	放送担当 講　師　名 (所属・職名)
身　体　の　発　達　と　教　育				
1	形　態　の　発　育	<p>人間の身体は、18歳頃まで発育を続け、大きさを増していく。しかし、身長や下肢長などの長育、体重や皮下脂肪量などの量育、肩幅や頭長などの幅育は、同じ割合で発育していくものではない。</p> <p>本章では、身体各部の発育がどのような経過をたどるか、長育、量育、幅育のそれぞれの項目に分けて、これまで報告されているデータに基づいて解説する。またそれらの発育が身体的能力の発達にどのようにかわるか、などについて述べる。</p> <p>更に、青少年の身体発育促進現象が、明治33（1900）年頃から始まっているが、それがどのような経過をたどっているか、戦争の影響はどうか、発育促進の rate はどの時期が最も高かったかなどについて、身長を例にあげて解説する。</p>	生田 香明 (大阪大学教授)	生田 香明 (大阪大学教授)
2	手指の精密動作の習得（3歳前後）	<p>手指は脳の出先き器官とも言われ、脳の神経細胞の発達とともにその機能は3歳前後に急速に発達することが研究によって明らかにされている。これは、人間の局所の神経感覚機能が早期に急速に発達することを示す。局所の神経感覚機能の急速な発達が手にある外部情報を集める感覚器官、手の反射と運動、手の精密な素早い運動とどのように関係するかについて述べる。</p> <p>本章では、それが他の身体的能力の発達に比べてなぜこの時期に急速に発達するか、またなぜ、この時期にこの動作を習得しておかなければならないか、などについて解説する。</p>	同　上	同　上
3	足の形態と機能の発達（5歳前後）	<p>この世に生を受けて間もなく、ヒトは臥位から立位へと大きな姿勢転換を強いられる。この時期、神経系の発達と共に、身体の土台としての足の機能も急激に発達する。</p> <p>本章では、直立・二足歩行というヒト特有の移動様式に注目し、幼児期の足の形態と機能の発達について解説する。</p>	臼井 永男 (放送大学助教授)	臼井 永男 (放送大学助教授)
4	全身動作の習得（8歳前後）	<p>サッカーボールを蹴って相手に正確にパスしたり、ピンポン球をラケットで巧みに打って相手に正確に返したりする全身動作は、8歳前後に急速に発達する。これは全身を制御する神経感覚機能がこの時期に急速に発達することを示す。全身を制御する神経感覚機能の急速な発達が、全身動作と感覚系、全身動作のプログラム、基礎的動作の発達、全身動作の分化と統合、全身動作の巧みさなどどのように関係するかについて述べる。なぜこの時期にこの動作を習得しておかなければならないか、などについて解説する。</p> <p>本章では、それが他の身体的能力の発達に比べてなぜこの時期に急速に発達するか。</p>	生田 香明	生田 香明

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
5	ねばり強さの習得 (12歳前後)	<p>身体のねばり強さは、全身持久力で評価され、その能力は12歳前後に急速に発達する。ねばり強さの急速な発達が遅筋線維の発達、心血管系の発達、呼吸器系の発達およびそれらの発達の総合的機能としてあらわされる最大酸素摂取量とどのように関係するかについて述べる。</p> <p>本章では、全身持久力(最大酸素摂取量)の身体的能力が呼吸循環機能に規定される要因について、また健康を保持していくのにどのように関係していくか、更になぜこの時期にねばり強さを習得しておかなければいけないか、などについて解説する。</p>	生田 香明	生田 香明
6	力強さの習得 (15歳前後)	<p>身体の力強さは、筋力で評価され、その能力は15歳前後に急速に発達する。力強さの急速な発達が速筋線維の発達、神経と筋の連関、筋力の発揮様式、最大筋力の発達などどのように関係するかについて述べる。</p> <p>本章では、筋力の身体的能力が筋機能に規定される要因について、また健康を保持していくのにどのように関係していくか、更になぜこの時期に力強さを習得しておかなければならないか、などについて解説する。</p>	同上	同上
7	少子化社会と子どもの体力	<p>我が国の少子化傾向は、昭和49年に始まり、現在も続いている。それは子どもの生活に計り知れないほど影響を与えてきた。少子化の進行が子どもの体力低下の進行、特に10歳児の体力データと幼児の体力データにどのような影響をおよぼしているか、また、幼児の遊び相手と遊ぶ人数に与えている影響などについて述べる。</p> <p>本章では、子どもの体力低下の進行が少子化社会とどのように関係し、またそれがどの時期から、またどこに最も強く現れているか、更に、子どもの体力低下が健康にどのようにかかわってくるか、などについて解説する。</p>	同上	同上
8	現在の子ども 「心」と「体」の発達の問題点	<p>無気力、無関心、無感動な子どもの増加に始まって、校内暴力、いじめ、不登校など子どもの荒れが問題になって十数年になる。最近の報告では「不登校」の小、中学生が全国で約12万8千人に達し、また「暴力行為」が全国の学校で約3万5千2百件となって、いずれも過去最多を更新した。その原因として子どもが変わってきたことがあげられ、それを「心」の問題として対策が講じられてきたが、沈静化に向かわない。</p> <p>本章では、子どもの「心」が問題になる前に既に「体」に問題が起きていたことを提起し、「心」と「体」の働きの関係などについて解説する。</p>	同上	同上
身 体 の 老 化 と 教 育				
9	生活習慣病の低年齢化 (30歳代)	<p>ロンドンバスの運転手と車掌についての比較研究は、1953年J.モリスによって報告された。ロンドンの2階建バスの階段を昇り降りしている車掌は、勤務中ほとんど座っている運転手に比べて心筋梗塞にかかる率がずっと低いと言うものである。</p> <p>この論文はあまりにも有名で、今では古典的とさえ言われている。</p> <p>しかし、近年のモータリゼーションの発展は、この研究結果が示唆しているにもかかわらず、車掌ではなく運転手の方を大量に育成していくことになる。</p> <p>このことは本章で取り扱う生活習慣病の本質を示しているように思われる。</p>	臼井 永男	臼井 永男

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
10	基礎代謝の低下 (40歳代)	<p>基礎代謝は、生きるのに必要な最低の消費エネルギーであり、これは15歳(女子)～17歳(男子)歳頃から低下が始まり、40歳代でその低下が加速する。</p> <p>本章では、40歳代でその低下が加速する要因について、遅筋線維の代謝活性と量、特に代謝活性が深く関わっていること、またそれが健康や身体的能力にどのような影響を及ぼすか、更にその低下防止はどのようにすればよいか、などについて解説する。</p>	生田 香明	生田 香明
11	足機能の低下 (60歳代)	<p>よく老化は足から始まると言われる。歩行スピードの低下、立ち上がり動作の緩慢、足腰の疲労や痛みが加齢とともに顕著になってくる。特に60歳代に入ると足の機能の低下に伴う種々な症状が著しくなり、しかもこのことはしだいに個人差が大きくなる様相を示す。</p> <p>高齢化社会を迎え、また平均寿命も80歳になった今、60歳代というのはいささか 若すぎるようにも思われるが、転ばぬ先の杖、足の機能について触れるのには適切な時期だと思う。</p> <p>本章では特に足の機能の低下から、中高年者の身体の特徴について解説する。</p>	臼井 永男	臼井 永男
12	呼吸循環機能の低下 (70歳代)	<p>肺の働きで酸素を血中に取り込み、心臓の働きで酸素や栄養素を全身に運搬する呼吸循環機能は、長寿と密接な関係にあるが、70歳代でその機能の低下が加速する。</p> <p>本章では、70歳代でこの機能低下が加速する要因について、遅筋線維の量と代謝活性、特にその量の低下が深く関わっていること、またそれが健康や身体的能力にどのような影響を及ぼすか、更にその低下防止はどのようにすればよいか、などについて解説する。</p>	生田 香明	生田 香明
13	脳機能の低下 (80歳代)	<p>脳の神経細胞の大部分は生後分裂することはない。脳では、思考、記憶、判断をはじめとする高次の精神機能が営まれる。また、外界に対する応答として各種の運動や動作が調節される。</p> <p>本章では、80歳代でこの機能低下が加速する要因について、脳の運動中枢の形態と機能の老年変化および前頭前野の形態と機能の老年変化が深く関わっていること、またそれが健康や身体的能力にどのような影響を及ぼすか、更にその低下防止はどのようにすればよいか、などについて解説する。</p>	同上	同上
14	100歳以上の超高齢者の増加	<p>平成11年9月末に全国で100歳以上の長寿者が11,346人になった。この人たちは、明治32年以前に生まれており、長寿のためにどのような生活をすべきかを私たちに教えている。</p> <p>本章では、この人たちの発育期および加齢期に生涯健康を支えてきた運動、栄養、睡眠が現在と比較してどのようなであったか、またそれらが身体的能力にどのような影響を与えたか、そして100歳を越す長寿者がこの4～5年1000人のペースで増加を続けていることと、平均寿命が男女とも世界一を保持していることなどから、誰でも長生きできるとの認識が広まっているが、その通りになるかなどについて解説する。</p>	同上	同上

回	テ　　マ	内　　　　　　容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
15	生涯運動が生涯健康に果たす役割	<p>少子高齢社会が進行している我が国では、子どもの身体的能力が低下を続ける一方で、年齢相応の身体的能力の高い高齢者が増加を続けているため、平均寿命がわずかながら伸びている。</p> <p>本章では、これまでの内容を総括しながら、国民の生涯健康のために国がどのような施策を打ちだしてきたか。また 100 歳を超すためには 4 つの関門をクリアしなければならないこと、そのためには最も適当な時期に最も適切な運動をすることが極めて重要であることなどについて解説する。</p>	生田　香明	生田　香明

学校臨床社会学 = (' 0 3) = (R)

－ 教育問題をどう考えるか －

〔主任講師： 苅谷 剛彦（東京大学大学院教授）〕

〔主任講師： 志水 宏吉（大阪大学大学院助教授）〕

全体のねらい

現代の日本の学校には、さまざまな「問題」が存在する。いじめや不登校、教師のバーンアウト、「学力」や学習意欲の低下など、メディアなどで取り上げられる教育問題に、学校はどのように対応すればよいのか。この授業では、こうした問題にただちに答えを出すのではなく、これらの問題をどのようにとらえていくかという視点にまで立ち戻り、社会学の視点から検討を加える。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	学校臨床社会学とは何か	わが国の学校社会学の歩みを振り返ったうえで、そこに臨床的な視点を導入することの意義について論じる。「現場に根ざした研究」「臨床現場を対象とする研究」「問題に対する診断と処方をめざす研究」など、「臨床」ということばに付与された意味の多義性を、具体的な研究実践例を引きつつ検討し、学校臨床社会学の有効性と可能性について考察する。	志水 宏吉 (大阪大学大学院助教授)	志水 宏吉 (大阪大学大学院助教授) 苅谷 剛彦 (東京大学大学院教授)
2	学校臨床社会学の対象と方法	学校臨床社会学が対象とする問題領域について概観するとともに、問題理解の視点と分析のための方法論について論じる。問題把握における構築主義と本質主義の立場の違い、スクールエスノグラフィー、教室における会話分析、ライフストーリー論などの各種の方法論の有効性等について検討する。	酒井 朗 (お茶の水女子大学教授)	酒井 朗 (お茶の水女子大学教授)
3	いじめ	いじめ問題は、時には自殺にまで子どもを追いつめるような極めて重大な問題となっている。本講義では、先ず、いじめの原因論といじめをめぐる社会的反応について紹介する。さらに、いじめ問題を教育現場ではどのように指導して行くべきなのかについて、集団形成やコミュニケーション能力の育成という点から考えてみたい。	油布佐和子 (福岡教育大学助教授)	油布佐和子 (福岡教育大学助教授)
4	不登校	不登校という現象は子どもが「学校に行かないこと」の背景や、それへの解釈が歴史的に変遷してきた結果としてある。現在学校に行かないことは、矯正すべき病理としてよりも、調整や介入の必要な状況と位置づけて対処されているが、こうした状況とそれがもたらすものについて、多面的に考える。	伊藤 茂樹 (駒澤大学助教授)	伊藤 茂樹 (駒澤大学助教授)
5	少年非行	近年、少年非行－特に凶悪な非行や特異な事件－が増えているようなイメージが流布し、学校の問題との関連で論じられることが多い。しかしこれはどこまで妥当なのだろうか。統計と事例の検討により、少年非行と学校の関連を冷静にとらえなおし、学校現場で何ができるか、何をすべきかを考える。	同上	同上

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
6	子どもの居場所	最近子どもが安心していられる場所に注目が集まり、「子どもの居場所」と命名されることが多くなった。ここではこの問題に対する関心の高まりの社会的背景を考察するとともに、塾や街角、インターネット空間など多様に広がる子どもたちの居場所の実態とそこで子ども達のあり様を各種の調査研究を紹介しながら検証する。	酒 井 朗	酒 井 朗
7	学校の秩序のゆらぎ	学校で教育活動を行うためには秩序が必要であり、従来そうした秩序が維持されていることはいわば自明のことだった。しかし近年「学級崩壊」「私語の蔓延」など、この秩序のゆらぎを感じさせる現象が報告されている。これらを通じて学校の秩序の脆さと、秩序がいかに可能かについて考える。	伊 藤 茂 樹	伊 藤 茂 樹
8	変わりゆく教師生徒関係	日本の学校に見られる教師生徒関係の特徴を他の社会との比較を通じて確認した上で、私事化、情報化、心理主義化が進む今日の社会において、これまでの教師生徒関係がどのように変容しつつあるか、そこに潜む問題は何かについて論じる。	酒 井 朗	酒 井 朗
9	教師のバーンアウト	近年増加している教師の休職やバーンアウトについて、アンケート調査・インタビュー調査の結果から、その実態を明らかにする。また、こうした教師の心身の問題を、多忙化問題と関連づけて考え、「事実としての多忙」と「多忙感」の違いを考慮しながら、教師の仕事や、教師の意識の変化・変質についても考察する。	油 布 佐 和 子	油 布 佐 和 子
10	教師集団	学級崩壊などの問題に対処するに当たって、その回復過程に、同僚の教師集団が多大な影響力を持つことが指摘されている。また、欧米でも個人主義的文化の克服という点から教師の同僚性が注目され始めている。わが国の教師集団の現状についてその実態を明らかにし、その後、教師の協働性・同僚性の確立の問題について検討する。	同 上	同 上
11	カリキュラムと学力	2002年度からの新しい学習指導要領の導入に伴い、学校現場ではさまざまなカリキュラム改革や授業改善に向けての試みが進行中である。そうした動向は、子どもたちの学力や学習意欲にどのような影響を及ぼすのか。果たして「生きる力」の育成という改革の目標に合致した成果が生みだされるのか。教室の現状から考えてみたい。	志 水 宏 吉	志 水 宏 吉
12	選抜と進路選択	現代社会において、学校は、社会的選抜の機関としての重要な役割を担っている。その役割は、学校臨床の場面では、生徒の進路選択をめぐる問題、それを支える進路指導の問題として立ち現れる。しかし、高等教育システムの変化・拡大、職業構造の複雑化や労働市場の急速な変化などを受けて、進路選択、進路指導の課題はかつてに比べ困難になりつつある。そうした問題の背景とどのような対処が可能かについて、ここでは検討する。	荻 谷 剛 彦	荻 谷 剛 彦

回	テ ー マ	内 容	執筆担当 講 師 名 (所属・職名)	放送担当 講 師 名 (所属・職名)
13	マイノリティー問題	わが国の学校文化の性質とその変革の可能性を考えるために、マイノリティー・グループに属する子どもたちの学校体験について検討を加える。具体的な考察の対象とするのは、「ニューカマー」と呼ばれる外国人児童生徒である。彼らにとってのぞましい教育支援とはどのようなものなのかを見極めたい。	志水 宏吉	志水 宏吉
14	ジェンダーをめぐる問題	ジェンダーの視点とは、社会的・文化的に規定された女と男のあり方を意識的に見る道具である。学校現場において、性(ジェンダー)はどのような距離感をもって捉えられているのだろうか。またそのことが、臨床的問題の認識、解決への指向性にどのような影響を与えているのだろうか。ここでは、現場であるからこそ意識される<性>、現場だからこそ見えにくい<性>の側面に焦点を当て、教育問題・学校問題のなかに埋もれているジェンダー問題の探り方を考察する。	吉原 恵子 (関西福祉大 学助教授)	吉原 恵子 (関西福祉大 学助教授)
15	臨床学校社会学：課題と展望	臨床的なく知>の重要性が叫ばれる中、社会学という学問の立場から、学校の臨床的な問題にどのように取り組むことができるのか。14 回までの授業をもとに、学校臨床社会学の今後の課題と展望について討論する。	荻谷 剛彦	荻谷 剛彦 志水 宏吉 酒井 朗

＝学校臨床心理学（‘05）＝（R）

〔主任講師： 滝口 俊子（放送大学教授）〕

全体のねらい

教育現場における学校臨床心理学の理論と実際とを、紹介する。どの講師も教育に深く関わっている臨床心理学者なので、教育現場の諸課題に臨床心理学が如何に関与しているかが伝わるであろう。学校教育と心理臨床は、手を携えて、未来を担う子どもたちの成長に携わっているのである。学部の科目「スクールカウンセリング」をも視聴することをすすめる。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	学校臨床心理学の輪郭	教育の場である学校は、多様で複雑な人間関係を生きることが体験的に学習する場である。そこでは、お互いの心に触れ合いながら、個々の個性を形成してゆく。学校臨床心理学は、このような人間関係と一人ひとりの個性を育む専門的な関与であることを、概説する。	滝口 俊子 (放送大学教授)	滝口 俊子 (放送大学教授)
2	学校臨床心理学の実践思想	学校臨床心理学は、臨床心理学の理論や心理療法の実践方法を、たんに学校という教育の場に援用したり応用したりする領域ではない。臨床心理学の歴史がそうであったように、学校臨床心理学もまた、学校教育における多種多様な人間関係のなかで児童生徒の人間形成に苦闘する、まさに実践のなかから生まれてきたとすることができる。したがって、学校教育という独自の人間関係の場の在りようが、この学問の実践思想の基盤となっている。そして、現代という時代との相対のなかで、学校教育における人間関係の新たな実践思想の創出が強く要請されており、そうした要請の中心に「関係の場としての学校」という視角がある。今回は、臨床心理学の理論や心理療法の実践方法を瞥見しつつ、この視角について考える。	皆藤 章 (京都大学助教授)	皆藤 章 (京都大学助教授)
3	学校臨床心理学の実践	学校臨床心理学の実践は、実に多種多様な領域に及ぶが、児童生徒が抱える諸問題への教師の対応という関係の在りようが中心になってくる。問題を抱えて生きる児童生徒にいかに関わり、その世界を共に理解しようとするのか、そうした実践をとおして児童生徒がみずから生きる意味を創出していくプロセスに学校教育の本質がある。その際、児童生徒が抱える問題は、たんに解決すべき否定的な在りようとしてではなく、生きる意味が創造される契機とすることができる。このように、今回は、「問題」という表現が過去に背負ってきた否定的含意を払拭して、教師のみならず児童生徒に関わるすべての人間に共通する視点として、問題を「創造へと向かうテーマ」として捉える必要性について考える。	同上	同上

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
4	学校臨床心理学からみた学校支援システム	学校はそれ独自に成立している固定的な場ではなく、家庭・地域との緊密な関わり合いのなかで、きわめて動的に生きている場である。児童生徒をはじめとして、学校の場に生きる人間はすべて、家庭や地域と交流しながら日常を生きている。このような動的に生きた場として学校を捉えるとき、学校は家庭や地域の人的資源を積極的に活用して児童生徒の人間形成に資すると同時に、家庭や地域は積極的に学校を支援していく必要性を認識することが重要となる。このような、学校と学校外との人間的・動的交流をどのようなシステムで機能せしめるかについて考える。	皆藤 章	皆藤 章
5	学校支援に応える教師と学校臨床心理士の連携と課題	学校支援システムの一環として、スクールカウンセラー制度が進められ着実な成果をあげてきている。その典型例としての学校外部の専門家である臨床心理士との連携が、児童生徒はもとより教師自身ひいては学校に関わるすべての人にも求められている。けれども、学校内での臨床心理士の活動に関するシステムはまだまだ生成途上にあると言える。それは、学校がきわめて動的な場であり、臨床心理士の活動が人間関係を中心として機能するという意味で、人間と人間との出会いの一回性という性質が濃く反映されることに大きな要因がある。学校はこの要因を問題と捉えるのではなく、ここに学校教育の本質があるとする視角をもって、児童生徒が生きる知恵を創出するために、多様な教師と臨床心理士の連携と新しい学校教育システムを探求していく必要がある。今回は、こうしたシステムについて考える。	同上	同上
6	学校理解 (その1)	学校臨床心理業務で対象理解が重要なのは、個人心理臨床と同様である。これを学校理解（学校コミュニティ査定）と呼ぶ。学校理解は個人査定と共通点があり、学校コミュニティを対象とするゆえの特徴をも有する。個人査定には、査定面接、心理検査、行動観察などの方法がある。また、主訴や家族構成、生育歴、現病歴、相談契約・構造、相談経過など、学校理解の方法や着目点を、具体的に考えてみる。	鶴養 美昭 (日本女子大学教授)	鶴養 美昭 (日本女子大学教授)
7	学校理解 (その2)	若い学校臨床心理士（スクールカウンセラー）の方を招き、実際の学校コミュニティに接した体験による学校理解について伺う。この対話から学校理解の要点、着目点、学校理解を進める留意点を浮き彫りにしたい。受講者は、自分が学校に参入していく際に、何が起き、どう感じ、どう対応するかをイメージし、その作業を通じて、学校コミュニティをどのように見立てて、見通しをたてるかをシュミレートしていただきたい。	同上	同上
8	依存と自立のサイクルをともにした生徒理解	人間は依存と自立を繰り返しながら成長していくのであり（依存と自立のサイクル）、親や大人の役割は子どもに安心基地を供給するとともに、自立のための支援をすることである。このような考えをもとに、子育てや生徒指導における優しさと厳しさ、スキンシップ、保護と過保護、自立への支援などについて考えていきたい。	山下 一夫 (鳴門教育大学教授)	山下 一夫 (鳴門教育大学教授)
9	生徒指導における3つの立場と基本的態度	生徒指導（教育相談・生徒理解）においては、集団の規律やきまりをより重視する立場（検察官）、子どもの心や自発性をより重視する立場（弁護士）、そして双方の立場を尊重しそれらを統合する立場（裁判官）がある。この3つの立場をもとに生徒指導における教師の基本的態度について考えたい。	同上	同上

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
10	スクールカウンセラーによる学校支援の実際	スクールカウンセラーとして学校支援に関わった経験から、その具体的な実践活動について概説を行う。主なテーマは、《子ども対象の面接》《保護者の相談》《教師へのコンサルテーション》《外部専門機関との連携》《研修・講演活動》《広報活動・その他》とし、具体的な場面を紹介しながら論じたい。	伊藤美奈子 (慶應義塾大学助教授)	伊藤美奈子 (慶應義塾大学助教授)
11	スクールカウンセラーの業務の特殊性	スクールカウンセラーによる学校支援実践は、それ以外の心理臨床活動とは異なる特徴を持っている。教育臨床の特殊性と難しさを、《外部性（教師とは異なる専門性）と内部性（教師の一人として）》《関わりの三相（点の関わり・線への関わり・面への関わり）》という観点から考察してみたい。また、学校に根付き、教師と協働するために必要とされる資質や留意点についても述べる。	同上	同上
12	スクールカウンセラーの研修	専門職としてのスクールカウンセラーは、教育現場を理解し、関係者との連携をスムーズにするために、日夜研修に努めなくてはならない。カンファレンス、スーパーヴィジョン、研究会、教育分析など、その目的と方法について述べる。	滝口 俊子	滝口 俊子
13	スクールカウンセラーの倫理	スクールカウンセラーが学校現場で出会う大きな問題は、守秘義務というカウンセラーの倫理と、情報を共有して健全な教育を目指そうとする教育現場の要請との間の葛藤である。本講では、いくつかの具体的な事例を踏まえながら、特にこの問題について、どのような姿勢で望むべきかについて実践的に論じたい。	高石 浩一 (京都文教大学教授)	高石 浩一 (京都文教大学教授)
14	大学における学生相談	学校臨床のなかにあつて、大学における学生相談は、教育なのか発達援助なのか心理臨床なのかといった、根本的ないくつかの問題をはらんでいる。本講では大学という組織の中で行われる学生相談について、多角的な視野から切り込むことによって、大学における学校臨床心理学の基本的枠組み、見方や問題点などを詳らかにしていきたい。	同上	同上
15	学校臨床心理学の展望	京都大学名誉教授河合隼雄先生をゲストにお迎えして、永年の心理臨床の指導者としての経験から「教育とカウンセリングの関係」および「学校臨床心理学の課題と展望」についてお話いただき、本講座のまとめをする。	滝口 俊子	滝口 俊子

＝生涯学習論（‘02）＝（R）

－生涯学習社会の展望－

〔主任講師： 岩永 雅也（放送大学教授）〕

全体のねらい

近代国家では、例外なく、学校教育システムが人的資源の形成と配分の最も重要な装置またはエージェントとして機能してきた。そこでは、若年時に得た学歴を主な指標とする達成評価と選抜の結果が職業達成や社会階層を決定し、人生のありかたさえも決めてしまうようなメカニズムが働いていた。学歴社会と呼ばれる社会の形態である。しかし、高齢化や少子化、脱工業化といった大きな流れの中で、従来のそうした仕組みが十全に機能しなくなったことが指摘されるようになっている。学校教育の枠をこれまでのように固定的で絶対のものと考えない生涯学習の理念が、とりわけ現代の状況に適合的な考え方として重要視されるようになってきている。本講義では、そうした今日的な状況をふまえ、社会全体を見通すマクロな立場から、まず近代国家に必須であった人材形成の仕組みとしての学校と社会の歴史的な関係を概観し、それが変容を遂げつつある今日の諸事情を俯瞰する。ついで生涯学習に関わる社会的経済的な状況の変化を整理し、世界各国の生涯学習の現状を概観した上で、望ましい「学習社会」実現の展望と、それに向けての課題の整理を行う。本講義の履修にあたっては、ミクロな視点に立つ学部科目『生涯学習と自己実現』を履修しておくことが望ましい。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	生涯学習の出自	生涯学習の理念はどのような背景のもとで、いつ、どのようなものとして登場し、社会にどう受け入れられてきたのだろうか。ここでは、まず生涯学習の出自とその背景を整理し理念の変遷を跡付けることで、生涯学習を社会全体の視点から検討するという姿勢を明確にしていく。	岩永 雅也 (放送大学教授)	岩永 雅也 (放送大学教授)
2	近代国家と教育	近代国民国家は、例外なく学校教育制度を近代的国民の形成に利用してきた。そうした近代化における国民教育としての学校教育の意味と役割について検討する。その上で、特にわが国の明治初期に早生的に萌芽していた生涯学習的理念の国民教育的理念への転換についても考察を加える。	同 上	同 上
3	学歴と人材配分	わが国は、戦後教育改革以後、高度経済成長期を経て、学校教育による付与資格が労働市場での人材配分の大勢を決するという、いわゆる「学歴社会」のシステムを作り上げてきたといわれている。生涯学習の理念とは対極にあるともいえるその人材育成・配分システムについて検討する	同 上	同 上
4	学校教育の限界	戦後半世紀にわたり、わが国の社会化と文化の機能的中枢に位置してきた学校教育の功績とその意義を明らかにした上で、現代の学校が直面する教育力の低下の現状を分析する。さらに、教育の自由化、六年一貫制などそれを克服するための種々の試みについても、その有効性を検討する。	同 上	同 上
5	労働とリカレント教育	わが国は、伝統的に OJT(就業しながら技能を修得する)の比重が高い社会であった。しかし、生産技術や情報技術の著しい進歩は、OJT 中心の技能修得を困難にしつつある。労働とその技術習得を巡る環境変化と、新しいリカレント教育の潮流について紹介し、その今日的な意味を探る。	同 上	同 上

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
6	成人教育と社会教育	成人教育には、移民や長期滞在外国人などのニューカマーに対する再教育という政策的側面があったが、広義の社会政策の視点から、伝統的な成人教育の政策的な意義とその変遷、そして現代の生涯学習への継続性といったテーマを詳細に検討する。また、その日本的な形態である社会教育もすぐれて政策的な意味を持っていたが、現在、社会の総体的な多様化と価値の自由化の潮流の中で、従来型の社会教育はその使命を終えつつあるといわれている。ここでは、その歴史的な意義とその功罪を整理して考察する。	岩永 雅也	岩永 雅也
7	社会変動期の生涯学習	1990年代後半に入り、わが国でもさまざまな社会的変動の表出が顕著に見られるようになった。高齢化、少子化、情報化の著しい進展、産業の空洞化、長期の不況と雇用の低迷、グローバル化の進展等といった変動する今日の社会状況と、それらが生涯学習に与えるインパクトについて考察する。	同 上	同 上
8	余暇とスポーツ	労働環境の変化、あるいは主婦のライフコースの変化に伴い、自由裁量時間のあり方が質量ともに変化してきている。また、余暇活動の一環としてのスポーツ活動も変わりつつある。日本人の余暇生活とスポーツ活動の変化をさまざまな側面から検証し、それが生涯学習とどう関わっているかについて実証的に検討する。	同 上	同 上
9	生涯学習支援と行政	多くの行政主体では、社会教育からの継続性を保ちながら生涯学習に関する支援施策が行われている。行政による生涯学習支援の現状と問題点を具体的に考察し、あわせて生涯学習指導者のリクルートや育成が地域的にどのように行われているかについても検証する。また、生涯学習に関わるボランティア活動や情報提供、データベース（バンク）などについてもその現状を紹介する。	同 上	同 上
10	海外の生涯学習 (1)	わが国の生涯学習を考える上で、他の諸国の生涯学習の現状を知ることは重要である。そこで、前後二回にわたり世界各地の生涯学習の歴史と現状およびその特色を紹介する。ここでは、近代学校教育制度が発祥し、生涯学習理念もそこに起源を持つヨーロッパ諸国、特にイギリス、フランス、ドイツを中心に引き上げ、その伝統と社会変動との狭間で多様な可能性を模索する現状を紹介する。	同 上	同 上
11	海外の生涯学習 (2)	前回に引き続き、世界各地の生涯学習の現状とその特色を紹介する。ここでは、現在生涯学習の最先進国であるアメリカ、さらに、ヨーロッパから100年以上も遅れて近代化の歩みを開始したアジアの二つの国、中国と韓国を取り上げる。これらの国々では、社会経済的発展の過程もヨーロッパ各国とは大きく異なり、また、それ故に生涯学習を取り巻く環境も著しく違っていた。それらの国々における生涯学習の状況を把握することによって、ヨーロッパ諸国とは異なる観点から生涯学習システムを見ていく。	同 上	同 上
12	世界の遠隔高等教育	世界には、放送大学と同様に何らかのメディアを利用して遠隔教育を行っている大学が数多く存在する。各国の生涯学習の重要な一翼を担うそれらの遠隔高等教育機関の現状を紹介し、その社会的背景と課題について検討する。	同 上	同 上

回	テ ー マ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
13	IT 時代の生涯学習	情報通信技術の飛躍的な進展によって、生涯学習者、とりわけ個別在宅学習者にとって非常に強力な学習ツールが提供されるようになった。IT 時代とも呼ばれる現代と近未来のメディア環境を概観し、IT 化の生涯学習への影響と今後の可能性について考察する。	岩永 雅也	岩永 雅也
14	生涯学習の評価と調査	生涯学習は、ややもすると施設や機会の提供、支援システムの構築といったインプットのみで語られがちであって、その成果や学習者の達成についての評価調査が見落とされる傾向にある。ここでは、生涯学習への評価および学習者の意識などを調査する具体的な方法について学習する。	同 上	同 上
15	「学習社会」実現への道	ごく近い将来、すべての定型的な教育が生涯学習を軸に統合され、学ぶことに関する限り規制や障害のない「学習社会」が出来ると期待されている。しかし、その実現のためには、多くの問題が解決、改善されなければならない。望ましい学習社会を実現するための条件、課題にどのように取り組んでいくべきかについて議論を展開する。	同 上	同 上

＝情報教育論（'02）＝（TV）

－教育工学のアプローチ－

〔主任講師：菅井 勝雄（大阪大学大学院教授）〕

〔主任講師：赤堀 侃司（東京工業大学大学院教授）〕

〔主任講師：野嶋 栄一郎（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

近年、情報化社会の進展によって、学校教育から高等教育に至るまで、情報教育は必須のものとなり、「情報教育論」の構築が要請されるようになってきた。そこで、本科目では情報通信技術の進歩、社会の情報化、学校教育の情報化などと、人間の学習や発達、また必要な能力の育成との相互関連を考えながら、情報教育論を論述する。なお、副題に示すように、教育工学のアプローチによる。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	情報教育論の概説	初回なので、情報教育論の概説を試みる。近年、情報教育論が、教育学の一分野としてなぜ登場することになったのか、またその目的とするものは何か、さらに、学としての特徴は何かなどを論じながら、今回の講義の全体像を概説する。	菅井 勝雄 (大阪大学大学院教授)	菅井 勝雄 (大阪大学大学院教授)
2	メディアと学習～ 情報教育の準備期	情報教育が始まる前のメディアと人間の学習や発達との関係を含ませ、特に理論的な観点から取り扱う。それは主として、教育工学におけるコンピュータ利用の教授・学習システムの変遷などを論じる中で示される。それはまた、教授環境から学習環境の重視への方向でもある。	同 上	同 上
3	情報と学習～情報 教育のスタート	情報教育が我が国で始められてからの人間の学習や発達との関係を、特に理論的な視点から取り扱う。ここではまた、1980年代の分散型情報化から、1990年代のネットワーク型情報化への進展とも関連し、情報教育の在り方の変質とその発展が論じられる。	同 上	同 上
4	学習環境のデザイン	メディア利用の学習環境の構成と広がりに関して、その実際を3例あげて論ずる。最初に、小学校における算数理解システム、続いて、コンピュータ支援協調学習システム、最後にテレビ放送とインターネット融合システムをとりあげる。	同 上	同 上
5	情報とリテラシー	社会生活を送る上で必須の能力がリテラシーであるが、情報社会では情報の読み書きに相当する情報リテラシーが注目されるようになった。また、メディアリテラシーを含め、広く情報技術を活用する能力が求められてきた。その考え方について述べる。	赤堀 侃司 (東京工業大学大学院教授)	赤堀 侃司 (東京工業大学大学院教授)
6	情報教育のカリキュラム	我が国では高等学校に普通教科「情報」と専門教科「情報」が新設されて、その教科が実施されようとしている。その教科のねらいについて概説する。特に普通教科「情報」については概念が広い。その背景となっている考え方と特徴について述べる。	同 上	同 上
7	小・中学校における 情報教育の実際	教科の中で教科目標を達成する教育方法としての情報手段の活用と、情報技術を活用する情報教育が実際の小・中学校で展開されている。この実践を紹介すると同時に、情報手段の活用と情報教育について、その特徴といくつかの課題について述べる。	同 上	同 上

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
8	教育の情報化の進展	我が国では教育の情報化推進のために、100校プロジェクトやEスクウェアプロジェクト、こねっと・プランなど実践的な取り組みがなされてきた。また、教員研修、情報処理技術者派遣、ボランティア活動支援などの取り組みについて、その盛夏と課題について述べる。	赤堀 侃司	赤堀 侃司
9	ネットワーク利用による遠隔教育	該当年齢人口に占める大学在籍率が50%を超えるユニバーサルアクセス型の時代を迎え、オンキャンパス型の大学にオフキャンパス型の大学の機能を併せ持つ必要性が生じてきた。早大、スタンフォード大の事例を中心に、遠隔教育の具体例と将来展望を試みる。	野嶋 栄一郎 (早稲田大学 教授)	野嶋 栄一郎 (早稲田大学 教授)
10	デジタルネットワークを利用したテスト	ニュージャージー州プリンストンにあるETSを訪問するかたちで、コンピュータベースドテストの基礎理論、テスト項目の収集と分析、管理、コンピュータ環境について詳しく解説し、さらに将来的な可能性について言及する。主幹研究員村木英治氏に解説依頼する。	野嶋 栄一郎 村木 英治 (ETS主幹 研究員)	野嶋 栄一郎 村木 英治 (ETS主幹 研究員)
11	大学における教育方法の改善	デジタル化された教育環境、教育方法の紹介に焦点化する。(1) デジタルコンテンツの例として早稲田大学演劇博物館の事例、(2) バーチャルリアリティによる教育事例、(3) 電子教科書による授業事例を柱に、それらと大学教育の改善を関連づける。	野嶋 栄一郎	野嶋 栄一郎
12	情報技術の進展	通信ネットワークの広帯域化や携帯端末の普及など、情報技術の進展について展望する。さらにEUの国際マルチメディア教科書プロジェクトや台湾情報通信科学館などを事例に、新技術の教育利用や技術リテラシーの育成について考察する。	前迫 孝憲 (大阪大学教 授)	前迫 孝憲 (大阪大学教 授) 下條 真司 (大阪大学サイ バーメディア センター教 授)
13	地域の情報化	タイやメキシコ、世界銀行などの遠隔教育プロジェクトや、中国教育テレビに連動した衛星インターネット、「松原式」ネットワークなどを事例に、地域教育ネットワークについて考察する。さらに、米国スーパーネットなどを事例に、規制緩和と教育の役割について検討する。	前迫 孝憲	前迫 孝憲 吉田 雅巳 (メディア教育 開発センタ ー助教授)
14	情報化の光と影	情報化の進展は、産業の生産性を高め、我々の生活に便利さや楽しさをもたらす一方で、人間が元来持っていたさまざまな能力を失わせ、非倫理的な行為や犯罪を誘発するとされる。こうした情報化の光と影について研究や実践の実際を紹介する。	坂元 章 (お茶の水女 子大学助教 授)	坂元 章 (お茶の水女 子大学助教 授)
15	情報教育の課題	最終回なので、これまで講義してきたことを踏まえ、情報教育の課題をめぐって、3人の主任講師を中心として、座談会形式でいくつかの項目について討議する。情報技術、情報デバインド、教員養成、研究方法論などをとりあげる。	菅井 勝雄 赤堀 侃司 野嶋 栄一郎	菅井 勝雄 赤堀 侃司 野嶋 栄一郎

＝発達心理学（'02）＝（TV）

〔主任講師： 内田 伸子（お茶の水女子大学大学院教授）〕

全体のねらい

ヒトは回りの人々との対人的やり取りを通して人間化、文化化への道を進む。人間は生物学的な制約を受けながらも環境刺激によって道程が規定されながら発達を遂げる。発達の可塑性はきわめて大きく、しかも生涯発達し続ける存在である。本書は「生涯発達」・「文化」・「生涯学習」の視点に立ち、気質、感情、対人関係、自己意識、言語、思考など発達の諸相を描き出す。各章末には、その章で扱われた領域での代表的な研究を取り上げ、「研究ノート」として解説することにより、その領域における問題意識を具体的な研究課題にまで収斂させる方法論を読者に知らせることをめざしている。

回	テーマ	内容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	発達心理学の課題と方法	1950年代以降の発達心理学研究の動向を概観して発達心理学がどのような科学でありどんな役割をになっているものかを考察する。さらにそうした課題がどの程度達成されているのか、今後なすべきことはどのようなことであるかについてもふれる。次に発達心理学研究において用いられる主要な方法について紹介する。最後にこの科目全体の構成とそのねらいについて説明する。	三宅 和夫 (北海道大学 名誉教授)	三宅 和夫 (北海道大学 名誉教授)
2	発達初期の子どもの能力	かつては新生児・乳児は無能な存在とみなされていて心理学の研究はこの時期のことをあまり扱っていなかった。ところが20世紀半ばを過ぎるころから、この時期の発達についての研究が盛んになり、新生児・乳児が素晴らしい能力を持った能動的な存在であることを明らかにするような実証的資料が次第に蓄積されてきた。ここではこうしたことについて具体的に研究例をとりあげて説明し人間の発達における発達初期の意義を検討する。	同上	同上
3	気質と行動の発達	誕生後間もない新生児であってもその行動特徴においてかなりの個体差が見られることが知られている。それは生得的なものであると考えられるが、養育にあたる母親などに少なからず影響を及ぼすものである。ここではこのような生得的基礎をもつ行動特徴すなわち気質についての主要な研究を紹介し、さらに発達初期の気質がどのようにその後の行動発達とかかわっているかについて考察し、さらにそのことを通じて発達の安定性・可変性の問題についても検討する。	同上	同上
4	世界を捉えるしくみ：象徴機能の発生とことばの獲得	子どもは誕生時から感覚器官をフル回転させて環境と活発にやりとりしている。環境との感覚運動的なやり取りを通じて外界の認識を形成しているが、乳児期の終わりから対人的やり取りの中で視覚的共同注意や社会的参照、3項関係の成立に伴い、象徴機能が獲得され内面世界が成立するようになる。ことばは象徴機能を基盤に、生物学的制約と環境からの入力により獲得されていく。ことばの獲得は世界認識や対人関係の拡大をもたらす。	内田 伸子 (お茶の水女子大学大学院 教授)	内田 伸子 (お茶の水女子大学大学院 教授)
5	情動の発達	情動表出や情動知覚の研究、情動のダイナミックシステムのアプローチを紹介しながら、情動の古典的理論と最近の機能主義的理論を比較しながら説明する。情動と行動との関係について、情動とコミュニケーション、情動と社会的行動、不安やディストレスの制御、ディスプレイールの発達について研究を中心に説明する。また、情動の個人差について、気質と情動の関係、情動体験と自我、情動の文化差という観点から紹介する。	氏家 達夫 (名古屋大学 教授)	氏家 達夫 (名古屋大学 教授)

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
6	他律から自律へ： 母子システムと自律の発達	自律性の発達を生涯発達と文化の観点から説明する。自律性は文化的文脈の中で、子どもの状態の調整やしつけなどの親要因と、気質特徴、愛着、反抗などの子ども要因との相互作用を通じて発達する。子どもは他律的存在から自律的存在へと発達する。自律性は大人の発達課題でもある。子どもを育てる過程で親自身も成長する。そこには自律性の部分的な放棄が含まれる。成人期において自律と他律の新たなバランスが求められる。	氏家 達夫	氏家 達夫
7	対人関係の発達	乳幼児期から老年期までの対人関係の発達を扱う。人は生まれたときから家族の一員としての生活が始まり、家族の中での人間関係は発達にとって最も重要な環境を構成する。家族にとっても新たなメンバーの加入により、そのシステムの変容が起こり、メンバーそれぞれの年齢の変化にともないメンバー相互の間の関係の質も大きく変わっていくプロセスとメカニズムを考察する。また、家族の外の人間関係、特に仲間関係の影響も触れる。	白井 博 (北海道教育 大学教授)	白井 博 (北海道教育 大学教授)
8	想像力の発： 思考能力の拡大と ディスコースの成 立へ	子どもの拡散的思考、想像力は生活や対人的やり取りの中で発達していく。想像力の発達と軌を一にして、幼児期後期には、世界や自己を語る手段としてのディスコース（談話や文章、物語）が成立する。幼児初期～児童期にかけての、ディスコースの表現形の変化を追跡し、その表現をささえる創造的想像のメカニズムや認知機能について考察する。またの成立を支える創造的想像のメカニズムの発達について表現形の変化から探る。	内田 伸子	内田 伸子
9	日本の幼児教育実 践の特徴	日本の幼児教育の実践の特徴を主にアメリカのそれとの比較を通して描き出していきたい。具体的には最近のアメリカと日米の研究者たちの日米の幼児教育場面のエスノグラフィーや調査データを利用しながら、実際の教師の実践の方法、その背後にある教育の目標、児童観の違いを考察する。特に、教師のもつ土着的な教育方法に関する素朴理論（ethnopedagogy）を取り上げて、分析を行う。	白井 博	白井 博
10	学校文化のディス コース： 書くこと・考えるこ と	子どもが生活の中で育んできた一次的ことばは読み書き能力の獲得にもなって二次的ことばへと重層的な発達をとげる。読み書き能力によって時間・空間を隔てたコミュニケーションが可能になるとともに思考の手段として内面世界に深く関わるようになる。読み書き能力を獲得するという課題は、学校文化に適應することにつながっている。作文の情報処理過程や自分史の意義の考察に基づき、書くことと考えること・生きることの関わりについて探る。	内田 伸子	内田 伸子
11	学校での学び	学校で学ぶこととして、いわゆる認知的学習のほかに、社会的なスキル、さらには知的な課題解決の構えに影響する動機づけシステムの発達について、学校文化と関連づけて考察する。また、学校における社会化の重要な agent としての教師の子どもとの相互交渉のしかた、教師自身の職業的な発達についても考える。その場合、教育実習の効果を含め、教師教育の在り方についても生涯発達の視点から考察する。	白井 博	白井 博

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
12	メディアからの学び	現代社会は産業によって供給される情報伝達手段や情報表現手段が多数あり、大人と同様子どもも長時間接し、特に家庭や学校などを越えた広い世間への窓になっている。最初に接する活字メディアとしての絵本は親子の人間関係の中で本への導入を行う。その後、読書へと発展する。テレビ、テレビゲームは映像的メディアとして新たな活動を生み出し、子どもに大きな影響を与える。電話やインターネットが新たな人間関係を作り出している。	無 藤 隆 (お茶の水女子大学教授)	無 藤 隆 (お茶の水女子大学教授)
13	「臨床実践の発達の基礎」	発達心理学は、子どもから成人の発達を検討することを通して、発達の歪みやそこで生じる心理的問題の発生的根拠を示す。だが、その発生の要因は単一であることは滅多にない。多くの「危険(リスク)」要因が関与し、また要因に影響される度合いの個人差も大きい。例として、うつ病や食異常の問題を取り上げ、発達のリスク要因を解説する。また、家族や学校におけるメンタルヘルスの保持への教育や介入の代表的方法を紹介する。	同 上	同 上
14	自己意識の発達	1歳頃の身体的自己の成立から初め、4歳頃に心が実体として存在することを理解する。そこから児童期に掛けて、自己概念が次第に成立する。児童期の後半に入ると他者との比較による自己概念が成り立ち、自己尊重感の程度が重要になる。思春期に入ると、孤独感も感じるようになり、自己の見直しが行われる。その模索から成人期に入る頃に大人としてどう生きるかの自覚が成り立つが、その見直しは生涯にわたり繰り返されるだろう。メディア毎に年齢を追って記述する。1) 絵本への接触、2) 本への導入、3) テレビメディアへの接触とテレビ的世界への導入、4) テレビゲームと架空世界の楽しみ、5) 電話とインターネットが変える人間関係のトピックスを取り上げる。	同 上	同 上
15	成熟と老い： 成人期～老年期の 学び	中年期の発達について、既存の理論や研究と同時に、現在行っている追跡研究からいくつか事例を紹介しながら説明する。エイジングは発達ととらえることができる。個人は、さまざまな変化にアクティブに適応している。それは、心理的適応という側面と新たな技能の習得という側面からなっている。個人は老いるということを学ぶのである。また、心身ともに健康を保っている高齢者の研究を紹介し、豊かな老いについても考える。	氏家 達夫	氏家 達夫

＝才能教育論（‘02）＝（TV）

－スポーツ科学からみて－

〔主任講師： 宮下 充正（放送大学教授）〕

〔主任講師： 平野 裕一（東京大学助教授）〕

全体のねらい

遺伝的に規定されている範囲内で、子どもの能力を最大限に伸ばすためには、個人の個性を考慮し発達の度合いに応じて、もっとも適切な教育が提供されるべきことはいままでもない。この科目では、個人の成長・発達と密接な結びつきをもつスポーツの分野に限定して、高度な能力を効率的に育成するためにはどのような教育がなされるべきかを、スポーツ科学関連分野で蓄積されてきた知見に照らして考えたい。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講 師 名 (所属・職名)	放送担当 講 師 名 (所属・職名)
1	才能は教育できるか	才能とは、特異的な目的を達成させることのできる、遺伝的な要因が強く影響するが訓練すればそれだけ高度になる能力と定義する。そして、才能教育の目的は、それぞれの特異的な分野において優れた成果を生み出すことができるように能力の向上をうながすことである。スポーツにおける才能教育について、今後解明されるべき問題点を挙げる。	宮下 充正 (放送大学教授)	宮下 充正 (放送大学教授)
2	スポーツパフォーマンスの制限因子 －体力と運動技術－	スポーツの成績は、運動に必要とされるエネルギーの産生能力と、エネルギーを運動の目的に応じて効率よく利用する能力とによって決まる。この能力には向上の著しい年齢がある。その年齢における教育の成果をいくつかのスポーツを例に検討する。	平野 裕一 (東京大学助教授)	平野 裕一 (東京大学助教授)
3	運動能力とその発達における遺伝性	運動を遂行する能力は、どの程度先天的に決定され、あるいは、どの程度後天的に開発可能なのだろうか？最近、分子遺伝学的研究、双生児法・発育発達学を組み合わせた研究などにより、新たな知見が蓄積されつつある。それらの成果を、紹介、解説するとともに、今後すすめられるべき研究の方向を提示したい。	山本 義春 (東京大学教授)	山本 義春 (東京大学教授)
4	随意運動の獲得 －学習と発達－	運動は筋肉の活動によって発現するが、その活動は脳・神経系の働きによって制御される。これら脳・神経系の働きの中には、恒常性維持という観点から自動的かつ不変（系統発生的）と考えられているものもあれば、適応・学習といった現象で表現されるように、可塑性に富んだものもある。脳・神経系の作用機序に関する最近の研究動向を紹介し、例えば自動性と可塑性との境界など、解決されるべき課題を考えていきたい。	同 上	同 上
5	系統発生的動作か、 個体発生的動作か －歩くと走る－	誕生して1年目ぐらいから歩け、2年目ぐらいから走れるようになる。これら歩くのと走るは、特別な訓練をしないでも身につく動作なのだろうか。歩く、走るの運動力学的解析から、この問題を探っていきたい。	中村 好男 (早稲田大学教授)	中村 好男 (早稲田大学教授)
6	個体発生的動作の 学習 －跳ぶ－	跳躍動作は、段差のあるところから跳び下りる、水溜りを跳び越すといった経験を経て身につく。跳ぶ機会の減少した中で成長する子どもの跳躍能力は年々低下している。跳躍動作の解析から、この問題を提起したい。	深代 千之 (東京大学助教授)	深代 千之 (東京大学助教授)

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
7	個体発生的動作の 学習 －水泳－	学習しなければ身につかない代表的動作である泳ぐについて、まず、初心者が泳ぐという動作を身に付けるまでと、世界のトップレベルの記録が出せる泳力を身につけるまでの経過を解説する。	宮下 充正	宮下 充正
8	個体発生的動作の 学習 －投げる－	上手にボールを投げる動作の学習は人間にしかできない動作である。この事実には直立二足歩行という人間の最も基本的な身体的特性が深く関わっている。人間には誰にでも上手に投げられる可能性が与えられているが、適正な年齢に適正な指導や練習がなされないと十分にその可能性を生かすことはできない。	桜井 伸二 (中京大学教授)	桜井 伸二 (中京大学教授)
9	個体発生的動作の 学習 －止まっているボールを打つ	打つ動作には、木づちで叩くといった動作から、止まっているボールを長いクラブで打つゴルフがある。ゴルフはボールを遠くへとばすばかりではなく、その方向も重要である。アメリカにおけるゴルファーの教育機関での指導過程を紹介し、その合理性を追求したい。	深代 千之	深代 千之
10	個体発生的動作の 学習 －動いてくるボールを打つ	動いているボールを打つ動作には、飛んでくるボールを打つテニスのストロークや野球のバッティングなどがある。野球王国アメリカでの野球選手の養成課程を紹介し、飛んでくるボールを正確に打つ才能を伸ばす視点を提示したい。	平野 裕一	平野 裕一
11	力強さの増強 －レジスタンス・トレーニング－	好成績を収めるためには、発揮する力が大きい方が有利なスポーツの競技種目がある。このような筋力の向上に関与する栄養、運動、休養などの因子について解説し、レジスタンス・トレーニングの今後を展望する。	同 上	同 上
12	ねばり強さのトレーニング	運動を長時間続けていても、からだの動きの速さが低下しない方が有利なスポーツの競技種目がある。このような持久力に関与する生理学的機能について、マラソンのトップランナーを例にあげて解説する。	八田 秀雄 (東京大学助教)	八田 秀雄 (東京大学助教)
13	中高年齢者に見られる教育効果 －未開発だった才能の発掘－	長寿社会となり生涯学習が盛んになった。そこでは、さまざまな運動講座が開催されている。成長期に経験しなかった動作様式が中年を過ぎても身につく事実から、才能教育の可能性を探ってみたい。	中村 好男	中村 好男
14	身体障害者のスポーツ参加から才能教育を考える	社会福祉の一部考えられていた障害者スポーツの中からも競技スポーツ志向が芽生え、パラリンピックに参加するスポーツエリートのパフォーマンスは驚くほど高度である。健常者と異常者という二大別は無意味になりつつある。個人の能力を最大限に伸ばす過程について障害者のスポーツ参加から考える。	桜井 伸二	桜井 伸二
15	個性と成長段階に応じた運動指導の主眼	1個の細胞から増殖し、複雑な組織体となって誕生した個人は、その遺伝的制約の範囲の中で、成長という時間と環境という刺激とによって影響されながら成熟していく。その過程で教育はどうあるべきか考えていきたい。	宮下 充正	宮下 充正

＝道徳性形成論（‘03）＝（R）

〔主任講師： 大西 文行（横浜市立大学教授）〕

全体のねらい

この科目では、道徳性発達・形成に関する諸問題を考えることにする。道徳性をどのように考え、定義するかは大変困難な問題であるが、この科目では、「自他の福祉、幸福に資する人格的資質」と考え、講義の前半では、それらが諸学や社会でどのように概念化され、また道徳性は、形成過程がどのように記述され、測定されているかについて考える。個人は、他者、文化、社会との関係で発達、形成、生成されることから、他者、文化、社会との相互作用関係で道徳性発達・形成を考える必要がある。講義後半では、これらの相互作用で道徳性発達・形成について考察し、「自他の福祉、幸福に資する人格的資質」の形成を考察する。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	道徳性とは	道徳、道徳性の語源、語義、哲学、倫理、心理学の諸学から考察する。	大西 文行 (横浜市立大学教授)	大西 文行 (横浜市立大学教授)
2	道徳性発達・形成諸理論 1	道徳性を人間の精神機能、認知・知的、情意的、意志的、行為的側面から考える。 道徳性の認知的側面として、道徳的判断、推論についての心理学諸理論を考察、検討する。	同上	同上
3	道徳性発達・形成諸理論 2	道徳性の情意的側面として、良心、共感性、罪障感、配慮、思いやりなどについての心理学諸理論を考察、検討する。	同上	同上
4	道徳性発達・形成諸理論 3	道徳性の行為的側面、人格について心理学諸理論を考察する。	同上	同上
5	道徳性発達過程	道徳性の認知的側面についての発達過程を考察する。	同上	同上
6	道徳性形成過程	道徳性の情意的、行為的側面の発達・形成過程を考察する。	同上	同上
7	道徳性測定 1	道徳性発達の認知的側面の検査を考察し、その測定法の取得を目指す。	同上	同上

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
8	道徳性測定 2	道徳性発達の情動的側面および HEART について考察し、その測定法の取得を目指す。	大西 文行	大西 文行 明田 芳久 (上智大学教授)
9	道徳性形成と家庭教育	道徳性発達、形成の要因について、発達、意図—非意図、体系—非体系の軸から考察する。 家庭における道徳的環境、しつけ、養育態度や人間関係を考察する。	同 上	大西 文行
10	道徳性形成と学校教育	学校教育での道徳教育と道徳性形成の関係を考察する。	同 上	同 上
11	道徳性形成と同輩関係	同輩、交友関係と道徳性形成の関係を考察する。	大西 文行 戸田 有一 (大阪教育大学助教授)	大西 文行 戸田 有一 (大阪教育大学助教授)
12	道徳性形成と社会・地域教育	社会、地域、共同体の道徳的環境と道徳性形成の関係を考察する。	同 上	同 上
13	道徳性形成と少子化、高齢化社会	少子化、高齢化社会と道徳性形成との関係を考察する。	同 上	同 上
14	道徳性形成と情報化社会	情報化社会と道徳性形成の関係を考察する。	同 上	同 上
15	道徳性形成と国際化、多文化社会	国際化、多文化社会と道徳性形成を考察する。	大西 文行 小林 亮 (玉川大学助教授)	大西 文行 小林 亮 (玉川大学助教授)

＝逸脱行動論（‘02）＝（TV）

〔主任講師： 清永 賢二（日本女子大学教授）〕

〔主任講師： 徳岡 秀雄（元京都大学教授）〕

全体のねらい

最近の青少年による逸脱行動に焦点を当て、Ⅰ．逸脱行動研究への導入、Ⅱ．逸脱行動研究の理論、Ⅲ．逸脱行動研究の方法、Ⅳ．少年の逸脱行動過程、Ⅴ．逸脱少年の司法過程、Ⅵ．逸脱研究の最前線と逸脱の行方、等について社会学及び社会心理学的視点から総合的体系的に論じる。本講義によって、少年たちによる逸脱行動の世界的スケールに立った最新の知識を学ぶことが可能となると同時に、逸脱行動への受講生自身の知的探求行動を促進活性化することを目的とする。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	逸脱行動の世界	少年たちによる逸脱・非逸脱・反逸脱行動が境界性を喪失しながら膨張を加速化している。何が逸脱行動か、何が逸脱行動でないのか。社会全体の価値や規範の混乱を背景に、少年たちの中での逸脱世界も揺れ動く。逸脱世界を俯瞰し、そこでの少年たちの逸脱的行動実体についての全体的相貌と問題を論じる。	清永 賢二 (日本女子大学教授)	清永 賢二 (日本女子大学教授) 徳岡 秀雄 (元京都大学教授)
2	逸脱研究の今日的意義	逸脱は悪か。悪とは何か。悪は悪か。悪は不正義か。悪は時として正義ではないのか。それでは正義とは何か。一面的皮相的「逸脱＝悪」論を検証し、少年による逸脱行動の現実的作用と意味を問い直す。	岩永 雅也 (放送大学教授)	岩永 雅也 (放送大学教授)
3	「非行少年」の発明	非行という概念は、少年観の成立と共に、犯罪と貧困とは相互因果的であり、しかも幼少期の経験に大きく規定されているとの認識に基づいて、刑務所から犯罪少年を、救貧院から浮浪児を救出し、両者のために少年救護収容施設が創設される過程で生み出された。犯罪少年プラス貧困少年という非行の原型は、文化・時代による修正を受けながら、今日にいたっている。	徳岡 秀雄 (元京都大学教授)	徳岡 秀雄
4	実態・理論・政策	文化と歴史に規定された社会規範からの逸脱の一部が犯罪・非行として把握される。その実態を説明しようとするのが理論（仮説）であり、政策は理論を根拠に採用されるものだと思定される。しかし本章では、実態→理論→政策、という常識的見解よりもむしろ、現実には、政策→理論→実態、という流れなのだという点を強調したい。そこに大きく関わってくるのが、背後仮説という概念である。	同 上	同 上
5	社会的緊張理論の栄枯盛衰	社会学的犯罪理論が成長し、シカゴ学派とマートンのアノミー論とを統合した分化的機械構造論へと精緻化される。この理論（仮説）は時代の追い風を受けて、ケネディ政権のシンボリック政策にまで発展した。理論と政策との相互規定関係をたどるとともに、理論（仮説）は、さらに大きい時代的背景の中に位置づけてこそ意味を持ちえたのだという側面を明らかにする。	同 上	同 上
6	時代精神としてのラベリング論	政策・理論・実態、三者の相互規定性を如実に物語る一例として、1960年代後半から70年代のアメリカを席卷したラベリング論を取り上げる。伝統的実証主義の発想を逆転させたラディカルな主張が、時代精神の変化と共にたどった命運を記述する。また、ラベリング論の政策化は、意図的行為の意図せざる結果、潜在的逆機能の例示としても面白い。	同 上	同 上

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
7	逸脱行動の量的把握	具体的に逸脱行動をどの様に把握し理解するのか。1つの方法として官庁統計を中心とした各種量的把握方法がある。量で把握される「人間行動」の長所と短所、意義と限界、現実場面における具体的展開手法について論じる。	清 永 賢 二	清 永 賢 二
8	逸脱行動の質的把握	官庁統計を中心とした量的把握に対し、量では把握困難な日々の微細な少年たちの日常生活世界における逸脱行動に注目した質的把握方法がある。例えば、参加観察法を中心としたエスノメソドロジーは、逸脱行動研究にどのような新しい視界を開いて行くのか。今後更に必要とされるであろう逸脱行動の質的把握の深部に迫る。	同 上	同 上
9	逸脱行動の現象学	少年による様々な逸脱行動が噴出する。個々の逸脱行動がそれ自身で、あるいは複数の行動が相互に縋り纏れあいながら、時代時代の逸脱行動世界を紡いで行く。複雑に縋り振れた逸脱行動の現象を解きほぐし、歴史的時間や文化の変遷の中での逸脱行動の現象学的特性を解析する。	同 上	同 上
10	原因理解のための理論枠組み	少年はなぜ逸脱行動を働くのか。原因追及のための様々な理論枠組みが用意される。下位文化論、社会的葛藤論、社会的統制論の3理論を中心に、少年による逸脱行動の原因追及のための理論の整理と、こうした理論を下敷にした仮説モデルの設定を試みる。	同 上	同 上
11	逸脱行動の定量的定性的原因探求	理論は現実に検証されてこそ、その意味を深め、さらなる発展を可能にする。各種統計調査、また参加観察法などを通して定量的定性的に現実の少年たちの逸脱行動の原因を探っていく。	同 上	同 上
12	少年法の歴史と現在	「非行」の発明以来、少年保護体制が充実し、世界最初の少年裁判所がシカゴに創設されるまでの経緯を解説する。 続いて、日本における明治期以後の少年司法政策の発展過程を略述する。それは統制網の拡大・深化、すなわち刑罰を補完する保護処分から刑罰に代わる保護処分へ、さらには保護処分優先主義へと、保護処分対象者が増大する過程でもある。	徳 岡 秀 雄	徳 岡 秀 雄
13	これからの少年司法	2001年4月から施行された改正少年法は、5年後の見直しを規定している。少年司法の現在的課題を明らかにするためには、何か争点で何が変更されたのかを確認しておく必要がある。 また、改正点の一つに、近年急速に認識され始めた被害者への配慮がある。アメリカでの均衡・修復司法という実践が、日本文化の中で応用可能か否かを検討しておくことも重要である。	同 上	同 上
14	青少年問題の変質と対策のジレンマ	青少年問題全体の、またその重要な一部としての少年犯罪の歴史の変遷は、いずれも反対社会型から非社会への変質として特徴づけられる。それは、モラル・パニックを背景にして、対症療法的対策をとり続けてきたことの帰結であると解せられる。 道徳的社会化を成功させるためには、モラル・パニックに惑わされずに、あらゆる場面でタイプ A 的統制の可能性を追求することが肝要であると思われる。	徳 岡 秀 雄	徳 岡 秀 雄

回	テ ー マ	内 容	執 筆 担 当 講 師 名 (所 属 ・ 職 名)	放 送 担 当 講 師 名 (所 属 ・ 職 名)
15	逸脱研究「知」の最前線と少年たちの行方	少年による逸脱行動も21世紀を眼前に様々な変容を遂げようとしている。その変容に対し、世界の逸脱行動研究は、どのような対応をし、少年の逸脱行動のどのような側面に注目し、研究を進めようとしているのか。逸脱行動研究の知の最前線を世界的スケールで探る。同時にどうした「知」の窓を通して21世紀社会での逸脱少年の実像の行方を追う。	清 永 賢 二	清 永 賢 二

＝ 臨床心理学特論（‘05） ＝（R）

〔主任講師：橘 玲子（放送大学教授）〕

〔主任講師：齋藤 高雅（放送大学教授）〕

全体のねらい

臨床心理学特論では心理臨床活動の基礎となるさまざまな考え方（パラダイムや学派）や心理臨床に必要な知識や技法を述べる。心理臨床は多様な現場を持っているので（たとえば教育臨床とか病院臨床など）、それぞれの対象によって違いはみられるものの、こころの専門家として理解しておかなければならない基本的な視点が存在する。このような観点から、臨床心理学的知識や技法が心理臨床活動にどのように生かされていくのか、心理臨床行為の特異性は何か、また倫理の重要性などについて論ずる予定である。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	臨床心理学とは	臨床心理学の研究や活動分野、臨床活動と倫理の問題、教育と訓練について論ずる。	橘 玲子 (放送大学教授)	橘 玲子 (放送大学教授)
2	臨床心理学と 精神医学 1 臨床心理学の歴史	臨床心理学の誕生と精神医学との関係についてふれ、臨床心理学が確立する過程をアメリカと日本の例で述べる。	同 上	同 上
3	臨床心理学と 精神医学 2 心の病：神経症	心の病、特に神経症について、神経症の概念やその特徴、発症機制、治療について述べる。	馬場 謙一 (中部大学教授)	馬場 謙一 (中部大学教授)
4	臨床心理学と 精神医学 3 心の病：精神病	精神病の分類、主な精神病である統合失調症（精神分裂病）、躁うつ病、非定型精神病の紹介をする。	同 上	同 上
5	臨床心理学と 精神医学 4 心の病：心身症	心理的な負荷やストレスによって生ずる身体症状、心身相関の問題、心身症の種類、特異な心身症などについて述べる。	同 上	同 上
6	臨床心理学と 近接領域	臨床心理学にはたくさんの近接領域があるが、ここでは特に哲学と文化人類学について述べる。	橘 玲子	橘 玲子

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
7	臨床心理パラダイム	臨床心理学にかかわる4つのパラダイム、生物学的、精神分析的、認知・行動論的、人間学派的パラダイムについて述べる。	橘 玲子	橘 玲子
8	心のはたらき1 無意識の発見	心のはたらき方には無意識の問題を避けて通れない。無意識の発見、精神分析学的立場からとらえる人間像について述べる。	齋藤 高雅 (放送大学 教授)	齋藤 高雅 (放送大学 教授)
9	心のはたらき2 自我と無意識の 関係	無意識のはたらきでは、特に自我との関係が重要になってくる。不安と防衛、自我の防衛機制、症状形成などについて述べる。	同 上	同 上
10	心のはたらき3 イメージと身体	無意識には意識に至るさまざまなチャンネルがある。その中からイメージと身体感覚を取り上げ、心理臨床との関連を述べる。	橘 玲子	橘 玲子
11	心と身体： 性を考える	心と身体に直接係わるものとして、性がある。性について臨床心理学の観点から考えてみる。	同 上	同 上
12	ライフサイクル 論1 乳幼児期	発達の課題と心の問題について、精神保健および精神分析的発達論の観点から乳幼児期について述べる。	齋藤 高雅	齋藤 高雅
13	ライフサイクル 論2 児童期	先に続いて、児童期の精神保健と臨床心理学的特徴について述べる。	同 上	同 上
14	ライフサイクル 論3 思春期・青年期	思春期・青年期の臨床心理学的特徴について述べる。	同 上	同 上
15	ライフサイクル 論4 成人期・中年期	成人期・中年期の臨床心理学的特徴について述べる。	同 上	同 上

回	テ ー マ	内 容	執 筆 担 当 講 師 名 (所属・職名)	放 送 担 当 講 師 名 (所属・職名)
16	ライフサイクル 論5 老年期	老年期の臨床心理学的特徴について述べる。	齋藤 高雅	齋藤 高雅
17	心理アセスメン ト1 アセスメントと は	心理臨床とアセスメント活動について、特にアセスメント面接、心理検査、観察について述べる。	橘 玲子	橘 玲子
18	心理アセスメン ト2 アセスメント面 接	アセスメント面接の目的、すすめ方、その必要性など具体的な説明をする。さらに治療面接との違いにもふれる。	同 上	同 上
19	心理アセスメン ト3 心理検査：知能 検査と質問紙法	知能検査と質問紙法について代表的な種類や実施方法、それらの効用と注意点について述べる。	同 上	同 上
20	心理アセスメン ト4 心理検査：投影 法	臨床場面でよく使用されている投影法の種類と使用目的、その必要性和限界、心理療法との関連について述べる。	同 上	同 上
21	心理アセスメン ト5 報告書の書き方	アセスメント面接、心理検査などから報告書の書き方を事例で述べる。またクライアントに結果の報告をする際の留意点についても述べる。	同 上	同 上
22	心理療法1 精神分析療法	フロイト,S.に始まる精神分析療法について概説する。治療関係、抵抗、転移、逆転移、行動化、その他重要な概念について述べる。	馬場 謙一	馬場 謙一
23	心理療法2 分析心理学的心 理療法	ユング,C.G.に始まるユング派心理療法について、そのもっとも基本的なところを紹介する。	大場 登 (放送大学 教授)	大場 登 (放送大学 教授)

回	テ ー マ	内 容	執 筆 担 当 講 師 名 (所 属 ・ 職 名)	放 送 担 当 講 師 名 (所 属 ・ 職 名)
24	心理療法3 認知・行動療法	認知・行動療法における心理的援助活動の多様な方法について述べ、さらに心理臨床で使われる認知・行動療法の代表的な概念を説明する。ゲストを招いて放送する予定。	橘 玲子	橘 玲子 ゲスト 嶋田 洋徳 (早稲田大学教授)
25	心理療法4 来談者中心療法	ロジャーズ,C.による来談者中心療法の展開と特徴、その理念などについて述べる。ゲストと共に、ロジャーズの人柄や理論を紹介する予定。	同 上	橘 玲子 ゲスト 村山 正治 (九州産業大学大学院教授)
26	心理療法5 森田療法と内観療法	日本で発展した二つの心理療法、森田正馬が確立した森田療法と吉本伊作が開発した内観療法について紹介をする。	同 上	橘 玲子
27	心理療法6 臨床動作法	成瀬が発展させた臨床動作法について、特に身体を通しての心理的援助という視点を紹介する。ゲストと共に放送の予定。	同 上	橘 玲子 ゲスト 鶴 光代 (秋田大学教授)
28	心理療法7 児童の心理療法	児童の心理的な問題に対して行われる遊戯療法の紹介をする。また、養育者との面接の必要性と留意点について述べる。	滝口 俊子 (放送大学教授)	滝口 俊子 (放送大学教授)
29	心理療法8 集団心理療法	集団で行われる心理療法について、その考え方と実施の方法、個人療法との違い、適用範囲、今後の展開などについて述べる。	橘 玲子	橘 玲子
30	コミュニティと 心理臨床	学校臨床、被害者支援、HIV カウンセリングなど、コミュニティの中で展開する心理臨床は、これまでの心理臨床とは異なる視点が必要になっている。これらの代表的なテーマについて述べる。	同 上	同 上

＝臨床心理面接特論（‘02）＝（R）

－ 心理療法の世界 －

〔主任講師： 大場 登（放送大学教授）〕

全体のねらい

実際の心理臨床の現場で臨床心理学的面接ないし心理療法を行ってゆくにあたって、心理療法家(サイコセラピスト)にとってもっとも基本となる姿勢・留意点、そして、心理療法(サイコセラピスト)技法論の基礎について体系的に学習することを目的とする。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	はじめに：心理療法と生きた個性	臨床心理面接特論の講義を始めるにあたって、心理療法というものが、ある心理療法を創始した「ある生きた個人」「その個性」、そしてその心理療法の研修を受けた、あるいは、受ける、ある「生きた個人・生きた人間」「その生きた人間の心」を抜きにしては始まらない・語れないという根本について考えてみたい。	大場 登 (放送大学教授)	大場 登 (放送大学教授)
2	耳を傾ける・自然治癒力	心理療法という難しい理論やテクニカル・タームの勉強から始まると思う人もいるかもしれないが、実は、心理療法の基本は、「共感的に耳を傾ける」すなわちクライアントの話を傾聴することであり、そのプロセスの中で、クライアントの心の自然治癒力に働いてもらうことである。	同 上	同 上
3	心理療法の器（1）	心理療法という営みは、基本的にはサイコセラピスト（以下セラピストと略）とクライアントの間で生起するが、この営みを抱え、保護するものとして、「心理療法の器」というものが必要である。「レトルト」といったイメージを思い浮かべてもらおうとよいかもしいない。	同 上	同 上
4	心理療法の器（2）	「器」に保護される中で、心理療法のプロセスは初めて進行する。セラピストの守秘義務から始まって、面接時間・面接室・面接頻度、料金といった「面接構造」とも言われるもの、どのような心理療法機関（医療機関、大学相談室、個人開業）か、どのような心理療法の立場・姿勢に立ったセラピストか、その他様々の構成要素によって「器」のカラーが生まれてくる。	同 上	同 上
5	トピックス：心理臨床の現場から--① 私立心理療法機関	本講義では、トピックスとして、様々の心理臨床の現場での実際の心理療法、個々の現場固有の特徴・経験・感動・難しさについても紹介してゆくことにしている。第1回の今回は、カウンセリングセンターや心理療法研究所という形でサイコセラピーを開業している心理療法機関から学んでみたい。	同 上	大場 登 ゲスト： 三浦 和夫 (山王教育研究所)
6	初 回 面 接	面接の初回は、クライアントとセラピストの関係を創るために重要な基盤であるので、緻密な配慮を要する。また、初回面接には、その後の全面接過程が凝縮されていると言っても過言ではない。初回面接での留意点について、詳述する。	滝口 俊子 (放送大学教授)	滝口 俊子 (放送大学教授)
7	心理療法とアセスメント（1） -成人の場合	クライアントをセラピストの感情に流されずに理解するためには、アセスメントが必要である。アセスメントの理論と実際について説明する。時には、精神医学的な診断の必要であることについても触れる。	同 上	同 上

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
8	心理療法とアセスメント(2) -子どもの場合	年齢や性格によっては、心理検査を用いるアセスメントも行われるが、幼い子どもの場合は、プレイセラピーをしながらのアセスメントになる。また、親面接による情報も子どものアセスメントの素材となる。	滝口 俊子	滝口 俊子
9	セラピストの個性とクライアントの個性	クライアントも様々な症状・傾向・問題を持って心理療法機関を訪れるが、相対するセラピストも、当然の話ではあるが、様々な傾向・性格・カラーを持っている。そして、この両者の間で固有の心理療法プロセスが生じる。マニュアル通りにはゆかない面白さと困難さが、ここにあり、「相性」というテーマともとりくまなければならない。	大場 登	大場 登
10	トピックス:心理臨床の現場から--② スクールカウンセリング	スクールカウンセラーの役割と課題について、実際の体験を通して学んでみたい。	滝口 俊子	滝口 俊子 ゲスト: 香川 克 (京都文教大学・公立中学校 スクールカウンセラー)
11	セラピストの心に浮かぶ疑問・連想・イメージ・仮説	クライアントの姿・語ること・症状に「耳を傾け」ていると、セラピストの心に、いろいろな疑問・連想・イメージが浮かんでくる。あるいは、セラピストなりの見立てや仮説も、そして、時にはその見立てと抵触するイメージが浮かんでくることもある。	大場 登	大場 登
12	セラピストの問いかけとコメント	「共感的に傾聴」することが、サイコセラピーの一方の柱だとすれば、クライアントの話を傾聴しているうちに、セラピストの心に浮かぶ疑問・イメージや心の揺れ・仮説を見つめ、これに基づいて、クライアントの反応を慎重に見守りつつ「問いかけ」をしてゆくことが、もう一方の柱と言えるだろうか。	同上	同上
13	セラピストとクライアントの関係性(1)	クライアントの訴え、セラピストによる傾聴、両者の個性が、「器」の中で次第に「煮詰まって」くるにしたがって、クライアントの心の中の様々な「外的・内的人物像」は、心理療法で相対している「セラピスト」像と微妙なつながりを持ち始める。	同上	同上
14	セラピストとクライアントの関係性(2)	クライアントから投げかけられるクライアントの心の中の「外的・内的人物像」、そして、その「人物像」に伴う複雑で濃密、時に圧倒的な様々の感情は、セラピストの心に一定の心理的影響を及ぼさずにいることは決してない。かくして、セラピストの心もまた、「器」の中の「心理的なプロセス」に必然的に関与してゆくことになる。	同上	同上
15	トピックス:心理臨床の現場から--③ 医療機関(病院・クリニック・精神科・心療内科・小児科・NICUその他)	今回のトピックスは、医療機関での心理臨床の仕事の紹介である。医療機関といっても、多くの人々が思うような伝統的な「精神科・神経科」だけでなく、今日では、心療内科、小児科、いわゆる NICU(新生児集中治療室)そして、ホスピス、歯科領域でさえ、心理の仲間が働いている。	同上	大場 登 ゲスト: 橋本 洋子 (聖マリアンナ医科大学横浜 市西部病院 新生児病棟)

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
16	意識と無意識	心理療法の仕事をしていると、人間の心にはどうやら、自分で意識している「意識」領域を超えて、広大な「無意識」の領域が存在していると考えた方が理解しやすい経験に出会うことが多い。そして、この「無意識」には、今日あまりに安易に語られる「トラウマ」といった過去の記憶ばかりではなく、実は、「陰と陽」「影と光」「腐敗と生成」「魂」「癒し」「死」「エロス」「男性と女性」その他その他実に豊かなイメージが満ち溢れている。	大場 登	大場 登
17	プレイセラピー	言語表現の発達途上にある子どもとの面接において用いられているプレイセラピーについて、事例を交えながら紹介する。プレイセラピストに見守られながらの遊びは、短に情緒が開放される体験にとどまらず、自己治癒力が活性化するのである。	滝口 俊子	滝口 俊子
18	家族面接	クライアントは、家族と深く結びついているので、セラピーへの協力を得るために、家族とも面接することは重要である。家族成員の変化は、全体としての家族の変容と無関係ではありえない。家族面接の技法と留意点について述べる。	同上	同上
19	箱庭療法その他のイメージ療法	箱庭療法という言葉は、なんとなく耳にしたことがある人が多いかもしれない。もともとはチューリッヒの Kalf, D. が始めた心理療法技法であるが、日本に渡ってくるや、あっという間に全国の心理療法関係機関に浸透してしまった。それというのも、日本には、昔から「盆景」「箱庭」の世界があり、子どもだけでなく、成人もまた、自らの「世界」を非言語的に表現して、その「心のイメージ」と交歓・交感する伝統があったからのようである。	大場 登	大場 登
20	トピックス：心理臨床の現場から--④ 教育相談所・教育センター	今回は、全国各都道府県・各都市にあつて、子ども達の心理的問題（課題）・あるいはその家族の抱えている心理的困難に、必要な場合は学校と連絡をとりながら、心理療法的サービスを提供している「教育相談所・教育センター」の紹介である。	同上	大場 登 ゲスト： 甲斐 由美 (東京都板橋区教育相談所)
21	夢と癒し	古代ギリシャで、人々が心身の病に見舞われると、人々はアスクレピオス医神の神殿を訪ねた。斎戒沐浴の後、彼らは神殿最奥の小部屋で眠り、「癒しの夢」の訪れを待った。日本の古代・中世においても、人生の困難や病に出会った人々は、「貴船」や「石山」に詣でたり、「観音」さんに籠って、「癒しの夢」の到来を待った。	大場 登	大場 登
22	心理療法と夢(1)	古代ギリシャ・アスクレピオス神殿で当時の人々が夢による癒しを求めた営みはインキュベーションと呼ばれるが、Meier, C. A. によれば「このインキュベーションが2000年の眠りを経て Freud, S. の診察室・自由連想のカウチで復活した」と言われる。	同上	同上
23	心理療法と夢(2)	たしかに心理療法で、我々がクライアントの話に耳を傾けていると、「そう言えば今朝こんな夢を見ました」と報告されることが多い。「耳を傾ける」とは、この意味で、「心の最奥からの声」あるいは、「人間の意識を超えた領域からの声」に対してのことであるのかもしれない。	同上	同上

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
24	心理療法とコンステレーション (布置)	心理療法の面接でクライアントの語ることを注意深く聴いていると、クライアントの心の中、いわゆる内界で焦点化ないし、活性化されている、あるいは前景に出ているテーマと見事に対応する外的・現実的出来事が、クライアントの周囲で生じていることをよく経験する。だからこそ、一見「外的・日常的」だけと思われるクライアントの経験にも我々は、大きな関心を寄せて傾聴することができるとも言えよう。	大場 登	大場 登
25	トピックス：心理臨床の現場から---⑤ 産業・企業	職場におけるカウンセリング・産業カウンセリングの役割と可能性について検討してみたい。	滝口 俊子	滝口 俊子 ゲスト： 箕輪 尚子 (ソニー(株) 人事センター)
26	困難な事例との出会い	心理療法の営みを続けていると、セラピストは、必ずといってよいほど圧倒的な難しさ・無力感・不安を感じざるを得ないようなクライアントに出会うものである。それまでの僅かな、いわゆる成功経験など粉微塵に打ち砕かれるような出会い。「心の専門家」などという言葉は、以後、決して使えなくなるような経験。人間の心の闇は恐ろしい程に圧倒的で、且つ深いものである。	大場 登	大場 登
27	心理療法の面接と記録	困難な事例に出会った時には、面接記録を書くことさえ大変な心理的エネルギーを必要とする。記録には、クライアントのことよりは、セラピストを自称してきた自分の不安や無力感、あるいは面接の行われた晩に眠れぬ中で垣間見た「恐ろしい夢」が書き留められることも多いであろう。そもそも面接記録は、一体どのようなことを、どの程度書いたらよいのだろうか。	同上	同上
28	スーパーヴィジョン	心理臨床の研修にとって不可欠な体験として、スーパーヴィジョンがある。個人スーパーヴィジョンとグループスーパーヴィジョンの比較、スーパーヴァイザーの選び方や、スーパーヴィジョンの料金、期間について。さらに個人分析との異同についても述べる。	滝口 俊子	滝口 俊子
29	トピックス：心理臨床の現場から---⑥ エイズカウンセリング	今回のトピックスでは、いわゆるエイズカウンセリングにあたっている心理臨床の現場を紹介したい。仕事の困難さ・日頃感じていること・いわゆるエイズ患者やHIVウィルス感染者の方々に教えてもらったことなどが紹介される予定である。	大場 登	大場 登 ゲスト： 小島 賢一 (荻窪病院血液科)
30	おわりに：講師からのメッセージ	心理臨床の世界は、広大な裾野と、底知れぬ深さを持っている。それだけに、確かに非常にやりがいのある職業分野であると共に、一步間違えれば、いわゆるセラピスト側もがのみこまれてしまう危険と隣り合わせであるのも事実である。このことは、医学や法学等、生きた人間と真っ向から接する学問分野・専門職業分野の宿命と言えるかもしれない。最終回は、滝口と大場から、今後さらに心理臨床の勉強を続けてゆく人々へのメッセージを送りたい。	滝口 俊子 大場 登	滝口 俊子 大場 登

＝心理学研究法特論（‘02）＝（R）

〔主任講師： 鑪 幹八郎（京都文教大学教授）〕

全体のねらい

神学研究法の中でも、特に臨床心理学研究の困難さと重要性について解説する。臨床心理学においては、プライベートの問題および研究から得られる公共性との両立と相克が重要なテーマである。これらについて留意しながら、心理学研究法、なかんずく臨床心理学研究法について解説する。

回	テ　　マ	内　　　　　　容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	心理学および臨床心理学の領域と研究法	臨床心理学の領域を五つの領域、すなわちカウンセリング・心理療法・アセスメント・家族・コミュニティおよびグループに分けて考える。研究として重要なことは、まず何を知りたいかを明らかにすることである。研究の目的が明らかになれば、それをどのように達成するかという方法がおのずから明らかになるはずである。臨床心理学研究の特徴として、第一プライバシーや倫理的な問題をいつも頭に置いておくこと、第二に臨床経験が研究を左右する特徴があることを十分理解しておくこと。	鑪 幹八郎 (京都文教大学教授)	鑪 幹八郎 (京都文教大学教授)
2	研究法の背景	心理学研究法には個性記述（現象記述）的なアプローチと、法則定立的なアプローチがある。そして、自然科学の実証モデルを援用した数量化が重視されている。そこには、各事象が独立して発生し、しかも内容が等質であるという単純なモデルが基礎となっている。臨床心理学の研究においてもこのモデルが重要であることはいうまでもないが、臨床事例はくりかえしできない、個別のものであるため特別なアプローチが必要となる。	名取 琢自 (京都文教大学助教授)	名取 琢自 (京都文教大学助教授)
3	研究法① 面接法	具体的な研究法として、これから六つの方法を説明する。面接法をつかった研究法とはどのようなものであろうか。ここでは代表的な面接法である同一性地位面接と成人愛着面接を通して面接法による研究の意義と特徴を説明する。	平井 正三 (北大路精神分析オフィス)	平井 正三 (北大路精神分析オフィス)
4	研究法② 観察法	観察法による研究法を説明する。観察することによってどのように臨床的な資料を収集することが可能であるか、乳幼児の母子相互作用の研究を通してその意義と特徴を説明する。	同 上	同 上
5	研究法③ 質問紙調査法	現在数多くの質問紙が作られているが、主としてリッカート法による質問紙の構成法について解説する。また、臨床場面で使われる質問紙法や性格検査も紹介する。	香川 克 (京都文教大学助教授)	香川 克 (京都文教大学助教授)
6	研究法④ 投映法	投映法の特徴を、質問紙法や面接法など他の方法と比較しながら説明し、その意義について考察する。代表的な投映法について述べ、それらを用いた研究（あるいは、投映法自身に関する研究）について紹介する。	中村 博文 (京都文教大学講師)	中村 博文 (京都文教大学講師)

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
7	研究法⑤ 実験法	臨床心理学においても、実験による研究は重要である。その古典的一例として、ユングによる言語連想実験をとりあげ、心理学的事実を明らかにするための数量化の意義について解説する。また、実験研究を実施する際の基本概念（実験群・統制群など）についても説明する。	名取 琢自	名取 琢自
8	研究法⑥ 事例研究法	事例研究法は臨床心理学において最も重要な研究法のひとつであるが、この方法が実際にはどのようなものなのかは意外に知られていない。本講では、知識伝達と技術習得のちがいが、概念的知識と手続き的知識のちがいに注目しながら、臨床の場において人間を統合的にとらえる実践的方法として洗練されてきたこの事例研究法の意義と限界について検討したい。	同上	同上
9	領域と研究法① カウンセリング・心理療法	ここから講義の内容は各領域での研究法の適用に焦点をあてる。本講では、カウンセリング・心理療法における研究のトピックとして、以下のテーマを取り上げたい。 「診断・見立ての妥当性」「変容のプロセス」「技法の比較」「面接者とクライアントの相互作用」「治療者・クライアントの内的イメージ」「夢の変容」「スーパーヴィジョン」「教育分析」	鑓 幹八郎	鑓 幹八郎
10	領域と研究法② アセスメント	臨床心理学におけるアセスメントについて説明し、その必要性を述べる。アセスメントの諸方法を紹介したうえで、それらの妥当性について考える。またアセスメントそのものの妥当性検証について述べる。	中村 博文	中村 博文
11	領域と研究法③ 家族	近年、家族のあり方の急激な変化にともない、システムズ・アプローチ、構成的アプローチ、そのほか、様々な新しい視点が提案されている。これらの見方を資料的に具体化するための研究法について述べる。	鑓 幹八郎	鑓 幹八郎
12	領域と研究法④ コミュニティ・アプローチ	近年、学校や地域社会における心の問題が社会的に関心を集めている。臨床心理学はこの領域に様々な接近を試みている。その接近法から明らかにされる諸側面を、これまで述べた研究法を通して説明する。	香川 克	香川 克
13	領域と研究法⑤ グループ・アプローチ	グループを利用して、個人の成長や適応に資する活動が広い領域で活発に適用されており、グループアプローチ・集団心理療法などと呼ばれている。これらの活動の意義や特徴をらかにする研究法について解説する。	同上	同上
14	領域と研究法⑥ 統合的な理解の必要性	今回と次回にわたって、研究法と臨床心理学の領域の問題を再考する。研究法は研究目的によって決まること、臨床心理学においては統合的な理解が不可欠であることなど、これまでの研究法の講義をふりかえって再述する。	鑓 幹八郎	鑓 幹八郎
15	総括：臨床心理学研究の難しさと重要性について	臨床心理学研究法のまとめとして、研究の難しさと重要性について述べる。難しさに関しては、プライバシーや倫理の問題がかかわること、クライアントの福祉がかかわっていることがあげられる。重要性については、研究によって臨床的な活動が公共の知識として蓄積されること、さらに、人間存在における臨床の「知」という問題について貢献することができることを解説する。	同上	同上

＝ 社会心理学特論（'05）＝ (TV)

－ 発達・臨床との接点を求めて －

〔主任講師： 大橋 英寿（放送大学副学長）〕

〔主任講師： 細江 達郎（岩手県立大学教授）〕

全体のねらい

社会心理学は、パーソナリティ・社会・文化の3視点を有機的に統合して人間生活を理解しようとする学問分野である。この講義は三部から成る。第Ⅰ部で社会心理学に固有の視点と基本概念を概説する。第Ⅱ部ではライフサイクルにわたる社会化をめぐる多様なトピックをとりあげることで発達心理学との接点を探る。本講義が臨床心理プログラムのための講義であることを考慮して、第Ⅲ部では社会心理学と臨床心理学の接点を求めて地域のヘルスケア・システムに焦点をあてる。

回	テーマ	内容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
第Ⅰ部 社会心理学の視点				
1	社会心理学－人間科学の礎－	社会心理学は、パーソナリティ心理学・社会学・文化人類学の接合するところに位置する境界科学、学際科学である。それゆえに、活況をみせる一方で、この学問分野の定義、守備範囲、研究法をめぐっては多種多様な立場が併存している。この錯綜状況に整序をこころみ、マルチメソッドの必要性と、人間科学としての方法論上の独自性を強調する。	大橋 英寿 (放送大学副学長)	大橋 英寿 (放送大学副学長)
2	パーソナリティの社会心理学	パーソナリティ心理学は、「人間－状況論争」を通じ、内的要因と状況要因の相互作用を把握しうる視点や研究手法に関心が集まっている。こうした研究動向を紹介しつつ、「状況」に関する系統的な研究の必要とともに、人間行動の「コヒーレント（統合的）」な理解、いいかえれば、歴史的・動態的变化の把握に向けた、パーソナリティ心理学と社会心理学研究の連帯の必要性について考察する。	堀毛 一哉 (岩手大学教授)	堀毛 一哉 (岩手大学教授)
3	集団過程の社会心理学	人の主観的統一性と客観的影響性の同時的把握という社会心理学の基本的アプローチのうち客観的影響性の側面を集団過程から考察する。二者関係から多数者の組織的關係までの集団的影響関係を整序し、安定した状況下にある「集団」のもつ特徴を明らかにする。また、目標の共有、成員性、凝集性、組織性、持続性などの特徴がもたらす諸問題（集団浅慮、集団極化、服従）をとりあげる。	細江 達郎 (岩手県立大学教授)	細江 達郎 (岩手県立大学教授)
4	文化と人間の心身の関わり	「文化」とは、概念的には、(1) 物理・生態的環境（物質文明）、(2) 社会的環境（人と人との組織のされ方）(3) 内面的環境（人がその中に生きている意味世界）の三側面からなっているが、人々が生きている現実の文化環境は、それらがミックスしたものである。こうした文化環境が、人間の心身の発達にどのように関与しているかを(1) 胎児期の脳の発達と妊娠中の母体の健康、(2) 幼児期のメディア環境と脳、(3) 児童期・思春期における文化間移動に伴う問題などを中心に講じる。	箕浦 康子 (お茶の水女子大学客員教授)	箕浦 康子 (お茶の水女子大学客員教授)

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
第Ⅱ部 社会心理学の展開 - 社会化を中心に -				
5	社会化過程－発達 と時代史の交差－	人が文化規範を学習して社会の一員となっていく社会化過程は、パーソナリティ心理学、社会心理学、社会学、文化人類学の共通テーマである。社会化は幼少年期の受動的過程にとどまらず、ライフサイクル全体にわたる個性化の過程でもあり、さらに既存の社会と文化を変容させる要件にもなりうる。その実例をシャーマンの成巫過程を通して理解する。	大橋 英寿	大橋 英寿
6	職業的社会化と同郷ネットワーク	近代の社会変動にともなう村落から都市への急激な人口移動は伝統的な共同体の解体を一気に促したとされる。しかし、沖縄の特定地域からの移動と定着の事例は、親族や同郷人によるネットワークの形成と職業的社会化の過程が一体となって進行したことを示している。出身地域での重層的な繋がりを活用しながら、それぞれの移動先の状況に適合しうる形をあらたに編み出していった人びとの姿を考察する。	石井 宏典 (茨城大学助教授)	石井 宏典 (茨城大学助教授)
7	移民の生活ストラ テジー	国境を越えて移動する「国際移動民」が地球的規模で増加している。日本でも近年、外国人労働者が増え、1990年の入管法改正以降はブラジル、ペルー、アルゼンチン、ボリビアなどの日系人の出稼ぎ者が急増し、一時的出稼ぎから定住志向まで生活形態が多様化してきている。南米日系人の生活ストラテジー、日本体験に伴う二世・三世のエスニック・アイデンティティの変容を事例をもとに解説する。	大橋 英寿	大橋 英寿
8	組織に生きる個人 －企業の人的資源 管理と労働者のキ ャリアー	現代人にとって組織との関わりなしに生活することはむずかしい。なかでも企業はそのメンバーに「よい仕事」を提供し、彼/彼女の自己実現に資する一方、「会社人間」や過労死など病理的な影響をもたらす。企業に参入した人々は、組織のなかでどのようにキャリアを展開し、メンバーとして必要な能力や態度を身につけるのか。この問題を日本企業の人的資源管理の特質を踏まえながら検討する。	小林 裕 (東北学院大 学教授)	小林 裕 (東北学院大 学教授)
9	非行・犯罪の理解	犯罪原因論は、行為者の内的過程を重視する傾向にあるが、犯行・非行の生起は、実際には、行為者・被害者・法裁定者との動的関係で展開する社会心理学的現象である。したがって、その研究も社会心理学的アプローチが最適である。さらに犯罪研究も犯非行の態度形成場面、犯罪発生場面、矯正場面にわたり広範囲に研究される必要がある。犯罪の心理学的研究の問題点をたどりながら、犯罪・非行の理解に必要な概念や枠組みについて解説し、犯罪研究の将来像についても考察する。	細江 達郎	細江 達郎
10	遊びとしての逸脱 －暴走族のケース －	逸脱行動の中には、従来の犯罪・非行理論に典型的な、反社会的価値への同調や不利な社会環境に置かれたことによる社会的・心理的ストレスのみを強調する理論では十分に説明できないものが含まれている。そのような逸脱行動の典型例として暴走族活動を取りあげ、青年期における一時的な逸脱の背景と合法的生活への回帰のプロセスについて解説する。	佐藤 郁哉 (一橋大学大 学院教授)	佐藤 郁哉 (一橋大学大 学院教授)

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
第Ⅲ部 社会心理学と臨床心理学の接点				
11	ヘルスケア・システムと住民の対処行動	心身の不調に気づいたからといって、病院へすぐ出向くとはかぎらない。現代医療にのみ頼るわけでもない。病者と家族のとの対処行動を理解するには、＜疾病＞と＜病い＞、＜治療＞と＜癒し＞の複眼的視点とともに、民間セクター・専門職セクター・民俗セクターがオーバーラップする地域のヘルスケア・システム全体を視野にいれる必要性を、フィールドワークの知見にもつづいて検証する。	大橋 英寿	大橋 英寿
12	祭りとヘルスケア －高千穂夜神楽－	祭りは、地域の団結といった集団的意義にとどまらないで、個人にも重要な意義をもたらしているのではないか。こうした観点から、祭りをヘルスケア・システムにおける民俗セクターの一要素として位置づけてみたい。祭りを媒介として、民間セクターと民俗セクターがオーバーラップするヘルスケア・システムにおいてどのようなヘルスケア活動が行われ、どのようなヘルスケア効果を生み出されているのか、伝統的祭りである高千穂夜神楽を例に検討する。	福島 明子 (作新学院大学助教授)	福島 明子 (作新学院大学助教授)
13	シャーマニズムに みる癒し	人類最古の治療者と目されるシャーマンが現在も世界各地で活躍している。人々のシャーマニズム的職能者への依存の実態は、医療従事者には見えにくい、クライアントがとる対処行動の見過ごしえない一面である。土着コスモロジーを背景にした信仰治療は自然界や宇宙との調和にもつづくホーリスティックな治療法として注目される。津軽のシャーマン「カミサマ」の救いと沖縄のシャーマン「ユタ」の治療儀礼を通してその一端を紹介する。	大橋 英寿	大橋 英寿
14	被害者・被災者のケア	犯罪や非行などを理解するには、加害者と被害者との関係、さらに周囲の第三者との関係が欠かせない。社会心理学的な観点が必要な理由はここにある。近年大きな問題になっている被害者支援は、この社会心理学的な視点に立つことが必要である。又被害者への支援は被害者に直接接触する人々とどまらず地域社会全体の変容が期待される。社会心理学におけるコミュニティのアプローチを考え、あわせて災害等の被災者のケアについてもふれる。	細江 達郎	細江 達郎
15	臨床社会心理学に むけて	臨床的問題の発生過程と解決は個人の生きてきた社会文化的背景を抜きには理解できないであろう。カウンセラーとクライアントの対話である「心理臨床の場」そのものが心理社会的リアリティで構成されていく。とすれば、臨床心理学者にとって社会心理学の知識は不可欠であろう。両分野の接点と相互交流の在り方を模索する。	大橋 英寿	大橋 英寿

＝家族心理学特論（‘02）＝（R）

－システムとしての家族を考える－

〔主任講師： 亀口 憲治（東京大学教授）〕

全体のねらい

未曾有の変革期にある家族をとりまく心の危機の深層を解明し、具体的かつ効果的な対応策についての理解を深めることをねらいとする。家族臨床心理学は誕生まもない学問であり、また狭義の臨床心理学の枠にとどまらない多面的な問題群を抱えている。近接する学校教育、医療看護、介護福祉、産業労働、司法矯正、生涯発達、ジェンダー論など、数多くの専門領域の壁を超え、現代家族を総合的視野から理解し、支援するための知的基盤を提供する。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講 師 名 (所属・職名)	放送担当 講 師 名 (所属・職名)
1	家族臨床心理学への招待	家族療法と家族心理学が融合することによって生まれた家族臨床心理学という専門領域が果たすべき役割やその基本的概念について解説する。家族を根源的な人間システムとしてとらえる立場から、家族の心の危機への効果的な対応を探る。	亀口 憲治 (東京大学教授)	亀口 憲治 (東京大学教授)
2	生涯発達から見た家族危機	個人の成長や発達については、新生児期から老年期までを含む生涯発達の枠組みでとらえることが必要とされるようになった。家族システムも、発達段階ごとに独特の発達課題を乗り越えていかねばならない。主要な家族危機について解説する。	同 上	同 上
3	精神保健と家族の役割	ストレスの多い現代社会において、精神保健の果たすべき予防的役割が次第に強調されつつある。なかでも、家族が与える影響力の大きさについては、病因論と治療論の両面から指摘されているところである。最新の注目すべき研究成果を紹介する。	同 上	同 上
4	児童福祉における家族の役割	児童虐待の増加は、近年大きな社会的関心を集めるようになった。なぜ、実の親がわが子を虐待するのだろうか。児童虐待に見られる親子間、あるいは家族内の病理の発生メカニズムについて分析し、その効果的な対応策についても検討する。	同 上	同 上
5	看護・介護と家族コミュニケーション	高齢化の急速な進行は高齢者だけではなく、その家族の問題でもある。看護や介護に当たる家族員相互のコミュニケーションの問題は、ヘルパーなどの援助者が良質のケアを提供するうえでも、軽視することができない課題である。	同 上	同 上
6	学校と家族の連携－システム論の視点から	子どもの心の問題を解決するためには、学校と家族の連携が不可欠だといわれてきた。しかし、現実には、むしろ両者の対立を示す風潮の方が優勢ではなかっただろうか。本講では、両者をつなぐ父親の役割や先駆的な各地の実践例について解説する。	同 上	同 上
7	非行問題と家族の関わり	非行の背景に家庭環境の要因があることは以前から指摘されてきたことである。最近では、17歳の凶悪事件の多発に社会的関心も高まっている。非行の発生や予防の観点から、家族の関わりを再考し、主要な問題点を整理する。	同 上	同 上

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
8	家族に優しい職場の創造	能率や効率のみを重視した職場の労働環境が、個々の家族のささやかな団欒を奪ってきた現状を否定することはできない。21世紀の日本の職場が、家族に優しいものとなるか否かは、少子化の進行を食い止めるためにも緊急の課題である。	亀口 憲治	亀口 憲治
9	家族心理臨床の基礎	家族に関わる臨床の実践のために、理論と技法が構築されてきている。本講では、家族に関わる基本とも言うべき、臨床家の姿勢について実例を通して述べる。家族心理アセスメント、真の傾聴・受容・共感、クライアントと臨床家との関係性、家族の成長力への畏敬や家族崩壊への配慮にふれる。	同 上	同 上
10	家族療法の歴史と理論	1950年代に登場した家族療法の歴史を概観し、その理論がほぼ半世紀を経て、どのように形成され、今日に至っているかを簡潔に紹介する。個人の内界に注目する従来の心理臨床との対比や、両者の相補的關係や統合の可能性についても述べる。	同 上	同 上
11	家族療法の技法と実践	家族療法の技法の発展はめざましく、わが国でも不登校や摂食障害、家庭内暴力などの心理的問題の解決に顕著な効果をあげつつある。「ジョイング」や「リフレーミング」などの代表的な技法について具体例を示しながら平易に解説する。	同 上	同 上
12	家族療法の事例に学ぶⅠ－不登校問題の解決	全国で13万人を超す不登校児の問題を解決する有効な決め手はまだ見つかっていない。この問題に家族全員で取り組むことによって解決しようとする家族療法の実践事例を解説する。	同 上	同 上
13	家族療法の事例に学ぶⅡ－家庭内暴力と非行問題の解決	個人療法的アプローチでは解決困難な場合が多い家庭内暴力や非行の事例を取り上げる。これらの問題をかかえた家族に対して、家族療法がどのように展開されるのか、詳しく解説する。	同 上	同 上
14	夫婦療法の理論と実際	中高年夫婦の離婚の増加に見られるように、夫婦療法や夫婦カウンセリングなどの専門的な知識を身につけることが、多くの心理臨床家に求められている。実践の手法についても紹介する。	同 上	同 上
15	家族の未来と可能性	核家族はさらに分裂を進めて、多様な形態の「家族」が出現しつつある。現代家族は、家族進化の岐路に立たされているのだろうか。最終回となる本講では、家族の未来像を展望するうえで参考になる魅力的な話題を多数紹介したい。	同 上	同 上

＝コミュニティ・アプローチ特論（‘03）＝（R）

〔主任講師： 村山 正治（九州産業大学教授）〕

全体のねらい

成長モデルを念頭に置いて、特に教育・学校で臨床心理士がどう活動でき貢献できるかを講義する。家庭と社会や文化を結ぶ領域としての学校現場で臨床心理士の活動の展開も視点に入れる。したがって他職種とのネットワークを組んだり、専門家としての臨場的観点を提供しなければならない。コミュニティの中での学校をとらえることによって、臨床心理士の活動は新しい方向が模索され、示唆される。

回	テーマ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	今なぜコミュニティアプローチか	現代社会では異文化交流、子育てネットワーク、地域紛争、被害者支援、虐待やいじめなど、異業種間の専門家や非専門家である市民が協力して取り組む課題が増大している。このような今日的課題解決のためになぜ今コミュニティアプローチが注目されるのか論じてみたい。	村山 正治 (九州産業大学教授)	村山 正治 (九州産業大学教授)
2	コミュニティアプローチとは何か	コミュニティアプローチの定義、歴史、方法、その特徴、科学性、独自性、現代社会における意義、などについて具体例をあげながら解説する。	同 上	同 上
3	コミュニティアプローチとしての 一子育てネットワークの実際	作今、兄弟が少なく、子供同士で遊ぶ経験が少ない中で親になる人たちへの子育てに関する悩みは深刻なものがある。心理臨床の子育て支援活動の実際と意義について解説したい。	滝口 俊子 (放送大学教授)	滝口 俊子 (放送大学教授)
4	キャンパスコミュニティにおける コミュニティアプローチの展開	最近の学生には、対人不安傾向が強く、大学を自分の居場所と感じない学生が増えている。キャンパスコミュニティにグループアプローチを展開して、心の発達と成長、仲間づくりの効果測定などを実施したモデルにつき解説したい。	中田 行重 (関西大学助教授)	中田 行重 (関西大学助教授)
5	総合地域臨床科学の考え方	総合地域臨床とは特定の地域を対象とした心理臨床支援活動である。個人心理臨床の一環としてのネットワークづくりや特定の組織を対象とした組織臨床よりも広い概念である。地域臨床活動と研究を合わせた総合地域臨床科学について解説する。	下川 昭夫 (東京都立大学助教授)	下川 昭夫 (東京都立大学助教授)

回	テ ー マ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
6	総合地域臨床活動 の実際－ママ・ネット とボル・ネット	総合地域臨床活動にはセンター型支援とネットワーク型支援がある。前者は保育園、学校、福祉施設などへの支援であるし後者は地域社会に入り込んで見えてくる対象への支援である。実際例を紹介しながら開設する。	下川 昭夫	下川 昭夫
7	サイコトリート、 不登校児の母親グループ の実際	コミュニティアプローチによる援助の具体例を紹介する。一つは九州大学健康科学センター峰松修教授による「サイコトリート」である。もう一つが不登校児の親を援助するグループアプローチであり、特に小野修氏は長年の経験を本に著された。この2つの方法論について、その意味を考察する。	中田 行重	中田 行重
8	エンカウンターグループ を媒介にしたコミュニティ形成 の実際	エンカウンターグループは人々の心を繋ぎ、自分探しのための重要なアプローチとして注目されている。30年にわたる「福岡人間関係研究会」の活動を通じて形成されてきたコミュニティ形成過程を述べる。	村山 正治	村山 正治
9	エンカウンターグループによる 国際紛争の解決	カウンセリングで有名なカールロジャースは「静かな変革者」といわれている。アイルランド紛争、中米の対立 など80年代の世界における紛争の火種となっていた地域に着目し、紛争当事者の大統領クラスを集めて、グループを行い、相互の人的信頼を回復することで、国際紛争解決につながる事例を示し、その意義を解説したい。	同 上	同 上
10	コミュニティアプローチを めぐる倫理の諸問題	臨床心理士など専門家の活動には厳しい倫理規定がある。コミュニティアプローチの諸活動、例えばセルフヘルプグループ活動に伴う倫理問題についてはまだ十分検討することにしたい。日本吃音臨床研究会代表、伊藤伸二との対話を録音する。	同 上	村山 正治 伊藤 伸二 (大阪教育大学非常勤講師)
11	ネットワーキングの 理論と実際	変革の時代に専門家や関連する人々を繋いでいく有効なアプローチにネットワーキングの理論と方法がある。ここでは学校臨床心理士ワーキンググループの実際例を中心にその特徴、独自性、有効性を検討する	同 上	同 上
12	セルフヘルプグループの 展開	21世紀はセルフヘルプグループ(SHG s)の時代ともいわれている。「吃音者のための言友会」、「断酒会」。薬物常用者のための「ダルク」、不登校児のための「フリースクール」など様々な会が活動している。SHGsの現代的役割と機能について実際活動の事例を挙げながら考察したい。	同 上	同 上

回	テ ー マ	内 容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
13	九州国際大学窪田由紀教授との対談 危機介入モデルの理論と実際	窪田由紀氏は福岡県下の学校で発生した殺傷事件や校内暴力事件に臨床心理士として対応して来た実績がある。この経験から危機介入の手引きを作成したが、これは全国の学校臨床心理士から大変評判がよい。その作成の経過、活用の実際をコミュニティアプローチの視点から考察してみたい。	窪田 由紀 (九州産業大 学教授)	村山 正治 窪田 由紀 (九州産業大 学教授)
14	九州大学留学生センター高松里助教授との対談	コミュニティアプローチと留学生支援活動の実際 世界各国の多数の留学生が日本の大学で生活を送っている。異文化に生きる人々へのコミュニティアプローチを地域と連携としながら、展開している高松里氏と対談し、これからの多文化社会におけるコミュニティアプローチの重要性について論じていきたい。	高松 里 (九州大学助 教授)	村山 正治 高松 里 (九州大学助 教授)
15	大妻女子大学教授、日本コミュニティ心理学会長山本和郎との対談ーコミュニティアプローチのこれからの課題と展望	日本のコミュニティ心理学の開拓者であり、日本コミュニティ心理学会の会長でもある山本和郎氏をゲストにお招きして、これまでの日本における展開とこれからの方向を展望してこの講座のまとめとする。	山本 和郎 (大妻女子大 学教授)	村山 正治 山本 和郎 (大妻女子大 学教授)

この冊子に掲載した平成17年度新規開設科目の講義内容は、教材の原稿等を作成する時点で主任講師等が執筆しており、実際に印刷教材及び放送教材を制作する時点で内容等を組み替えていることもあり、必ずしも最終的な印刷教材・放送教材と一致していない部分がありますので、ご容赦ください。

なお、放送大学ホームページに掲載されている講義内容については、最新の内容にリアルタイムで更新しております。



古紙配合率100%再生紙を使用しています